

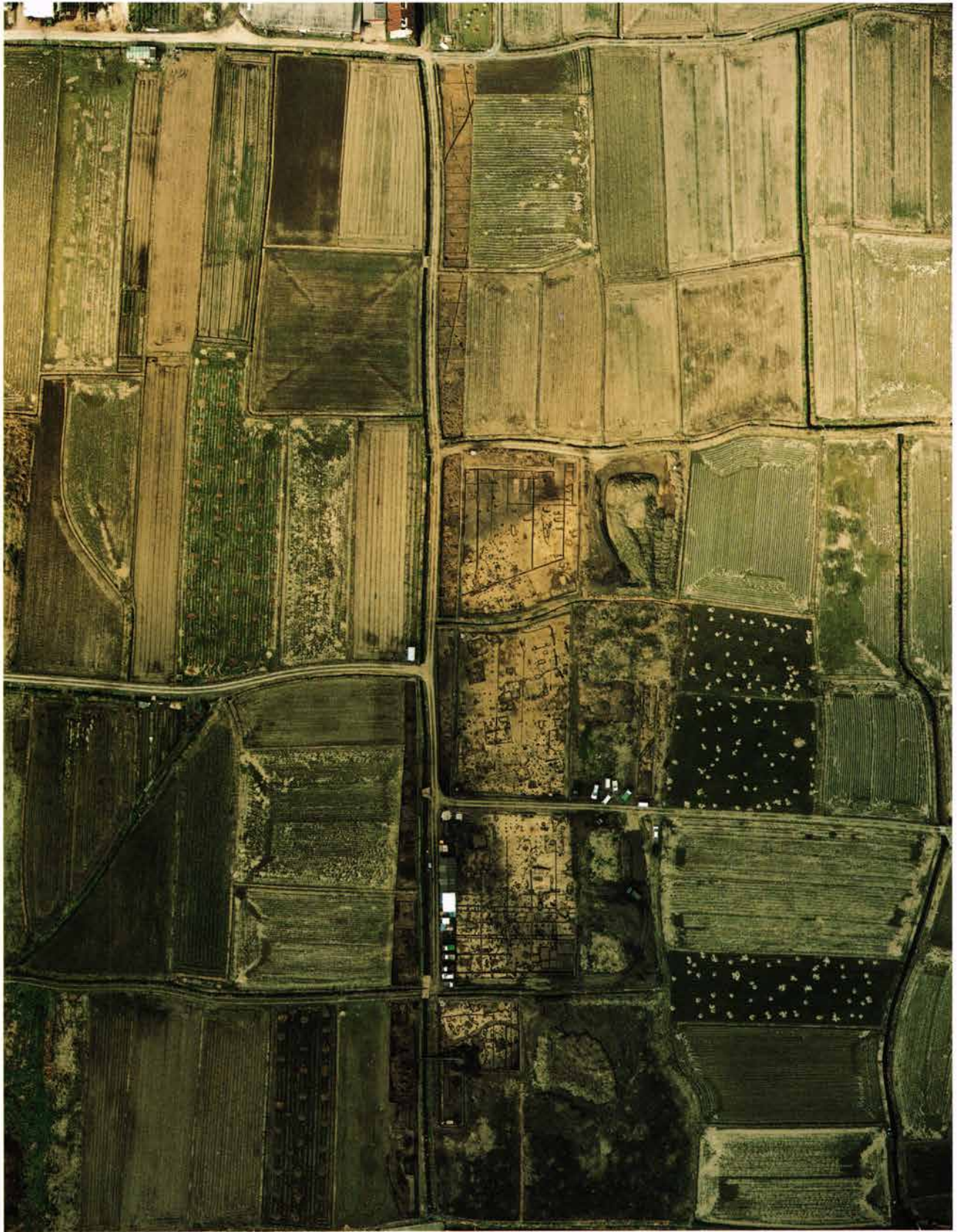
京都府遺跡調査概報

第 91 冊

1. 池上遺跡第 5 次
2. 平安京跡二条大路
3. 森垣外遺跡第 3 次

2 0 0 0

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



調査区全景（上が北）



トレンチ全景（西から）

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成10・11年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部・京都府教育委員会・京都府木津土木事務所の依頼を受けて行った池上遺跡第5次・平安京跡二条大路・森垣外遺跡第3次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、八木町教育委員会・京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所・精華町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成12年2月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 樋口隆康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
 1. 池上遺跡第5次
 2. 平安京跡二条大路
 3. 森垣外遺跡第3次
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	池上遺跡第5次	船井郡八木町池上	平10.10.22～平11.3.31	京都府土木建築部	中川 和哉 筒井 崇史 野々口陽子
2.	平安京跡二条大路	京都市中京区西ノ京式部町1番地	平10.12.11～平.11.3.12	京都府教育委員会	福島 孝行 引原 茂治
3.	森垣外遺跡第3次	相楽郡精華町大字南稻八妻小字森垣外	平10.6.16～平11.3.5	京都府木津土木事務所	小池 寛 松尾 史子

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。
4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

本文目次

1. 池上遺跡第5次発掘調査概要	1
2. 平安京跡二条大路発掘調査概要	69
3. 森垣外遺跡第3次発掘調査概要	111

挿図目次

1. 池上遺跡第5次

第1図	調査地位置図および周辺主要遺跡分布図	1
第2図	トレンチ配置図	2
第3図	池上遺跡各トレンチ土層模式柱状図	3
第4図	第1トレンチ遺構平面図	4
第5図	第1トレンチ個別遺構平・断面図	5
第6図	第2トレンチ遺構平面図	6
第7図	第2トレンチ個別遺構平・断面図	7
第8図	第3トレンチ遺構平面図	8
第9図	第3トレンチ個別遺構平・断面図(1)	10
第10図	第3トレンチ個別遺構平・断面図(2)	11
第11図	第4トレンチ遺構平面図	13
第12図	第4トレンチ個別遺構平・断面図(1)	14
第13図	第4トレンチ個別遺構平・断面図(2)	15
第14図	第5トレンチ遺構平面図	16
第15図	第5トレンチ個別遺構平・断面図(1)	17
第16図	第5トレンチ個別遺構平・断面図(2)	18
第17図	第6トレンチ遺構平面図	19
第18図	掘立柱建物跡S B603平・断面図	20
第19図	第7トレンチ遺構平面図	21
第20図	第7トレンチ個別遺構平・断面図	22
第21図	第7トレンチ方形周溝墓断面図	23

第22図	第7トレンチ周溝墓S T610主体部平・断面図(1)	24
第23図	第7トレンチ周溝墓S T610主体部平・断面図(2)	26
第24図	第7トレンチ周溝墓S T610主体部平・断面図(3)	27
第25図	第7トレンチ周溝墓S T611主体部平・断面図	25
第26図	第7トレンチ周溝墓S T611・612主体部平・断面図	30
第27図	遺物出土状況図および第7トレンチ南半部土層断面図	31
第28図	第1トレンチ出土遺物	32
第29図	第2トレンチ出土遺物(1)	33
第30図	第2トレンチ出土遺物(2)	34
第31図	第2トレンチ出土遺物(3)	35
第32図	第2トレンチ出土遺物(4)	37
第33図	第2トレンチ出土遺物(5)	38
第34図	第3トレンチ出土遺物(1)	40
第35図	第3トレンチ出土遺物(2)	41
第36図	第4トレンチ出土遺物	42
第37図	第5トレンチ出土遺物(1)	44
第38図	第5トレンチ出土遺物(2)	45
第39図	第6トレンチ出土遺物	47
第40図	第7トレンチ出土遺物(1)	49
第41図	第7トレンチ出土遺物(2)	50
第42図	第7トレンチ出土遺物(3)	51
第43図	第7トレンチ出土遺物(4)	52
第44図	第7トレンチ出土遺物(5)	53
第45図	第7トレンチ出土遺物(6)	54
第46図	金属器・石製品実測図	56
第47図	石製品実測図	57
第48図	石製品実測図	58

2. 平安京跡二条大路

第49図	調査地点と平安京・御土居	70
第50図	遺構配置図	71
第51図	トレンチ西壁土層断面図	72
第52図	トレンチ東壁土層断面図	73
第53図	トレンチ南壁土層断面図および隍S D01平面・断面図	74
第54図	池S G01-a平面図	75

第55図	池 S G 01－ b 平面図	76
第56図	柵 S A 01実測図	77
第57図	柵列 S A 03・04平面・断面図	78
第58図	S A 03および土坑 S K 14～17・52・53平面・断面図	79
第59図	墓 S X 01・02平面・断面図	80
第60図	S X 03断面図	80
第61図	廃棄土坑 S X 03平面・断面図	81
第62図	各井戸および埋桶遺構 2 平面・断面図	82
第63図	井戸 S E 08・14および土坑 S K 19～21平面・断面図	83
第64図	埋桶遺構 1 および各土坑平面・断面図	84
第65図	各土坑平面・断面図	86
第66図	各土坑平面・断面図	88
第67図	軒丸瓦実測図	90
第68図	軒平瓦実測図(1)	91
第69図	軒平瓦実測図(2)	92
第70図	軒平瓦実測図(3)	93
第71図	丸瓦実測図(1)	94
第72図	丸瓦実測図(2)	95
第73図	丸瓦実測図(3)	96
第74図	平瓦実測図(1) S G 01－ a 底土坑	97
第75図	平瓦実測図(2) S G 01－ a 底土坑	98
第76図	平瓦実測図(3) S G 01－ a 底土坑・底	99
第77図	平瓦実測図(4) S G 01－ a 底	100
第78図	平瓦実測図(5) S G 01－ a 底・S G 01最下層・下層	101
第79図	平瓦実測図(6) S G 01下層・上層	102
第80図	平瓦実測図(7) S G 01洲浜・池岸付近埋土	103
第81図	隍 S D 01出土瓦実測図	104
第82図	文字瓦および銭貨実測図	105
第83図	陶磁器実測図	107

3. 森垣外遺跡第3次

第84図	森垣外遺跡位置図	112
第85図	調査地区設定図	113
第86図	A 2 地区土層断面実測図	114
第87図	A 2 地区遺構実測図	115

第88図	北尻2・3号墳実測図	116
第89図	A2地区掘立柱建物跡分布図	117
第90図	掘立柱建物跡31～33・35・36・38・39・41・43・44実測図	118
第91図	竪穴式住居跡82・237・238・329実測図	119
第92図	土坑85実測図	120
第93図	出土遺物実測図	121
第94図	出土遺物実測図	122
第95図	出土遺物実測図	123
第96図	D1地区土層断面図	124
第97図	B1地区遺構実測図	125
第98図	B1地区掘立柱建物跡分布図	126
第99図	掘立柱建物跡45～47・49～51・53・56実測図	127
第100図	掘立柱建物跡52・57・59・60・62実測図	128
第101図	掘立柱建物跡61・63～68実測図	129
第102図	柱穴828・939・943実測図	130
第103図	I期掘立柱建物跡分布図	131
第104図	II期掘立柱建物跡分布図	132
第105図	溝13・22断面および遺物出土地点分布図	133
第106図	溝878実測図	134
第107図	竪穴式住居跡15・16実測図	135
第108図	井戸・土坑実測図	136
第109図	出土遺物実測図	137
第110図	出土遺物実測図	138
第111図	出土遺物実測図	139
第112図	出土遺物実測図	141
第113図	出土遺物実測図	142
第114図	出土遺物実測図	143
第115図	出土遺物実測図	145
第116図	出土遺物実測図	146
第117図	出土遺物実測図	147
第118図	出土遺物実測図	148
第119図	出土遺物実測図	149
第120図	出土遺物実測図	150
第121図	出土遺物実測図	151
第122図	出土遺物実測図	153

第123图	出土遺物実測図	-----	154
第124图	C地区土層断面図	-----	155
第125图	C地区遺構実測図	-----	156
第126图	C地区掘立柱建物跡分布図	-----	157
第127图	掘立柱建物跡69・71・72・74・75・80・82・85実測図	-----	158
第128图	掘立柱建物跡76・77・81・84・86・87・90実測図	-----	159
第129图	掘立柱建物跡78・91~93・95・96・99実測図	-----	160
第130图	柱穴104・188実測図	-----	161
第131图	竪穴式住居跡69・367実測図	-----	162
第132图	土坑70・79・108実測図	-----	163
第133图	溝52実測図	-----	164
第134图	溝59・75・77、周溝103実測図	-----	165
第135图	出土遺物実測図	-----	166
第136图	出土遺物実測図	-----	167
第137图	出土遺物実測図	-----	168
第138图	出土遺物実測図	-----	169
第139图	出土遺物実測図	-----	170
第140图	出土遺物実測図	-----	171
第141图	出土遺物実測図	-----	172
第142图	土坑71実測図	-----	172
第143图	A 1・A 2地区平面図	-----	174
第144图	B 1・C地区平面図	-----	175

付 表 目 次

2. 平安京跡二条大路

第1表	各層位出土丸瓦集計表	-----	104
第2表	各層位出土平瓦集計表	-----	104

図版目次

1. 池上遺跡第5次

- | | | |
|-------|--|-------------------------|
| 図版第1 | (1) 調査区北半全景(空中写真) | (2) 調査区南半全景(空中写真) |
| 図版第2 | (1) 調査前風景(北から)
(3) 第1トレンチ全景(北西から) | (2) 第1トレンチ掘削風景(南東から) |
| 図版第3 | (1) 第1トレンチS B114(南から)
(3) 第2トレンチS B115(北西から) | (2) 第2トレンチ全景(南西から) |
| 図版第4 | (1) 第2トレンチS E270(南東から)
(3) 第2トレンチS K32(南から) | (2) 第2トレンチS K271(西から) |
| 図版第5 | (1) 第2トレンチS K196・170(南から)
(3) 第3トレンチS B551(北から) | (2) 第3トレンチ全景(北西から) |
| 図版第6 | (1) 第3トレンチS B117(北西から)
(3) 第3トレンチS H90竈(南から) | (2) 第3トレンチS H90(南から) |
| 図版第7 | (1) 第3トレンチS H90内柱穴
(3) 第3トレンチS H446、S K272・365(西から) | (2) 第3トレンチS H118(西から) |
| 図版第8 | (1) 第4トレンチ全景(北西から)
(3) 第4トレンチ作業風景(北から) | (2) 第4トレンチ全景(南から) |
| 図版第9 | (1) 第4トレンチS H120(西から)
(3) 第4トレンチS H104(東から) | (2) 第4トレンチS H105(南から) |
| 図版第10 | (1) 第4トレンチS H119上層(南から)
(3) 第4トレンチS H119焼土(東から) | (2) 第4トレンチS H119下層(北から) |
| 図版第11 | (1) 第4トレンチS H107(北西から)
(3) 第5トレンチ全景(南から) | (2) 第4トレンチS H108(西から) |
| 図版第12 | (1) 第5トレンチS H390・391(南から)
(2) 第5トレンチS H391遺物出土状況(南西から)
(3) 第5トレンチS H394・395(南から) | |
| 図版第13 | (1) 第6トレンチ全景(南西から)
(3) 第7トレンチS X500(東から) | (2) 第7トレンチS B608(東から) |
| 図版第14 | (1) 第7トレンチS H417(南東から)
(3) 第7トレンチS T610・611・612(北から) | (2) 第7トレンチS H416(西から) |
| 図版第15 | (1) 第7トレンチS T610・611・612(南から)
(2) 第7トレンチS T610(西から) | (3) 第7トレンチS X106(北西から) |

- | | | |
|-------|--|--------------------------|
| 図版第16 | (1)第7トレンチS D389(西から)
(3)第7トレンチS D526(東から) | (2)第7トレンチS D462(南から) |
| 図版第17 | (1)第7トレンチS K449(西から)
(3)第7トレンチS K451(北から) | (2)第7トレンチS K452(東から) |
| 図版第18 | (1)第7トレンチS K448(西から)
(3)第7トレンチS K455(西から) | (2)第7トレンチS K546(西から) |
| 図版第19 | (1)第7トレンチS K540(南から)
(3)第7トレンチS K454(東から) | (2)第7トレンチS K453(南から) |
| 図版第20 | (1)第7トレンチS K544(西から)
(3)第7トレンチS K456・457(東から) | (2)第7トレンチS T611(西から) |
| 図版第21 | (1)第7トレンチS K494(西から)
(3)第7トレンチS K542(南から) | (2)第7トレンチS K495(西から) |
| 図版第22 | (1)第7トレンチS K548(南東から)
(3)第7トレンチS K536(西から) | (2)第7トレンチS K537・538(西から) |
| 図版第23 | (1)第7トレンチS K539(北西から)
(3)第7トレンチS H606(南から) | (2)第7トレンチS K512(西から) |
| 図版第24 | (1)第7トレンチS D604・605(西から)
(2)第7トレンチS D604遺物出土状況(東から)
(3)第7トレンチS D605断面(西から) | |
| 図版第25 | 出土遺物(1) | |
| 図版第26 | 出土遺物(2) | |
| 図版第27 | 出土遺物(3) | |
| 図版第28 | 出土遺物(4) | |
| 図版第29 | 出土遺物(5) | |
| 図版第30 | 出土遺物(6) | |
| 図版第31 | 出土遺物(7) | |
| 図版第32 | 出土遺物(8) | |

2. 平安京跡二条大路

- | | | |
|-------|----------------------------------|--------------------------|
| 図版第33 | (1)トレンチ全景(左が北)
(3)隍S D01(上が北) | (2)隍S D01(北西から) |
| 図版第34 | (1)隍S D01土層断面(西から) | (2)池S G01滞水状況(西から) |
| 図版第35 | (1)池S G01洲浜(南西から) | (2)池S G01洲浜(南西から) |
| 図版第36 | (1)柵S A01(西から) | (2)柵S A03・廃棄土坑S X03(南から) |
| 図版第37 | (1)墓S X02(北から) | (2)墓S X01(西から) |

- | | | |
|-------|-----------------------|-------------------|
| 図版第38 | (1)井戸 S E 01土層断面(南から) | (2)井戸 S E 02(南から) |
| 図版第39 | (1)井戸 S E 03(南から) | (2)井戸 S E 08(南から) |
| 図版第40 | (1)埋桶遺構 1 (南から) | (2)埋桶遺構 2 (南から) |
| 図版第41 | (1) S K 02(西から) | (2) S K 04(南から) |
| 図版第42 | (1) S K 09(西から) | (2) S E 10(南から) |
| 図版第43 | (1) S K 11(南から) | (2) S K 22(南から) |
| 図版第44 | (1) S K 19~21(南から) | (2) S K 27(東から) |
| 図版第45 | 出土遺物(1) | |
| 図版第46 | 出土遺物(2) | |
| 図版第47 | 出土遺物(3) | |
| 図版第48 | 出土遺物(4) | |

3. 森垣外第3次

- | | |
|-------|-----------------------------------|
| 図版第49 | (1) A 2 地区遠景(空中写真、東から) |
| | (2) A 2 地区全景(空中写真、右方が北) |
| 図版第50 | (1) A 2 地区北尻 2・3号墳完掘状況(南から) |
| | (2) A 2 地区北尻 3号墳周溝断面 E 堆積状況(北から) |
| | (3) A 2 地区 10bt 遺構検出状況(南から) |
| 図版第51 | (1) A 2 地区 縦穴式住居跡 82 検出状況(南から) |
| | (2) A 2 地区 土坑 85 遺物出土状況(南から) |
| | (3) A 2 地区 溝 4 礎出土状況(南から) |
| 図版第52 | (1) B・C 地区遠景(空中写真、東から) |
| | (2) B・C 地区全景(空中写真、西から) |
| 図版第53 | (1) B 1-1・2 地区全景(空中写真、東から) |
| | (2) B 1-1・2 地区全景(空中写真、北から) |
| 図版第54 | (1) B 1-1・2 地区全景(空中写真、西から) |
| | (2) B 1-1・2 地区全景(空中写真、左方が北) |
| 図版第55 | (1) B 1-1・2 地区近景(北西から) |
| | (2) B 1-1・2 地区 溝 22 建築部材出土状況(東から) |
| | (3) B 1-1・2 地区 柱穴 828 土器出土状況(東から) |
| 図版第56 | (1) B 1-1・2 地区 柱穴 939 土器出土状況(東から) |
| | (2) B 1-1・2 地区 柱穴 943 土器出土状況(北から) |
| | (3) B 1-1・2 地区 柱穴 587 土器出土状況(南から) |
| 図版第57 | (1) B 1-3 地区 柱穴 889 柱根検出状況(南東から) |
| | (2) B 1-3 地区 柱穴 945 柱根検出状況(南東から) |

- (3) B 1 - 1 ・ 2 地区土坑 1 土器検出状況(南から)
- 図版第58 (1) B 1 - 1 ・ 2 地区竪穴式住居跡15検出状況(東から)
 (2) B 1 - 1 ・ 2 地区竪穴式住居跡16検出状況(東から)
 (3) B 1 - 1 ・ 2 地区溝22最上層遺物出土状況(南から)
- 図版第59 (1) B 1 - 1 ・ 2 地区井戸307検出状況(北から)
 (2) B 1 - 1 ・ 2 地区井戸307完掘状況(南から)
 (3) B 1 - 3 地区溝878土器出土状況(南から)
- 図版第60 (1) B 1 - 1 ・ 2 地区井戸460転落井戸枠出土状況(北から)
 (2) B 1 - 1 ・ 2 地区井戸460最下部土器出土状況(南東から)
 (3) B 1 - 3 地区流路875遺物出土状況(南東から)
- 図版第61 (1) B 1 - 3 地区全景(空中写真、下方が北)
 (2) B 1 - 3 地区掘立柱建物跡・溝878完掘状況(南西から)
- 図版第62 (1) B 1 - 3 地区流路875用途不明鉄製品出土状況(北から)
 (2) B 1 - 3 地区流路887土層堆積状況(西から)
 (3) C地区東壁断面(南西から)
- 図版第63 (1) B 1 - 3 ・ C地区全景(空中写真、南から)
 (2) C地区全景(空中写真、右方が北)
- 図版第64 (1) C地区溝52・土坑79付近遺構検出状況(空中写真、上方が東)
 (2) C地区流路4・5、溝22付近遺構検出状況(空中写真、上方が東)
- 図版第65 (1) 柱穴188上位高杯出土状況(北から) (2) 柱穴188下位高杯出土状況(北から)
 (3) 柱穴104遺物出土状況(南から)
- 図版第66 (1) C地区流路5鏡形模造品出土状況(上方が南)
 (2) C地区流路4建築部材出土状況(上方が西)
 (3) C地区流路4遺物出土状況(東から)
- 図版第67 (1) C地区溝52検出状況(北西から) (2) C地区溝103検出状況(北東から)
- 図版第68 出土遺物(1)
- 図版第69 出土遺物(2)
- 図版第70 出土遺物(3)
- 図版第71 出土遺物(4)
- 図版第72 出土遺物(5)
- 図版第73 出土遺物(6)
- 図版第74 出土遺物(7)
- 図版第75 出土遺物(8)
- 図版第76 出土遺物(9)
- 図版第77 出土遺物(10)

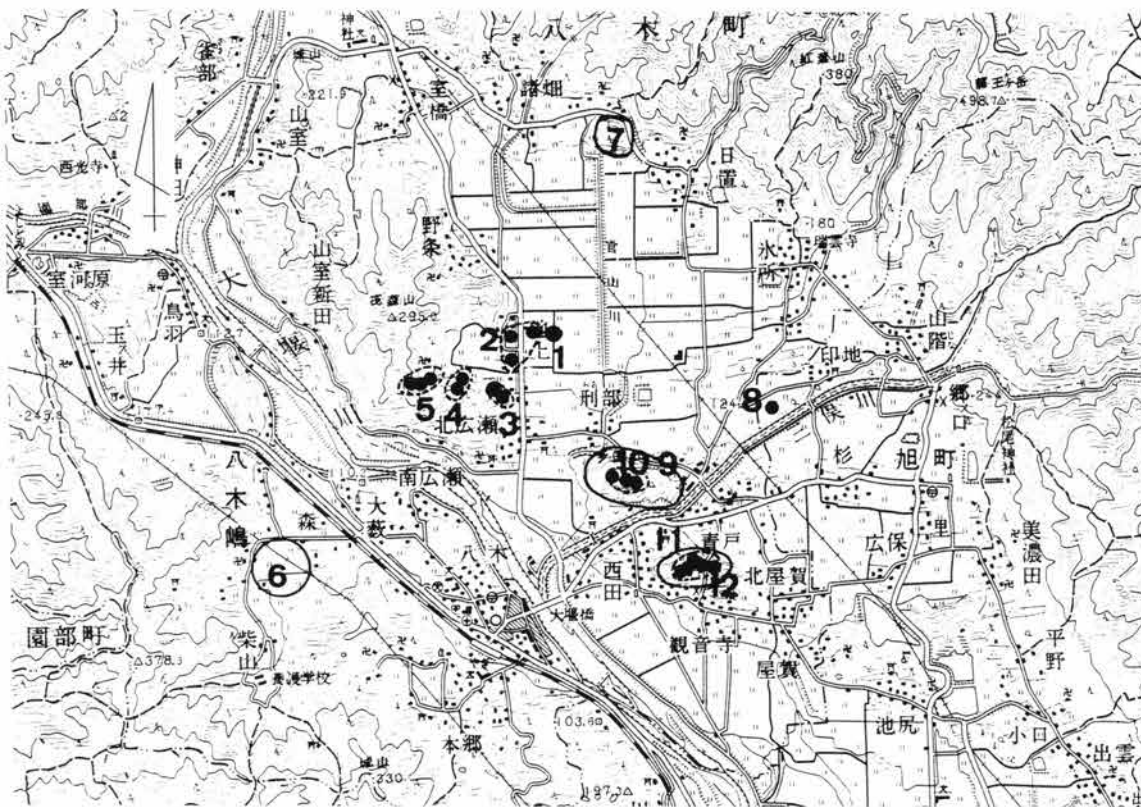
- 圖版第78 出土遺物(11)
圖版第79 出土遺物(12)
圖版第80 出土遺物(13)
圖版第81 出土遺物(14)
圖版第82 出土遺物(15)

1. 池上遺跡第5次発掘調査概要

1. はじめに

この調査は平成10年度主要地方道亀岡園部線関係遺跡埋蔵文化財発掘調査として、京都府土木建築部の依頼を受けて当調査研究センターが実施した。池上遺跡は、平成9年度の八木町教育委員会の試掘調査^(注1)によって、弥生時代から中世の墓地・集落跡であることが確認されていた。そのため今回の府道新設工事に伴う発掘調査においても、弥生時代から中世に至る多くの遺構・遺物を検出することが事前に予測できた。

池上遺跡は、京都府船井郡八木町池上に所在する。遺跡は八木町と亀岡市を懐にたく亀岡盆地の北端に位置し、北側の盆地狭隘部が平坦な地形に変化する場所にある。また遺跡の東側には、筏森山(295m)があり、この山塊は、亀岡盆地の北側の入り口を塞ぐように存在する。亀岡盆地を流れる桂川は、筏森山をはさんで遺跡の西側を流れる。遺跡の東側には、天井川である宮山川が流れる。遺跡の立地する場所は現在は水田として利用されているが、用水を隣町の園部町から取水しなくてはならないくらい、近接する場所からの取水が困難な地形である。



第1図 調査地位置図および周辺主要遺跡分布図(1/50,000)

1. 調査地 2. 狐塚古墳群 3. 寺内東古墳群 4. 寺内古墳群 5. 寺内西古墳群 6. 八木嶋遺跡
7. 八木田遺跡 8. 糠塚古墳 9. 刑部城跡 10. 多国山古墳群 11. 西田情跡 12. 住吉神社裏山古墳群



第2図 トレンチ配置図

調査対象地は道路部分で、現在の農道や農業用水路のため調査可能な幅が狭く、7つのトレンチに分割した。調査区は北を第1トレンチとし、順に番号を付けた。第1～4トレンチまでが用水の東側、他を西側に設定した。

また、狭小な調査地であるため、遺構が調査区外に延びることも少なくなかったが、八木町教育委員会のご協力で、同時期に隣接して調査が行われた池上遺跡4次調査の成果を参考に可能なものは規模を復原した。

現地調査は、中川和哉・野々口陽子・筒井崇史が行い、調査期間は平成10年10月22日～平成11年3月5日である。調査面積は約2,000㎡である。本文の執筆は、遺構の第1・2・3・7トレンチを中川が、第3・4・7トレンチを野々口が、第5・6・7トレンチは筒井が担当した。遺物については、第5・6トレンチの遺物を筒井が他を中川が担当した。編集は中川が行った。

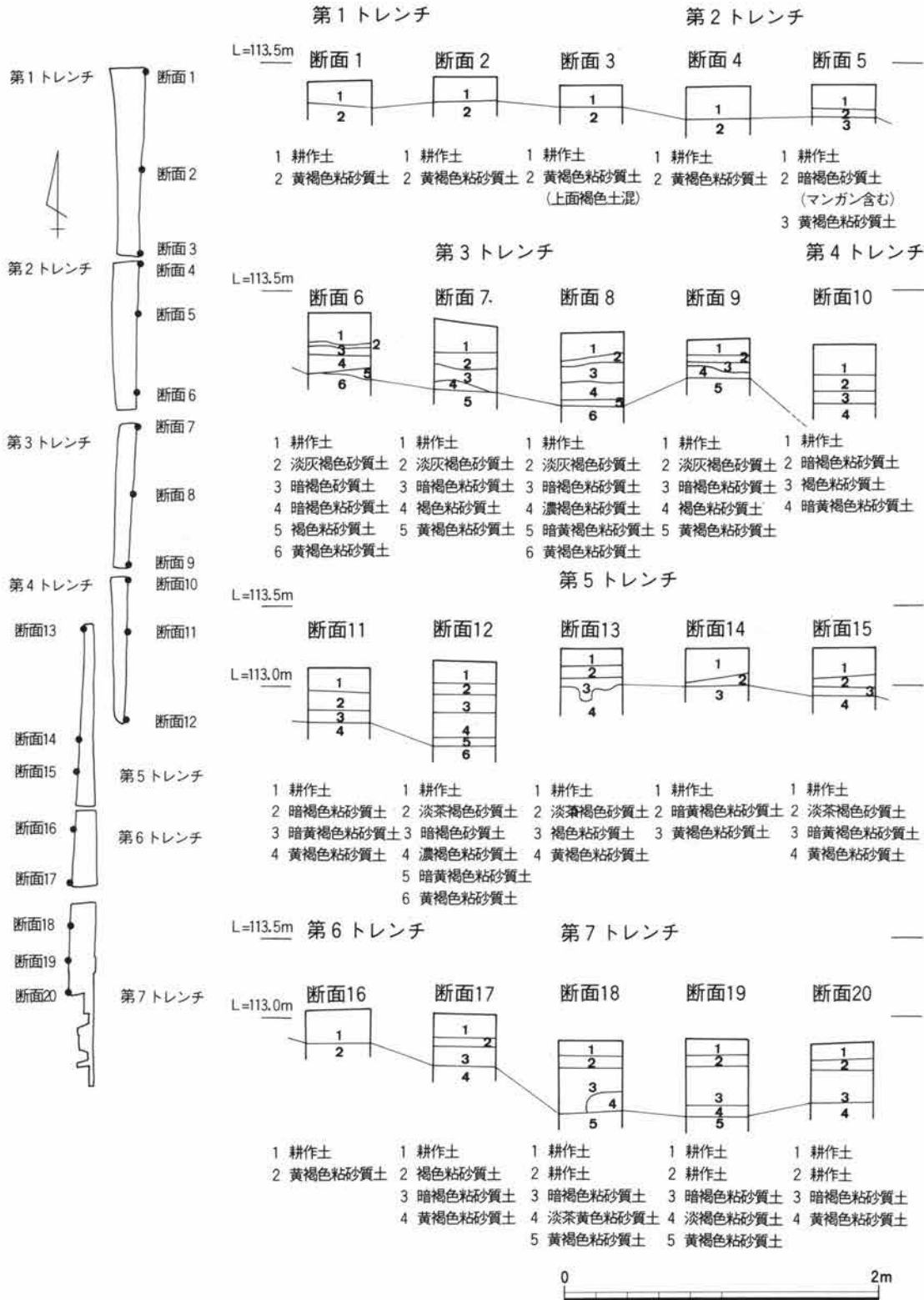
1. 基本層序と旧地形

遺構の多くは黄褐色粘土層の上面で検出できたが、その上層の暗褐色粘砂質土(黒ボク)から土器がまとまって出土することや、第7トレンチのS B608等は断面で黒ボク層中から切り込まれていることが確認できたことから、いくつかの時期の遺構は黒ボク層中で、検出可能と考えられるが、実際の検出作業においては、黒ボクから黄褐色粘砂質土への漸移層中からしか遺構を確認することは困難であった。

第3図の土層模式柱状図で解るように、第1トレンチから第7トレンチに地表面が北から南に

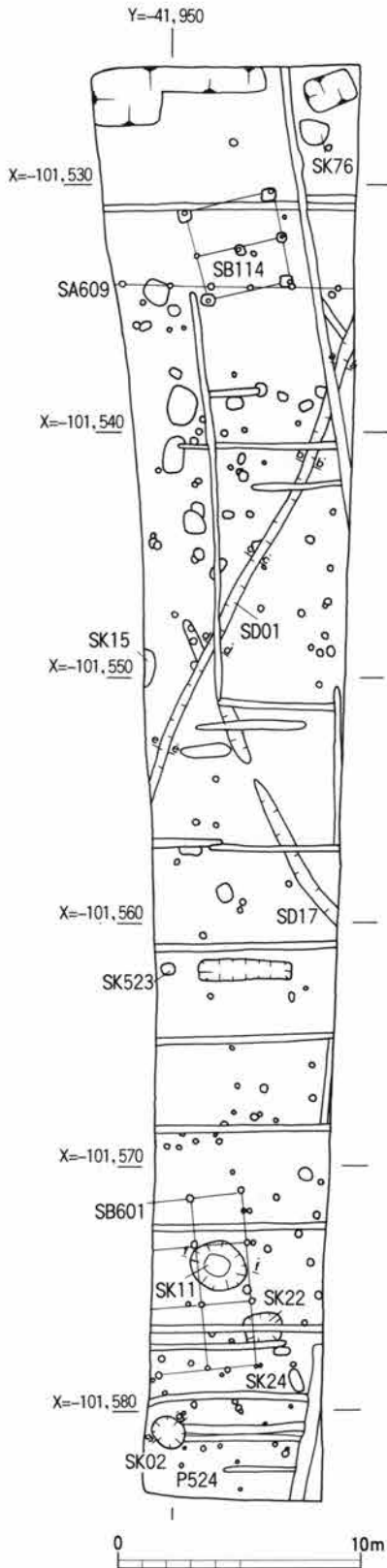
桂川の対岸には、古墳時代の豪族居館とされた八木嶋遺跡^(注2)がある。この遺跡からは、廂を持つ掘立柱建物跡が多く発見されている。今回の調査で検出できた古墳時代の建物との関連が注目できる。また、古墳も遺跡内にあったことが知られており、周辺の山塊にも群集墳が散在するが時期等の詳細は不明である。

筏森山の東麓に池上院という天台宗の寺院がある。この寺院は大規模の伽藍を持っているという伝承があり、地名にも塔や他の施設が存在していたことがうかがえる。池上院は平安時代初期の千手観音像をもち、寺歴の古さを示すものと考えられる。池上院は、承安4(1174)年に模写された吉富荘絵図にも描かれている。この絵図には池上院の東側に、池上在家として数件の家が描かれており、今回の調査地との関係が連想される。



第3図 池上遺跡各トレンチ土層模式柱状図

下がっていく。この現地表面に見られる傾向は、遺跡の旧地表面を形作ったと考えられる黄褐色粘砂質土の検出面の高さに見られる特徴と同じであるが、現地表面である水田面が比較的平坦であるのに比べ、旧来は凹凸があったことがうかがえる。また、第1トレンチでは耕作土直下で黄褐色粘砂質土になる。第1トレンチ北側の深掘部の観察から、下層には礫層があることが分かっ



第4図 第1トレンチ遺構平面図

ている。第1トレンチ北では、比較的浅く礫層が検出できることから、現在の水田面を造成するにあたって大きく旧地表面が削平されていると考えられる。これを傍証するように、第1トレンチの柱穴は他のトレンチのものに比べてきわめて浅い傾向が認められる。

2. 調査の概要

(1) 1トレンチ(第4図)

調査区内では、東西方向の正方位にのった暗渠排水と、南北方向に角度をもって掘られた、暗渠排水が認められる。切り合い関係から、東西方向のものが先行する。東西方向のものは、断面が方形で竹が底部に残存しているものも認められた。検出面では、礫が多く含まれていた。

① 中世

掘立柱建物跡 S B 601(第5図) 北で5°西に振れる円形掘形を持つ総柱建物である。柱間距離は東西が2.1m・南北が2.1・2.4・2.7mを測る。出土遺物がなく、帰属時期を明らかにすることはできないが、建物の特徴から中世のものと考えられる。

② 古墳時代

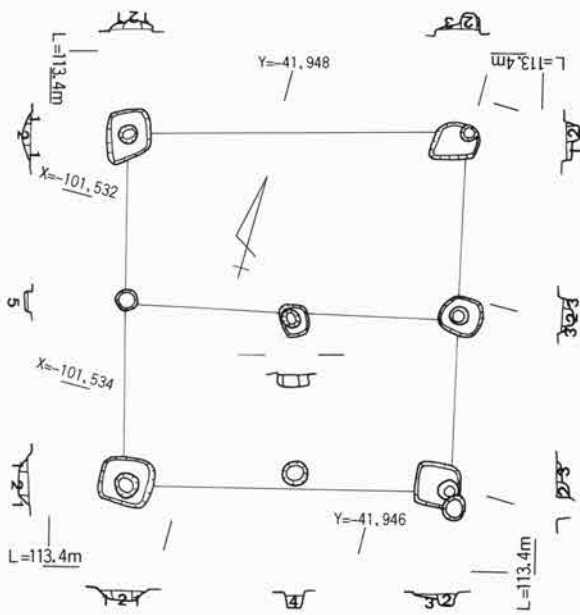
土坑 S K 22 東西に長い隅丸長方形を呈する土坑である。東西約1.6m・南北約1.3m、検出面からの深さは約0.1mを測る。碎片の土器から古墳時代後期と考えられる。

③ 弥生時代

溝 S D 01(第5図) 南西から北東に底部が傾斜する断面が方形に掘られた溝である。調査区内で41m分検出した。南西端では、弥生土器が集中して出土した。

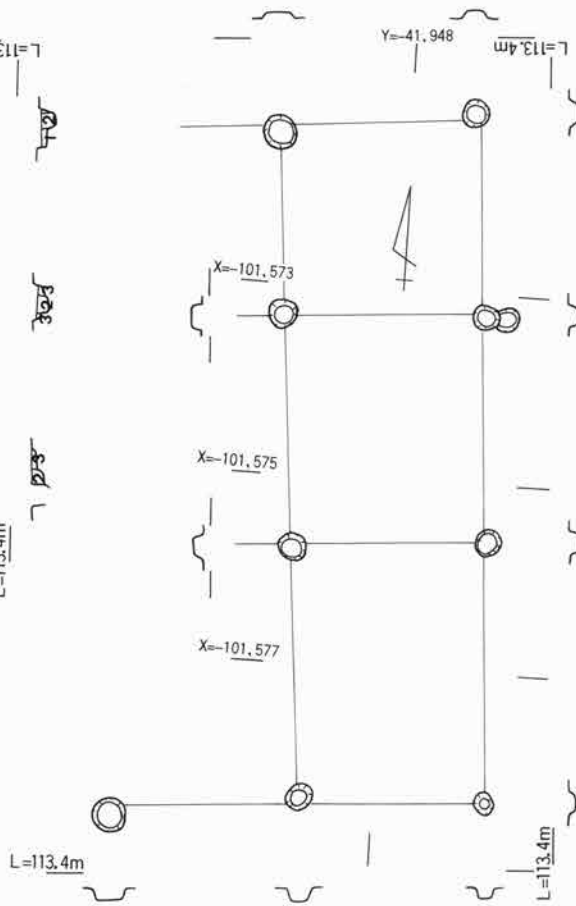
溝 S D 17 北西方向から南東方向の方位を持つ溝で、検出面からの深さは約5cmと浅く、途中で途切れる部分もある。S D 01との切り合い関係は、S D 17が非常に浅くはっきりしなかったが、出土遺物から弥生時代に属すと考えられる。

土坑 S K 02(第5図) 平面形が円形で、土坑は垂直に立ち上がる。井戸状の構造を持つが、湧水は認められなかった。直径約1.1m、検出面からの深さは約0.6mを測る。



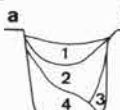
SB114平・断面図

- 1 黒褐色粘砂質土(黄褐色土ブロック含む)
- 2 黒褐色粘砂質土
- 3 黄褐色粘砂質土(黒褐色土ブロック含む)
- 4 淡褐色砂質土
- 5 暗褐色粘砂質土



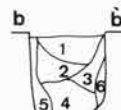
SB601平・断面図

SD01断面 1



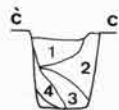
- 1 黒褐色粘砂質土
- 2 暗褐色粘砂質土
- 3 暗褐色粘砂質土(黄褐色土混)
- 4 暗褐色粘質土(黄褐色土混)

SD02断面 3



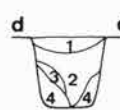
- 1 黒褐色粘砂質土
- 2 暗褐色粘砂質土
- 3 暗褐色粘砂質土(黄褐色土混)
- 4 3に比べ黄褐色土少ない(暗褐色土混)
- 5 茶褐色粘砂質土
- 6 黄褐色粘砂質土

SD02断面 5



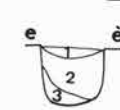
- 1 暗茶褐色粘砂質土
- 2 暗茶褐色粘砂質土(黄褐色土混)
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗茶褐色粘砂質土(黄褐色土混)

SD02断面 7



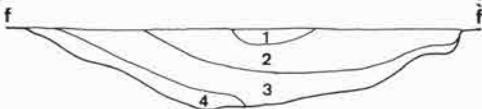
- 1 暗褐色粘砂質土(黄褐色土混)
- 2 黒褐色粘砂質土
- 3 黒褐色粘質土
- 4 暗茶褐色粘砂質土(黄褐色土混)

SD02断面 9



- 1 暗褐色粘砂質土
- 2 暗褐色粘砂質土(黄褐色土混)
- 3 暗褐色粘質土

L=113.4m



SD11断面(南から)

- 1 黒褐色粘砂質土
- 2 暗褐色粘砂質土
- 3 黄褐色礫混砂質土
- 4 暗茶褐色粘砂質土

L=113.4m



SK02断面(南から)

- 1 淡褐色砂質土(黒褐色土混)
- 2 黒褐色粘砂質土
- 3 暗褐色粘砂質土
- 4 暗茶褐色粘砂質土
- 5 暗黄褐色粘質土(黄褐色土混)



第5図 第1トレンチ個別遺構平・断面図

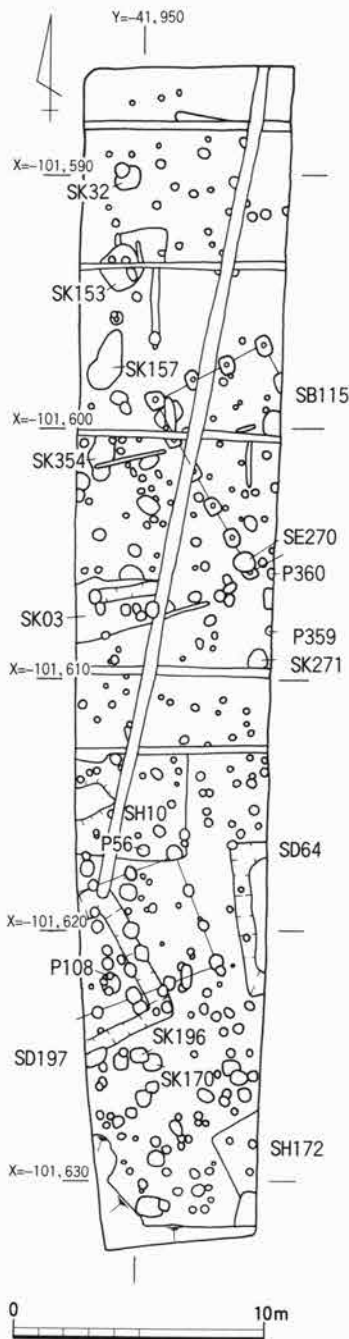
土坑SK24 第1トレンチ南部で検出した長楕円形の弥生時代中期の土坑である。長径約1m・短径約0.5m、検出面からの深さは約0.15mを測る。

土坑SK523 平面形が円形を呈する弥生時代中期の土坑である。直径約0.5m、検出面からの深さは約6cmを測る。

柱穴 P 524 第 1 トレンチ南部で検出した長楕円形の弥生時代中期の柱穴である。建物として、柱穴はまとまらない。

④時期不明遺構

掘立柱建物跡 S B 114(第 5 図) 南北 2 間、東西 1 間の北で 14° 西に振れる方形掘形を持つ掘立柱建物である。柱間は東西約 3.6m・南北 1.8m を測る。柱穴の残りが非常に悪く、西側柱列の中央の柱穴は、沈み込んだ柱跡のみが残り、円形に検出されたと想定できる。また中央にも柱穴があり、変形の総柱建物となる。弥生時代の遺構埋土が黒色に近いのに比べ色が淡いことから、それ以降の時期に属すと考えられる。



第 6 図 第 2 トレンチ遺構平面図

土坑 S K 11(第 5 図) 円形で皿状の土坑である。直径約 2.3m、検出面からの深さは約 0.4m を測る。

柵 S A 609 東西方向に 1.7~1.8m の等距離の円形柱穴を持つ柵跡である。埋土は、S B 114 のものに比べ締まりがなく、淡褐色を呈する。中世以降のものと考えられる。

(2)第 2 トレンチ(第 6 図)

第 1 トレンチ同様、近代の暗渠排水が認められる。同じく東西方向のものが先行する。遺構検出面は、耕作土直下である。

①奈良・平安時代

掘立柱建物跡 S B 115(第 7 図) 北で 28° 西に振れる方形掘形を持つ、東西 3 間、南北 5 間以上の総柱建物である。柱間は約 1.6m 等間と考えられる。平安時代の井戸 S E 271 によって柱穴が切られる。出土遺物は弥生時代の土器碎片が多いが、1 点飛鳥時代以降の須恵器杯口縁部が出土している。

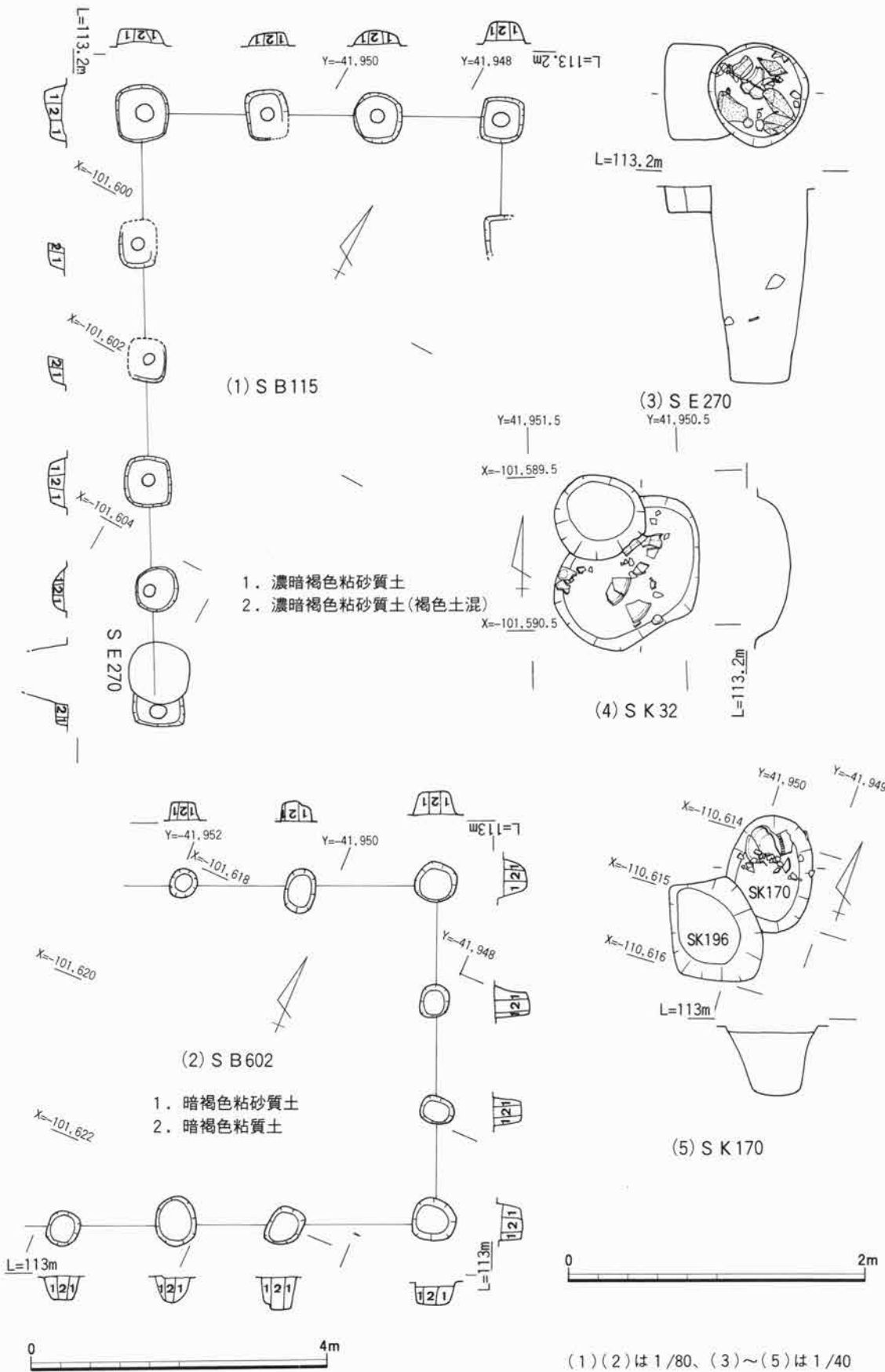
井戸 S E 270(第 7 図) 平面形が円形を呈する素掘りの井戸である。井戸底部は保水層である礫層面に達している。井戸の埋土の中位には板状の礫が含まれる部分があった。遺物は礫の前後と底部で多く出土したが、礫の出土層準から底部までは、特に土器出土数の変化は認められなかった。直径約 0.7m、検出面からの深さは約 1.3m を測る。

土坑 S K 271 楕円形の平面形を呈する平安時代の土坑である。土坑内から多くの完形の土器が出土している。長径約 0.4m・短径約 0.35m、検出面からの深さは約 0.15m を測る。

柱穴 P 46・47・50・358・359・360 S E 270 周辺の柱穴群で、平安時代の遺構は井戸周辺に限定できる。

②古墳時代

掘立柱建物跡 S B 602(第 7 図) 北で 22° 西に振れる円形掘形



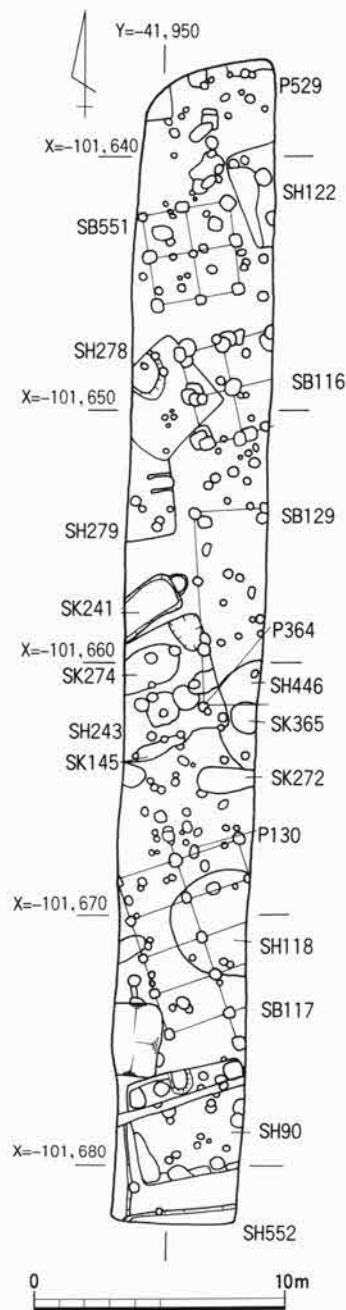
第7図 第2トレンチ個別遺構平・断面図

を持つ東西3間以上南北3間の掘立柱建物である。柱間は東西方向柱列の西側が約1.8m、他は1.5mである。出土遺物はすべて土師質の土器の碎片である。

竪穴式住居跡 S H10(第7図) 平面形が方形の7世紀の竪穴式住居跡で、張り床部のみ検出した。西辺は調査区外になるが、竈の位置から壁近くまで掘削できたことが分かる。東西約4.5m・南北約4.5mを測る。

竪穴式住居跡 S H172 平面形が方形と考えられる古墳時代後期の竪穴式住居跡である。検出面からの深さは約0.18mを測る。

③弥生時代



第8図 第3トレンチ遺構平面図

土坑 S K 03 遺構の東端が、近世以降の暗渠排水によって壊された方形の平面形を持つと考えられる弥生時代中期の土坑である。幅約2.5m、検出面からの深さは約0.1mを測る。遺構内からは弥生土器片のほか、太形蛤刃石斧・玉砥石が出土している。遺構内は多くの他の時期の遺構によって切り合い関係を持つが、多くは土坑埋土を除去後に検出した。

土坑 S K 32(第7図) 不定形の弥生時代中期の土坑で、検出面からの深さは約0.3mを測る。

土坑 S K 153 隅丸方形の平面形を持つ弥生時代中期の土坑で、一辺約1m、検出面からの深さは約0.2mを測る。

土坑 S K 157 不定形の弥生時代中期の土坑で、検出面からの深さは約30cmを測る。

土坑 S K 170(第7図) 楕円形の平面形を持つ弥生時代中期の土坑で、長径約0.8m・短径約0.6m、検出面からの深さは約0.45mを測る。土坑内からは大型の壺146の口縁部が出土している。

④時期不明遺構

溝 S D 64 調査区外に東に延びる、「コ」の字状の溝である。出土遺物は少ないが、弥生時代中期の土器が含まれる。検出面からの深さは約0.1mを測る。

溝 S D 197 調査区外に西に延びる、「コ」の字状の溝である。検出面からの深さは約0.1mを測る。S D 64と同じ性格を持つと考えられるが、古墳時代の遺物を含む。柱穴に多く切られていたため混入した可能性も考えられる。

(3) 3トレンチ(第8図)

①古墳時代

掘立柱建物跡 S B 116(第9図) 北で主軸を西に11°振る2間×2間の総柱の掘立柱建物である。方形の平面形を持つ柱掘形は、

3度の切り合い関係を持ち、同位置で3回の建て替えが行われたと考えられる。SH278との切り合い関係から古墳時代以降と考えられる。南北方向の柱間距離は約1.8m、東西方向の柱間距離は約1.8mを測り、南北方向の方が長い。

掘立柱建物跡SB117(第9図) 2間×4間の総柱の母屋を持ち、妻中央の柱の外の両側に棟持ち柱と考えられる柱穴が1か所ずつ認められる。北で主軸を西に19°振る。柱穴は円形に近い隅丸方形を呈しているが、棟持ち柱は方形に近い。南北方向の柱間距離は約1.6m、東西方向の柱間距離は約2.5mを測り、東西方向の方が長い。妻と棟持ち柱の間は1mを測る。

掘立柱建物跡SB129 南北3間、東西2間以上の円形堀形を持つ掘立柱建物である。北で主軸を西に4°振る。南北方向の柱間距離は約1.6m、東西方向の柱間距離は約2.4mを測り、東西方向の柱間が長い。棟持ち柱は妻から1.1m離れる。柱穴内からの遺物は少ないが、弥生土器片が含まれる。竪穴式住居跡との関係から古墳時代に位置付けた。

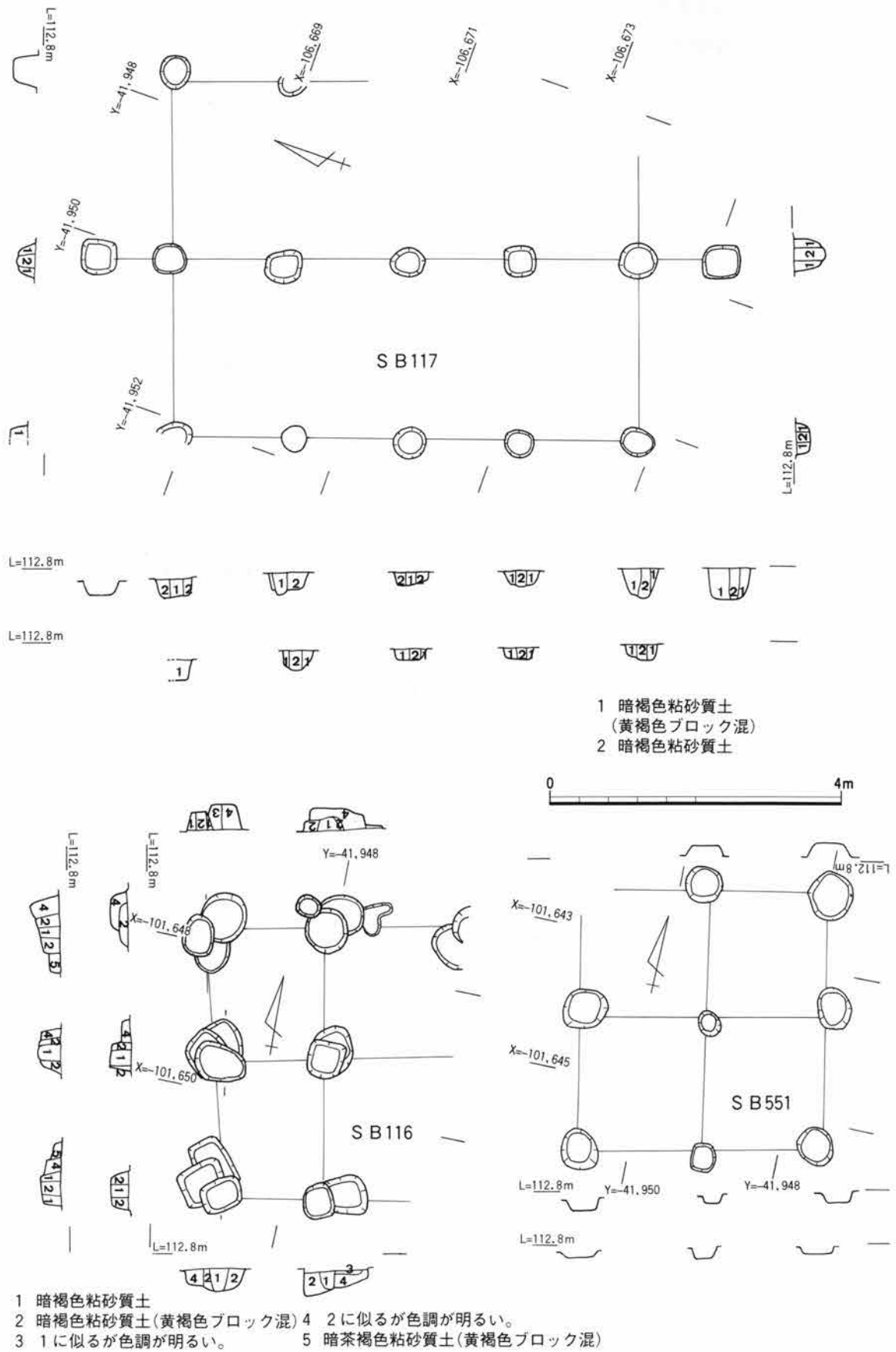
掘立柱建物跡SB551(第9図) 北で主軸を西に10°振る2間×2間の総柱の掘立柱建物である。南北方向の柱間距離は約1.8m、東西方向の柱間距離は約1.7mを測り、南北方向の方が長い。

竪穴式住居跡SH90(第10図) トレンチ南端で検出した住居跡である。平面形は、方形で、長辺約4.7m・短辺約4.2m・深さ約0.25mを測る。床面から多数の柱穴を検出した。主柱穴については、方形に配されていると推定され、深さ約0.4~0.6mの柱穴を3か所で検出した。南東の主柱穴については、調査区外になるとみられる。住居床面の各コーナーでは、方形および不整形の土坑を検出した。また、北辺から南辺の周壁沿いでは、部分的に周壁溝を確認した。住居床面中央では、よくしまった暗黄褐色粘質土の土層を検出した。

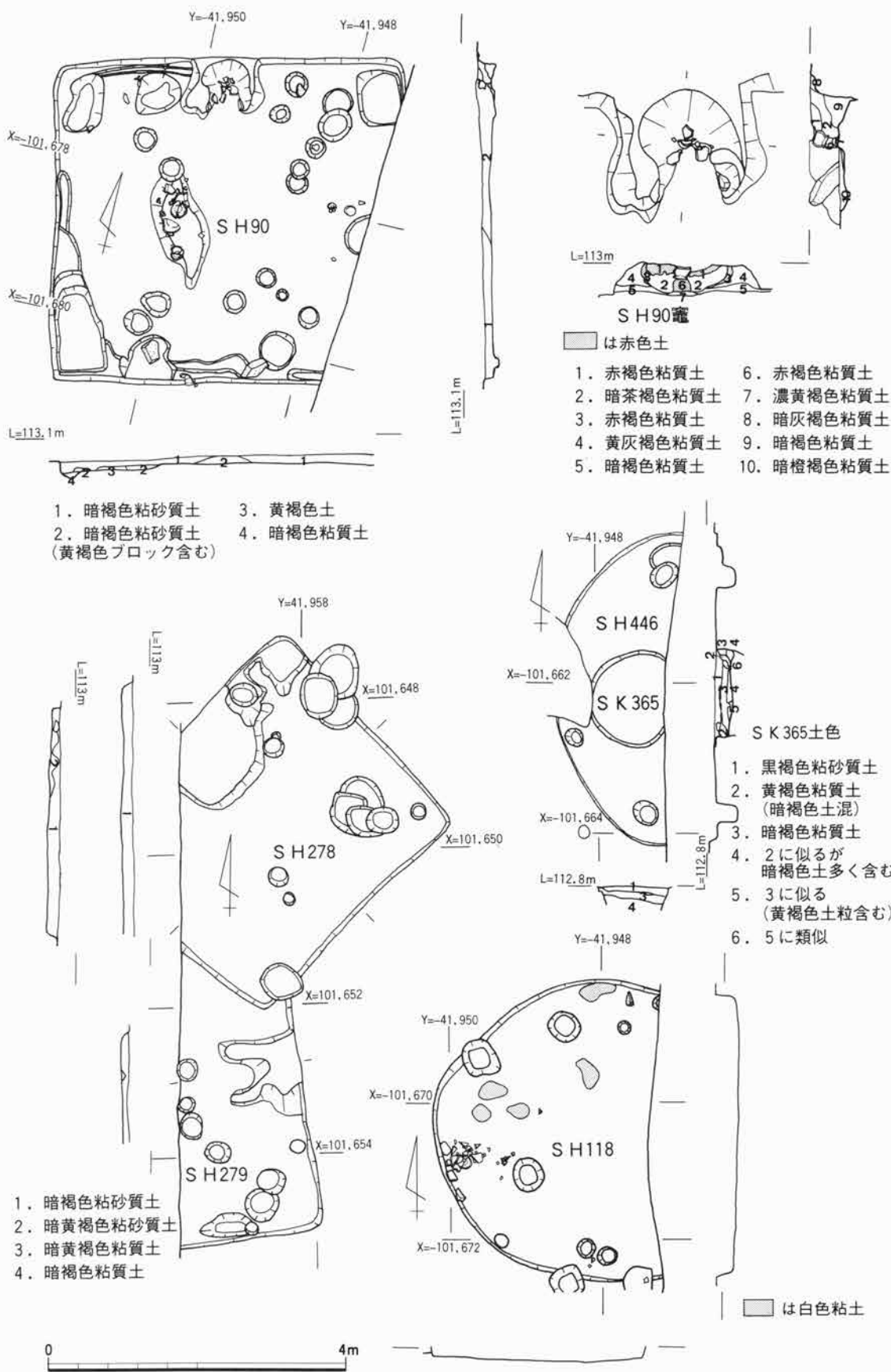
北辺の周壁中央には、竈が位置する。竈の遺存状況はきわめて良好で、規模は、長さ約0.8m・幅約1.1mを測る。竈外壁は、黄灰褐色粘土で固められ、中央部から土師器小形壺を反転させた支脚を検出した。竈断面の観察によって、被熱した竈内壁および内壁天井部が残存し、一部の崩落は認められるものの、当初の形状をよく維持していることを確認した。内壁天井部は、土圧により本来の位置からやや下がっているが、基底部から天井部までの高さは約0.15mを測る。竈内では繊細な赤褐色斑粒を多く含む土色変化がみられた。また、支脚の下層から、支脚を設置した際に土台にしたとみられる赤褐色の粘土塊を検出した。この粘土塊は、支脚の位置をより高くし、熱効率をより高めるために設置されたものであろう。支脚の直上からは、土師器甕の底部が出土した。竈の焚き口は、「ハ」の字状に開き、焚き口の内寄りには、左右に石材が取り付けられている。これらは、やや内傾気味に埋置されていることから、放熱を防ぐ機能を有していたと考えられる。竈本体から住居の外側にかけて、断ち割り調査を行ったが、煙道等の付属施設は確認されておらず、すでに削平されたものとみられる。

出土遺物は、住居跡中央部で、土師器甕が出土し、南辺の周壁西寄りの位置で、砥石が出土した。また、北東主柱穴の南側で検出した小柱穴からは、口縁部を打ち欠いた甕が出土した。

竪穴式住居跡SH274 トレンチ中央部で検出した住居跡で、平面形は方形で、長辺約4.6m・



第9図 第3トレンチ個別遺構平・断面図 (1)



第10図 第3トレンチ個別遺構平・断面図(2)

短辺約4.5m、検出面からの深さ約5cmを測る。竈の痕跡が東辺中央部に認められた。床面では多くの土坑が検出できた。SK145は南壁にそって掘られていることから、同時期のものと考えられる。内部からは古墳時代後期の土器が出土しており、竈出土の土器と年代は齟齬しない。柱穴P364は主柱穴にあたる位置にあるが、2つの柱穴が重なり合っており、SB129の柱穴である可能性もある。

竪穴式住居跡SH278(第10図) トレンチ中央部で検出した住居跡で、平面形は方形を呈し、長辺約3.8m・短辺約3.4mを測る。主柱穴とみられるやや深い柱穴を、3か所で検出した。竈は北辺中央の周壁に取り付くが、遺存状況は悪く、被熱した暗黄褐色粘土塊と、一部の焼土を確認したに過ぎない。住居床面の北東隅で、長さ約0.5mの不整形の土坑を検出した。

竪穴式住居跡SH279(第10図) SH278の南側で検出した方形住居跡で、床面の一部を、SH278により削平されている。床面の西側は、調査区外であり、規模は不明である。竈は、東辺の周壁中央に付設される。竈の焚き口北側では、須恵器杯身が出土しており、6世紀後半頃の住居と推定される。

②弥生時代

竪穴式住居跡SH118(第10図) 平面形が円形を呈する竪穴式住居跡である。東部は第4次調査区に含まれる。主柱穴の検出につとめたが明確なものは検出できなかった。床面には白色の粘土が散在し、長楕円形を呈する。土器焼成用の粘土と想定できる。住居の壁面から2点の砂岩製の砥石が出土している。出土土器から弥生時代中期に属すると考えられる。直径約4m、検出面からの深さ約0.1mを測る。

竪穴式住居跡SH446(第10図) 平面形が円形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡内からはSK365が検出できた。土坑底部からはSH118と同様の白色粘土が検出できた。出土土器から弥生時代中期に属すると考えられる。直径約4.5m、検出面からの深さ約0.1mを測る。

土坑SK241 西端が調査区外であるが、平面形が長方形を呈する土坑で、長辺2.5m以上、短辺約1.3m検出面からの深さ約0.7mを測る。土坑底部東側には、壁面に沿って溝が巡る。

柱穴P242 SH243内部の土坑SK274の底部から検出した柱穴である。出土遺物から弥生時代中期に属する。

③時期不明

土坑SK272 隅丸長方形を呈する土坑で、7トレンチで検出した埋葬主体部と規模が似るが、木棺痕跡や遺物は検出できなかった。長辺約2m以上・短辺約0.9m、検出面からの深さ約0.1mを測る。

(4) 4 トレンチ(第11図)

トレンチの南に行くに従って、黒ボク層が厚くなる傾向が見られる。また、南端は鞍部になることが周辺の調査で確認でき、漸移層の堆積も厚い。

①古墳時代

竪穴式住居跡SH104(第12図) トレンチ北側で検出したもので、SH105の東側の床面を削平

し、構築されている。一部、残存していた西側の床面は、一辺約4.5mを測り、西側の周壁沿いと推定される位置に、黄褐色粘土を固めた竈が構築されている。竈は、中央部に土師器小形壺を反転して設置して、支脚としたもので、その直上で、土師器甕の底部が出土した。

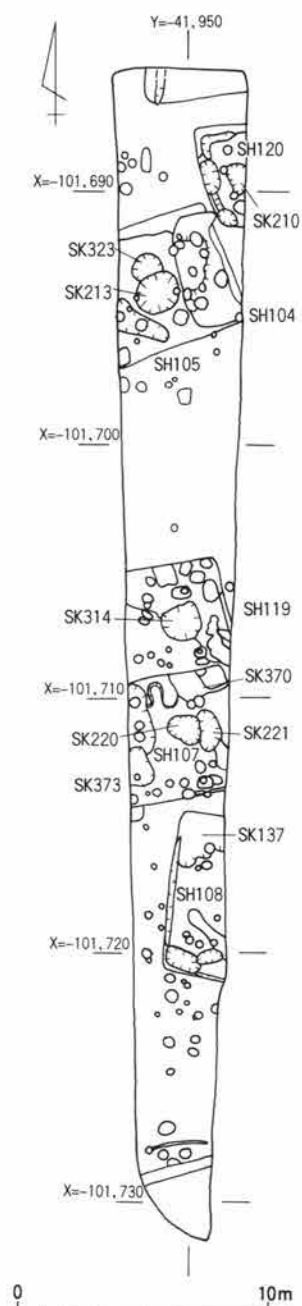
竪穴式住居跡 S H105(第12図) S H104と切り合い、東側を S H104下層で検出した住居跡である。平面形は方形で、一辺約5.0m・深さ約0.1mを測る。支柱穴とみられる深さ約0.3m前後の柱穴は、貼床上面では3か所で検出し、貼床下層では、柱穴は、小柱穴を含めると20か所以上で検出している。また、床面の南東隅と南西隅から、不整形の土坑を検出した。また、同じく床面中央部から、直径約1.8m・深さ約0.15mの円形の土坑を検出した。これらの土坑から、特に顕著な遺物は出土していない。

竪穴式住居跡 S H107(第13図) S H119の建て替えと推定される住居跡で、一辺約4.9m・深さ約0.1mを測る方形住居跡である。竈は、北側周壁に沿って構築されており、竈中央部から土師器の土製支脚を検出した。床面には、一部に貼り床が遺存し、支柱穴は、3か所で確認した。北西の未掘部分を含めると、支柱穴はほぼ正方形に配されていると推定される。貼り床下層では、床面中央やや東寄り、直径約1.3m・深さ約0.3mのほぼ円形の土坑を検出し、竈の東側と、床面東側でも、不整形の土坑を検出した。これらの土坑からは、いずれも遺物は出土していない。周壁溝は、南周壁に沿って一部を確認した。

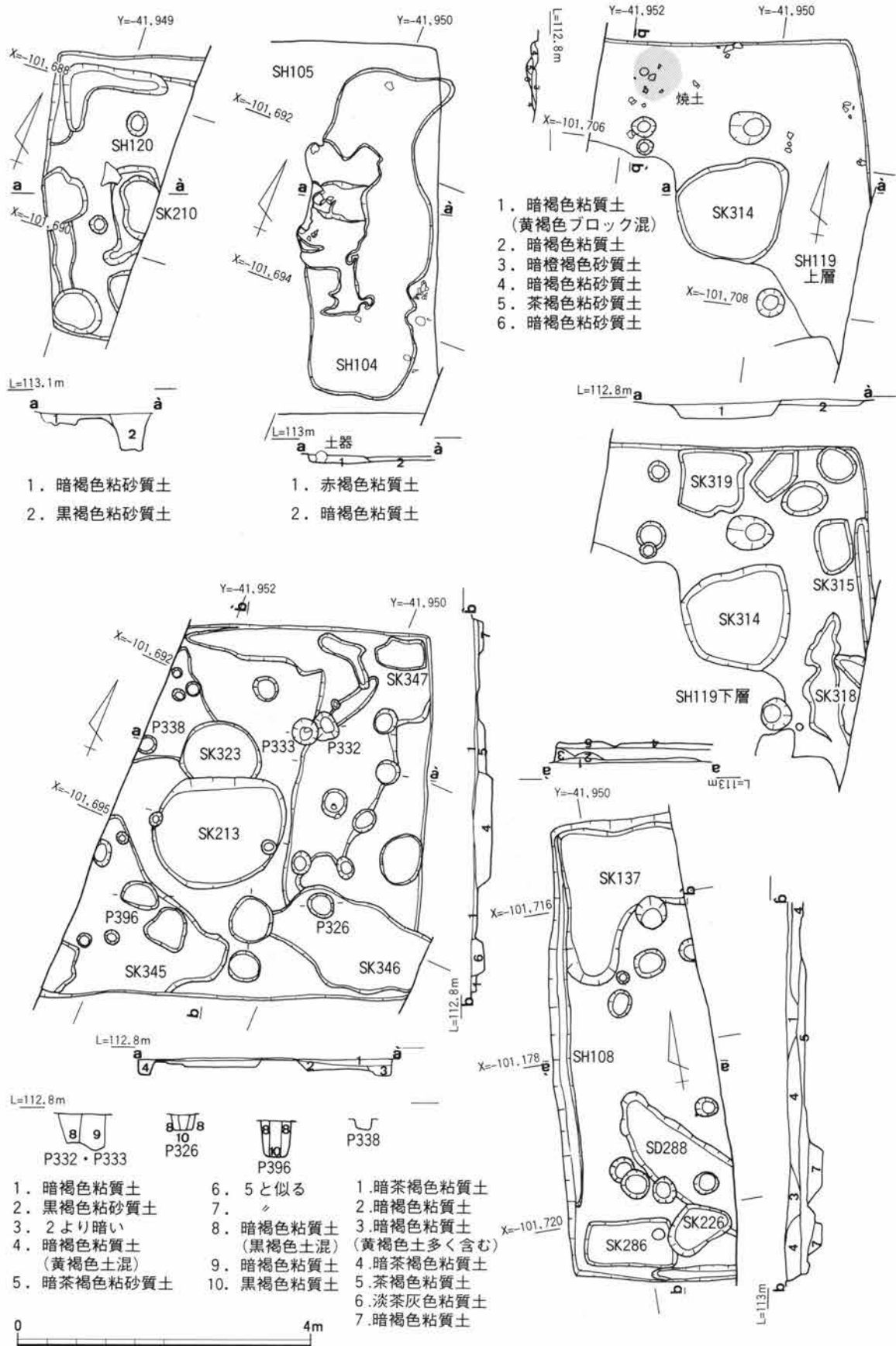
竪穴式住居跡 S H108(第12図) 第4トレンチ中央東側で検出した方形の住居跡である。床面西側の一部を検出したもので、一辺約6.3m・深さ約0.2mを測る。床面では、約0.1mの厚さで、貼り床を確認しており、2か所で支柱穴とみられる柱穴を検出した。西側および南側の周壁沿いで、幅約0.15m・深さ約0.2mの周壁溝を検出した。また、貼り床下層では、中央部や周壁沿いで、不整形の土坑を検出した。貼り床上のやや北寄りの位置で、須恵器杯身等が出土しており、6世紀後半～末頃の住居跡と推定される。

竪穴式住居跡 S H119(第12図) トレンチ中央部で検出した住居跡で、床面南東隅は、S H107に一部削平される。平面形は方形で、検出面での長さは、一辺約4.5m・深さ約0.1mを測る。支柱穴は、3か所で検出した。床面中央部では、直径約1.5m・深さ約0.2mのほぼ円形の土坑を検出した。床面北西から、須恵器杯蓋等が出土しており、おおよそ6世紀後半頃の住居跡と推定される。

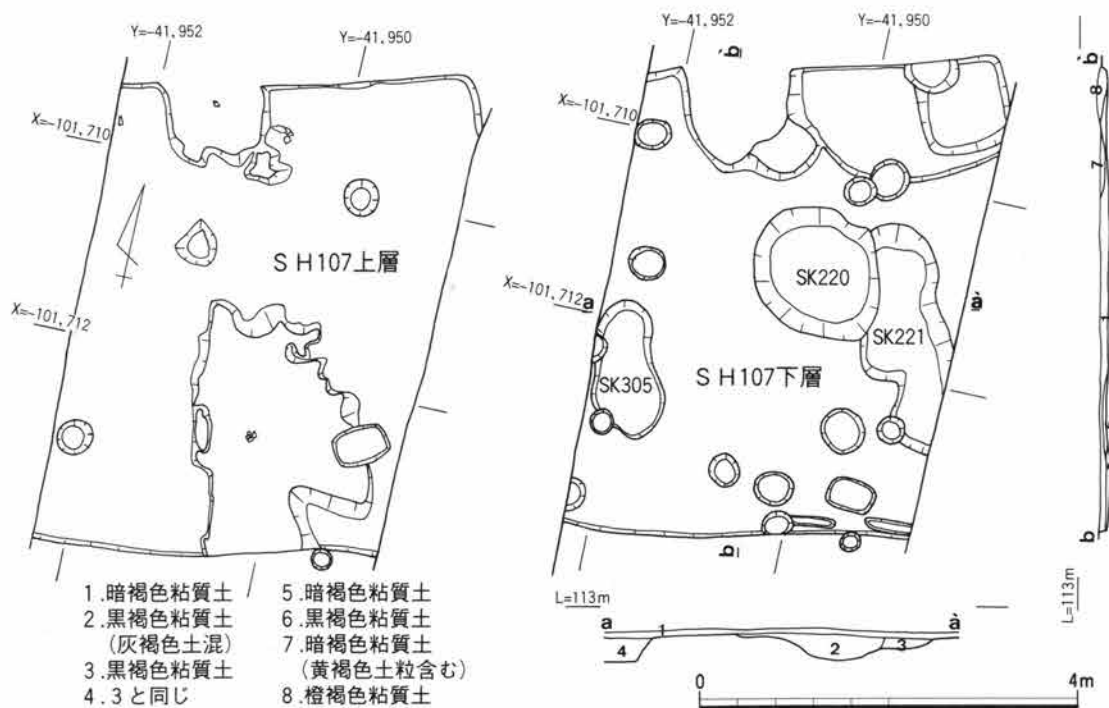
竪穴式住居跡 S H120(第12図) トレンチ北側で、住居跡の西半分を検出した。平面形は方形



第11図 第4トレンチ
遺構平面図



第12図 第4トレンチ個別遺構平・断面図(1)



第13図 第4トレンチ個別遺構平・断面図(2)

で、一辺約3.9m・深さ約0.2mを測る。支柱穴は、2か所で検出しており、正方形に配置されているものと推定される。幅約0.3mの周壁溝を部分的に検出しており、床面で、厚さ約0.1mの貼り床を確認した。また、住居中央部の貼り床下層で、約1.0m×約0.7mの楕円形の土坑を検出した。土坑内から、特に遺物は出土しておらず、炭化物等も認められなかった。

(5) 5 トレンチ(第14図)

調査トレンチが現行の用水路を挟んで西側に移動する。弥生時代の竪穴式住居跡1基、古墳時代の竪穴式住居跡6基のほか、掘立柱建物跡あるいは柵と思われる柱穴群や土坑・溝などが検出された。

①古墳時代

竪穴式住居跡 S H 390(第15図) 竪穴式住居跡 S H 396と重複する方形の竪穴式住居跡である。S H 396と同様、西壁を除く三方の周壁を検出した。南北長5.6m・深さ0.1mを測る。南壁の中央に竈を有する。竈はすでに崩壊しており、焼土塊を検出したにとどまる。周壁溝は南壁の一部で検出したにすぎない。出土遺物から古墳時代後期末頃の竪穴式住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 391(第15図) 竪穴式住居跡 S H 390の南辺に接して検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。南東角が調査地外にあるものの、ほぼ全体の形状を明らかにすることができた。南北長4.7m・東西長4.2m・深さ0.1mを測る。北壁の中央に馬蹄形を呈する竈を有する。周壁溝は東壁と北西角付近で検出した。床面上で柱穴を10基ほど検出したが、支柱穴と思われるものは3基で、直径0.2~0.3mを測る。

出土遺物は、竈の東側で須恵器杯蓋・杯身・甕(口縁部)などがまとまって出土した。甕は口縁

部を正位にした状態で出土しており、何らかの置き台として利用されていたのかもしれない。また、東壁付近で土師器皿(245)が完形に近い状態で出土した。そのほかにも埋土中から須恵器杯、土師器杯・甕、土錘などが出土した。出土した遺物から、飛鳥時代中頃と考えられる。

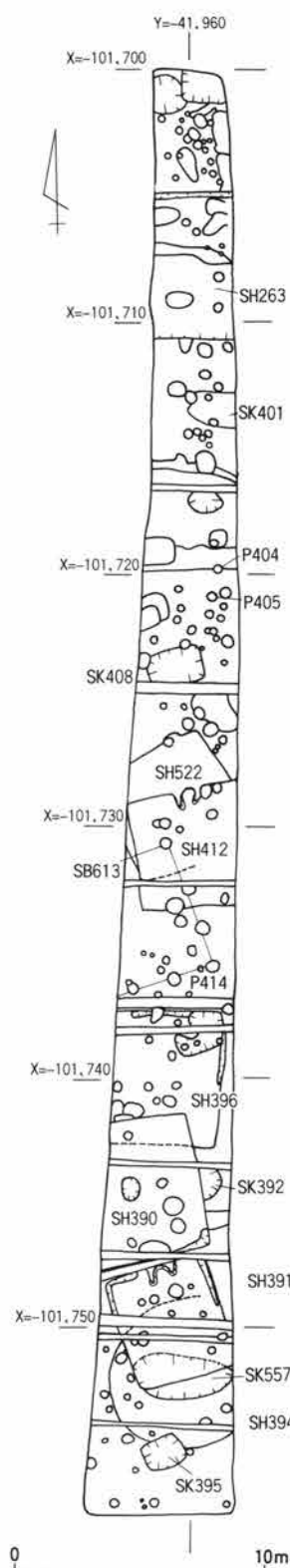
竪穴式住居跡 S H 263(第15図) 第5トレンチの北端で検出した。南北の周壁が平行することから、方形を呈する竪穴式住居跡と考えられる。東西の両壁は調査地外に位置する。南北長5.8m・深さ0.2mを測る。北壁に沿って周壁溝を検出したが、南壁では検出されなかった。床面上で柱穴・土坑などを検出したが、主柱穴の可能性のある2か所を除くと、S H 263に伴うものであるかどうか不明である。出土遺物から、古墳時代後期前半～中頃と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 396(第15図) 第5トレンチの南半で検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。西壁を除く三方の周壁を検出した。南北長5.2m・深さ0.15mを測る。周壁溝は北壁と東壁で検出したが、南壁については竪穴式住居跡 S H 390との重複関係にあるため不明である。北東隅に長軸2.2m・短軸1.6mを測り、深さはわずか数cmの非常に浅い土坑がある。柱穴は多数検出したが、主柱穴として復原できるものはない。柱穴のうち何か所かは検出面から掘り込まれており、明らかに住居跡に伴わないものもある。

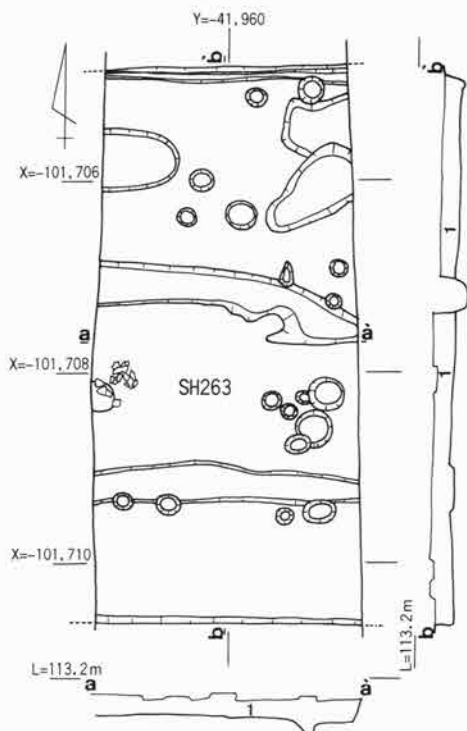
出土遺物としては、須恵器片・土師器片などがあるものの、図示できたのは土師器甕1点のみである。S H 396は、後述する竪穴式住居跡 S H 390に先行することから、古墳時代後期後半～末に位置づけられよう。

竪穴式住居跡 S H 412(第15図) 竪穴式住居跡 S H 522と重複する方形の竪穴式住居跡である。東壁が調査地外にあるが、北壁と南西隅を検出した。南北長4.6m・深さ0.2mを測り、方形を呈する住居跡である。北壁の中央に馬蹄形を呈する竈を有する。周壁溝は検出されなかった。柱穴は10基検出したが、主柱穴の可能性のあるものは2か所である。柱穴の中にはS H 522に伴う柱穴もあると思われる。出土遺物から古墳時代後期前半と考えられる。

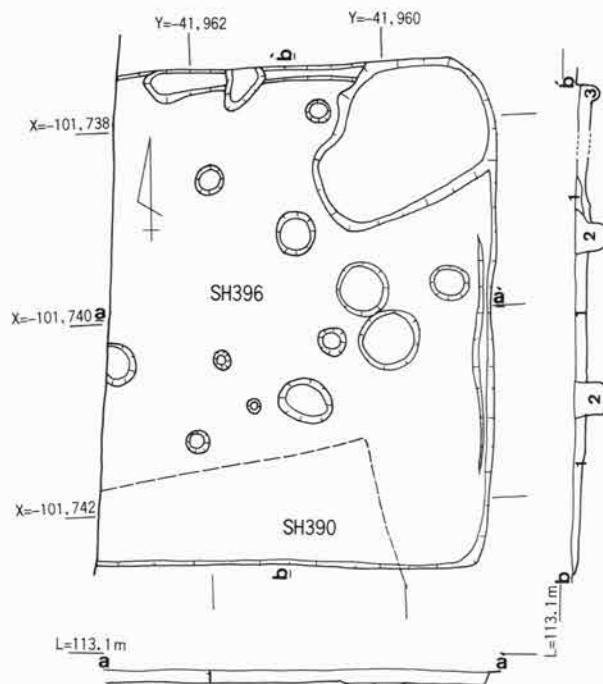
竪穴式住居跡 S H 522(第15図) 第5トレンチの中央部で検出された方形を呈する竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡 S H 412と重複しており、これに先行する。南隅と北隅を検出しており、南北長4.8m・東西長4.8m・深さ0.2mを測る。北西壁から北角にかけて周壁



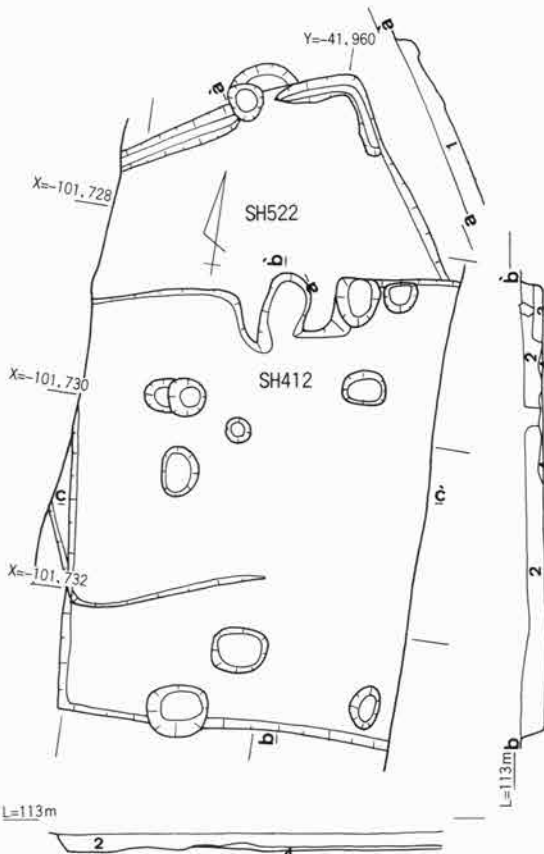
第14図 第5トレンチ
遺構平面図



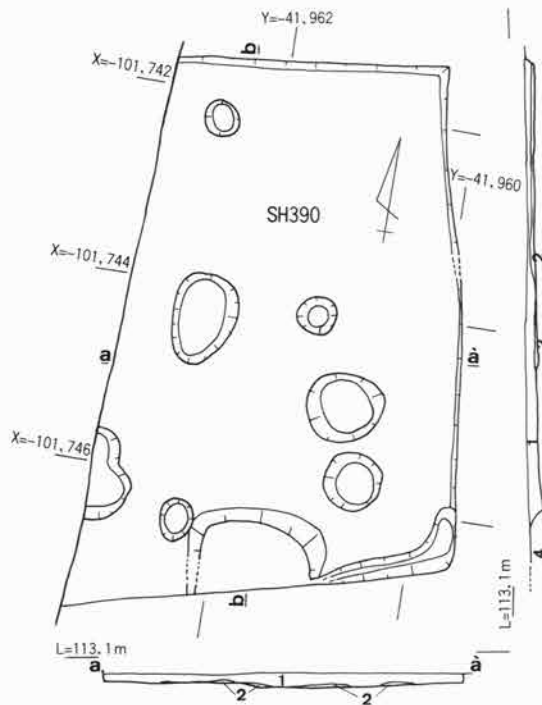
1. 暗褐色粘質土



1. 暗褐色粘砂質土
2. 暗褐色粘砂質土 (1より淡い)
3. 暗褐色粘砂質土 (黄褐色土混)



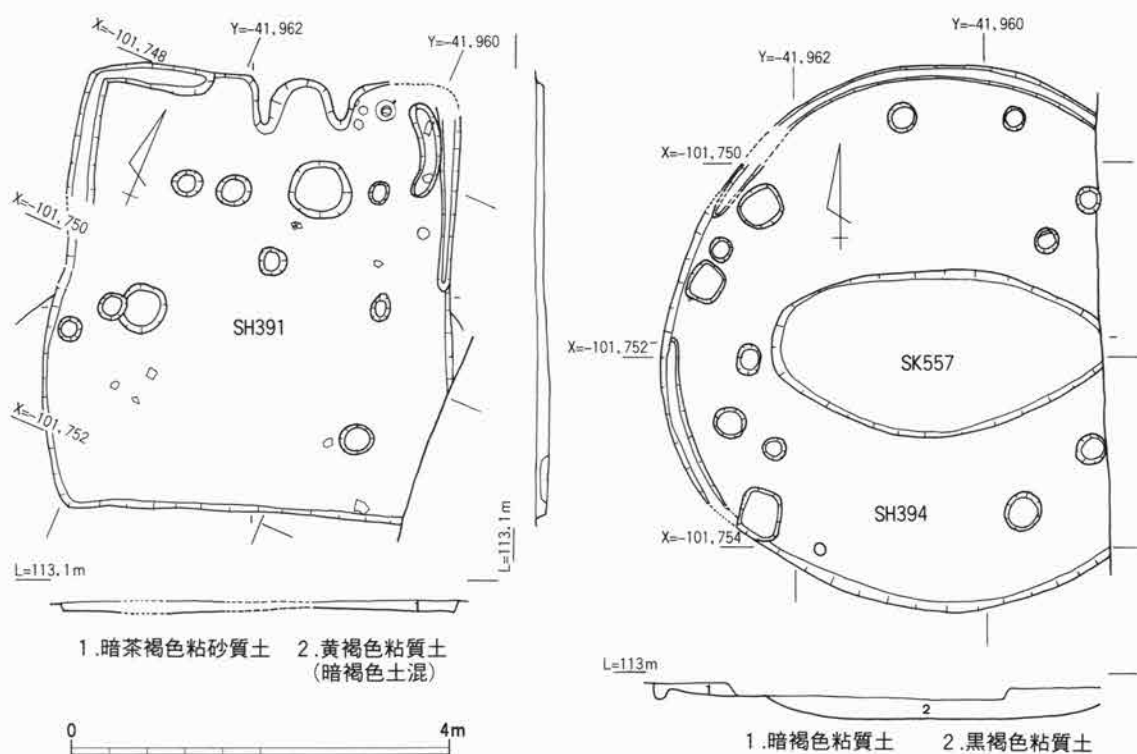
1. 暗褐色粘砂質土
2. 暗褐色粘砂質土 (黄褐色土を含む)
3. 焼土
4. 暗褐色粘砂質土 (焼土を含む)



1. 暗褐色粘砂質土
2. 黒褐色粘質土
3. 暗褐色粘砂質土 (黄褐色土混)
4. 暗橙褐色砂質土



第15図 第5トレンチ個別遺構平・断面図(1)



第16図 第5トレンチ個別遺構平・断面図(2)

溝を検出した。南側では周壁溝は検出されなかった。

出土遺物には、須恵器片・土師器片などがあるが、今回は図示していない。SH522は、後述する竪穴式住居跡SH412に先行することから、古墳時代後期初頭に位置づけられよう。

土坑SK557 SH394住居跡の中央にある東西方向に主軸をもつ長楕円形を呈する土坑である。土層断面の観察と、須恵器片が出土したことから、SH394に伴うものではなく、古墳時代以降の遺構と判断された。

土坑SK408 第5トレンチのほぼ中央、竪穴式住居跡SH522の北に位置し、平面形が長方形を呈する土坑である。全長約2.2m・幅約1.5m・深さ約0.1mを測る。出土遺物には土師器甕などがある。

②弥生時代

竪穴式住居跡SH394(第16図) 第5トレンチの南端で検出された円形を呈する竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡SH391と重複する。東端は調査地外にのびるが、径5.8m・深さ0.1mを測る。床面上で周壁溝と柱穴を検出した。周壁溝は全周せず、南側には見られない。柱穴は、周壁に沿って検出された。

(6)第6トレンチ(第17図)

第6トレンチでは、古墳時代の竪穴式住居跡3基、掘立柱建物跡1棟のほか、性格不明の落ち込みなどが検出された。

①古墳時代

掘立柱建物跡 S B 603(第18図) 性格不明の落ち込み S X 510の完掘後に、桁行5間(長さ8.0m)・梁間4間(長さ5.8m)を測る掘立柱建物跡1棟を確認した。建物の主軸が北で15°西に振る。各柱穴は、一辺0.4~0.6mを測る方形を呈する。深さは0.2~0.4mを測るが、柱穴の底面はおおむね標高112.3mを測る。

出土遺物としては、各柱穴から須恵器・土師器小片が出土した。出土した遺物から古墳時代後期末頃に位置づけられる。

竪穴式住居跡 S H 459・514 調査地の北半で検出したが、その一部が検出されたにとどまり、全容は不明である。

出土遺物としては、須恵器片・土師器片があり、S H 514出土の須恵器杯身を図示した。S H 514は、出土した遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。S H 459の時期は不明である。

竪穴式住居跡 S H 528 調査地の南半で検出された方形を呈する、やや大型の竪穴式住居跡である。東壁の一部が、落ち込み S X 510と重複するため、北東隅から東壁にかけては、やや不明瞭であるが南北長6mを測る。比較的残りのよい南西隅付近で深さ0.15mを測る。同規模の住居跡が第7トレンチでも検出されている(竪穴式住居跡 S H 509)。床面上では、柱穴を検出したが、主柱穴とは考えにくい。また、周壁溝は検出されなかった。

出土遺物としては、須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕、土師器甕、弥生土器甕などがある。出土した遺物から古墳時代中期後半頃に位置づけられる。

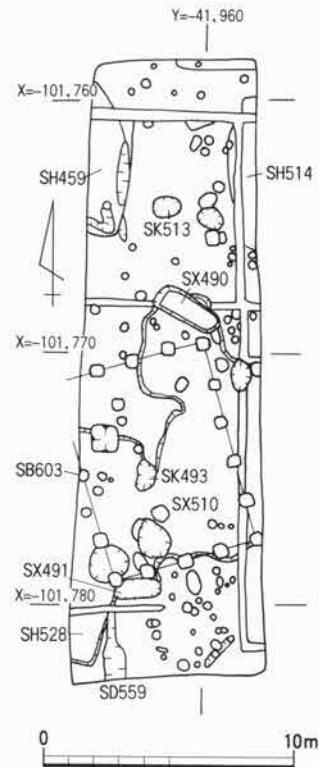
溝 S D 559 第6トレンチの南端を南北方向に流れる溝である。検出長2.5m・幅0.3~0.8m・深さ0.25mを測り、途中から著しく幅が大きくなる。溝の北端は竪穴式住居跡 S H 528と切り合うため不明である。南端は調査区外にのびるが、第7トレンチでは確認していない。

出土遺物としては須恵器杯蓋などがある。出土した土器から、古墳時代中期後半に位置づけられる。

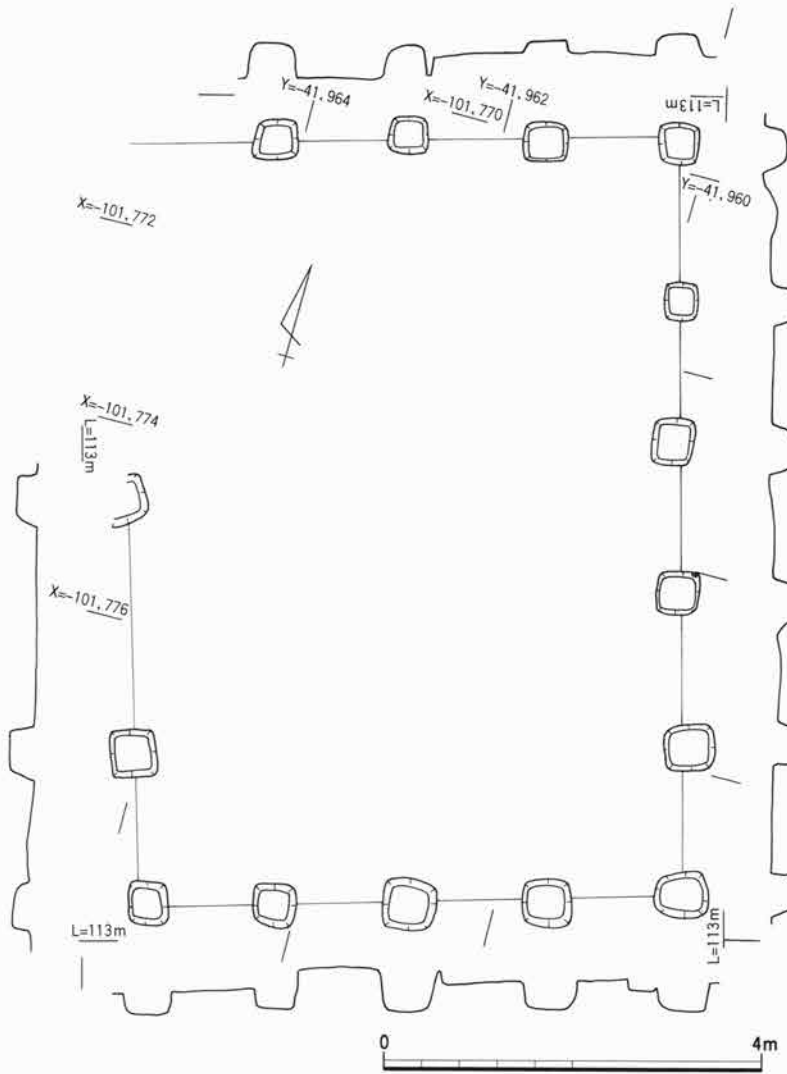
落ち込み S X 510 第6トレンチの中央から南半にかけて広がる落ち込みである。土層断面の観察から、一度に掘削されたのではなく、何回にもわたって掘り返されたような形跡をうかがうことができた。

出土遺物としては、須恵器杯蓋・杯身・高杯・器台、土師器甕などがある。出土した遺物から古墳時代中期中頃~後半に位置づけられる。

S X 510は、どのような目的で掘削されたかは不明であるが、調査地周辺では、瓦作りのための粘土採掘が近年まで行われていたので、古墳時代においても、土器作りなどを目的とした粘土採掘が行われていたことを示すのかもしれない。第7トレンチの北半で検出した S X 511についても同様の粘土採掘に伴う落ち込みの可能性はある。



第17図 第6トレンチ
遺構平面図



第18図 掘立柱建物跡 S B 603平・断面図

古墳時代の竪穴式住居跡4基、奈良・平安時代の掘立柱建物跡1棟などがある。

①奈良・平安時代

掘立柱建物跡 S B 463(第20図) トレンチ中央西端で部分的に検出した建物跡である。南北3間・東西1間以上で、柱穴の堀形は、一辺約0.6~0.9mの隅丸方形を呈する。建物の主軸は、北で2°西に振る。柱間は、東西約1.75~1.9mを測る。南北は、北側と南側の1間がともにやや大きく約1.3~1.5mで、中央の1間は約1.2mを測る。柱穴から遺物は出土しておらず、時期は不明である。遺構検出は、黄褐色土と黒色土の漸移層中で行ったが、断面観察から遺構の切り込み面は黒色土層中にあることが分かった。包含層中から近江産の緑釉陶器が出土していることから平安時代後半の可能性を指摘しておきたい。

②古墳時代

竪穴式住居跡 S H 416(第20図) トレンチ中央部で検出した方形の古墳時代後期の竪穴式住居跡である。住居北辺の周壁には暗黄褐色粘土を固めた竈が取り付け、中央部から支柱石を検出した。床面には、部分的に貼り床が施される。東西約3.6m・南北約3.2m、検出面からの深さ約6

②時期不明遺構

土壌 S K 490 落ち込み S X 510の北辺で検出した土壌である。全長2.6m・幅0.9m・深さ0.15mを測る。出土遺物がなく時期不明であるが、形状から土壌墓の可能性を考えたい。

土壌 S K 491 落ち込み S X 510の南辺で検出した長方形の土壌である。全長1.6m・幅0.65m・深さ0.15mを測る。S K 490同様、出土遺物がないため時期不明であるが、形状から土壌墓の可能性を考えたい。

(7)第7トレンチ(第19図)

第7トレンチでは、弥生時代中期の方形周溝墓3基・主体部26基・溝2条、

cmを測る。

竪穴式住居跡 S H417(第20図) トレンチ中央部で検出した一辺約4.4m・深さ約0.1mのほぼ正方形の住居跡である。床面からは、10か所以上の柱穴を検出したが、深さ約0.3m前後の支柱穴とみられる柱穴は、3か所で確認した。住居北辺の周壁には暗黄褐色粘土を固めた竈が取り付く。南西辺と南東辺には周壁溝と考えられる溝が掘られていた。床面には、部分的に貼り床が施される。また、北西辺の周壁沿いで、貼り床下層から、深さ約0.2~0.3mの不整形の土坑を検出した。遺物は、床面から、須恵器片が出土している。

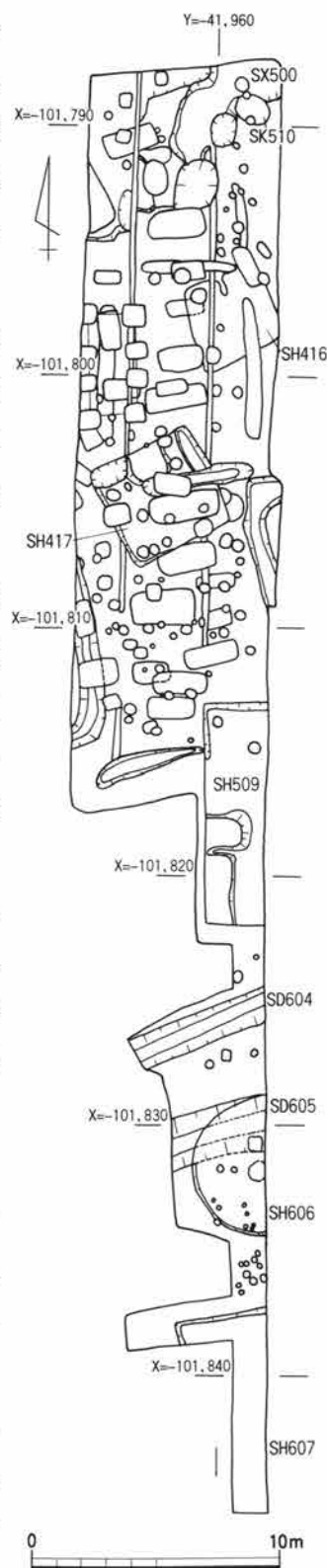
竪穴式住居跡 S H509(第20図) 調査区南部および拡張区で西部を検出した方形の竪穴式住居跡である。竈は西辺の南よりから検出できた。その南側には遺構検出面に似た黄褐色の土が、床面に置かれており、いわゆるベット状遺構に類似する。南北長約8.7m、検出面からの深さ約0.2mを測る。

竪穴式住居跡 S H607 拡張区の南部で隅部を検出した方形の竪穴式住居跡である。調査区内では竈は検出できなかった。南北の長さは8.2m以上と、S H509と同規模以上の大型の住居跡である。現行の水路の斜面によって切られるが、遺跡はより南に延びていくことがわかる。南北約8.2m以上の規模を持ち、検出面からの深さは約0.25mである。

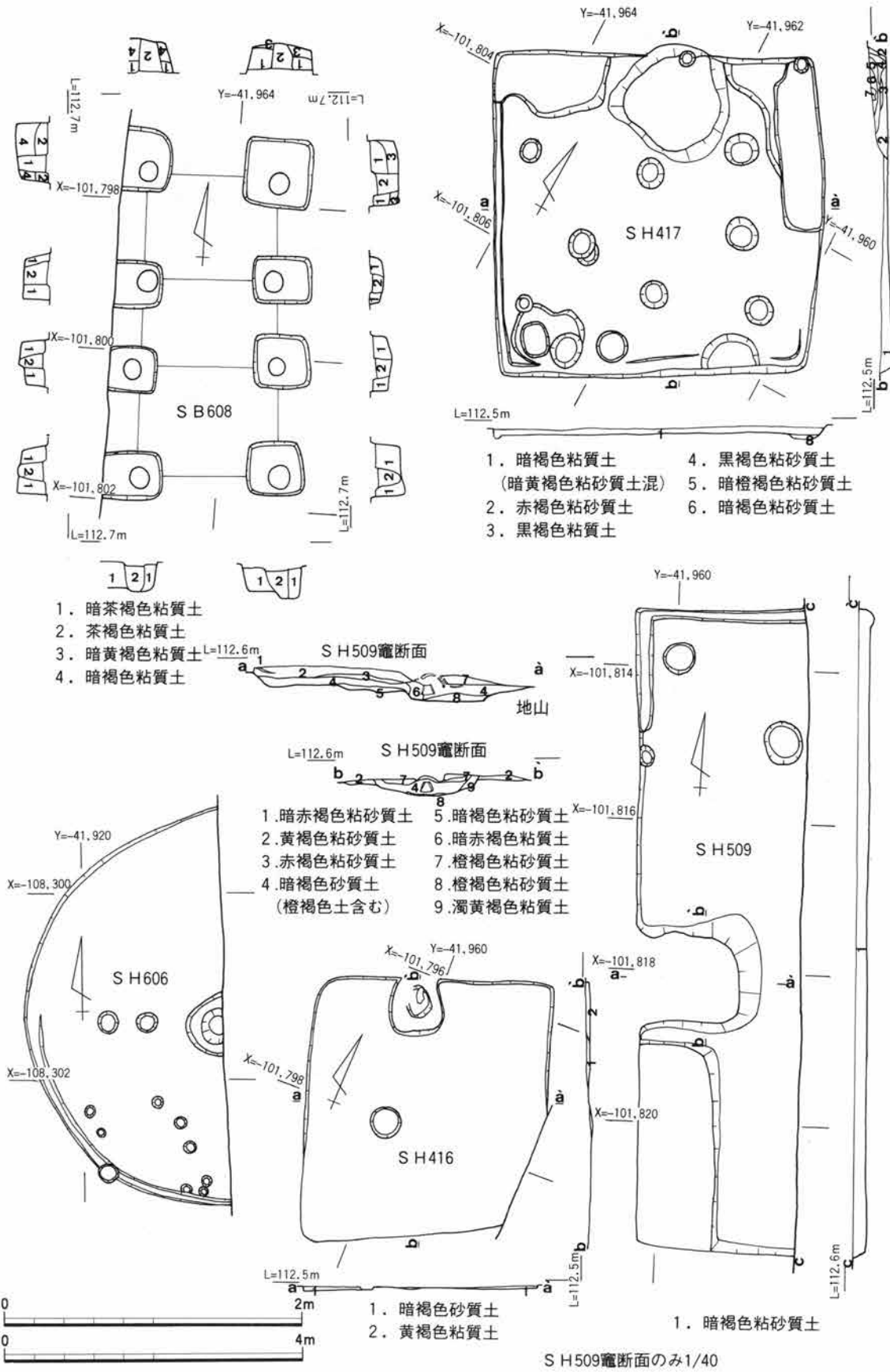
土坑 S K511・落ち込み S X510 第7トレンチの北側から農道の下へ広がる落ち込みである。土層断面の観察から、一度に掘削されたのではなく、何回にもわたって掘り返されたような形跡をうかがうことができた。出土した遺物から古墳時代中期中頃~後半に位置づけられる。

③弥生時代

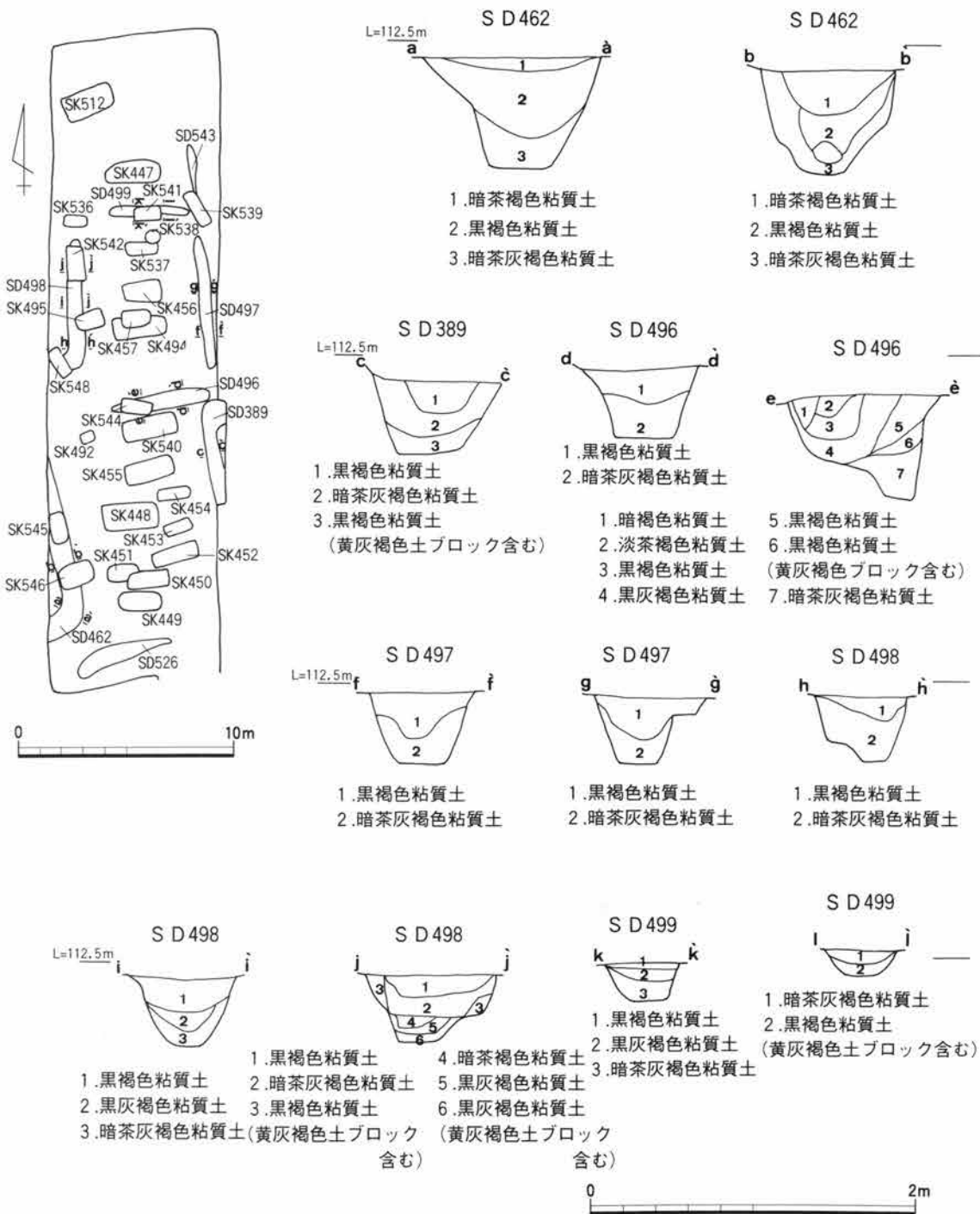
方形周溝墓 S T610(第21図) 方形周溝墓 S T610は、第7トレンチの南端で検出された方形周溝墓で、南北10.5m・東西8mを測る。S T610の東側周溝 S D462・西側周溝 S D389は、ともにコーナーを1か所検出したにとどまるが、S T610を囲わずに外側に向かつてのびる。また、S T610の北側周溝 S D496と南側周溝 S D526は、各々 S D462、および S D389とつながっておらず、S T610の四隅を掘り残している。これに対して、S D462・389は、コーナー部分を明らかに掘削しており、これらの溝に囲まれた別の方形周溝墓が存在すると予想される。したがって、S T610は、未確認の東西両側



第19図 第7トレンチ遺構平面図



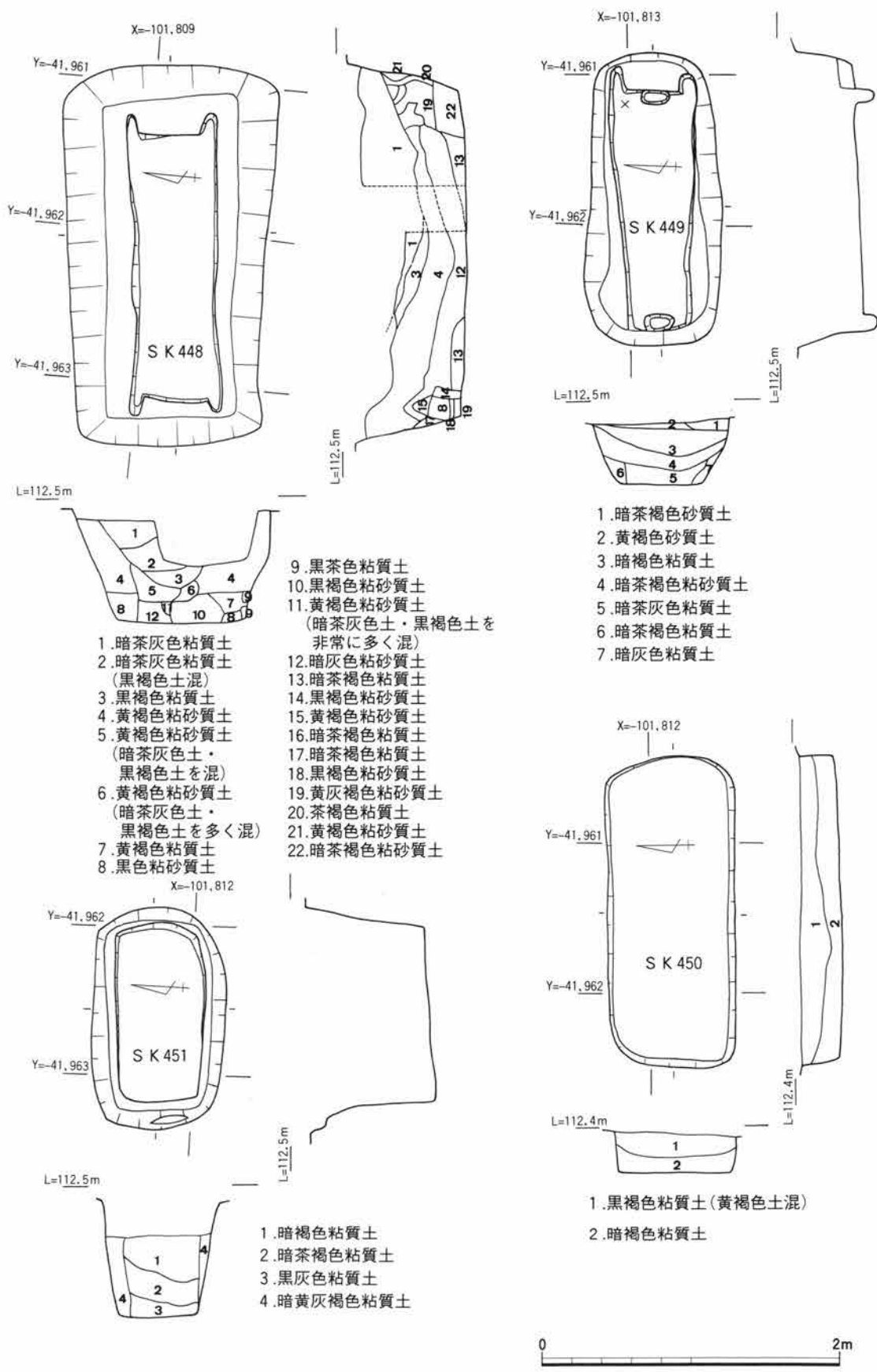
第20図 第7トレンチ個別遺構平・断面図



第21図 第7トレンチ方形周溝墓周溝断面図

に位置する方形周溝墓の間の空閑地を溝(S D 496・526)で区画することによって築造されたと考えられる。

西側周溝 S D 389 直上の黒ボク層から、弥生土器がまとまって出土しており土器溜り S X 106 として取り上げた。本来の遺構の切り込み面が、黒ボク層の中にあることを示唆するものと考えられるが、遺構検出はきわめて困難である。溝の底部からもまた土器がまとまって出土しており、



第22図 第7トレンチ周溝墓S T 610主体部平・断面図 (1)

間層を挟んで出土レベルが異なっている。前述したように、S D 389が未検出の先行する周溝墓の溝であることから、上層がS T 610に伴うもので、下層のものが先行する周溝墓のものである可能性が指摘できる。

東側周溝 S D 462(第27図) S T 610の周溝の中ではもっとも規模が大きく深い。図示したように、完形の土器3点(352・353・356)がS K 546とS K 545との間から出土した。3点は溝中心に3つ並ぶように、埋土中位から出土している。

南側周溝 S D 526(第27図) 東部が狭く西部が広い溝で、中央部から土器が多く出土している。

S T 610には、中心主体と考えられる主体部S K 448をはじめ、墳丘上に8基の主体部(S K 449・450・451・540・455・452・453・492)があるほか、溝中埋葬と考えられる主体部も2基(S K 544・546)ある。

370(第44図)は口縁部が頸部で分かれた状態の破片が、口縁部を下に溝の底に張り付いて出土した。368は溝の北側から落ち込んだように検出できた。溝中埋葬のあった可能性もあるが、検出できなかった。

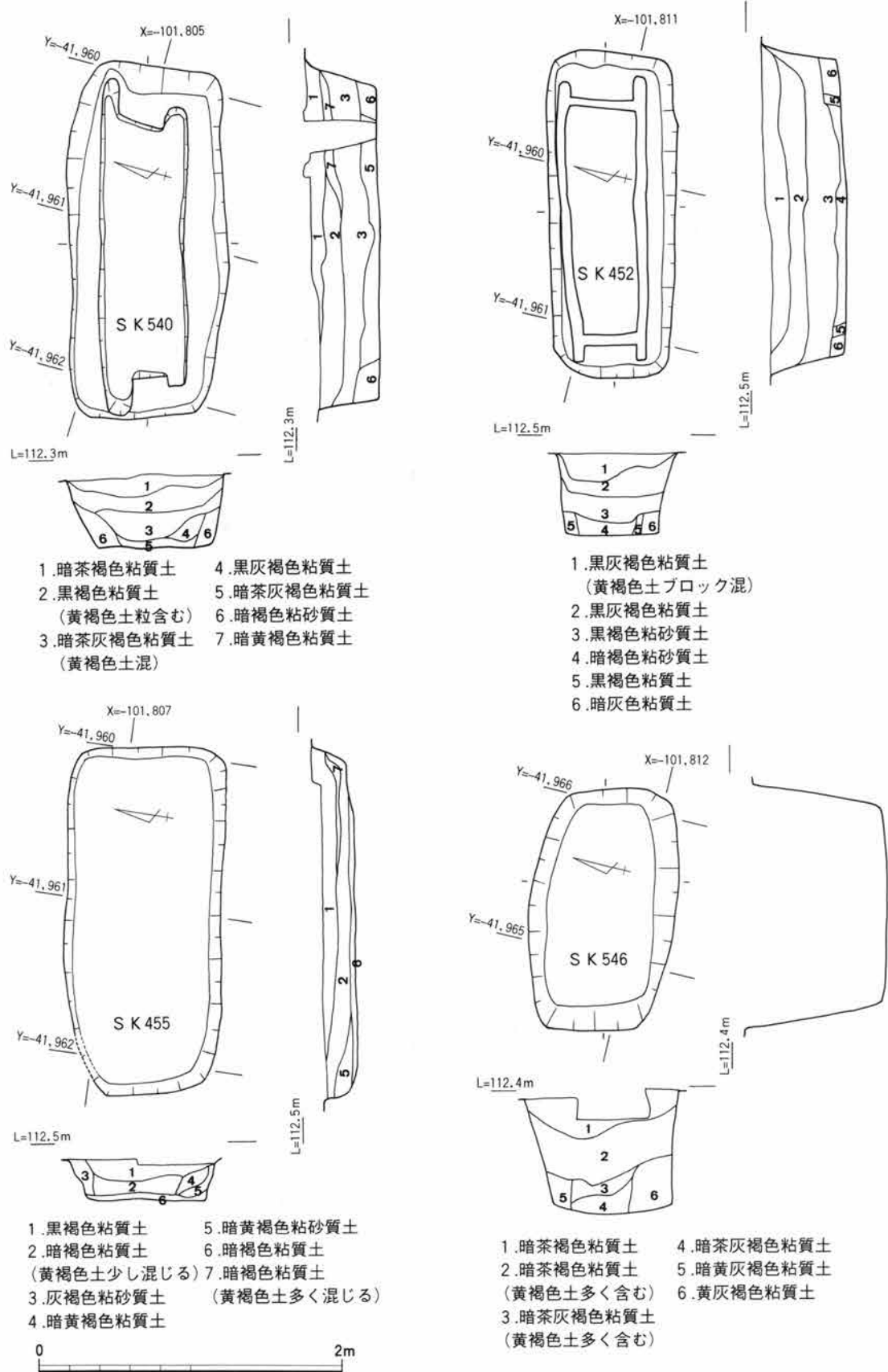
主体部 S K 448(第22図) S T 610の中心主体と考えられ、墓壙の規模は全長2.6m・幅1.2～1.4m・深さ0.8mを測り、主軸はE 7°Nである。墓壙内には長側板と小口板を、いわゆる「H」形に組み合わせた木棺を納める。木棺の規模は全長2.0m・幅0.6mを測る。棺材の痕跡は確認できなかった。

埋土は、地山に類似した淡黄褐色土で埋められており、当初は陥没痕を墓壙と認識したが、断ち割り等の結果、陥没痕であることを確認したため、本来の墓壙を検出して調査を行った。墓壙埋土は、陥没に伴って中心付近に向かうような堆積状況を示していた。木棺の裏込め土は、黒褐色粘質土である。

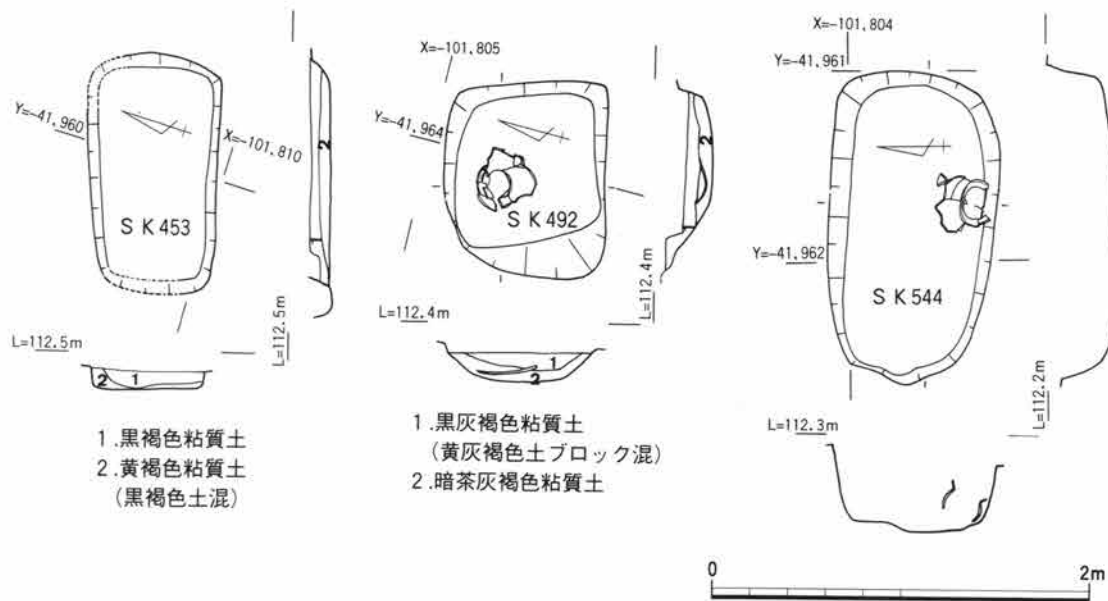
主体部 S K 449(第22図) S T 610の最も南端に位置する。墓壙の規模は全長2.0m・幅0.7～0.9m・深さ0.4mを測り、主軸はE 1°Nである。平面形はやや隅丸を呈する。墓壙内には、長側板と小口板を組み合わせた木棺を納める。西側の長側板は小口板よりも突出しない。木棺の規模は、全長1.8m・幅0.4～0.6mを測る。小口板は、墓壙底に穿たれた据え付け穴に立てられていたと考えられる。今回の調査で検出された主体部のうち、同様の構造を呈する木棺はなかった。棺材の痕跡は確認できなかった。西小口部北寄り直径3mm・長さ7mm程度のグリーンタフ製の管玉が出土した。

主体部 S K 450(第22図) 主体部S K 449の北側に接する。墓壙の規模は全長2.1m・幅0.8m・深さ0.3mを測り、主軸はE 1°Wである。平面形はやや隅丸を呈する。木棺の痕跡は確認できなかった。

主体部 S K 451(第22図) 主体部S K 450と重複しており、他の主体部に比べ、幅に対して長さが短めである。墓壙の規模は全長1.5m・幅0.9m・深さ0.8mを測り、主軸はE 2°Nである。平面形はやや隅丸を呈する。木棺は、長側板が小口板よりも突出しない、いわゆる箱形の木棺と考えられる。木棺の規模は全長1.2m・幅0.6mを測る。棺材の痕跡は確認できなかった。



第23図 第7トレンチ周溝墓S T610主体部平・断面図(2)



1. 黒褐色粘質土
2. 黄褐色粘質土
(黒褐色土混)

1. 黒灰褐色粘質土
(黄灰褐色土ブロック混)
2. 暗茶灰褐色粘質土

第24図 第7トレンチ周溝墓S T 610主体部平・断面図 (3)

主体部 S K 540 (第23図) S T 610の北端、S D 496に平行して営まれた主体部である。墓壙の規模は全長2.4m・幅0.8~1.0m・深さ0.45mを測り、主軸はE15°Nである。墓壙内には主体部 S K 448と同様、いわゆる「H」形の組み合わせ式木棺を納める。木棺の規模は全長2.2m・幅0.6mを測る。北側の長側板が長かったらしく、墓壙の東辺を一部穿って納めている。棺材の痕跡は確認できなかった。

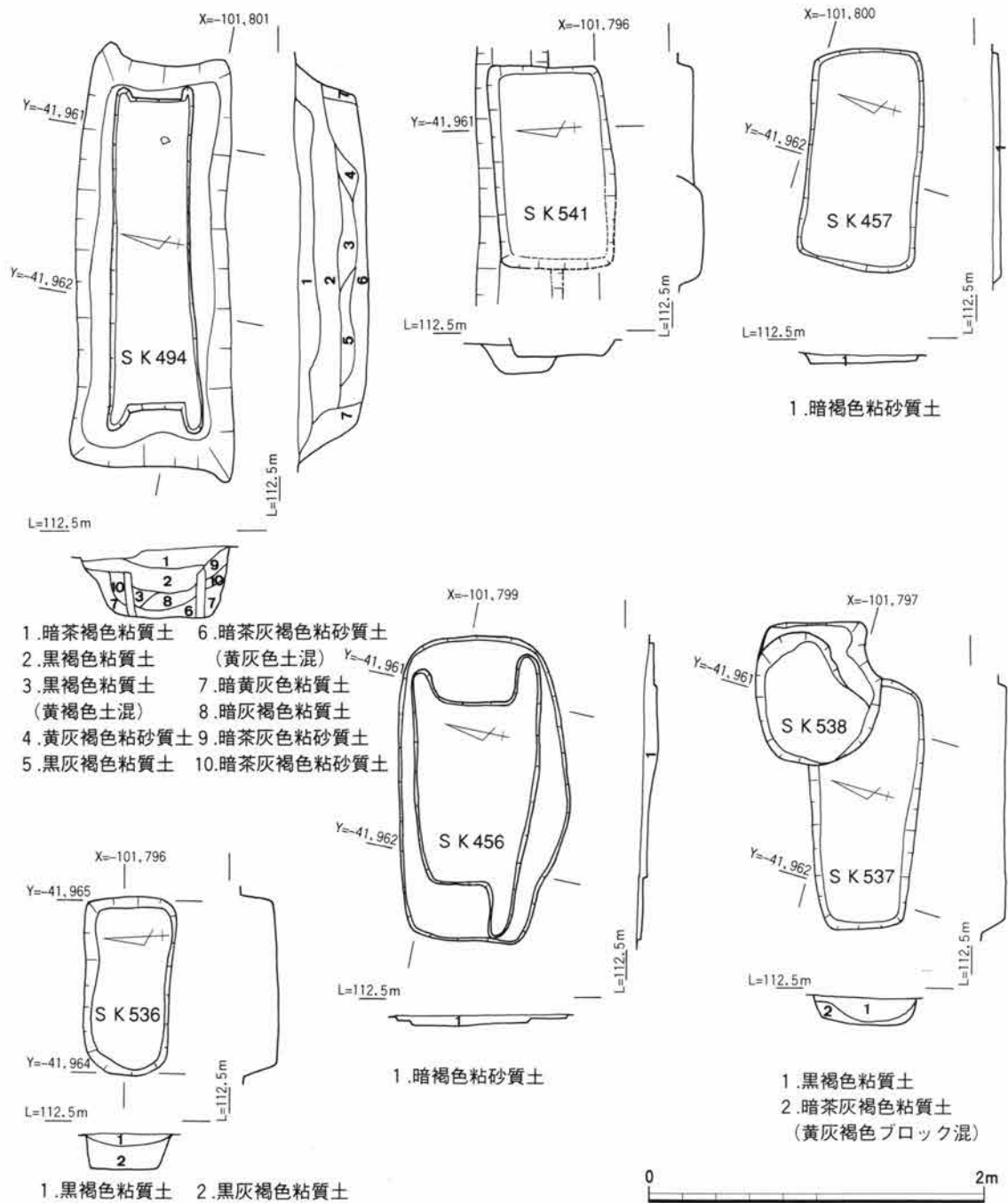
主体部 S K 455 (第23図) 主体部 S K 540の南側に位置する。墓壙の規模は全長2.3m・幅1.0m・深さ0.3mを測り、主軸はE8°Nである。木棺痕跡は確認できなかった。

主体部 S K 452 (第23図) 主体部 S K 448の南東に位置する。墓壙の規模は全長1.9m・幅0.8m・深さ0.5mを測り、主軸はE14°Nである。墓壙内に、いわゆる「H」形の組み合わせ式木棺を納める。木棺の規模は全長1.8m・幅0.5~0.6mを測る。木棺痕跡は明瞭に検出することができ、幅6~8cmの棺材痕跡も確認できた。北側の長側板は墓壙壁に接するように配置されている。

主体部 S K 546 (第23図) 周溝 S D 462に重複して営まれた墓壙である。主体部 S K 451と同じく、全長がやや短めである。墓壙規模は全長1.6m・幅0.8~1.0m・深さ0.9mを測り、主軸はE13°Nである。平面形はやや隅丸を呈する。木棺痕跡を確認していないが、土層断面において裏込め土などを確認している。

主体部 S K 453 (第24図) 主体部 S K 448の東側に位置する小規模な主体部である。墓壙の規模は全長1.3m・幅0.7m・深さ0.1mを測り、主軸はE17°Nである。木棺痕跡を確認していないが、本来木棺を伴わない土坑墓であった可能性もある。

主体部 S K 492 (第23図) 主体部 S K 540の西側に位置する主体部で、甕(あるいは壺)を棺として利用したものである。一辺0.8mないし1.0mを測り、ほぼ正方形に近い形状を呈する。深さは0.2mを測る。主軸はE14°Nである。墓壙のほぼ中央やや南よりに、口縁部を下に向けて置かれていた。上半部はすでに削平されていた。



第25図 第7トレンチ周溝墓ST611主体部平・断面図

主体部SK 544(第23図) 周溝SD496に重複する主体部である。墓壇の規模は全長1.6m・幅0.7~0.8m・深さ0.3mを測り、主軸はE1°Sである。木棺痕跡を確認していない。墓壇の南側の壁に接して甕が1点出土した。供献されたものとみられる。

主体部SK 545 SD462の北側で検出した溝中埋葬主体部である。溝掘削中に発見したため棺構造は不明である。長辺1.4m・短辺0.7mの方形の掘形を持ち、主軸はN16°Wである。

主体部SK 454 墳丘東側で検出できた主体部で、墓壇の規模は、1.6m・0.7m・深さ0.1mを測り、主軸はE5°Nである。

方形周溝墓 S T 611(第21図) 墳丘規模南北約9.3m・東西6.8m・深さ約0.3~0.6mを測る。S T 611の南周溝 S D 496は、S T 610と溝を共有する。S T 611の墳丘上からは、5基の主体部と1基の土壙を検出した。いずれも主軸は、ほぼ東西方向である。また、北周溝から1基、西周溝から3基、南周溝から1基の溝中埋葬を検出した。南周溝の溝中埋葬は、S T 610の墳丘上の主体部に近接しており、S T 610にともなう溝中埋葬とみられる。さらに、墳丘北西のコーナー付近と北東のコーナー付近から、S K 536と S K 539の2基の主体部を検出しているが、これらも溝中埋葬と同様な性格を持つものであろう。

主体部 S K 456(第25図) 墳丘中央付近で検出したもので、墓壙の規模は、全長1.8m・幅1.0mを測り、主軸はE14°Nである。墓壙上面は、後世の削平を著しく受けており、検出面での深さは約0.1mを測るにすぎない。棺は、「H」形の組合箱形木棺を使用している。西側の長側板が長く、棺痕跡は、全長1.7m・幅0.75mを測る。

主体部 S K 494(第25図) 墳丘南寄りで検出した主体部で、規模は、全長2.5m・幅0.9m・深さ0.4mを測り、主軸はE14°Nである。棺痕跡から、棺は「H」形の組合箱形木棺が想定される。棺の規模は、全長2.1m・幅0.5mを測る。棺内の西寄りの位置で、石包丁片(398)が出土した。

主体部 S K 457(第25図) 主体部 S K 494と一部切り合う主体部で、墓壙規模は、全長1.3m・幅0.65m・深さ5cmを測り、主軸はE14°Nである。

主体部 S K 541(第25図) 北周溝 S D 499で検出した主体部である。規模は、全長1.5m・幅0.65m・深さ0.15mを測り、主軸はE14°Nである。

主体部 S K 537(第25図) 北周溝内から検出した溝中埋葬である。規模は、全長1.15m・幅0.8m・深さ0.15mを測り、主軸はE14°Nである。南側は、土壙 S K 538によって、一部削平されている。

主体部 S K 539(第26図) 墳丘北東隅で検出したもので、全長1.85m・幅0.65m・深さ0.35mを測り、主軸はE14°Nである。

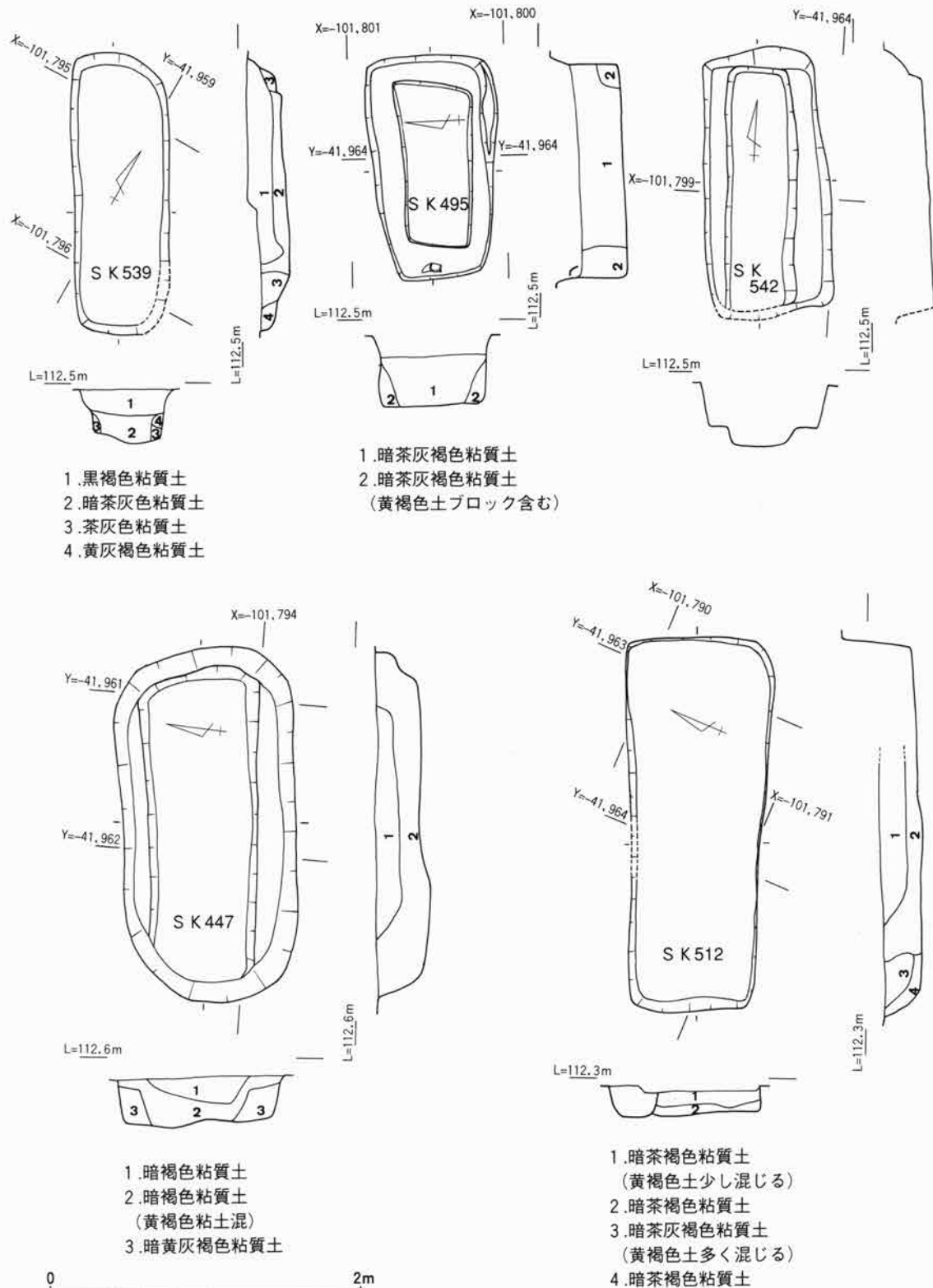
主体部 S K 495(第26図) 墳丘の西辺で検出したもので、北周溝 S D 498上に一部がかかる。墓壙規模は、全長1.45m・幅0.8m・深さ0.45mを測り、主軸はE14°Nである。

主体部 S K 542(第26図) 西周溝 S D 498で検出した溝中埋葬である。墓壙は全長1.8m・幅0.8m・深さ0.45mを測り、主軸はE14°Nである。

主体部 S K 536(第25図) 墳丘北西隅で検出した主体部である。全長1.05m・幅0.5m・深さ0.2mを測り、主軸はE14°Nである。

主体部 S K 548 S D 498の南端を切る墓壙である。全長1.4m・幅0.6m・深さ0.2mを測り、主軸はN25°Wである。

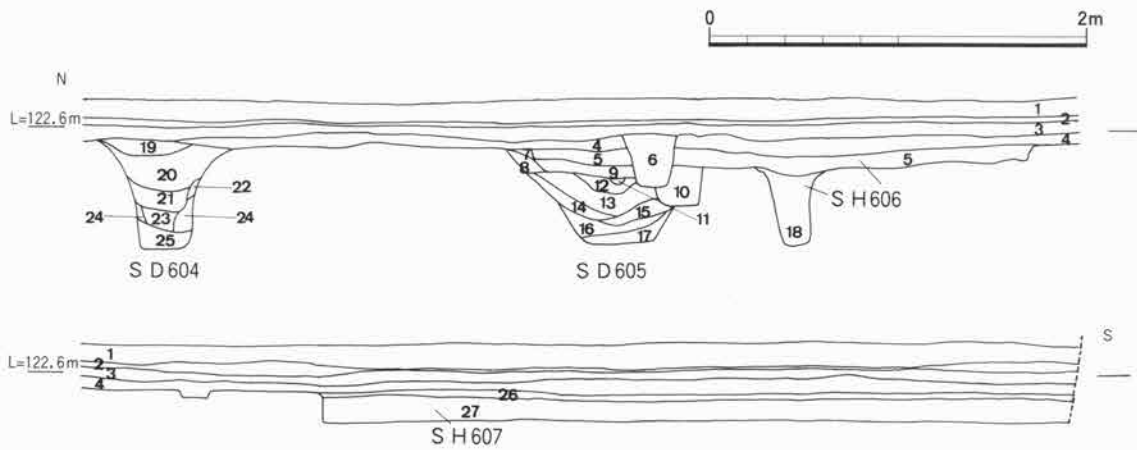
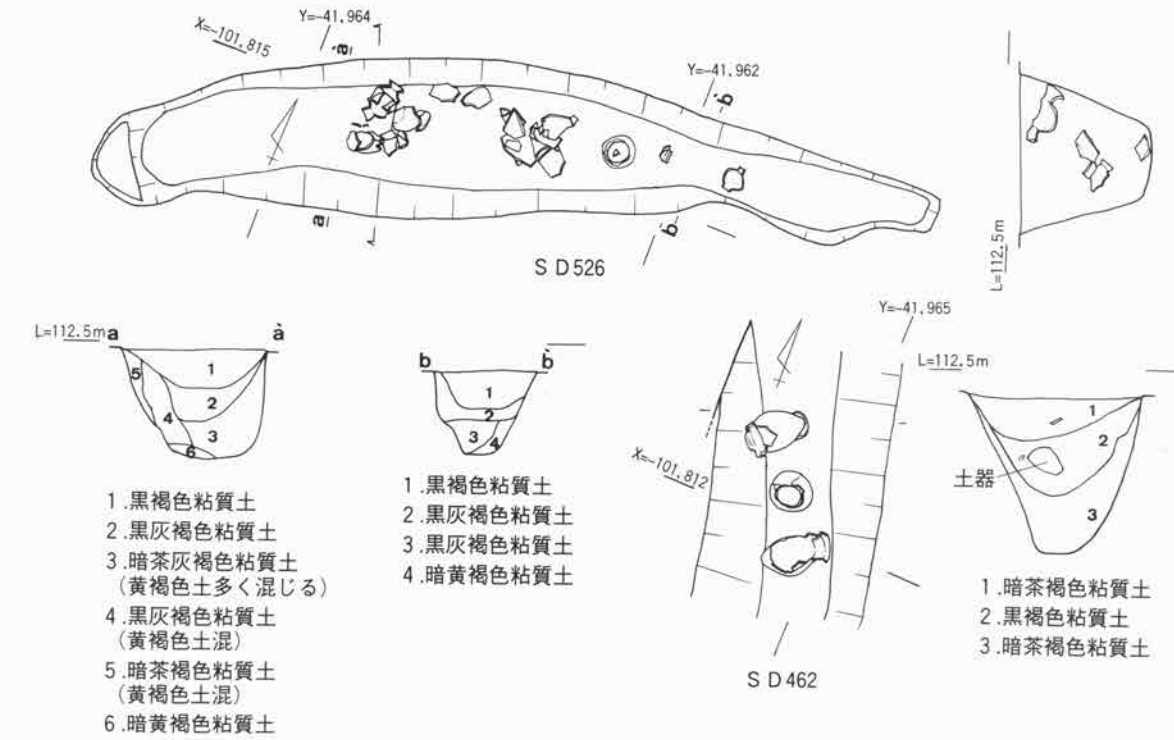
方形周溝墓 S T 612(第21図) 墳丘は、後世の粘土採掘坑と推定される不整形の土坑群によって、大きく削平を受けており、S T 611と周溝を共有する南周溝と、東周溝の一部を確認したに過ぎない。そのため、墳丘規模は不明であるが、墳丘上と推定される位置から、2基の主体部を検出した。いずれも、主体部の主軸は、ほぼ東西方向を示しており、S T 610・S T 611の墳丘上



第26図 第7トレンチ周溝墓S T 611・612主体部平・断面図

の主体部と同様の規則性が認められる。

主体部S K 447(第26図) 南周溝寄りで検出した主体部で、規模は、全長2.25m・幅1.1m・深さ0.3mを測り、主軸はE 14° Nである。棺痕跡は、全長2.15m・幅0.7mを測り、組合の箱形木棺と推定される。

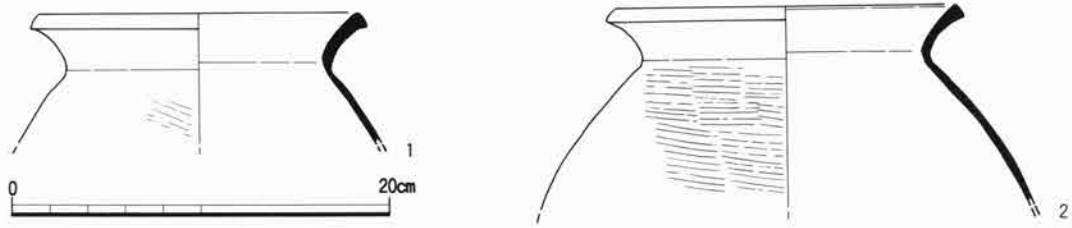


- | | | |
|------------------------------|------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 淡灰褐色砂質土(耕作土) | 11. 黒褐色粘質土(黄褐色土混) | 21. 黒褐色粘質土 |
| 2. 淡黄灰茶色砂質土(床土) | 12. 黄褐色粘質土(黒褐色土若干混) | 22. 暗茶褐色粘質土 |
| 3. 茶褐色砂質土(マンガンを多く含む) | 13. 黒褐色粘質土(黄褐色土混) | 23. 暗茶褐色粘砂質土
(細粒の黄褐色土を含む) |
| 4. 褐色砂質土 | 14. 暗褐色粘質土(黄褐色土混) | 24. 暗黄褐色粘砂質土(暗褐色土混) |
| 5. 暗褐色粘砂質土 | 15. 暗褐色粘質土
(14に比べ黄褐色土少ない) | 25. 暗茶褐色粘質土 |
| 6. 灰褐色粘砂質土(柱穴埋土) | 16. 黒褐色粘質土 | 26. 暗褐色粘砂質土 |
| 7. 濃暗褐色粘砂質土 | 17. 黒褐色粘質土(緑黄褐色土混) | 27. 暗褐色粘砂質土
(φ 5 cmの黄褐色土ブロックを含む) |
| 8. 暗褐色粘砂質土(黄褐色土粒を含む) | 18. 黒褐色粘質土(黄褐色土混) | |
| 9. 黒褐色粘質土 | 19. 暗褐色粘砂質土 | |
| 10. 黒褐色粘砂質土
(下部に黄褐色土粒を含む) | 20. 黒褐色粘砂質土 | |

第27図 遺物出土状況図および第7トレンチ南半部土層断面図

主体部 S K 512(第26図) 南周溝から約4m北側で検出した主体部で、規模は、全長2.4m・幅1.0m・深さ0.25mを測り、主軸はE 14° Nである。

竪穴式住居跡 S H 603(第20図) 南部拡張区で検出した円形の住居跡である。中央土坑が認められ、部分的に周壁溝が検出できた。直径約5.5m、検出面からの深さは約0.2mを測る。



第28図 第1トレンチ出土遺物

溝S D 604(第27図) 両肩は急斜面で立ち上がり、検出面に近づくにしたがい開く、弥生時代中期の溝である。検出長約6m・幅約1.4m、検出面からの深さ約1.2mを測る。土器は埋土中位と、下層から出土した。特に中位からは、372・378の土器が完存した状態で横位で出土した。いずれも底部に穿孔があり、周溝墓などに伴うものに認められる特徴であるが、この溝と対になる溝が検出できていないことから周溝の一部とは考えられない。

溝S D 605(第27図) S D 604に比べ両方はゆるやかに立ち上がり、検出面に近づくにしたがいさらに開く、弥生時代中期の溝である。S H 603に先行する。検出長約4m・幅約2m、検出面からの深さ約1.1mを測る。土器は埋土中位から細片の状態で多く出土した。S D 604・605はほぼ並行する溝で集落を区画する溝と考えられる。しかし、今回の主要な調査地となった両溝の北側では、竪穴式住居跡の分布はきわめて疎らであったが、周溝墓ならびに土溝墓が多く検出されている。

3. 出土遺物

(1) 土器

① 第1トレンチ(第28図)

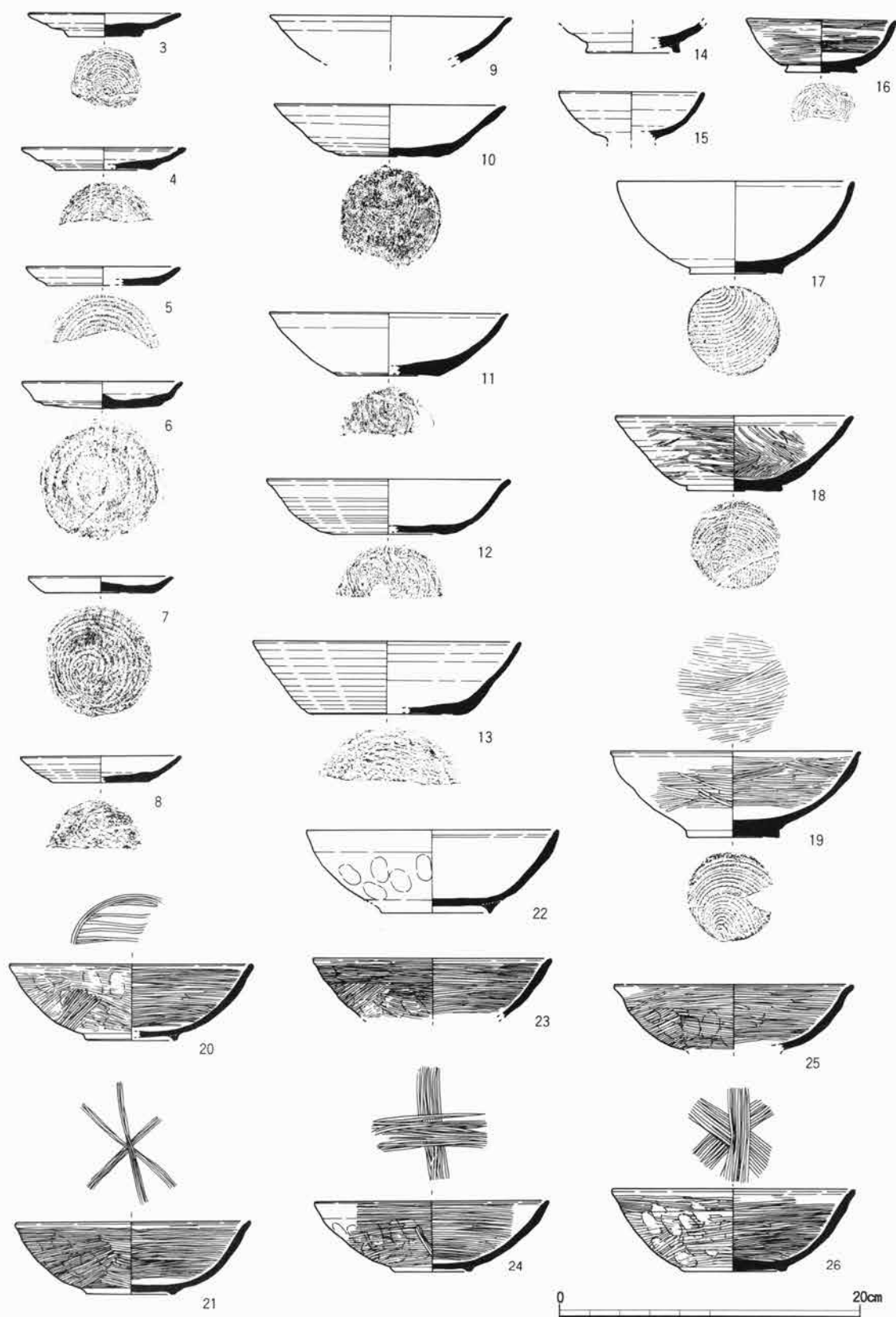
検出した遺構の残存状態が非常に悪く、埋土中の遺物はきわめて少なかった。S D 01では弥生土器片が多く出土したが、いずれも体部片で図化し得なかった。

調査区の南部で検出した柱穴P 523・527から弥生時代中期の土器が出土している。1・2ともに口縁端部に面を持つ甕である。体部外面はタタキ調整が施されるが、内面は磨滅のため調整は不明である。

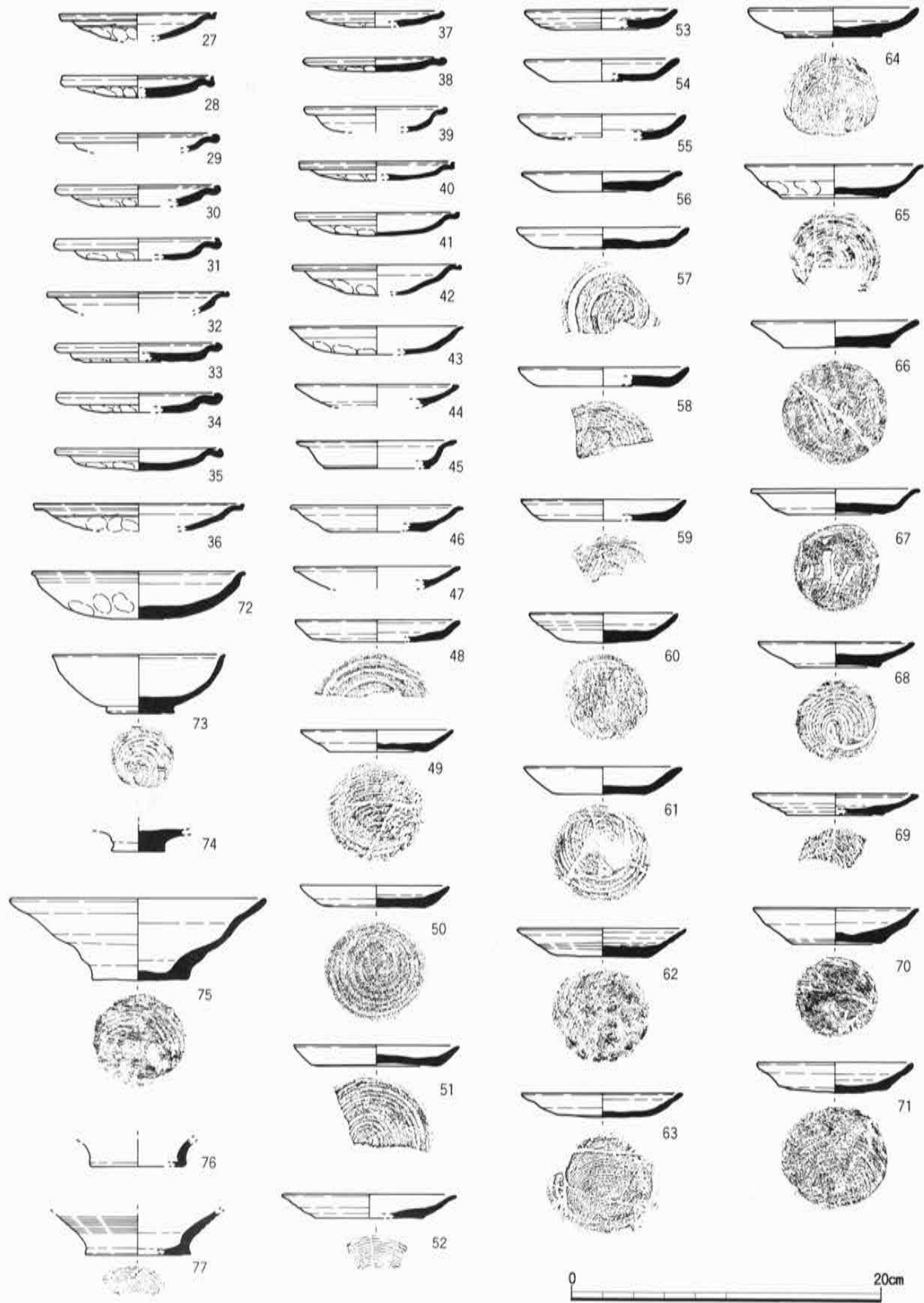
② 2トレンチ

a. 平安時代

土坑S K 271(第29図) 多くの土器が折り重なるように出土した。出土遺物には土師器(3～13)・須恵器(14)・黒色土器(15～26)がある。土師器の器種には皿・杯があり、底部は糸切りが主体となる。杯は水引き線が顕著なものが多い。11は糸切り痕が認められ高台を持たないものであるが、胎土などから黒色土器である可能性が高い。須恵器とした14は貼付高台の碗であるが、色調は灰白色の軟質である。体部外面は磨滅が著しいがケズリが認められる。黒色土器では碗のみが出土しており、小型器種と大型のものに分かれる。15・16はいずれもロクロ整形で、16には



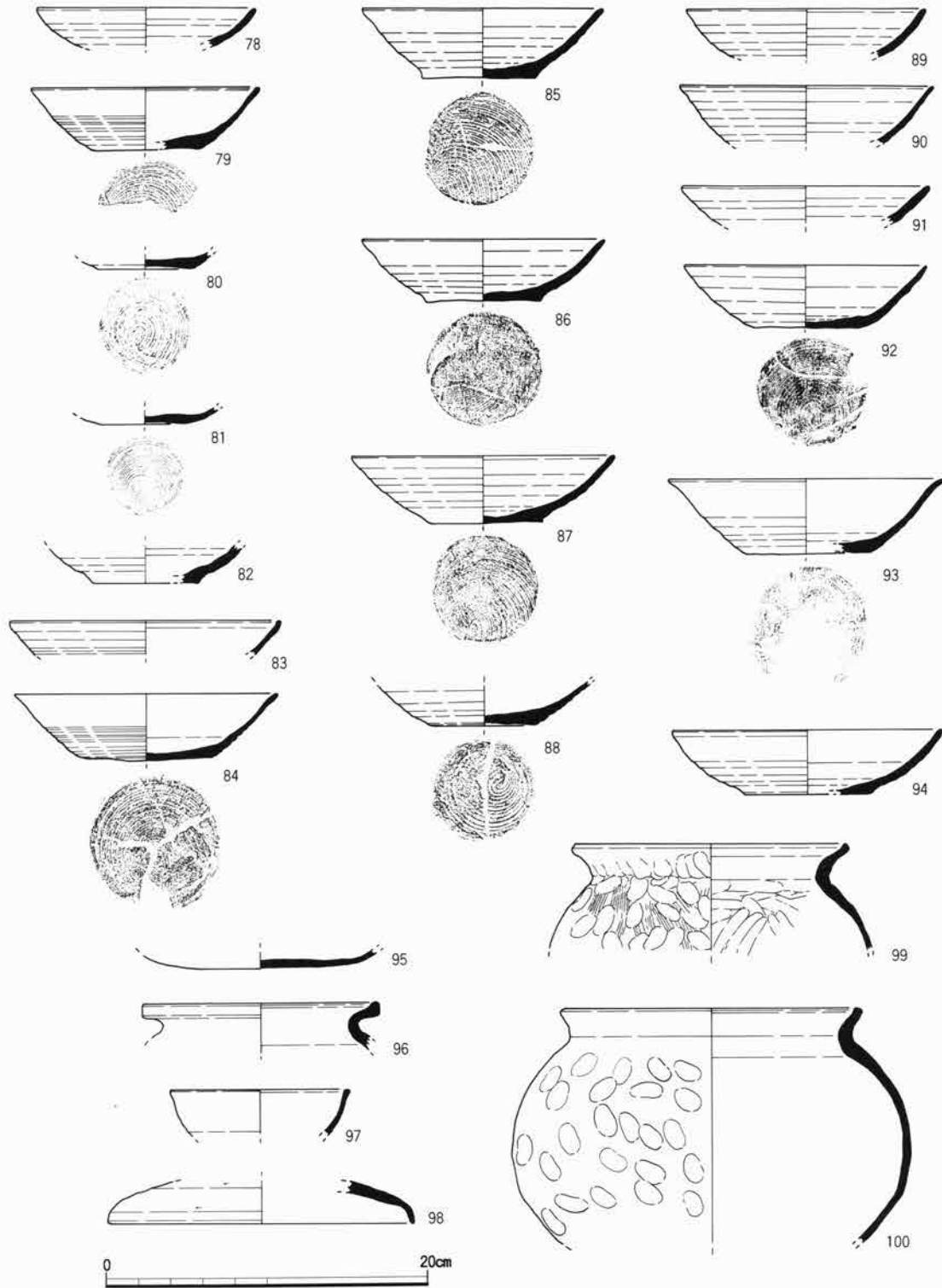
第29図 第2トレンチ出土遺物 (1)



第30図 第2トレンチ出土遺物 (2)

糸切り痕が残される。大型のものはさらに2種類認められ、ロクロ整形の糸切り高台を持つものと、外面に指頭圧痕を持ち、貼付高台のものがあある。糸切り高台のものは図示したものが図化できるもので、黒色土器の多くは後者に属する。

井戸S E 270(第30~32図) 井戸内には埋土中位で板状の粘板岩やチャートが面をなして出土



第31図 第2 トレンチ出土遺物 (3)

する層順から、遺物が多く出土した。また底部付近からも多く出土している。しかしその間からも遺物が出土するが、2つに分けて取り上げを行った。石出土レベル前後からは、27・36・52～59・61～76・78～84・96・98～109が出土し、他のものは底部付近から出土した。

土師器には皿・椀・杯・甕、須恵器には椀・蓋、黒色土器には皿・椀がある。土師器の皿は型式に富み、「て」の字状の口縁を持ち手づくね整形のもの(27～42)、口唇部が外反し手づくね整形のもの(43・72)、底部糸切りまたはヘラ切りで口唇部が外反するもの(45・46・52・56・65・67)、内側に口唇部が肥厚するもの(44・68・69)等があるが、底部からまっすぐ開き端部に向かうに従って器壁が薄くなり丸く終わるものが最も多い。75・76は回転台を使った土師器の杯で、外部から高台部分と見える内側まで見込みが整形されている。糸切り底を持つ杯(78～94)は体部外面に、水引き線を多く持ち底部に近いほど細かい傾向がある。また、口唇部で極端に単位が大きくなるもの(79・84～86・93・94)は、口唇部が外反することも多い。95は手づくね土器の底部である。色調は橙褐色を呈し、72に似る。やや大型の皿である可能性がある。97・98は須恵器である。

99は胎土に含まれる砂粒は細かく、雲母片が比較的多く含まれる。外面にはススが認められる。100は砂粒が目立ち、雲母・長石に富む。外面にはススが認められる。

黒色土器は皿と椀があるが、ほとんどすべてが椀で、その中でも回転台を用いないものが主体をしめる。103は回転台を利用し糸切り痕が認められるが、その外面には貼付によって輪高台が作られている。このような例はこれだけである。

柱穴 P 46(第32図114) 回転台を用いない黒色土器の椀である。

柱穴 P 47(第32図115) 回転台を用いない黒色土器の椀である。

柱穴 P 50(第32図116・117) 回転台を用いない黒色土器の皿である。底部には多くの指頭圧痕が残る。

柱穴 P 56(第32図118) 円盤高台を持つ、回転台土師器の皿である。

柱穴 P 358(第32図119) 回転台を用いない黒色土器の椀である。貼付高台は剥離し剥離痕が残されている。

柱穴 P 359(第32図120) 回転台を用い糸切り痕の残る土師器の杯である。

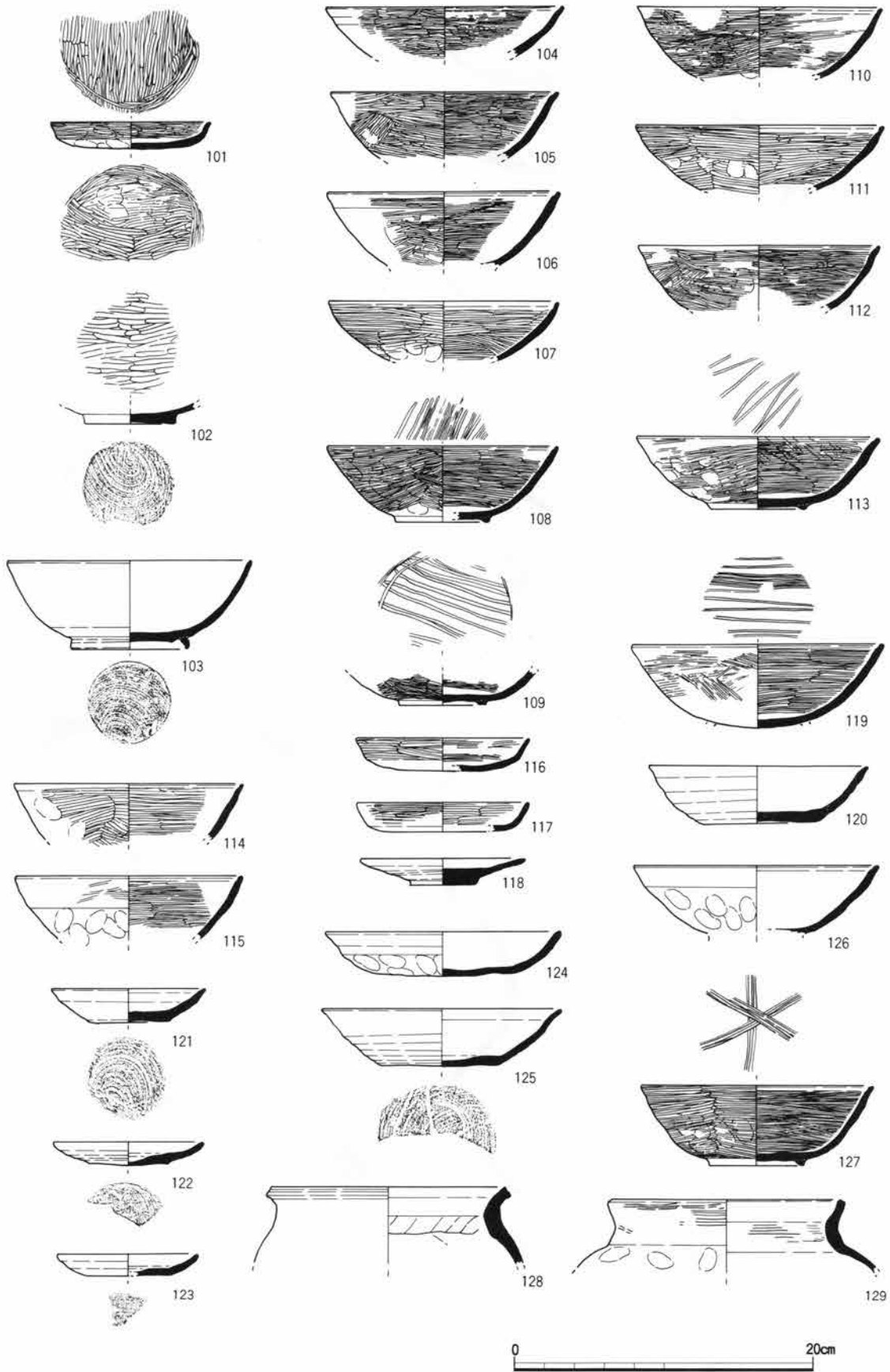
柱穴 P 360(第32図121～129) 土師器の皿(121～124)・杯(125)・甕(128・129)、黒色土器椀(126・127)が出土している。碎片で図化できなかったが、近江産の可能性のある緑釉片が出土している。

b. 古墳時代

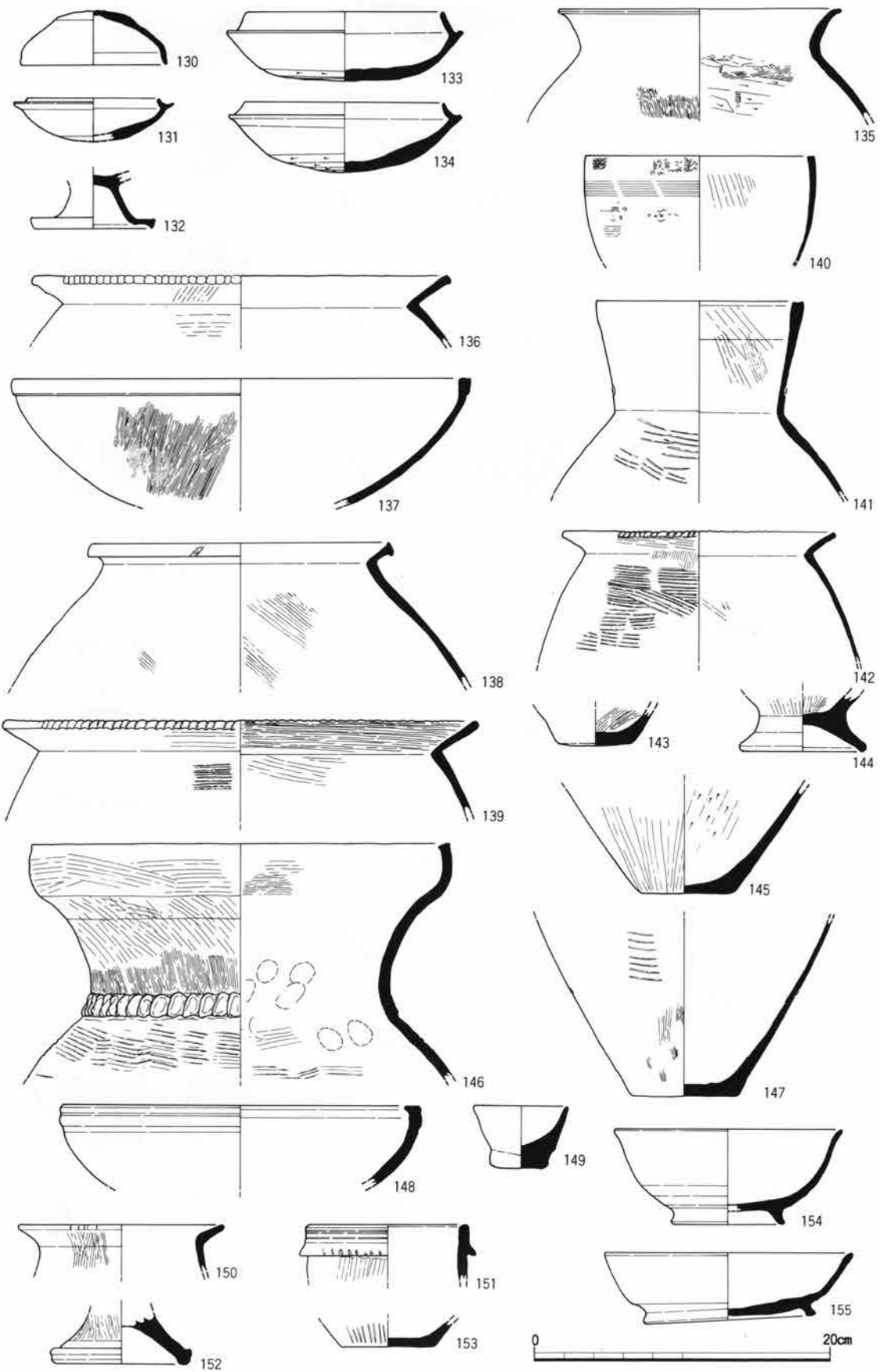
竪穴式住居跡 S H 10(第33図130～132) 須恵器の杯蓋・身・高杯が出土している。7世紀代のものと考えられる。

竪穴式住居跡 S H 172(第33図133・134) 古墳時代後期の須恵器の杯身が出土している。土師器は破片が多く出土したが、体部碎片が多く図化できなかった。

溝 S D 197(第33図135) 土師器の甕である。外面は縦方向の細かなハケと、内面はケズリとハ



第32図 第2トレンチ出土遺物(4)



第33図 第2トレンチ出土遺物 (5)

ケの調整が認められる。

c. 弥生時代

土坑 S K 03(第33図136) 頸部が「く」の字状に曲がる弥生時代中期の甕である。口唇部には縦方向の刻みが認められる。外面はタタキ、内面はハケ調整である。

土坑 S K 32(第33図137～141・143～145) 137は内外面ハケ調整の鉢である。口唇部は貼付によって外側に帯状に肥厚する。138は内外面ハケ調整の壺形土器である。139は頸部が「く」の字状に曲がる弥生時代中期の甕である。外面はタタキ、内面はハケ調整である。140は鉢で、調整は不明であるが、口唇部から波状文と直線文が交互に施紋される。141は直行する口縁部を持つ水差しである。体部外面はタタキが施され、口縁部内面は粗いハケの後、端部近くをていねいに横ナデする。145は甕の底部でタタキの後底部から上方向に向かったの強いハケが施され、ほぼ痕跡がなくなる。内面は下から上に向かったのケズリが見られる。

土坑 S K 153(第33図150～152) 150は小型の甕の体部で、外面はハケ調整、内面は不明である。151は弥生土器の口縁部で、断面が下方向に下がる張り出し突帯を持つ。頸部外面は縦方向のハケ、内面はナデである。152は脚部で内外面ともにハケ調整である。

土坑 S K 170(第33図146) 頸部に貼付の刻みを持つ突帯が施された大型の壺である。体部はタタキ調整、内面はハケである。口縁部外面にもタタキ痕跡が認められる。

土坑 S K 176(第33図147) 全体に磨滅が激しいが、痕跡から外面はタタキの後底部から上方向に向かったのハケが施されていたと考えられる。

柱穴 P 49(第33図142) 頸部が「く」の字状に曲がる弥生時代中期の甕である。外面は口唇部までタタキの後ハケ調整が施される。内面はハケ調整である。

柱穴 P 108(第33図148・153) 148は高杯の口縁部である。調整は不明である。153は甕の底部で磨滅が著しいが、外面にはケズリが認められる。

柱穴 P 354(第33図149) 小型の手づくね土器である。内外面ともナデ調整である。

包含層(第33図154・155) 154は灰釉陶器の椀である。155は律令期の須恵器杯Bである。いずれも包含層からの出土であるが、方形掘形を持つ掘立柱建物跡の年代を示す可能性がある。

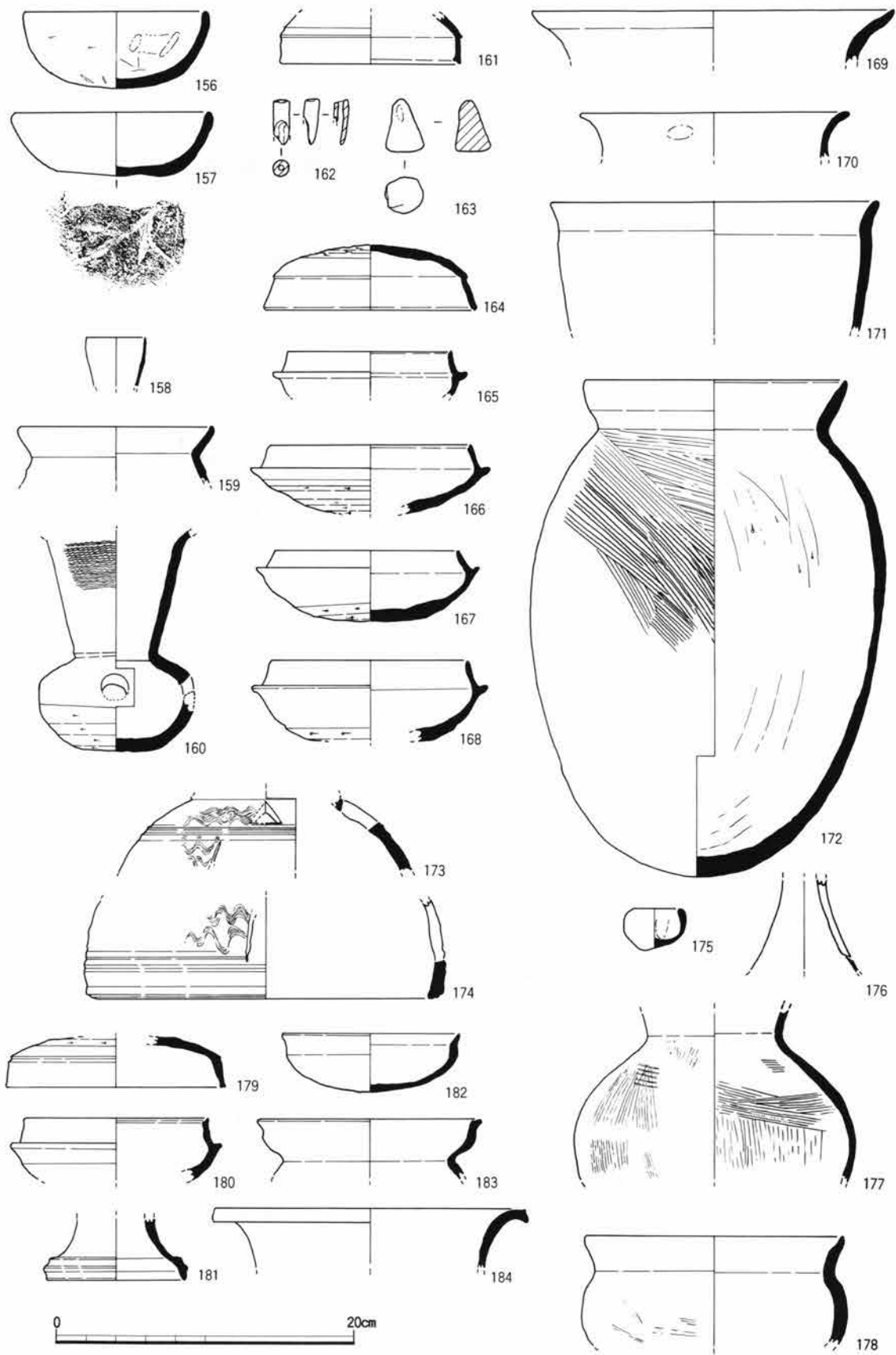
③第3トレンチ

a. 古墳時代

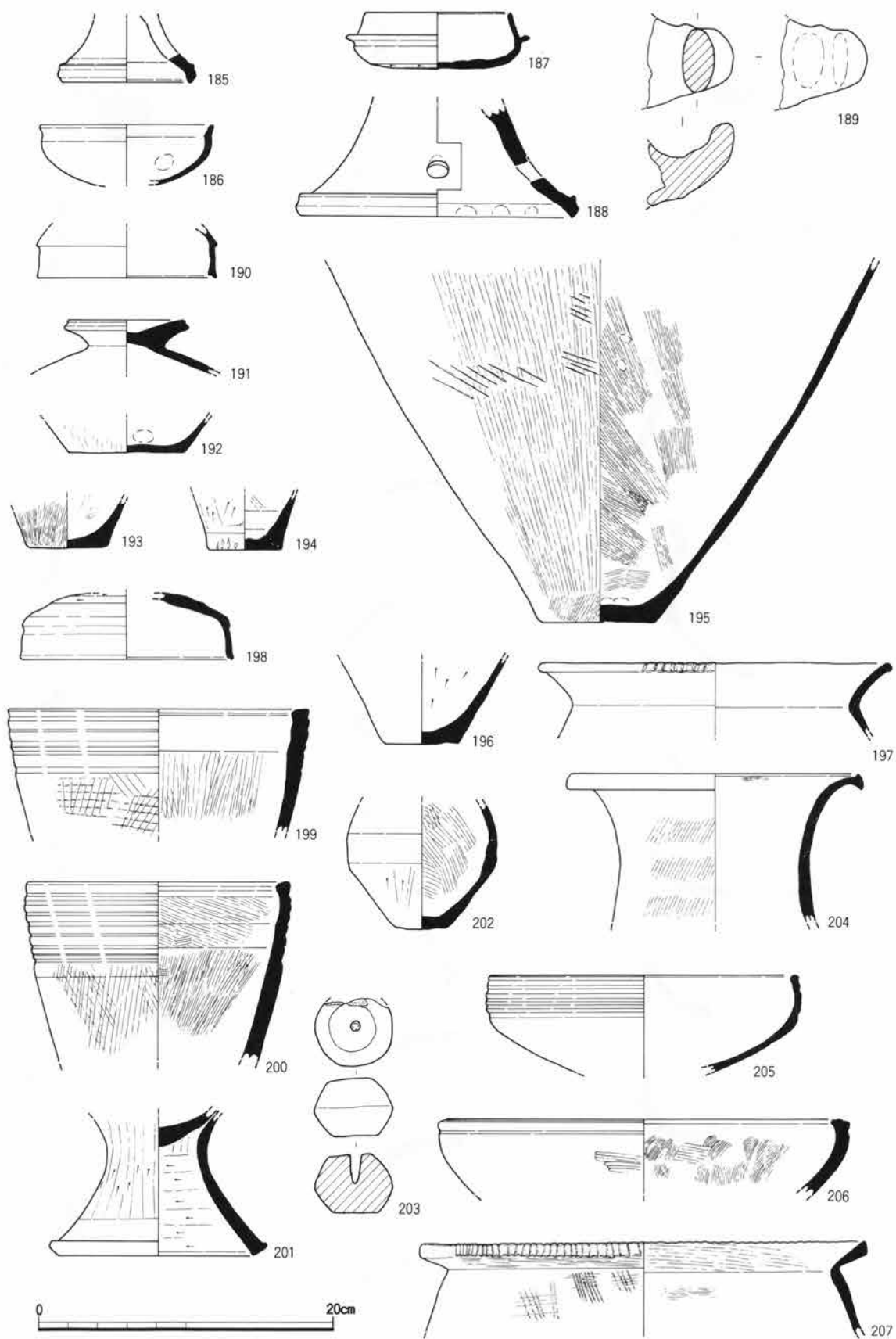
掘立柱建物跡 S B 129(第33図161・169) 建物北西隅の柱穴から出土した須恵器である。

竪穴式住居跡 S H 90(第34図156～160・162～168・170～174) 156・157は土師器の椀で、157は底部に大型の葉の葉脈が圧痕として残る。158は薄手の土師器で製塩土器と考えられる。S H 90内の柱穴から出土した土師器の甕である。160は須恵器の甕で口縁部が打ち欠かれた状態で柱穴内から出土した。163は円錐形に整形された土師質の製品である。171は土師器の甕口縁部である。172は長胴化した土師器の甕で、外面はハケ、内面はケズリである。173・174は同一個体と考えられる須恵器の器台脚部である。二段の三角形の透かしがあったものと復原できる。

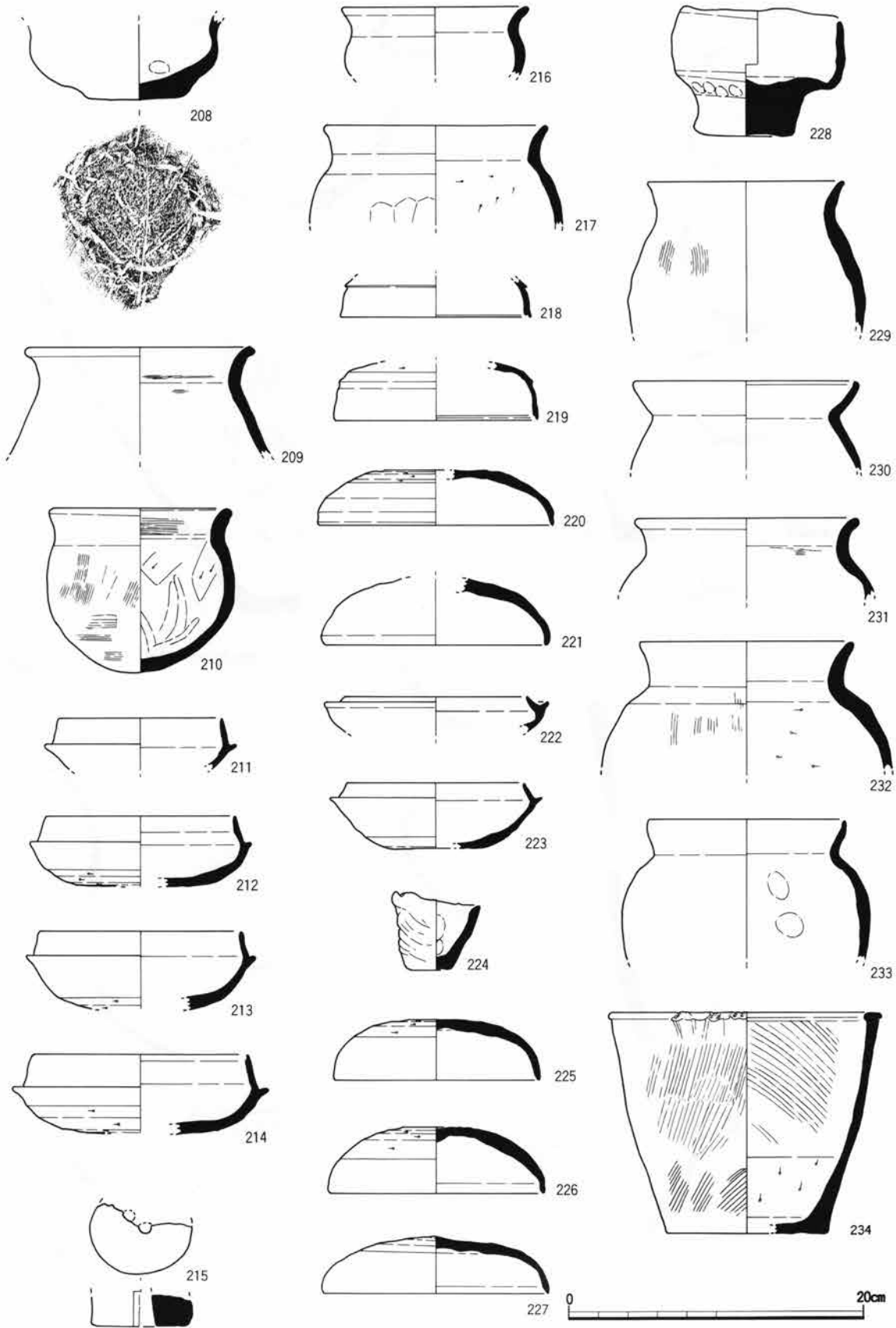
竪穴式住居跡 S H 122(第34図175～177) 175は土師器の手づくね土器である。176は須恵器の



第34図 第3トレンチ出土遺物 (1)



第35図 第3トレンチ出土遺物(2)



第36図 第4トレンチ出土遺物

一段透かしの高杯脚部である。177はタタキ後ハケ調整の施された弥生時代中期の壺の体部である。混入と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 243(第34図183) 竈から出土した土師器甕の口縁部である。古墳時代後期に位置付けられる。

竪穴式住居跡 S H 278(第35図185) 透かしを持つ須恵器の杯脚部である。

竪穴式住居跡 S H 279(第35図186～188) 186は土師器の杯である。調整は指頭圧痕以外剥落のため不明である。187は須恵器の杯身である。188は軟質の須恵器脚部である。

土坑 S K 145(第34図178～182) S H 243に伴う土坑中から出土した遺物である。古墳時代後期に属する。

柱穴 P 180(第35図189) 土師器の甑把手部である。

柱穴 P 364(第34図184) 須恵器の甕口縁である。

柱穴 P 368(第35図190) 須恵器の杯蓋である。

b. 弥生時代

竪穴式住居跡 S H 118(第35図195・196) 195は大型の甕の底部である。外面はタタキ後ハケ調整が施され、内面はハケである。196は外面の調整は不明であるが、内面はケズリと考えられる。

土坑 S K 241(第35図191) 蓋または台付き器種と考えられる土器片である。調整不明である。

柱穴 P 130(第35図194) 弥生土器の甕底部である。外面ケズリ、内面ハケである。

柱穴 P 182(第35図192) 弥生土器の底部である。外面はハケ、内面には指頭圧痕が残る。

柱穴 P 242(第35図193) 弥生土器の甕底部である。内外面ともにハケ調整である。

柱穴 P 529(第35図197) 弥生土器の甕口縁部である。調整は不明である。

包含層(第35図198～207) 198～200は直口短頸壺の口縁部である。いずれも口縁近くには凹線が施され、外面は粗いハケ調整が施される。201は脚部である。外面は縦方向のケズリ、内面は時計回りに横方向のケズリが見られる。203は算盤玉状の土製の紡錘車と考えられるが、穿孔は貫通していない。204は磨滅のため調整は不明であるが、痕跡から3段以上の列点文が施文されていたと考えられる。

④第4トレンチ

a. 古墳時代

竪穴式住居跡 S H 104(第36図208～214) 208は手づくねの土師器であるが、底部外面には大型の木の葉の葉脈が圧痕として残る。竈内から出土した。内外面ともナデである。

竪穴式住居跡 S H 105(第36図215～219・234) 215は円盤形の紡錘車片である。2か所に穿孔があり1方は中心からずれる。216・217は土師器の甕である。218は住居内土坑 S K 214から出土した須恵器杯蓋である。234は鉢で口縁端部は端面角に刻みが認められる。弥生時代に属すると考えられる。

竪穴式住居跡 S H 107(第36図220～222・229～231) 220～222は須恵器の杯蓋である。229～231は土師器の甕で、住居内でも北東部で出土している。

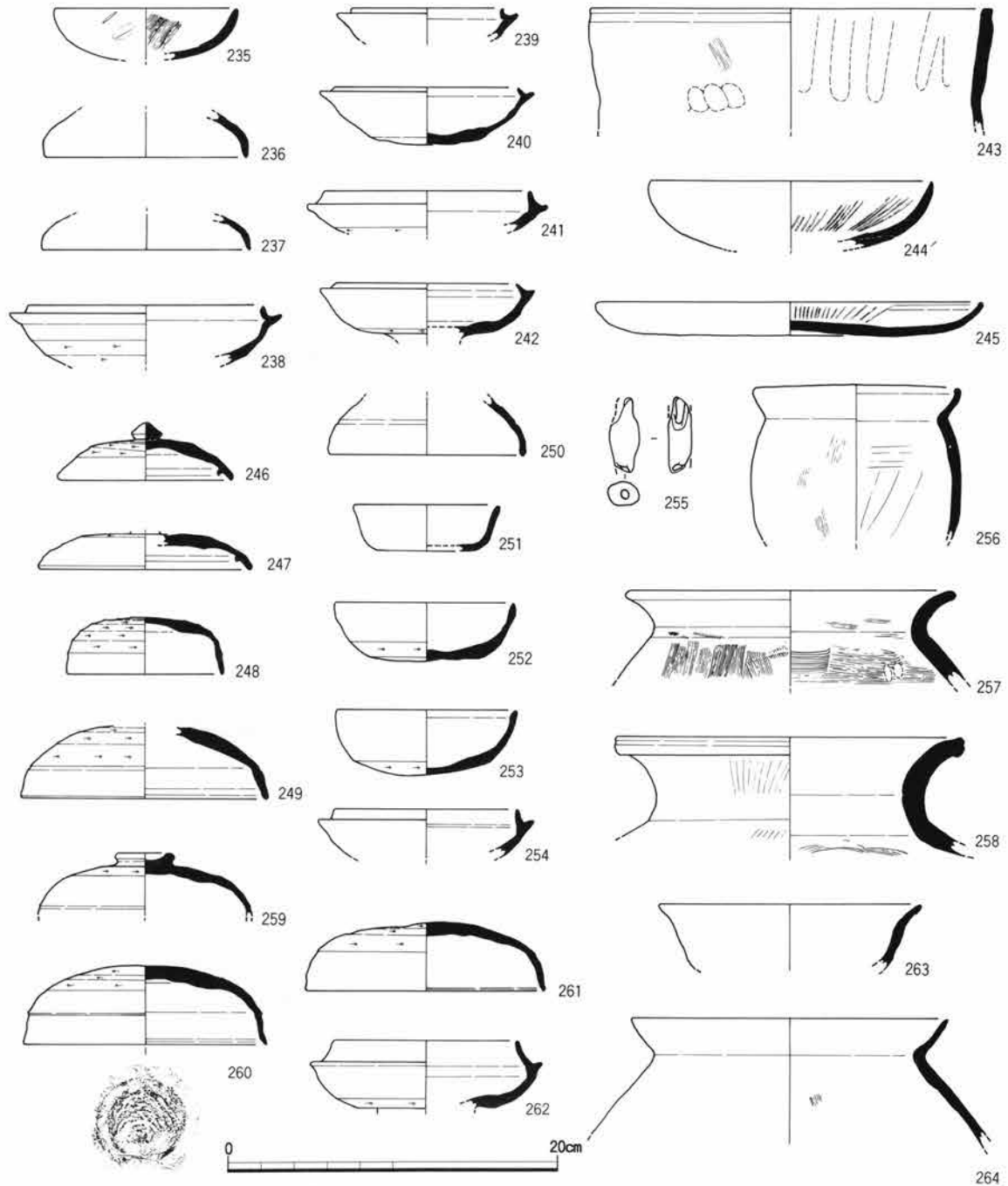
竪穴式住居跡 S H108(第36図223)須恵器の杯身である。

竪穴式住居跡 S H119(第36図224～228・233) 224は手づくねの土師器の鉢である。225～227は須恵器の杯蓋で古墳時代後期に属する。228は手づくねの高台付きの鉢である。竈から出土している。233は土師器の甕である。

⑤第5トレンチ

a. 古墳時代

竪穴式住居跡 S H390(第37図235～243) 須恵器には、杯蓋2点・杯身4点・高杯1点がある。

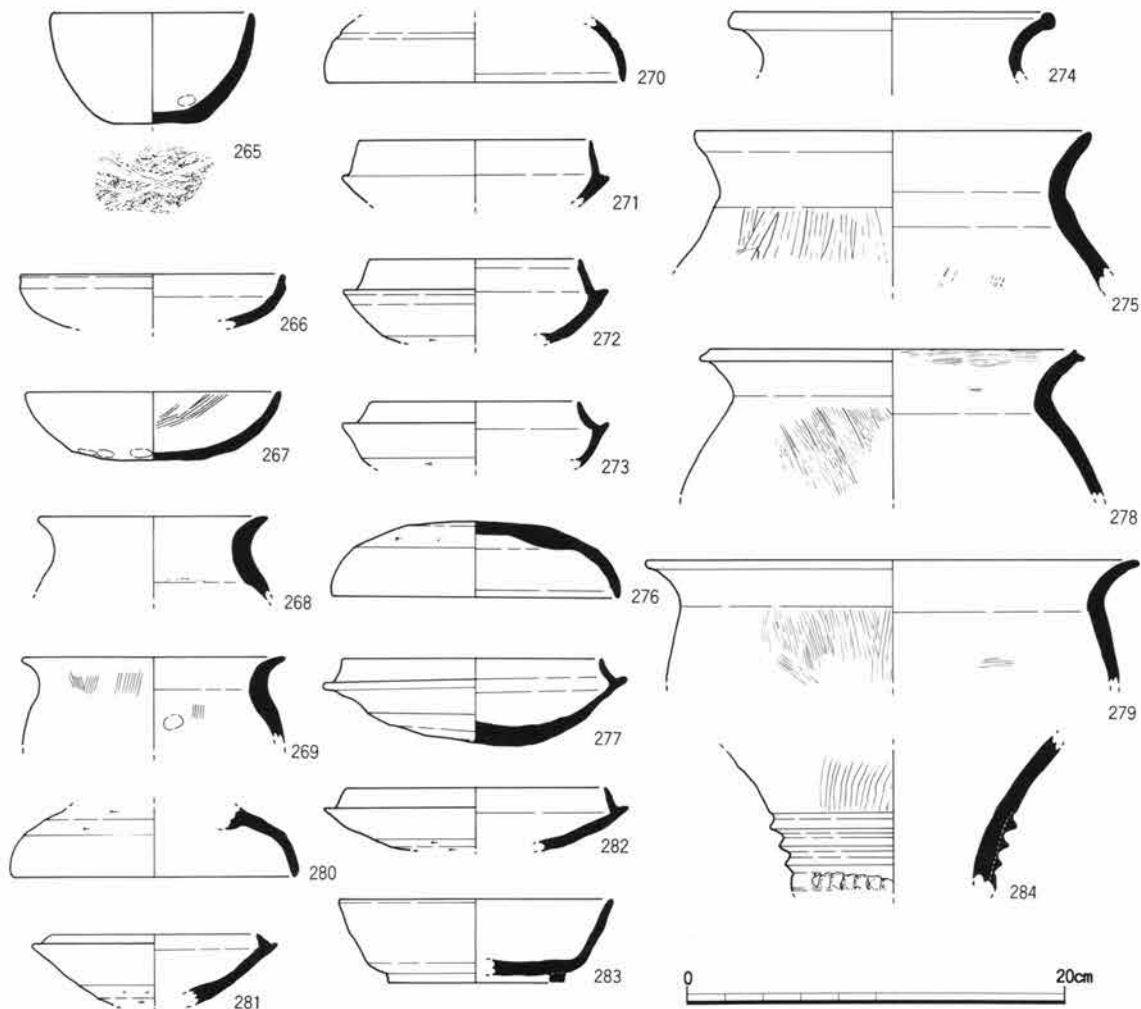


第37図 第5トレンチ出土遺物 (1)

236・237は杯蓋である。いずれも小片である。238～241は杯身である。口径が9.1cmから14.1cmまでのものがあり、ばらつきが大きい。238・241は底部に回転ヘラケズリ調整を施す。240は底部はヘラ切り後不調整である。242は高杯である。脚部を欠損する。

土師器は、杯1点・甑1点である。235は杯である。内面にハケ調整を施す。243は甑の口縁部の破片である。外面に指押さえとハケ調整が、内面にナデ調整がそれぞれ施される。須恵器の編年観からいえば、陶邑編年でTK209型式か。

竪穴式住居跡SH391(第37図246～258) 須恵器には、杯蓋5点・杯身4点・甕1点がある。杯蓋はその形態から2形式あり、248～250のようにドーム形の天井部を有するものと、246・247のように宝珠つまみと内面にかえりを持つものがある。なお、248は身の可能性もある。杯身も杯蓋同様2形式あり、254のように受け部と立ち上がりをもつものと、251～253のように平底もしくはやや丸みを帯びた平底に、直線的もしくはやや内湾気味にのびる口縁部を有するものである。252・253は古墳時代に盛行する杯蓋を身に転じたような形状を呈する。258は、甕の東側で出土した甕である。全周する口縁部のみが出土した。



第38図 第5トレンチ出土遺物 (2)

土師器は、杯・皿各1点、甕2点がある。244は杯である。口縁端部はやや尖り気味である。内面に暗文を有する。245は皿である。口縁端部を内面に肥厚させて沈線状を呈する。内面に暗文を有する。256・257は甕である。256は小型の甕で、口縁端部の内面が肥厚する。257は「く」字状に外反する口縁部を有する。体部外面に縦方向のハケ調整、体部内面に横方向のハケ調整を施す。口縁部は、内面にハケ調整を施した後ナデ調整である。

須恵器の編年観からいえば、陶邑編年のTK217型式、飛鳥Ⅱ型式に相当するであろうか。

竪穴式住居跡SH263(第37図259～262) 259は高杯の蓋である。口縁部を欠損する。残存高3.8cmを測る。260・261は杯蓋である。260は内面に同心円文が認められる。262は高杯である。脚部を欠損する。須恵器の編年観からいえば、陶邑編年のTK10型式前後か。

竪穴式住居跡SH412(第38図265～275) 須恵器には杯蓋1点、杯3点、甕1点がある。270は、杯蓋である。外面に2条の沈線が認められる。271～273は杯身である。272は口縁端部内面にかすかに段を有するが、271・273は口縁端部を丸くおさめる。272・273は底部外面にヘラケズリ調整が施される。274は甕である。口縁部を肥厚させる。

土師器には、杯2点、鉢1点、甕3点がある。266・267は杯である。266は、口縁端部に強いヨコナデ調整を施す。267は266とほぼ同じ法量であるが、端部は丸くおさめる。底部外面に指頭圧痕が認められる。265は鉢で、底部に葉脈圧痕が認められる。甕は、小型のもの(268・269)と大型のもの(275)とがある。小型のものは、口縁部が「く」字形に短く外反する。いずれも、やや磨滅が著しい。大型のものは、口縁部が「く」字形に外反し、体部外面に縦方向のハケ調整を施す。須恵器の編年観からいえば、陶邑編年のMT15型式前後か。

竪穴式住居跡SH396(第37図264) 土師器の甕1点のみを図示した。口縁部が「く」字形に屈曲して、やや尖り気味ながら端部を丸くおさめる。全体に磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、内面にハケ調整の痕跡が認められる。土師器であるため時期は明らかではない。

土坑SK408(第38図278・279) 土師器甕2点を図示した。ともに口縁部が「く」字状に外反する。278は口縁端部に面を有する。体部外面ハケ調整、口縁部内面に横方向のハケ調整を施す。279は端部を丸くおさめる。体部外面に縦方向のハケ調整を施す。

土坑SK401(第38図276・277) 須恵器の杯蓋・杯身各1点を図示した。276は杯蓋である。277は杯身である。

柱穴出土土器(第38図280～282) 280は柱穴P404出土の須恵器杯蓋である。281は柱穴P405出土の須恵器杯身である。立ち上がりが高くない、口縁端部を丸くおさめる。281は柱穴P414出土の須恵器杯身である。立ち上がりの短い口縁部を持つ。

b. 弥生時代

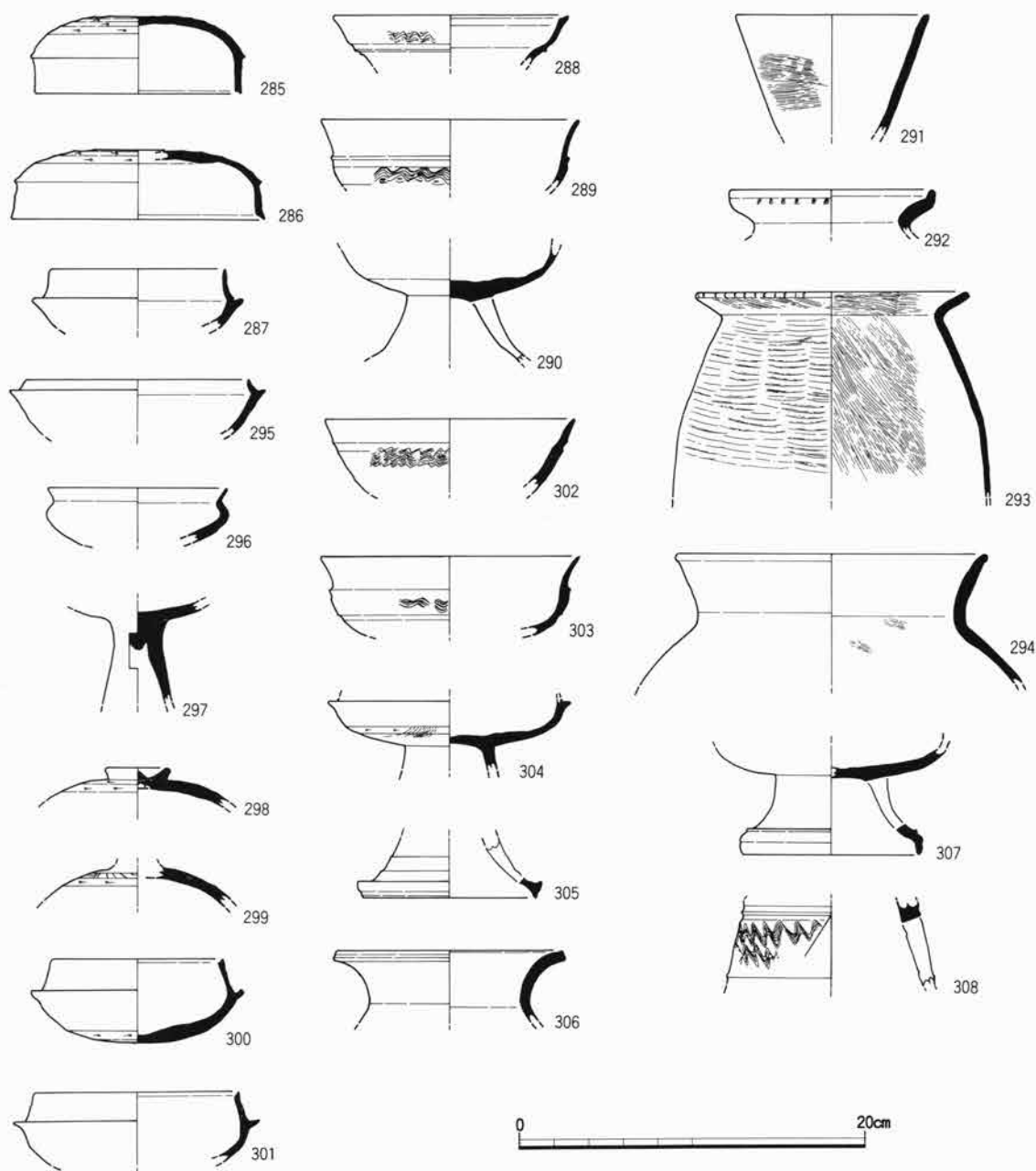
土坑SK557(第38図284) 弥生土器1点を図示した。広口壺の頸部の破片である。断面三角形の突帯を3条張り付ける。

⑥第6トレンチ

a. 古墳時代

竪穴式住居跡 S H514(第39図295) 須恵器 1点のみを図示した。立ち上がりの短い杯身である。須恵器の編年観からいえば、陶邑編年のTK209型式か。

竪穴式住居跡 S H528(第39図286~294) 須恵器には杯蓋・杯身・無蓋高杯・高杯・甕各1点がある。286は杯蓋である。天井部と口縁部の先に明瞭な稜をもつ。口縁端部は凹状を呈する面を有する。287は杯身である。比較的高い立ち上がりを有するが、口縁端部を丸く納める。289は無蓋高杯の杯部と考えられる。口縁部と体部の境に稜を有し、体部に波状文を施す。口縁端部は丸く納める。290は高杯である。口縁部と脚端部を欠損する。288は甕の口縁部と考えられる。口縁端部内傾する面を有する。口縁部外面に波状文を施す。



第39図 第6トレンチ出土遺物

土師器には甕1点がある。ゆるやかに「く」字状に外反する口縁部を有する。口縁端部外面がやや肥厚気味である。須恵器の編年観からいえば、TK23型式前後。以上のほか、弥生土器として292・293がある。293は甕である。体部下半を欠損する。口縁部外面はタタキ調整の後ナデ調整によってタタキ痕を消す。口縁部内面は横方向のハケ調整を施す。体部外面にタタキ調整、体部内面にハケ調整を施す。291は小型の壺の口縁部である。

溝SD559(第39図285) 須恵器の杯蓋1点のみを図示した。285は、天井部と口縁部の境に稜を有し、口縁端部が面をなす杯蓋である。天井部に回転ヘラケズリ調整を施す。須恵器の編年観からいえば、陶邑編年のTK23型式前後とみられる。

落ち込みSX510(第39図296～308) 須恵器には、杯蓋2点・杯身2点・無蓋高杯2点・有蓋高杯1点・高杯脚部2点・器台1点がある。298・299は杯蓋で、ともに小片であるが、つまみを有する。299はつまみの周辺に列点文を施す。300・301は杯身である。比較的高い立ち上がりを有し、口縁端部は凹状の面をなす。302・303は無蓋高杯である。302は椀状を呈し、外面に波状文を有する。303は、口縁部と体部の境に稜を有し、体部に波状文を施す。口縁部はやや外反気味で、端部は丸く納める。304は有蓋高杯の杯部底部と脚部の接合部である。杯部は立ち上がり部を欠損する。305・307は高杯脚部である。305は、「ハ」字状に開いた後、端部を上下につまみ出して面をなす。307は、「ハ」字状に開いた後、脚端部を内方へ屈曲させるものである。屈曲部に突起状の稜を有する。308は器台の破片である。上下を沈線で区画された内側には波状文と三角形と思われる透かしを有する。陶邑編年のTK208～47型式である。

⑦第7トレンチ

a. 古墳時代

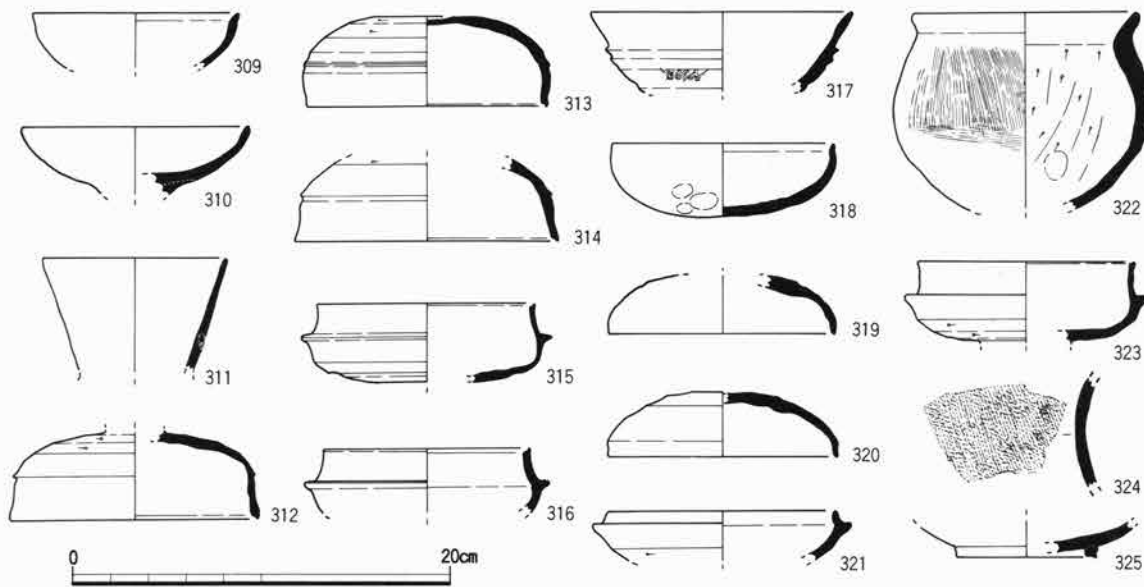
竪穴式住居跡SH416(第40図318) 318は土師器の杯である。器表面には指頭圧痕が認められるが、調整は剥落が顕著で確認できない。

竪穴式住居跡SH417(第40図319～321) 須恵器の杯蓋(319・320)・杯身(321)が出土している。319は非常に軟質で調整は不明である。321は口縁残存率が1/16と口径が変わる要素を持つ。

竪穴式住居跡SH509(第40図309～317) 土師器の杯(309)・高杯(310)・壺(311)、須恵器有蓋高杯の蓋(312)・杯蓋(313・314)・杯身(315・316)・高杯(317)が出土している。311は頸部から上が完存しており、体部は接合しない。土師器は残りが悪く調整は不明である。

土取り跡SX511(第40図327) 327は有蓋高杯の身の部分で、底面には脚部に透かしを入れた際に生じた痕跡が認められる。

包含層(第40図322・324・325) 322は古墳時代後期の土師器甕である。外面はハケ調整で、内面はケズリである。324は須恵器甕体部片である。外面には縄蓆文が認められ、内面はていねいにナデられている。表面は暗灰色であるが、破断面は赤褐色を帯びる。いわゆる初期須恵器の特徴を持つ。509はやや軟質の生地の上に深い緑色の釉をかけた近江産の緑釉である。貼付による有段輪高台を持つ。10世紀後半に位置付けられる。調査区内の掘立柱建物跡の時期を示唆していると考えられる。



第40図 第7トレンチ出土遺物(1)

b. 弥生時代

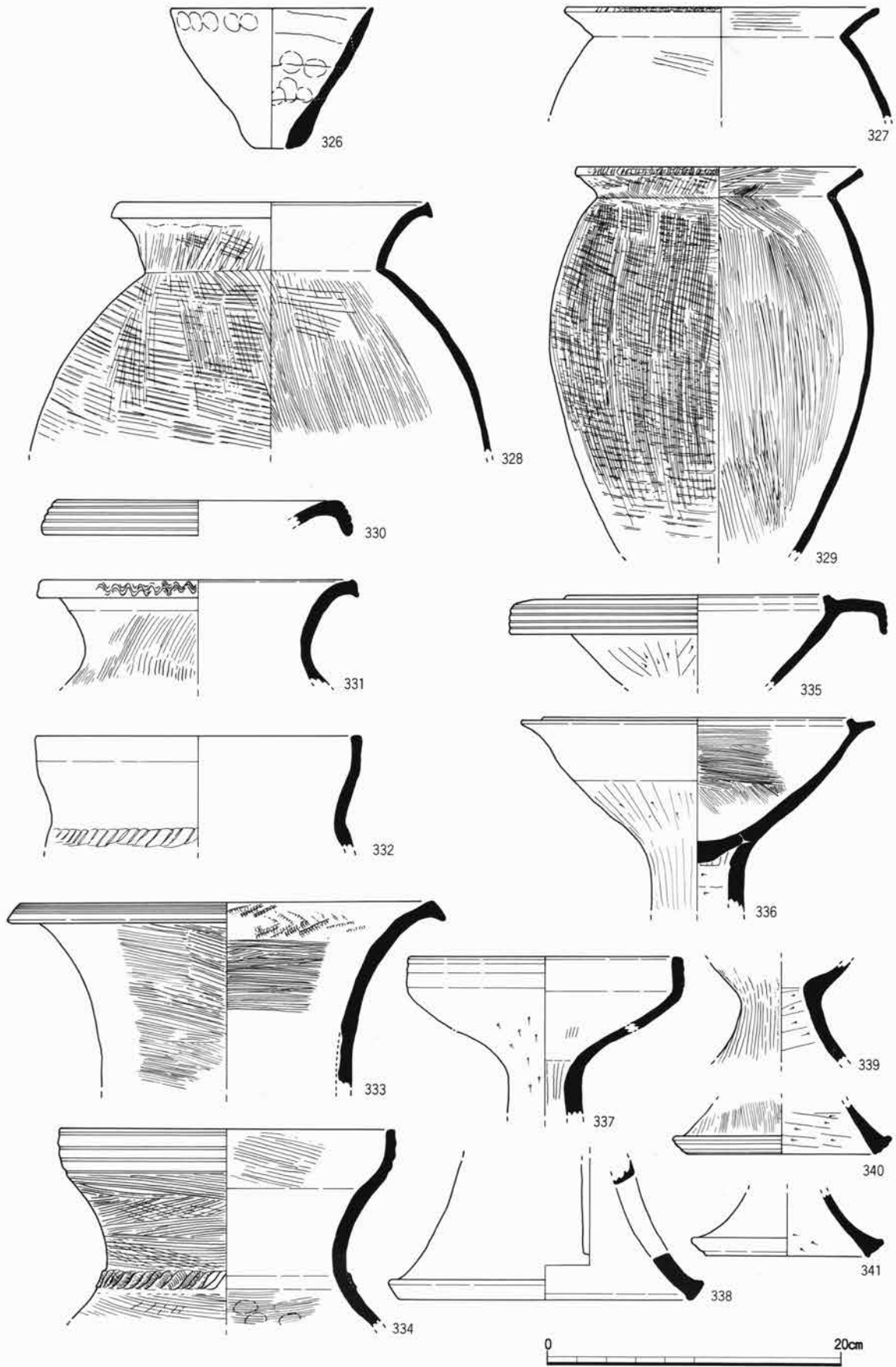
竪穴式住居跡 S H 606(第41図) 326は住居跡床面で検出した柱穴から出土した。柱穴は土器とほぼ同じ大きさで口縁部を上にした状態で出土した。底部に穿孔があり、内面には粘土接合痕が鮮明に残る。中央土坑から弥生土器片が出土している。

土坑 S K 492(第41図328) 広口の短頸壺である。口縁端部は面を持ち上下に肥厚する。外面はタタキ調整の後ハケ、内面はハケである。

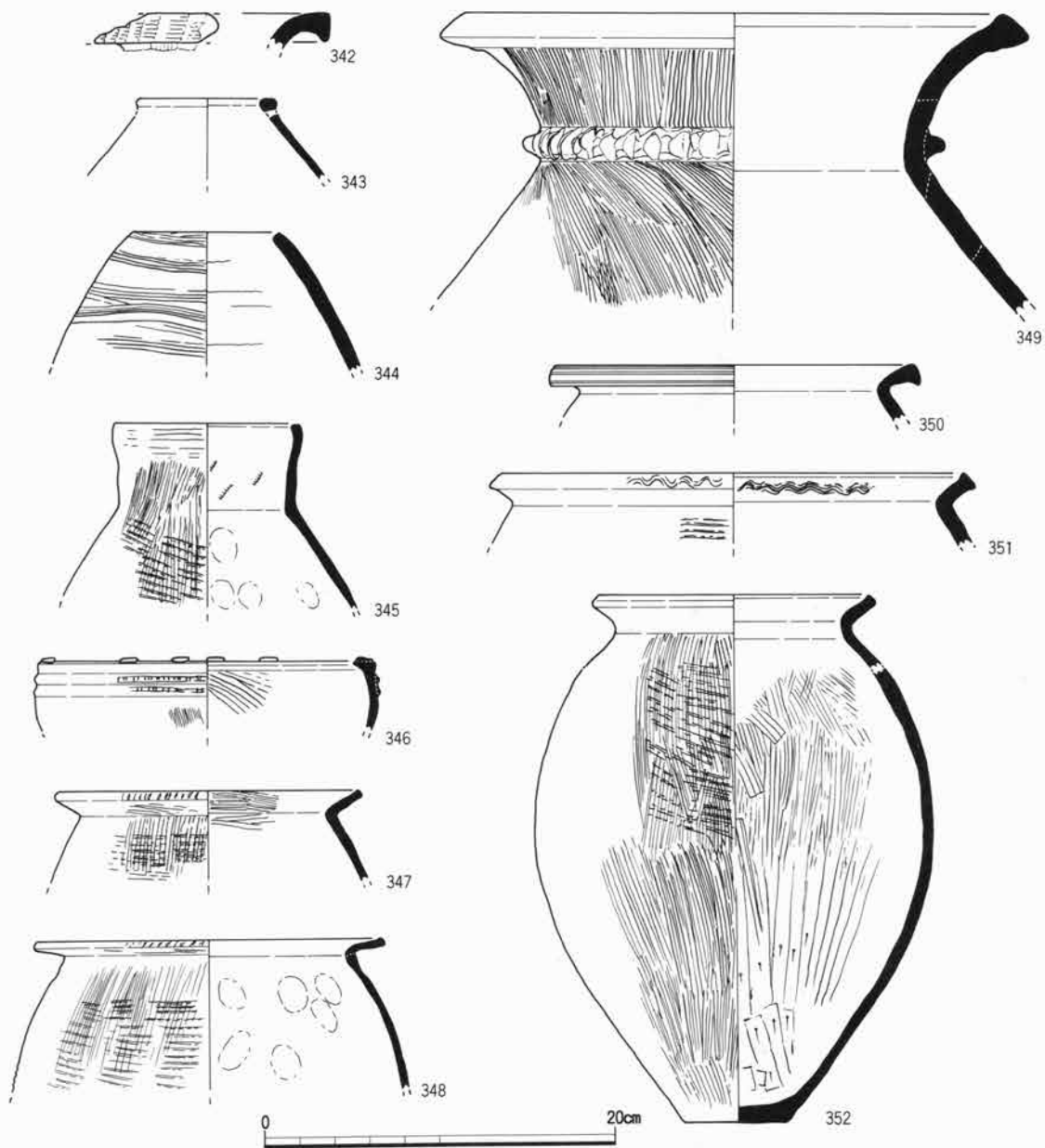
土坑 S K 544(第41図327・329) 両者ともに「く」字状口縁を持つ甕である。外面はタタキ調整の後ハケ、内面はハケである。

土器溜り S X 106(第41図330～341) 330は壺の口縁部で5条の凹線が施される。331は口縁部に波状文を持つ広口壺である。332は調整が不明で屈曲が鮮明でないが、有段受口広口壺と考えられる。333は口縁部に凹線の施された広口長頸壺である。頸部内外面はハケ調整である。334は受け口状に大きく開いた有段状口縁を持つ広口壺である。頸部・体部間には1条の指頭圧痕文突帯が施される。335・336は水平口縁を持つ高杯である。335は口縁端が垂下し、4本の凹線が施される。杯部外面はケズリである。336は口縁端部が垂下しない形態で、外面は下から上へのケズリ、杯部内面はハケ、脚部内面はケズリである。338は脚部片で方形の透かしが確認できる。

周溝 S D 389(第42図342～352) 342は口辺端面に施された簾状文が施される壺口縁である。342は橙褐色の無頸壺である。胎土色調が他の土器と異なる。344は無頸壺である。外面には櫛描文が施されるが、単位ごとに平行ではなく施文が粗い。345は短頸壺である。外面はタタキ調整の後ハケ、頸部内面はハケ端面の痕跡が認められる。346は鉢で、口縁端面には円形浮文が施される。外面には刻みを持つ貼り付け突帯2条が認められる。内外面ともハケ調整である。349は橙褐色の広口壺である。頸部・体部間には1条の指頭圧痕文突帯が施される。外面は粗いハケ、内面はハケと思われる。胎土色調が他の土器と異なり、橙褐色を呈する。351は口縁端面と内側



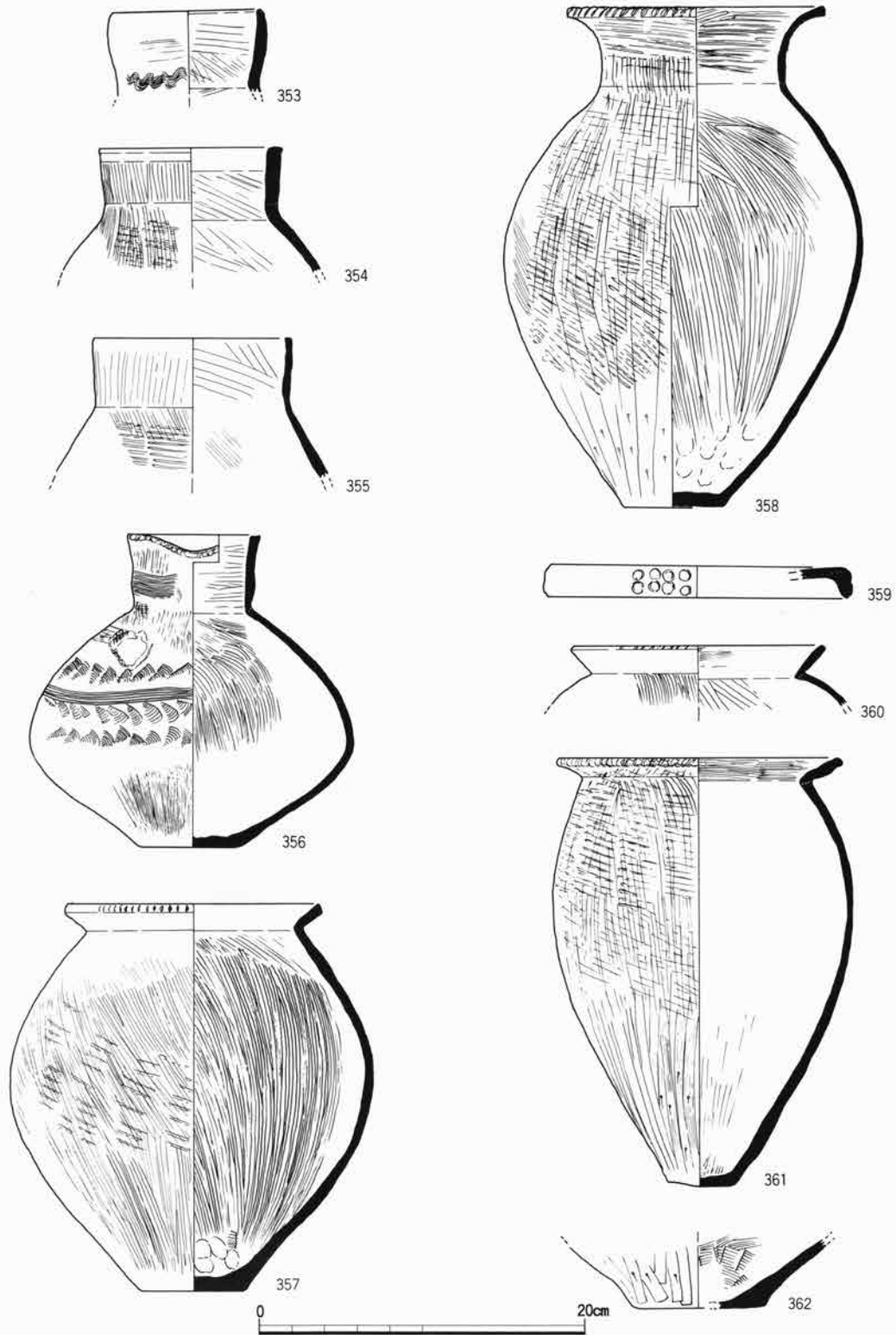
第41図 第7トレンチ出土遺物(2)



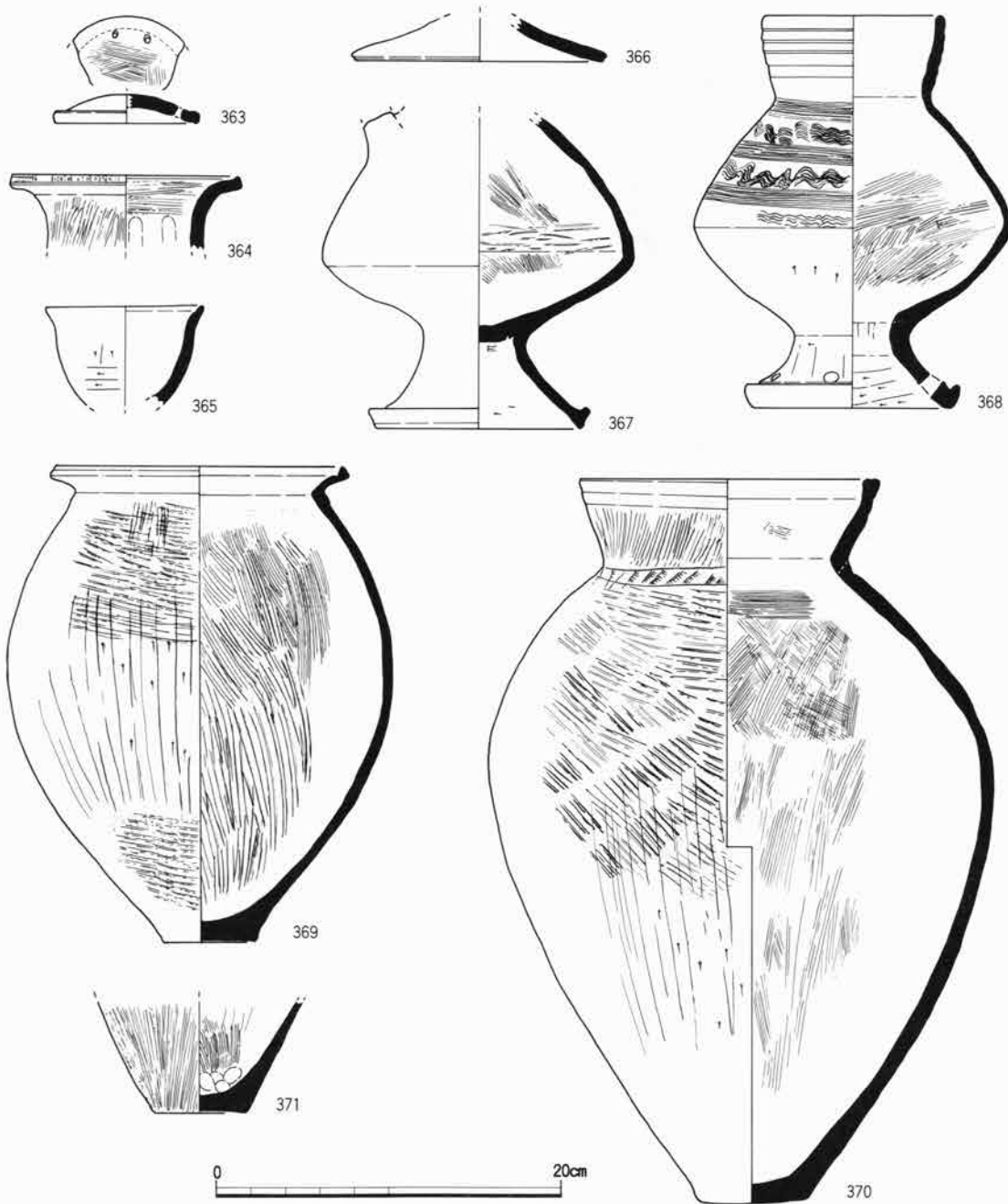
第42図 第7トレンチ出土遺物(3)

に波状文が施された甕である。外面はタタキ、内面は不明である。352は口縁部と胴部の接点がないが、同一個体と考えられる甕である。体部下半部はタタキがハケによって残されていないが、上半部はタタキが残る。内面は下半部が下から上へのケズリで、上半がハケである。

周溝S D462(第43図353~362) 353~355は短頸壺口縁部である。354は外面に波状文が施される。内面にはハケが認められる。354・355は外面はタタキ調整の後ハケ、内面はハケである。356は水差しである。櫛描文、扇形文が施される。体部外面の下部は上方向へのハケ、内面もハケ調整である。357は「く」の字状口縁を持つ完形の甕である。外面はタタキ調整の後ハケ、内面はハケである。体部の最大径より上面は器表面が荒れており、口縁の残りも悪かった。埋没以前に上半部が一定期間空気に触れていた可能性がある。358は広口の短頸壺である。体部外面の下半部はタタキ後、下から上へのケズリ、上半はタタキ後ハケである。内面はハケ調整である。



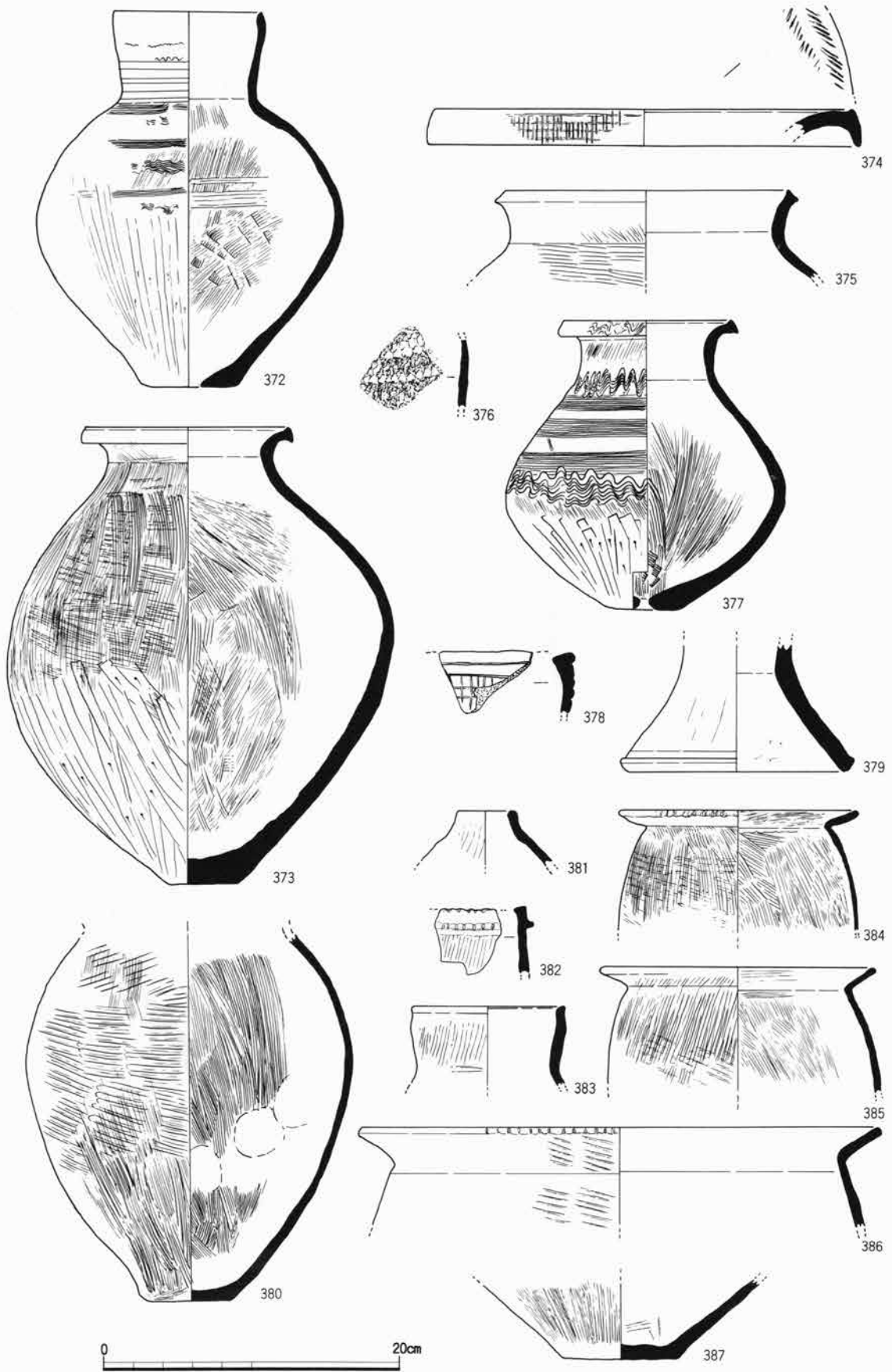
第43図 第7トレンチ出土遺物 (4)



第44図 第7トレンチ出土遺物 (5)

359は壺口縁部で、垂下する口縁部には二段の円形浮文が施される。361は「く」の字状口縁を持つ完形の甕である。体部外面の下半部はタタキ後、下から上への広葉樹木口を用いたと考えられる細かいハケ、上半はタタキ後ハケである。内面はハケ調整で、上半はナデを施す。

周溝S D526(第44図363~370) 363は紐穴が2つある蓋である。外面はハケ、内面はナデ調整である。365は小型の鉢で外面はケズリ内面はナデである。366は内外面ナデ調整の蓋である。外縁内側にはコゲが残る。367は台付きの水差しである。外面の調整および施文は不明である。内面はハケ調整である。368は台付きの水差しである。口縁外面には5条の凹線、体部上半には櫛



第45図 第7トレンチ出土遺物 (6)

描直線文と波状文が交互に施文される。脚部には円形の透かしが設けられる。体部下半外面にはケズリ、内面はハケで調整される。脚部内側は横方向のケズリが認められる。369は「く」の字状口縁を持つ完形の甕である。外面はタタキ調整の後ケズリ、内面はハケである。370は短頸壺で頭部と体部の間には1条のハケの小口面による圧痕文突帯が施される。体部外面の下半部は、タタキ後下から上のケズリ、内面はハケである。

周溝S D 496(第44図371)甕の底部である。内外面ともにハケ調整である。

溝S D 604(第45図372~379) 372は直口短頸壺で、埋土中位で出土した。完形で横位で出土し、底部には穿孔が認められる。頸部外面には波状文と直線文が認められ、櫛描直線文と波状文がみられる。体部下半部はケズリ、上半はハケである。374は短頸広口壺で、施文はなく体部外面下半はケズリ、上半はタタキ後ハケである。375は上層から出土した壺の口縁である。376は縄文土器片である。377は広口太頸壺である。372と近接して横位で出土した。底部には穿孔が認められる。波状文と櫛描直線文が施文され、体部下半がケズリ、上半がハケ、内面はハケである。379は上層から出土した脚部である。

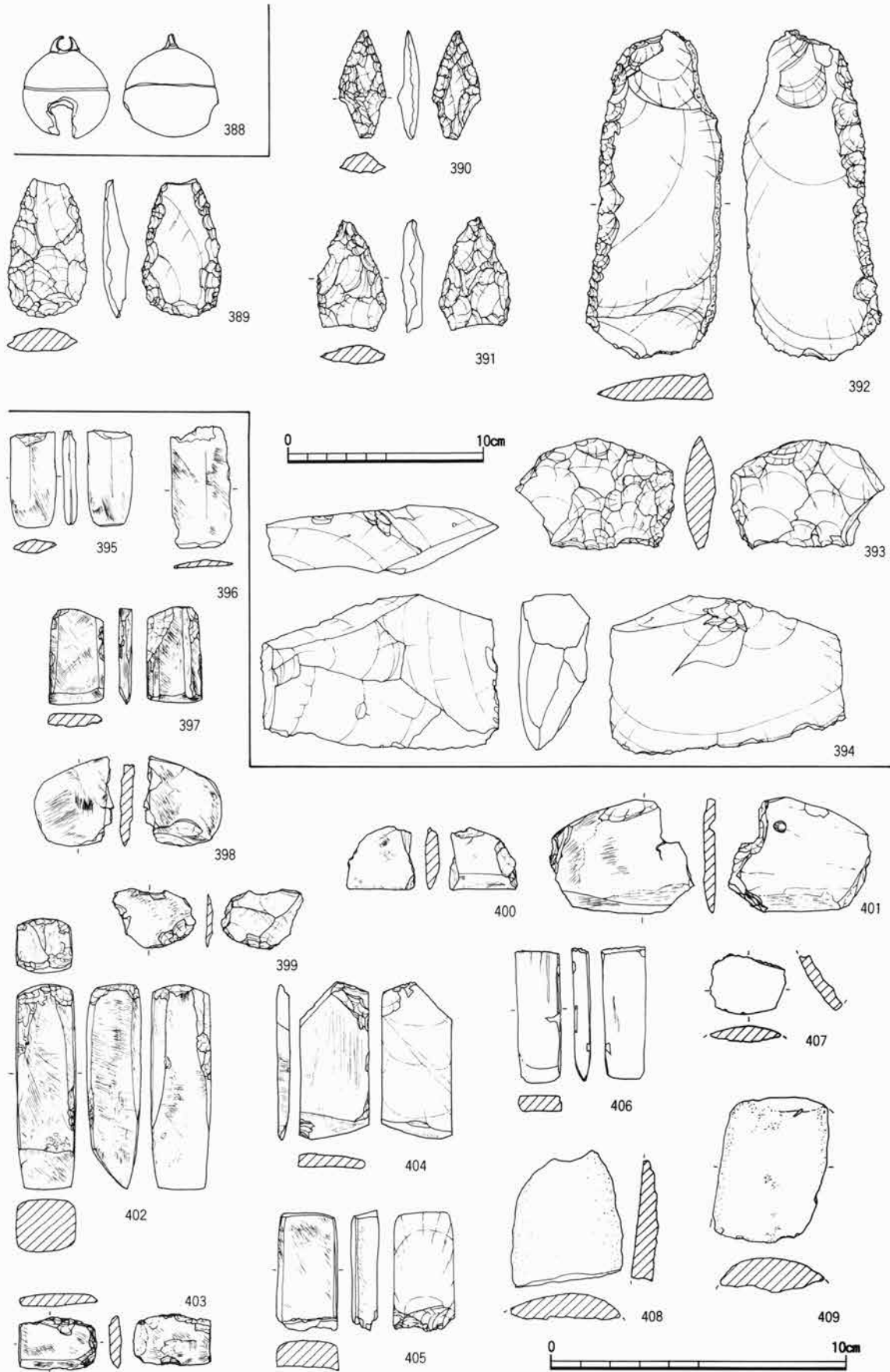
溝S D 605(第46図380~387) 380は甕の体部である。外面調整はタタキ後ハケで下半部はタタキがほぼ消されている。内面はハケである。382は直口壺の口縁部で、口縁端より下方に、貼り付け突帯を持つ。上層から出土した。384は中層から下層にかけて出土した甕である。外部はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。386は大型の上層出土の甕である。287は中層から下層にかけて出土した底部である。

(2) 金属器・石器(第46図388~421)

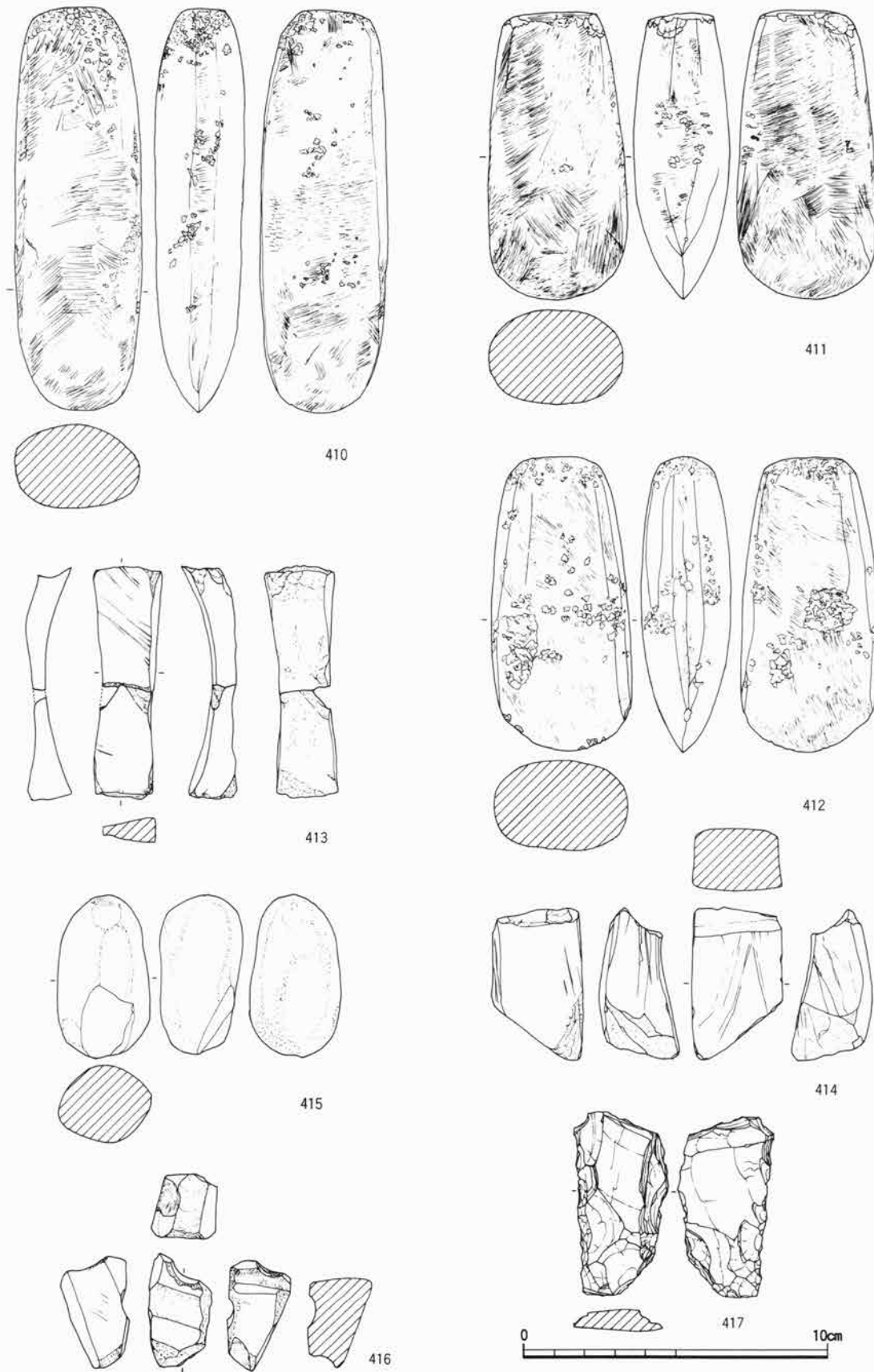
388は第2トレンチS E 270出土の青銅製の鈴である。中央部で上下を接合している。内部には金属製の玉が入っている。

389~391はサヌカイト製の打製石鏃である。389は第7トレンチS D 604から出土し、素材剥片の主要剥離面が大きく残る。390は第3トレンチ包含層から出土した有茎石鏃である。391は第7トレンチ包含層から出土した。392は第2トレンチS K 68から出土したサヌカイト製の削器である。素材剥片は自然面打面を持つ石核から剥離された縦長剥片で、側片に自然面を持つ。二次加工は自然面に対する長片に、背腹両面から認められる。393はサヌカイト製の楔形石器である。折れ面を一方に持つ。394は第7トレンチS D 604から出土したサヌカイト製の剥片である。

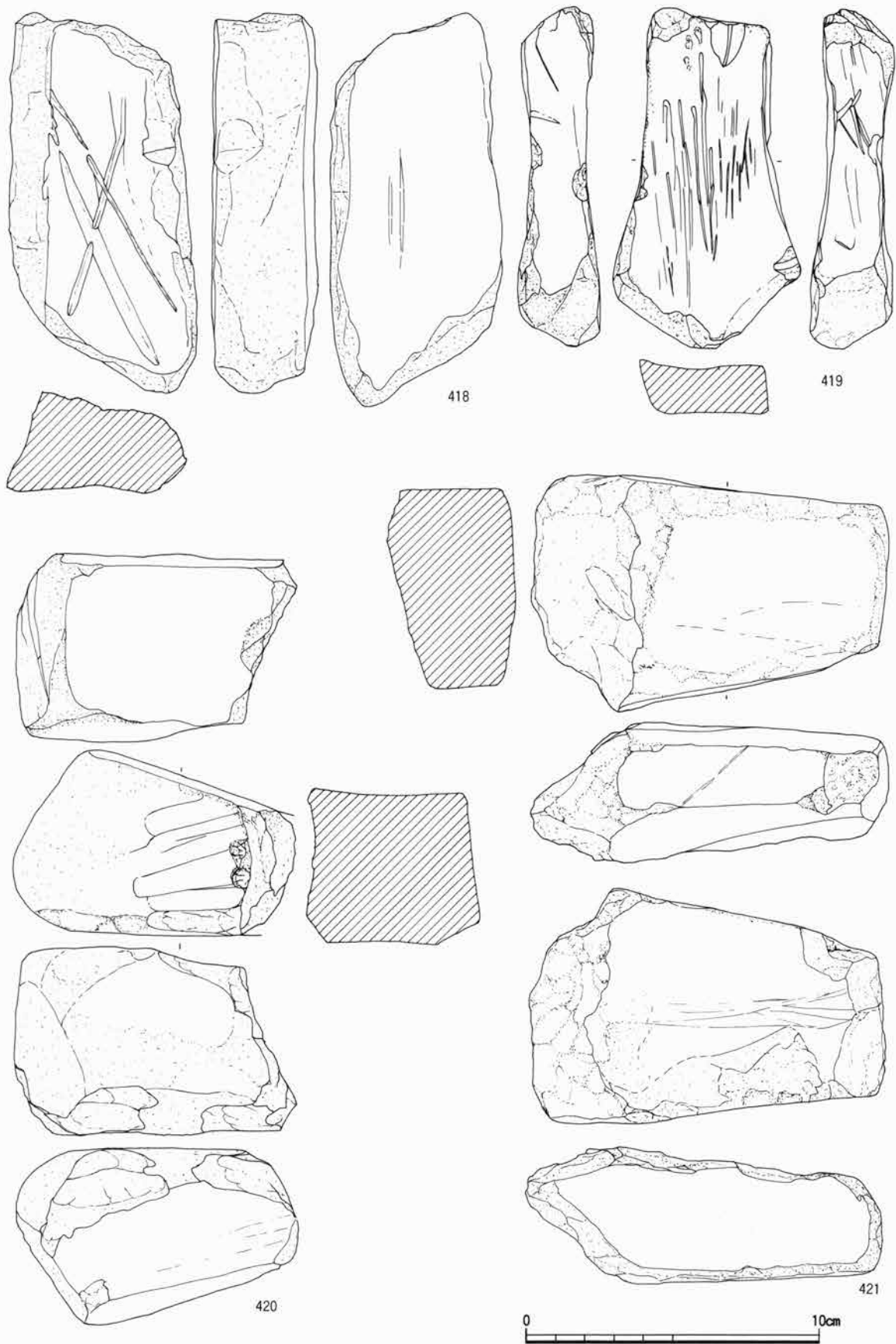
395は第7トレンチS D 605から出土した黒色の粘板岩製の石剣である。破片は基部で下端表面の加工は粗く、両サイドは刃潰しとして研磨面を持つ。386もまた第3トレンチ包含層から出土した黒色の粘板岩製の石剣である。図化した裏面は剥離面で破損している。397は黒色粘板岩を用いた板状石斧であるが、器表面には二本の平行する溝が残っており、銅剣形石剣の破損品を再利用したものと考えられる。398は第7トレンチS K 494から出土した黒色の粘板岩製の石包丁である。399は第7トレンチS D 604から出土した黒色の粘板岩製の石包丁である。400は第2トレンチS E 270から出土した黒色の粘板岩製の石包丁である。混入と考えられる。401は第7トレンチS D 462から出土した赤褐色の粘板岩製の石包丁である。紐穴は未貫通である。素材となった



第46図 金属器・石製品実測図



第47図 石製品実測図



第48図 石製品実測図

赤褐色の粘板岩は包含層や遺構中から多く出土する。

402は第3トレンチ包含層から出土した、淡灰色の頁岩製の柱状片刃石斧である。403は第7トレンチS D604から出土した黒色粘板岩製の扁平片刃石斧である。404は第1トレンチP 25出土の粘板岩製の扁平石斧である。片面は破損しており、図面左側の表面は破損の後、砥石として再利用されている。405は第7トレンチS H509出土の黒色粘板岩製の柱状片刃石斧片である。406は第2トレンチ出土の緑灰色の軟質粘板岩製の扁平石斧である。頭部が破損しているが、砥石として再利用されている。407は第3トレンチP 129出土の太形蛤刃石斧の刃部片である。408は第5トレンチS K402出土の太形蛤刃石斧片である。409は第2トレンチS D197出土の太形蛤刃石斧の頭部片である。石材の同定に試料として出した。410～412は完形の太形蛤刃石斧である。410は閃緑岩製で第2トレンチ包含層から出土した。411は、緑色の砂岩に似た石材を用い、第2トレンチS X03から出土した。410は第3トレンチ包含層から出土した。

413は第5トレンチS H412から出土した灰白色の砥石である。中央で破損しているが、接合し、ほぼ完形となった。413は第5トレンチS H412から出土した暗灰色の砥石である。416は第2トレンチS X03出土の黄褐色製の玉砥石である。破損の後、通常の砥石として用いられていたと考えられる。415は第3トレンチS D552出土の砂岩製敲石である。一端から使用によると考えられる剥離が認められる。417は第3トレンチP 242出土の灰色粘板岩の剥片で、周辺には整形加工の痕跡が認められる。

418・419・421は第3トレンチS H118出土の黄褐色の砂岩製の砥石である。418・419は長軸方向に線状痕が多く認められる。420は茶灰色の砂岩製の砥石である。

4. ま と め

今回の調査は、調査区の幅が最大でも10m余りと狭小であったため、遺構をすべて調査区内でとらえるのは困難であったが、300mの長さを持ったことは、池上遺跡の性格を知るための貴重な資料を提供した。検出できた遺構は古代末から、弥生時代中期後葉に渡り古墳時代弥生時代の遺構が主体をしめる。

古代末の遺構からは多くの黒色土器・土師器が出土しており、口丹波地域においては10世紀末の資料が少ない中、貴重な資料を提供した。またS E270では多くの「て」の字状口縁の土師器が出土したことや、非回転台形の黒色土器が主体を占めることなどから、都との強い結びつきが見られる。吉富荘絵図に見られる池上在家や池上院との関係が問題となろう。

古墳時代には多くの竪穴式住居跡が発見されているが、いずれも須恵器出現以降のものである。時期はT K208型式～飛鳥Ⅱの時期までである。隣接する池上遺跡第4次調査でも多くの竪穴式住居跡が発見されており、古墳時代集落の中心域を調査していたものと考えられる。住居の中には一辺が9mに達するものもある。竪穴式住居跡は検出可能なものは竈を持っている。また床面からは多くの土坑が発見されており、遺物も住居跡のものと同様でないものも多い。特に中央部近くに大型の土坑を持つパターンが認められる。

第3トレンチにおいては総柱の掘立柱建物跡が2棟検出されている。第4次調査の近接地では棟持柱建物が検出されている。同じく時期の詳細が分からないがSB117は妻の両側に棟持柱のある建物である。今後、第4次調査の報告を待って検討を加えていく必要がある。八木嶋遺跡の豪族居館跡とされるものが廂を4面に持つ建物であることと建物の形状が異なる。時期的に異なるのか、集落の性格が異なるのかは今後の課題として残される。また、池上遺跡は近接する狐塚古墳群や寺内古墳群を築造した集落の一つと考えられる。

遺物としては157・208・265の土師器は明らかに古墳時代の土師器であるのに、底面に木葉圧痕を持つ。このような特徴は弥生時代中期の土器に見られるもので、古墳時代では珍しいと考えられる。また、TK208段階の須恵器や、より古い縄蓆文を持つ初期須恵器が出土していることも注目される。

弥生時代は、調査対象地の南部で多く発見されている。しかしながら、北部でも弥生の遺構が残されており、住居跡等が削平されている可能性が残る。竪穴式住居跡は4棟のみ検出できたが、第4次調査でも調査面積に比べて少なく、黒ボク層の残されている地域でも分布はまばらである。このことは、居住区の中心域からずれていることを示している。第7トレンチにおいて検出した平行する2条の溝は、集落を区画していたと考えられる。住居跡SH606が溝の埋まった後に作られていることから、溝が機能していた時期の集落は今回の調査地からずれていることがわかる。溝の方向から考えると、調査地の南側に居住域が広がる可能性が指摘できる。

SH118・SK365から出土した白色粘土を、800°Cで5時間焼成した。焼成によって鉱物組成が変化することが分かり、粘土と土器胎土の単純な対比には問題のあることが指摘できる。また、焼成後の鉱物組成は、出土土器の胎土中の鉱物組成と齟齬しない。

今回の調査では前述しているように、周溝墓は、以前に作られた周溝墓の溝と溝の間を区切ることによって形成されている。注目すべきことは、溝中埋葬を含めると25か所の主体部が検出できたことである。埋葬主体部は東西方向に主軸を持ち、「H」形の木棺を持つものが墳丘内で良好な位置を占め、規模も大きく深い。また、異なった形状の主体部が混在することはその選地や規模を手がかりに親族関係を考える資料となるであろう。

出土遺物に目を移すと、安山岩製の石器が少ないのに比べ、粘板岩の剥片は多く出土した。特に少し赤みを帯びたものが多く、同様な石材は401の穿孔途中でやめられた石包丁に用いられている。417は製作途中であることから、集落内で磨製石器生産が行われたものと考えられる。また、玉砥石(416)の存在は、集落内での玉作り作業を物語るものである。

今回の調査結果は、隣接する第4次調査時の成果とつきあわせて考えていく必要がある。今後の調査により、この池上遺跡の全貌に近い将来明らかにできるものと考えられる。

(中川和哉・筒井崇史・野々口陽子)

注1 谷口 悌『八木町遺跡地図―町内遺跡詳細分布調査報告書―』八木町教育委員会 1997

谷口 悌『池上遺跡発掘調査概要―第2次調査―』八木町教育委員会 1998

- 注2 鶴島三壽「国道9号バイパス関係遺跡平成2年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第46冊）
1991
- 注3 調査に当たっては、池上地区住民の方々、八木町教育委員会はもとより、諸機関のご協力をいただきました。記してお礼申し上げます。

付 編

胎土分析および石材分析

(株)京都フィッション・トラック

1. はじめに

試料分析試料は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査担当者により、京都府船井郡八木町池上、池上遺跡で採取された弥生土器10点、加熱分析用粘土2点、石材1点である。これらは以下の分析方法を用いて測定に供された。

2. 分析方法

2-1. 胎土分析用土器

(1) 試料の採取

分析試料片は、試料のもつ考古学的価値を担わないように配慮し、調査担当者の手により慎重に位置決めされた個所を、ダイヤモンドカッターで適宜切削し採取した。結果的に得られた各試料片重量は1.2~6.8g程度である。

(2) 前処理

試料片は50℃で一昼夜乾燥し、秤量後乳鉢で1つずついねいに粉碎した。次に2ℓビーカー中で適宜水替えをしながら水洗し、さらに300mlパイレックスビーカーに移し超音波洗滌を行った。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウム溶液を微量加え、懸濁がなくなるまで洗浄液の交換を繰り返した。ついで、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い3段階の篩別(120, 250メッシュ)を行った。こうして得られた120~250メッシュ(1/8~1/16mm)、250メッシュ(1/16mm)以下の2つの粒径試料を、比重分別処理を加えることなく封入剤(nd=1.54)を用いて岩石薄片を作成した。

(3) 重鉱物分析

火山灰分析などで、通常分析対象とする120~250メッシュ粒径(1/8~1/16mm)篩別試料で検鏡を行った。

検鏡作業は、主要重鉱物であるカンラン石(01)・斜方輝石(0px)・単斜輝石(CPx)・褐色普通角閃石(BHo)・緑色普通角閃石(GHo)・不透明(鉄)鉱物(0pq)・カミングトン閃石(Cum)・黒雲母(Bi)・ジルコン(Zr)・アパタイト(Ap)・を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計算してその量比を百分率で示した。なおこの作業は封入薄片1枚(封入粒子2000~4000個)を対象に行い試料により重鉱物含有の少ないものは結果的に総数200個に満たないことを、お断りしておきたい。また重鉱物分析は、一般に重液処理により重鉱物を濃集してなされることが多いが、重液処理操作の過程で風化や付着物のため生じる比重変化や粒径の違いが組成分

布に与える影響を考え、重液処理は行っていない。

(4)全鉍物含有率分析

主として重鉍物・軽鉍物・土粒子の量比の違いが試料ごとに認められるかをチェックする目的で分析をするが、試料間の差がそれほどないことから分析項目を増し、火山ガラス・軽鉍物・重鉍物・土粒子・その他の5項目について含有粒子数のランダム計数を行った。このうち土粒子としたものは、胎土中焼結され多くの微細粒子が集合し塊状となった粒子をさす。作業要領は基本的に前述の重鉍物分析と同じで、1薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数した。なお対象粒子は120～250メッシュ(1/8～1/16mm)粒径試料である。

2-2.加熱分析用粘土

2つの加熱分析用粘土試料、sp(11)SH118粘土と、sp(12)3TrSK365粘土を対象に加熱分析を行った。この分析の目的は焼成前後における胎土分析結果を比較することにある。まず①加熱焼成前の粘土を対象に、前述の2-1の要領で胎土分析を行う。②次に竈気炉で800℃、5時間の焼成を行う。③焼成後の粘土試料を胎土分析し、④最後に池上5次土器試料の胎土分析結果とあわせ①と③の分析結果を比較した。なお粘土試料の焼成には、Yamato製電子制御式Muffle Furnace FP21型(温度範囲室温～1150℃、温度設定精度±2℃)を用いた。焼成は、事前に炉内温度800℃に設定した炉に白金ルツボに入れた粘土試料を挿入し、5時間加熱後、室温で冷却し、前述の胎土分析の要領で分析を行った。また焼成前の粘土試料には新鮮な火山ガラスが数%含まれていたため、火山ガラスの屈折率測定を行い、ガラスの同定を試みた。

2-3.石材の同定

石材同定試料(池上5次・2トレ・SD197・99.01.11) 1個の端付近をまずダイヤモンドカッターで切断し、岩石検鏡用薄片を作成したのち、偏光顕微鏡(Nikon XTP型)で鑑定した。また試料の岩質判定情報を増すため、アルキメデス法を用い試料のみかけ密度の測定も行った。

3. 分析結果と考察

以下に各分析結果について述べ、考察を加える。

3-1. 土器の胎土分析

今回の分析結果の詳細は、巻末の測定データ一覧表中に示されている。しかし分析生データだけを見ていたのでは比較要素が多いため、分析値間の相互関係を把握することは困難と思われる。そこで、重鉍物分析および火山ガラス・鉍物組成分析結果を三角ダイアグラム(図1)上にプロットし表示した。なお三角ダイアグラムを作成するにあたり、各分析結果の3つの端成分として次に述べる要素を設定した。

まず重鉍物分析では、黒雲母(Bi)、不透明(鉄)鉍物とジルコンの和($0px+Zr$)、緑色角閃石と斜方輝石および単斜輝石の和($GHo+0px+Cpx$)を3つの端成分とし、それぞれ頂点・左下・右下

を100%として図示した。その理由は以下の3点ある。まず①Biは主として花崗岩起源の可能性の高い要素とみなすことができること。②Opq+Zrはともに比重が非常に大きく風化にも強く粘土中に残りやすい鉱物であり、さらにこれらは水簸の過程で沈降しやすく排除されやすい要素であること。最後に③Cho+Opx+Cpxはその他の成分で火山灰起源の可能性をもつ要素があり、相互関係を検討するには有効と判断したからである。

一方火山ガラス・全鉱物含有率分析結果では、三角ダイアグラムの3成分として頂点に重鉱物+火山ガラスを、左下に土粒子、右下に軽鉱物をそれぞれ100%になるようにプロットした。その理由は、粘土鉱物を主とし非結晶～微結晶の集合体である土粒子は土器材料の主成分であること、軽鉱物はそれに次ぐ主成分粒子であること、最後に重鉱物+火山ガラスは含有量がともに少なく一括して副成分粒子とみなせると判断したからである。なお軽鉱物はさらにカリ長石・斜長石・石英等に細分されるが、今回の分析では一括してとりあつかった。

なお分析点数が10点と少ないため、分析結果に対し多くはコメントできない。しかし、BiとHo+Opx+Cpx比が試料ごとに異なり結果はかなりばらつくものの、連結線の分布傾向が似ると指摘できる。ただし例外はsp(10)試料であり、軽鉱物や重鉱物が多く逆に土粒子の含有が少ない傾向にあり、連結線の傾きが他の試料とは異なる。

3-2. 加熱分析粘土

焼成の前後で2試料とも同様の明瞭な差が生じた。傾向としては焼成前は火山ガラス・軽鉱物・重鉱物含有が多く土粒子が少ないのに対し、焼成後は火山ガラス・軽鉱物・重鉱物が減り、土粒子が大幅に増加することが指摘される。また焼成前には火山ガラスにヒビ割れは認められず、色付ガラスや褐色普通角肉石(BHo)が稀であったのに対し、焼成後はヒビ割れや着色の認められる火山ガラスが急増し、ガラス片中の30～40%程度にも及ぶようになった。さらに焼成前には普通角閃石は両試料とも大部分緑色(GHo)であったものが、焼成後は観察されるものは褐色のみとなる大きな変化がみられた。これは角閃石の高温酸化による変色と解釈される。焼成前粘土に含まれる火山ガラスの屈折率測定と水和層の観察から、2試料とも含有ガラスはAT、大山系、K-Ahの3種類が混合しているものと考えられる。これらの火山ガラスが含まれていることは、分析粘土の産出層準に一定の制約を与えるものと考えられる。

なお両試料とも、焼成前の胎土分析結果は土器片試料とかなり異なるが、焼成後の分析結果はほぼ同様な傾向をもつことが注目される。すなわち、今回行った2試料の焼成実験の結果から、これら2試料が弥生土器の胎土であっても矛盾はないものと考えられる。

3-3. 石材同定

試料は池上5次・2ト・SD197・99.01.11石材で、石斧として利用されたものの破片である。全休に風化が進み、表面より5mm厚の部分は新鮮な原岩組織が保存されている。新鮮な部分は肉眼では黒っぽく見える緻密な完晶賞斑状の岩石である。主として伸長性に富む自形普通角閃石と

斜長石からなり、石英および斜長石の斑状結晶を含み、黒雲母は伴っていない。普通角閃石は累帯構造を示し、その一部は緑泥石化する。また少量の白雲母を含む。みかけ密度は2.696g/cm³を示し、カコウ岩よりは大きい。石材がかなり風化していることから、新鮮な原石密度は2.75g/cm³程度と推定される。以上の所見から、本石材は細粒斑状角閃石石英閃緑岩(fine-grained porphyritic hornblende granodiorite)と同定される。産状はまったく不明だが、閃緑岩体の一部、カコウ岩体中の黒色包有物、貫入岩の可能性などが指摘される。なお調査地に比較的近い閃緑岩体としては京都市左京区鞍馬本町中之谷付近があり、多くは玉石状となり地下に埋没している。“本鞍馬”と称し、古くより挽茶臼として利用されたことが知られている。ただし本石斧との関係は不明である。

分析資料

SP(1)は第3トレンチSH118出土弥生土器。SP(2)第3トレンチSH118出土弥生土器。SP(3)は第3トレンチ包含層出土弥生土器。SP(4)は第3トレンチ包含層出土弥生土器。SP(5)は第3トレンチ包含層出土弥生土器。SP(6)は第4トレンチSH104カマド出土土師器。SP(7)は第4トレンチSH104出土土師器。SP(8)は第2トレンチSE270出土土師器碗(糸切り高台)。SP(9)は第2トレンチSE270出土土師器皿(ての字口縁)。SP(10)は第2トレンチSE270出土土師器甕。

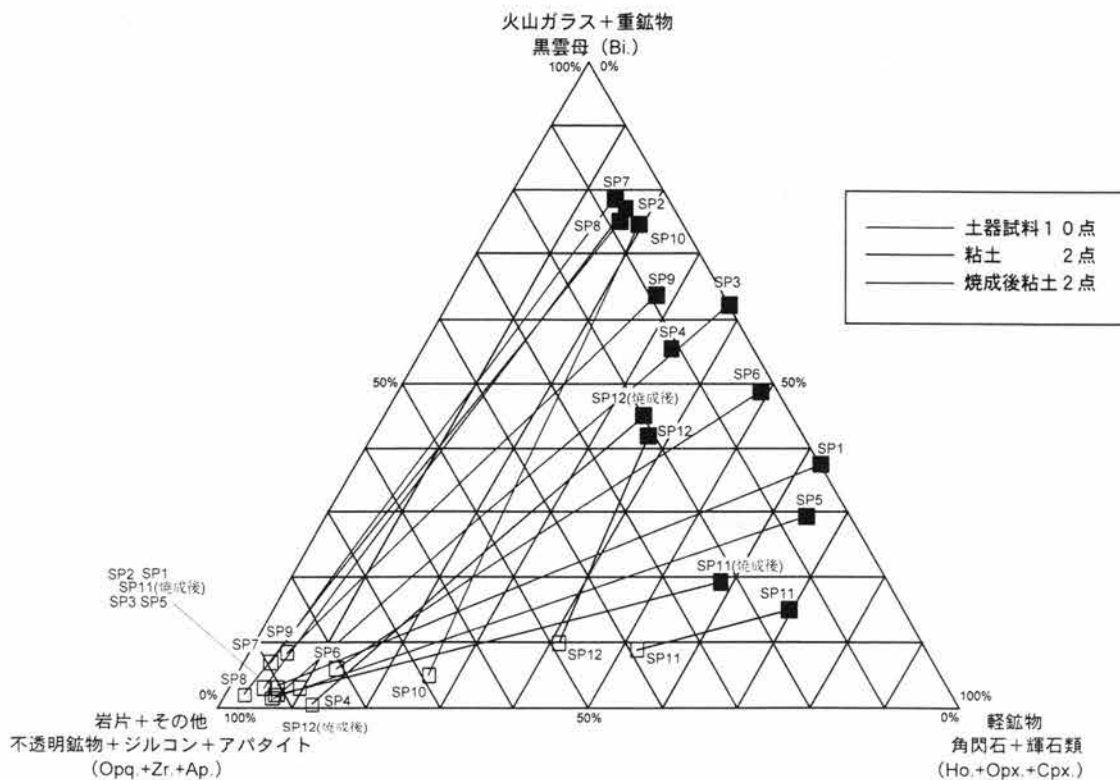


図1 池上遺跡出土遺物の胎土分析結果

表1 池上遺跡出土資料の全鉱物分析および重鉱物分析

No	試料名	全鉱物分析				重鉱物			
		火山ガラス + 重鉱物	岩片 + その他	軽鉱物	合計	黒雲母	不透明鉱物 + ジルコン + アバタイト	角閃石 + 輝石類	合計
1	SP(1)	6(3%)	181(91%)	13(7%)	200(100%)	6(38%)	0(0%)	10(63%)	16(100%)
2	SP(2)	6(3%)	185(93%)	9(5%)	200(100%)	47(77%)	4(7%)	10(16%)	61(100%)
3	SP(3)	3(2%)	184(92%)	13(7%)	200(100%)	28(62%)	0(0%)	17(38%)	45(100%)
4	SP(4)	1(1%)	174(87%)	25(13%)	200(100%)	10(56%)	2(11%)	6(33%)	18(100%)
5	SP(5)	4(2%)	183(92%)	13(7%)	200(100%)	5(29%)	1(6%)	11(65%)	17(100%)
6	SP(6)	12(6%)	162(81%)	26(13%)	200(100%)	41(49%)	2(2%)	41(49%)	84(100%)
7	SP(7)	14(7%)	179(90%)	7(4%)	200(100%)	11(79%)	1(7%)	2(14%)	14(100%)
8	SP(8)	4(2%)	191(96%)	5(3%)	200(100%)	9(75%)	1(8%)	2(17%)	12(100%)
9	SP(9)	17(9%)	173(87%)	10(5%)	200(100%)	7(64%)	1(9%)	3(27%)	11(100%)
10	SP(10)	10(35%)	138(69%)	52(26%)	200(100%)	149(75%)	12(6%)	39(20%)	200(100%)
11	SP(11)	18(9%)	78(39%)	104(52%)	200(100%)	30(15%)	31(16%)	139(70%)	200(100%)
12	SP(12)	20(10%)	98(49%)	82(41%)	200(100%)	84(42%)	42(21%)	74(37%)	200(100%)
13	SP(13)	4(2%)	182(91%)	14(7%)	200(100%)	6(19%)	7(23%)	18(58%)	31(100%)
14	SP(14)	6(3%)	175(88%)	19(10%)	200(100%)	43(45%)	19(20%)	33(35%)	95(100%)

表2 池上遺跡出土資料の重鉱物分析結果一覧表(1)

No	試料名	重鉱物組成*(1)										備考	
		Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bi	Ap		total
			Opx	Cpx	Bho	Gho							
1	SP(1)	—	1	1	—	8	—	—	—	6	—	16	Bhoは含まれない。
		0.0	6.3	6.3	0.0	49.9	0.0	0.0	0.0	37.5	0.0	100.0	
2	SP(2)	—	1	1	6	2	4	—	—	47	—	61	BhoはGhoが高温酸化を受けたものか？
		0.0	1.6	1.6	9.8	3.3	6.6	0.0	0.0	77.1	0.0		
3	SP(3)	—	2	—	1	14	—	—	—	28	—	45	
		0.0	4.4	0.0	2.2	31.1	0.0	0.0	0.0	62.3	0.0	100.0	
4	SP(4)	—	—	3	3	—	2	—	—	10	—	18	BhoはGhoが高温酸化を受けたものか？
		0.0	0.0	16.7	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	55.5	0.0	100.0	
5	SP(5)	—	—	3	—	8	1	—	—	5	—	17	Bhoは含まれない。
		0.0	0.0	17.6	0.0	47.1	5.9	0.0	0.0	29.4	0.0	100.0	
6	SP(6)	—	3	2	3	32	2	1	—	41	—	84	
		0.0	3.6	2.4	3.6	38.1	2.4	1.2	0.0	48.7	0.0	100.0	
7	SP(7)	—	—	—	—	2	1	—	—	11	—		
		0.0	0.0	0.0	0.0	14.2	7.1	0.0	0.0	78.6	0.0	100.0	
8	SP(8)	—	1	—	—	1	1	—	—	9	—		
		0.0	8.3	0.0	0.0	8.3	8.3	0.0	0.0	75.1	0.0	100.0	
9	SP(9)	—	2	—	—	1	1	—	—	9	—	11	
		0.0	18.2	0.0	0.0	9.1	9.1	0.0	0.0	63.6	0.0	100.0	
10	SP(10)	—	—	—	4	35	12	—	—	149	—	200	BhoはGhoが高温酸化を受けたものか？
		0.0	0.0	0.0	2.0	47.5	6.0	0.0	0.0	74.5	0.0	100.0	
11	SP(11)	—	6	—	2	127	30	4	1	30	—	200	
		0.0	3.0	0.0	1.0	63.5	15.0	2.0	0.5	15.0	0.0	100.0	
12	SP(12)	—	6	—	2	65	41	1	1	84	—	200	
		0.0	3.0	0.0	1.0	32.5	20.5	0.5	0.5	42.0	0.0	100.0	
13	SP(13)	—	1	—	17	—	7	—	—	6	—	31	Ghoは高温酸化し、すべてBhoに変化する。(800℃、5hr)
		0.0	3.2	0.0	54.8	0.0	22.6	0.0	0.0	19.4	0.0	100.0	
14	SP(14)	—	1	—	32	—	19	—	—	43	—	95	Ghoは高温酸化し、すべてBhoに変化する。(800℃、5hr)
		0.0	1.1	0.0	33.7	0.0	20.0	0.0	0.0	45.2	0.0	100.0	

* (1) 上段 計測粒子数、下段 %

なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol: カンラン石、Opx: 斜方輝石、Cpx: 単斜輝石、Bho: 褐色普通角閃石、Gho: 緑色普通角閃石、Opq: 不透明(鉄) 鉱物、Id: イディングサイト、Zr: ジルコン、Bi: 黒雲母、Ap: アパタイト、Gar: ザクロ石、VG: 火山ガラス、Zoisite: ユウレン石、Cum: カミングトン閃石、Epidote: 緑閃石

表3 池上遺跡出土遺物の重鉱物・軽鉱物含有比測定結果一覧表(2)

No						備考	
	火山 ガラス	軽 鉱 物	重 鉱 物	岩 片	土 粒 子		合 計 (%)
1	5	13	1	—	181	200	火山gl:bw>pm型。ビ'ルはなし。軽鉱物:か長石・石英・斜長石。重鉱物:微量のGho・Bi・Opx・Cpx。プラントオパール含む。
	2.5	6.5	0.5	0.0	90.5	100	
2	4	9	2	—	185	200	火山gl:bw>pm型。ビ'ルはなし。軽鉱物:か長石・石英・斜長石。重鉱物:Bi>BHo・Opq・Gho・Opx・Cpx。プラントオパール含む。
	2.0	4.5	1.0	0.0	92.5	100	
3	1	13	2	—	184	200	火山gl:bw型。ビ'ルはなし。軽鉱物:か長石・石英・斜長石。重鉱物:Bi・Gho>Opx・BHo。プラント・オパール含む。
	0.5	6.5	1.0	0.0	92.0	100	
4	0+	25	1	—	174	200	火山gl:bw・pm微量。ビ'ルなし。軽鉱物:か長石・石英・斜長石。重鉱物:Bi>Cpx・BHo・Opq。プラント・オパール含む。
	tr	12.5	0.5	0.0	87.0	100	
5	3	13	1	—	183	200	火山gl:bw型。軽鉱物:か長石・石英・斜長石。重鉱物:Gho・Bi・Cpx・Opq。プラントオパール微量。
	1.5	6.5	0.5	0.0	91.5	100	
6	9	26	3	—	162	200	火山gl:bw>>pm型。ビ'ル目立つ。色付gl含む。軽鉱物:石英・か長石。重鉱物:微量のBi・Gho>Opx・BHo・Cpx・Opq・Cum。プラントオパール、β-Qz含む。
	4.5	13.0	1.5	0.0	81.0	100	
7	13	7	1	—	179	200	火山gl:bw型。色付gl多し。軽鉱物:か長石・石英。重鉱物:Bi>Gho・Opq。プラントオパール含む。
	6.5	3.5	0.5	0.0	89.5	100	
8	2	5	2	—	191	200	火山gl:bw型。色付gl多し。軽鉱物:か長石・石英。重鉱物:Bi>Opx・Gho・Opq。プラントオパール含む。
	1.0	2.5	1.0	0.0	95.5	100	
9	16	10	1	—	173	200	火山gl:bw>pm型。軽鉱物:か長石・石英。重鉱物:Bi>Opx・Gho・Opq。プラントオパール含む。
	8.0	5.0	0.5	0.0	86.5	100	
10	3	52	7	—	138	200	火山gl:bw型。軽鉱物:か長石・石英。重鉱物:Bi>Gho>Opq・BHo。プラントオパール含む。水鏡悪し。
	1.5	26.0	3.5	0.0	69.0	100	
11	7	104	11	—	78	200	火山gl:bw・pm型。ビ'ルなし。少量のgl含む。軽鉱物:か長石・石英・斜長石。重鉱物:Gho・Opq・Bi>・Opx・Cum・BHo・Zr。プラント・オパールを1%程度含む。
	3.5	52.0	5.5	0.0	39.0	100	
12	14	82	6	—	98	200	火山gl:bw>pm型。ビ'ルなし。少量のgl含む。軽鉱物:か長石・石英・斜長石。重鉱物:Bi・Gho・Opq>・Opx・BHo・Cum・Zr。プラント・オパールを3%程度含む。β-Qz含む。
	7.0	41.0	3.0	0.0	49.0	100	
13	1	14	3	—	182	200	火山gl:bw・pm型。ビ'ルや色付glが増加し40%程度のものにみられる。軽鉱物:か長石・石英・斜長石。重鉱物:BHo・Opq・Bi>・Opx。プラント・オパールを1~2%程度含む。あたかも水鏡良好に見える。
	0.5	7.0	1.5	0.0	91.0	100	
14	4	19	2	—	175	200	火山gl:bw・pm型。ビ'ルや色付glが増加し30~40%程度のものに観察される。軽鉱物:か長石・石英・斜長石。重鉱物:Bi・BHo・Opq>・Opx。プラント・オパールを1~2%程度含む。
	2.0	9.5	1.0	0.0	87.5	100	

* (1) 上段 計測粒子数、下段 %、+は微量含むことを示す。

なお測定は、#120~#250粒径の粒子を対象としています。

備考欄中の説明:bw:バブル・ウォール(扁平)、pm:バミス(軽石)、β-Qz:ベータ石英(高温石英)、Po:プラント・オパール

鉱物名の略称は重鉱物組成表と同じ

表4 池上遺跡出土粘土の火山ガラス屈折率の測定結果一覧表

No	試料名	屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
11	SP (11)	1.497	1.501	1.985	26	1.497 ≤ n < 1.499 *60%	H,C
		—	—	1.5034	1		C
		1.511	1.512	1.5113	3		H,C
12	SP (12)			1.4981	9	1.509 ≤ n < 1.511 *70%	H,C
				1.5018	4		C, It
				1.5102	17		H,C

*全測定量に対するmode範囲内にある火山ガラスの含有を示す。

H:扁平型、C:中間型、T:多孔質型(吉川、1976)、It:不規則型

2. 平安京跡二条大路発掘調査概要

1. はじめに

平安京跡二条大路の調査は、京都府立朱雀高校の体育館改築工事に伴い、京都府教育委員会管理課の依頼を受けて実施した。調査は体育館の工事範囲内にトレンチを設定して行った。調査面積は約1300m²である。調査期間は平成10年12月9日から平成11年3月12日までである。なお、調査に要した費用は全額京都府教育委員会が負担した。

調査地は、京都市中京区西ノ京式部町1番地に所在し、北に二条中学校、南に中京中学校、東に二条城をひかえ、文教ゾーンを形成している。

平安時代には調査地の南側大半を二条大路が占め、北部に隍、塙地、大垣をはさんで、宮内の式部厨などの役所が所在する。中世には上京・下京からはずれ、市街地ではなくなっている。近世には江戸時代初頭の絵図には洛中ではあるが、空き地のようである。その後、二条城周辺は官庁街となり、当調査地は二条城番衆、御門番頭屋敷に相当する地点にあたる。

従前の調査には、まず昭和48年に京都市が行った美福通歩道の調査^(注1)があげられる。この調査では、押小路通と美福通の北東交点から北へ150m付近を中心にトレンチ調査を行っている。この調査で、今回検出した平安宮南隍の延長部分と見られる溝が確認されているが、正確な隍の位置は分かっていなかった。この後、昭和53年に今回の調査地の西側、特別校舎部分^(注2)を京都府教育委員会が調査している。この調査では近世の礫敷きと柵、中世の井戸、近世の井戸土坑などが検出されている。また、湿地として報告されているトレンチ北拡張部分は、今回の調査によって、後述するように池の一部であることが判明した。

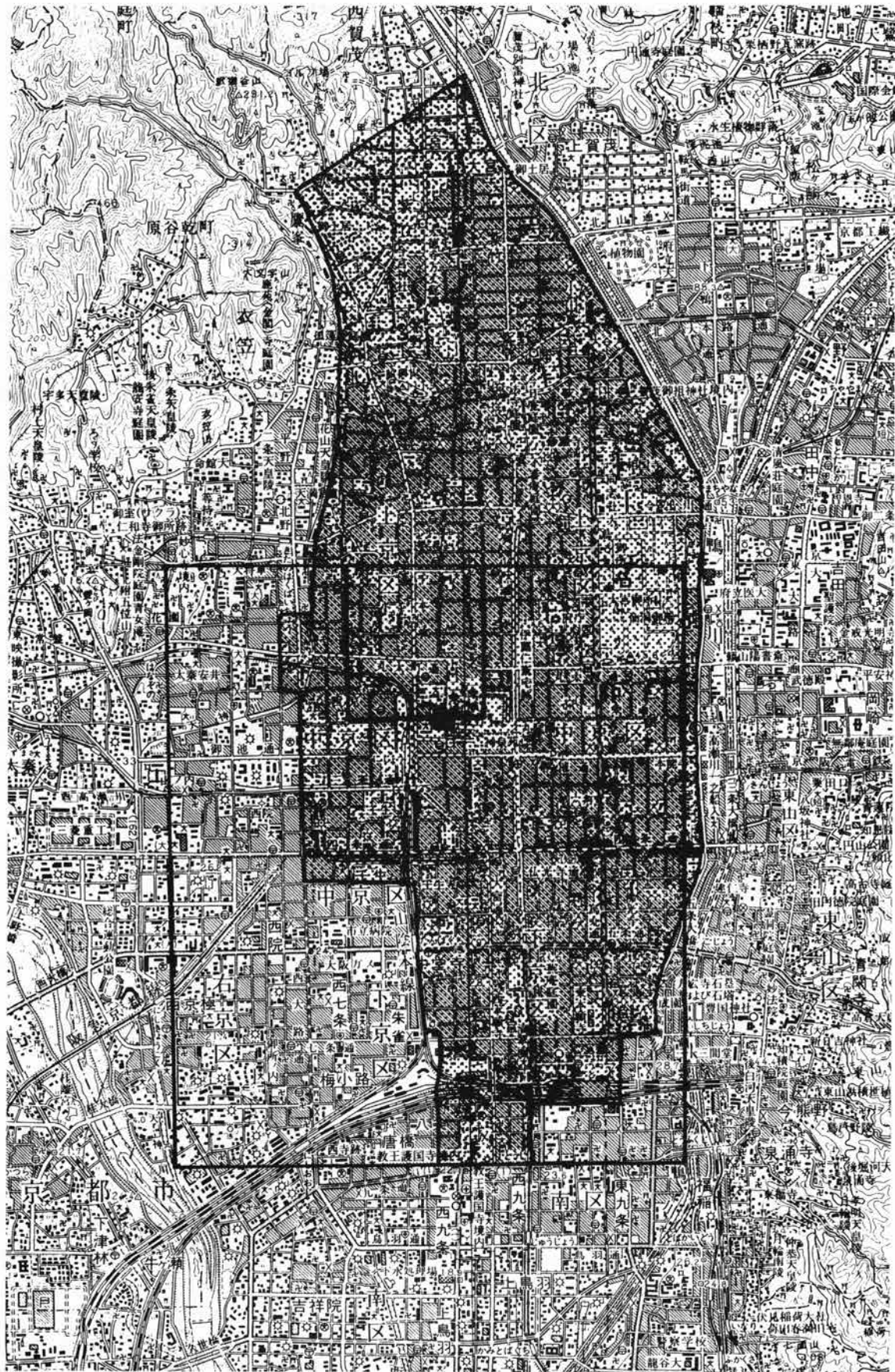
なお、調査中及び整理中に次の皆様のご指導、ご助言、御協力を賜りました。記して感謝いたします。

京都府立朱雀高等学校の皆様、京都大学西山良平氏・三重大学山中 章氏・古代学協会植山茂氏・同志社大学鋤柄俊夫氏・花園大学山田邦和氏・(財)京都市埋蔵文化財研究所鈴木久男氏・同、辻 純一氏・関西文化財調査会吉川義彦氏・当調査研究センター足利健亮理事・川上 貢理事・井上満郎理事。

2. 調査概要

(1)基本層位(第51～53図)

調査地の地表から1.5mほどは旧京都府立第二女学校建設時、現朱雀高校建設時の盛土および旧体育館撤去時の盛土である。この盛土を除去すると、旧耕作土があり、トレンチ北部では耕作溝と見られる溝を検出した。またトレンチ南部では、礫がちな地山面に到達した。トレンチ北部において、耕作溝を検出したベース層を除去すると、シルト質の層になり、これを除去すると拳大の半分ほどの大きさの礫で作られた洲浜が現れる。また、平安宮南隍相当地点に上面幅3～3.3mの溝と、それに続く池状遺構を検出した。洲浜はこの池状遺構に伴うものであることが分



第49図 調査地点と平安京・御土居(1/50,000)
(黒四角は調査地点、網掛けは御土居に囲まれた洛中)

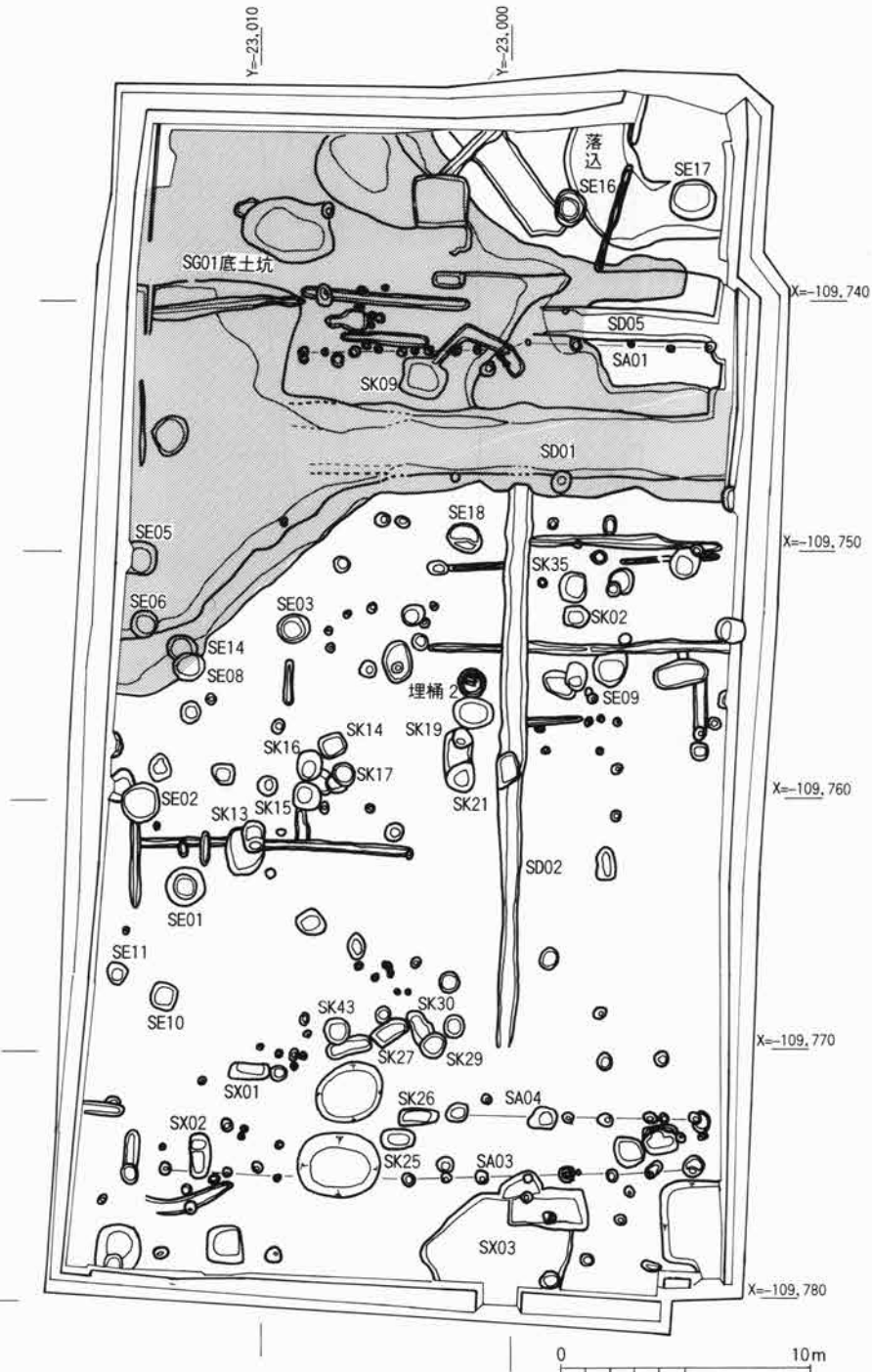
かった。この池を完掘して整地層を除去すると、再びシルト質の層となり、これを完掘すると径3cmほどの礫で作られた洲浜を検出した。洲浜は黄褐色のシルト質の地山の緩斜面に施されていた。地山の絶対高は、南部の礫がちな部分で36.9m前後、北部のシルト質の部分で37m前後である。

(2) 検出遺構

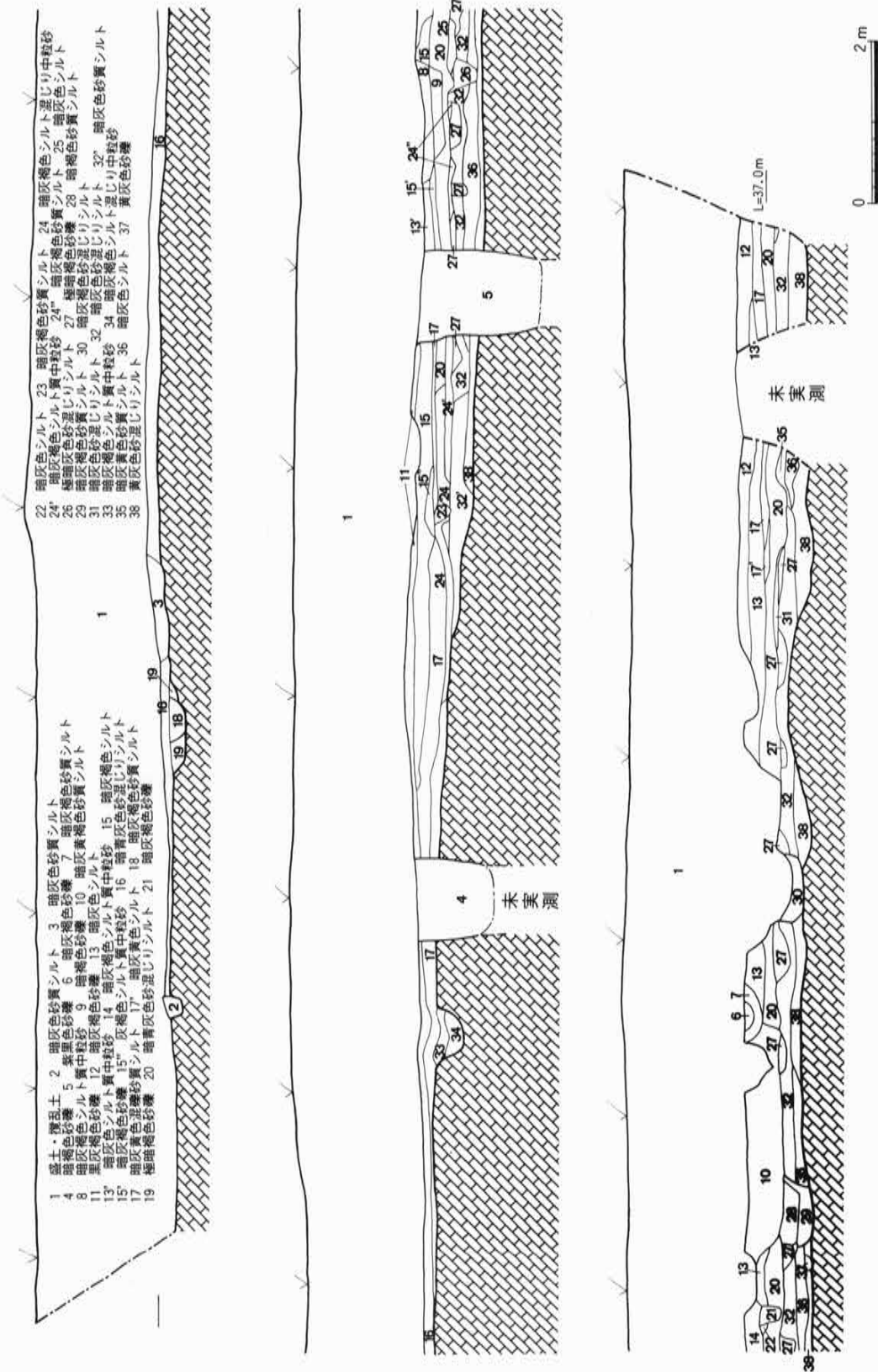
① 平安時代～鎌倉時代の遺構

平安宮南陸SD01(第53図) 礫がちな地山とシルト質の地山の境界付近に位置し、理論的な平安宮南陸の位置に

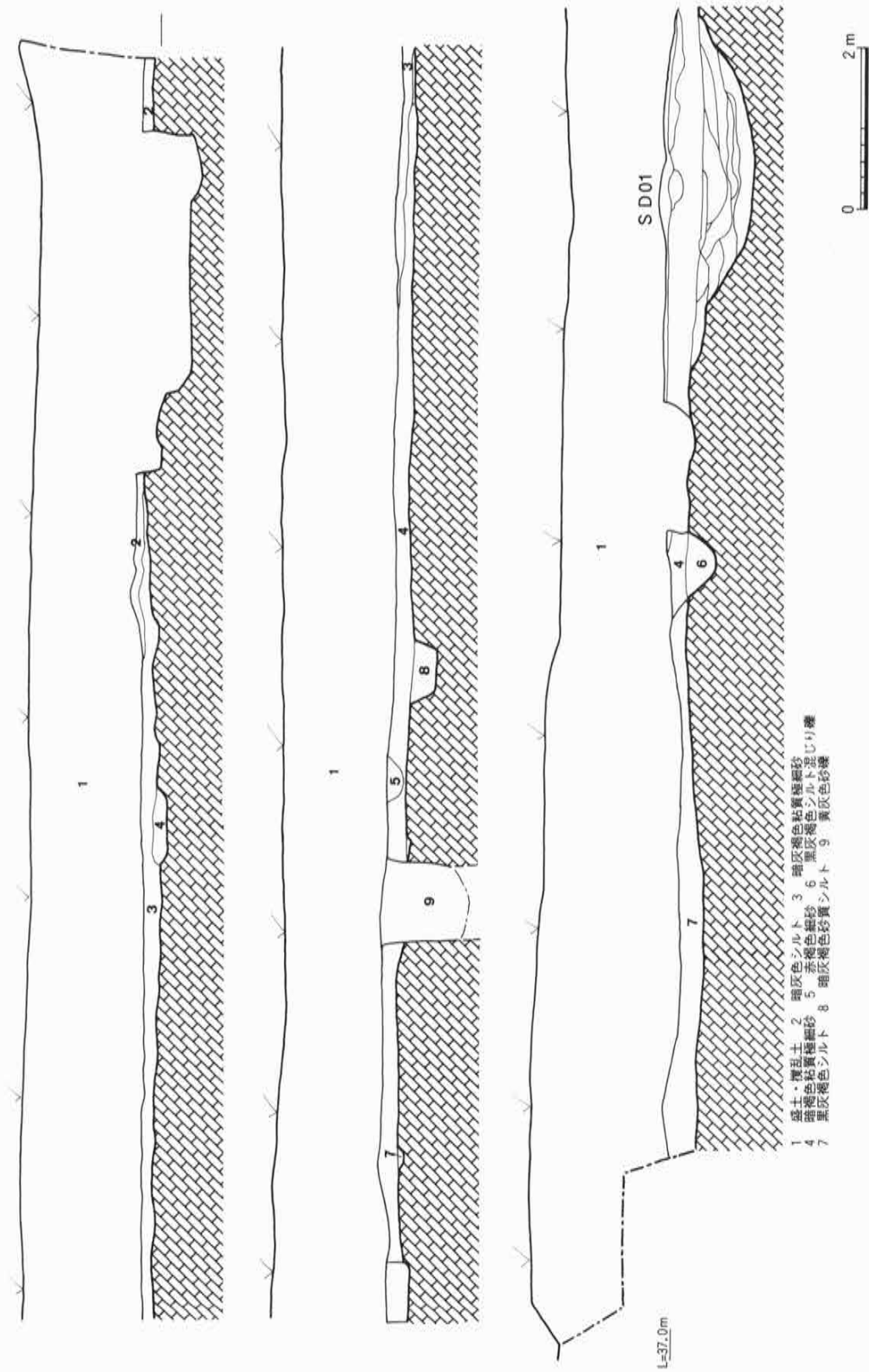
相当する場所に所在する溝である。^(注3) 検出した上面での幅3m(約10尺)、深さ0.4~0.5mを測る。断面形態は逆台形で、溝上部は大きく広がるが、中位から下位にかけてはほぼ垂直に落ちる。埋土は大きく3層に分かれ、上層は小規模な土石流、中層は暗灰褐色砂質シルト層で、当初の溝を再掘削した層である。これによって上端が10尺に拡張されている。下層は小規模な土石流層である。下層は溝壁が垂直に落ちる部分に相当し、その幅もほぼ2.4m(『延喜式』の「京程」にみる陸幅8尺に相当)^(注4)であることから当初の平安宮南陸であると考



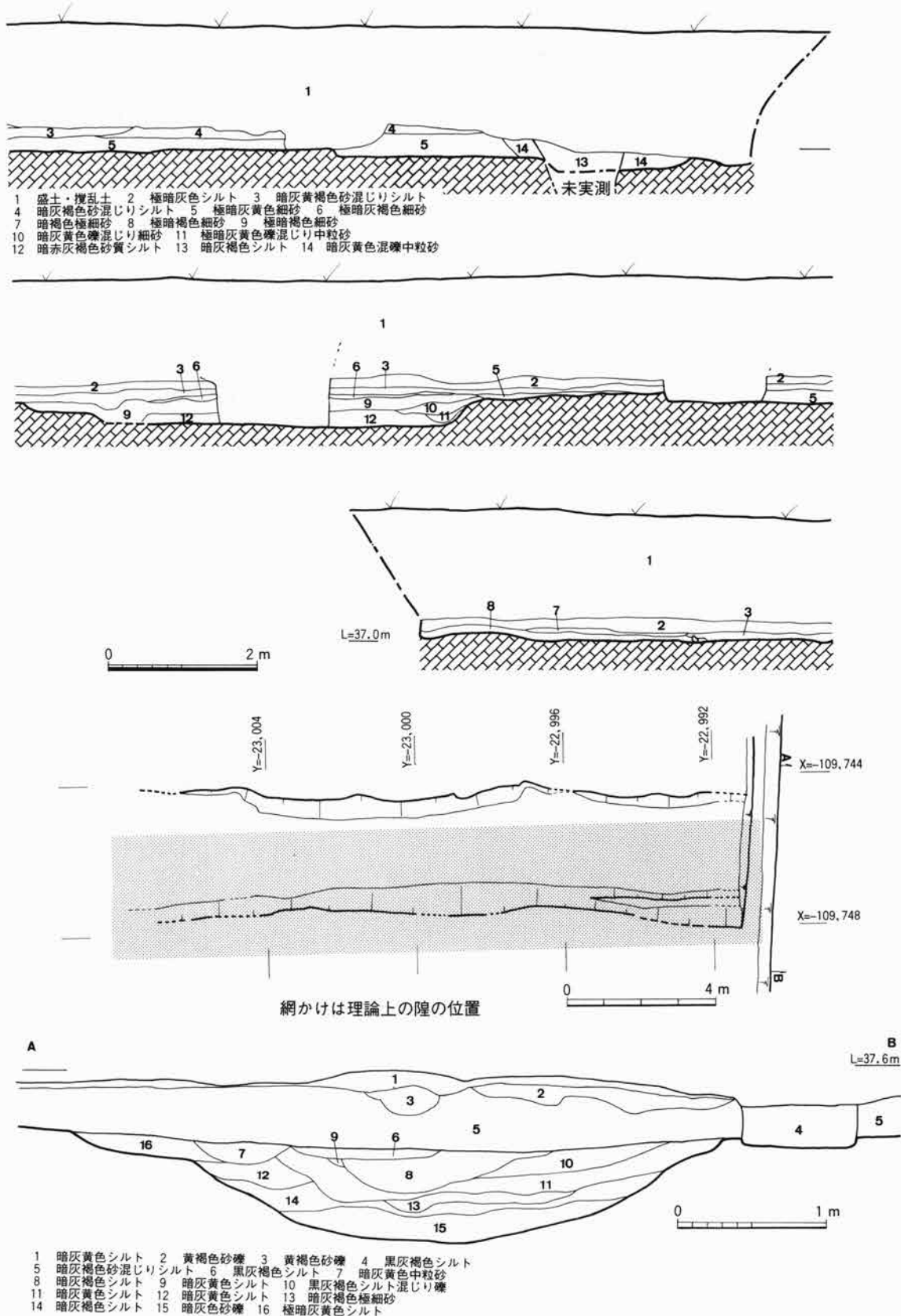
第50図 遺構配置図 (網掛けは池SG01-b)



第51図 トレンチ西壁土層断面図



第52図 トレンチ東壁土層断面図 (SD01部の土層名は第53図参照)



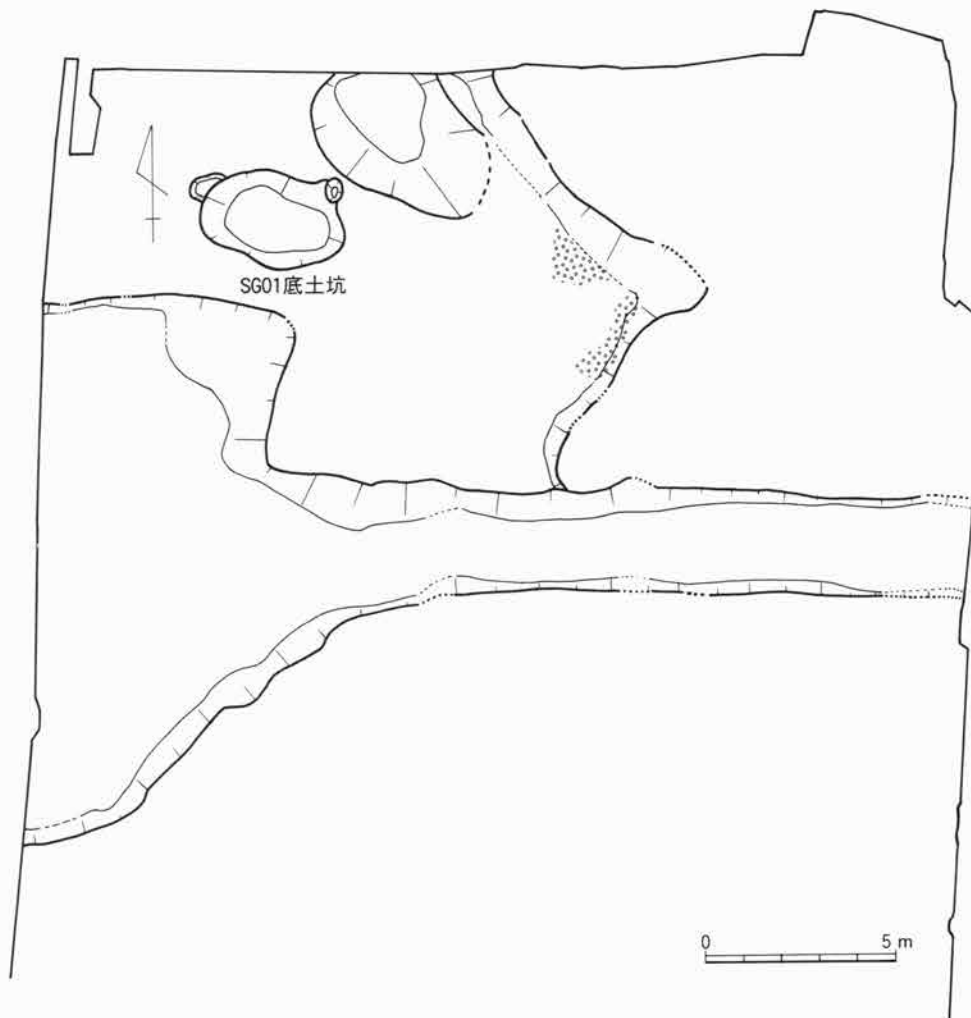
第53図 トレンチ南壁土層断面図および隕S D01平面・断面図

えられる。西側部分は後述する池状遺構に削平され、次第に浅くなり、池底にかろうじてくぼみとして残る程度になる。遺物(第81図)は平安・鎌倉時代の瓦、白磁片、土師器片が出土した。

池状遺構 S G 01-a・b(第54・55図) S G 01-aは S D 01を切り、また再利用して作られた池状の遺構である。検出した規模は南北24m、東西22mで、深さは最深部で約30cmを測る。汀線は36.8m付近となる。池は一度陸化してから再び池として再利用されていることが埋土から読みとれる。従って1時期目の池を S G 01-a、2時期目の池を S G 01-bと称することにした。池 S G 01-aの北東部は3cm大~拳大の礫で洲浜が形成されており、この上に池の埋土が覆い、その上に再度洲浜が形成されていることから、埋土に見られた池を形成した時期が2回あることと矛盾しない。^(注5)

池底は土坑状に深くなっている部分、堤状にやや高くなっている部分がある。土坑状の部分からは瓦がコンテナ6箱分出土した。下層(S G 01-a)からは、平安時代後期~鎌倉時代初頭の瓦・宋銭などが出土した。

柵 S A 01(第56図) 平安宮の塙地部分に掘られた柱列である。柱穴の掘形の直径は約30cm、深さ0.2mを測り、柱痕を残すものがある。東側は柱間が広く、西側は狭い。東側は西側よりやや



第54図 池 S G 01-a 平面図(網掛けは洲浜)

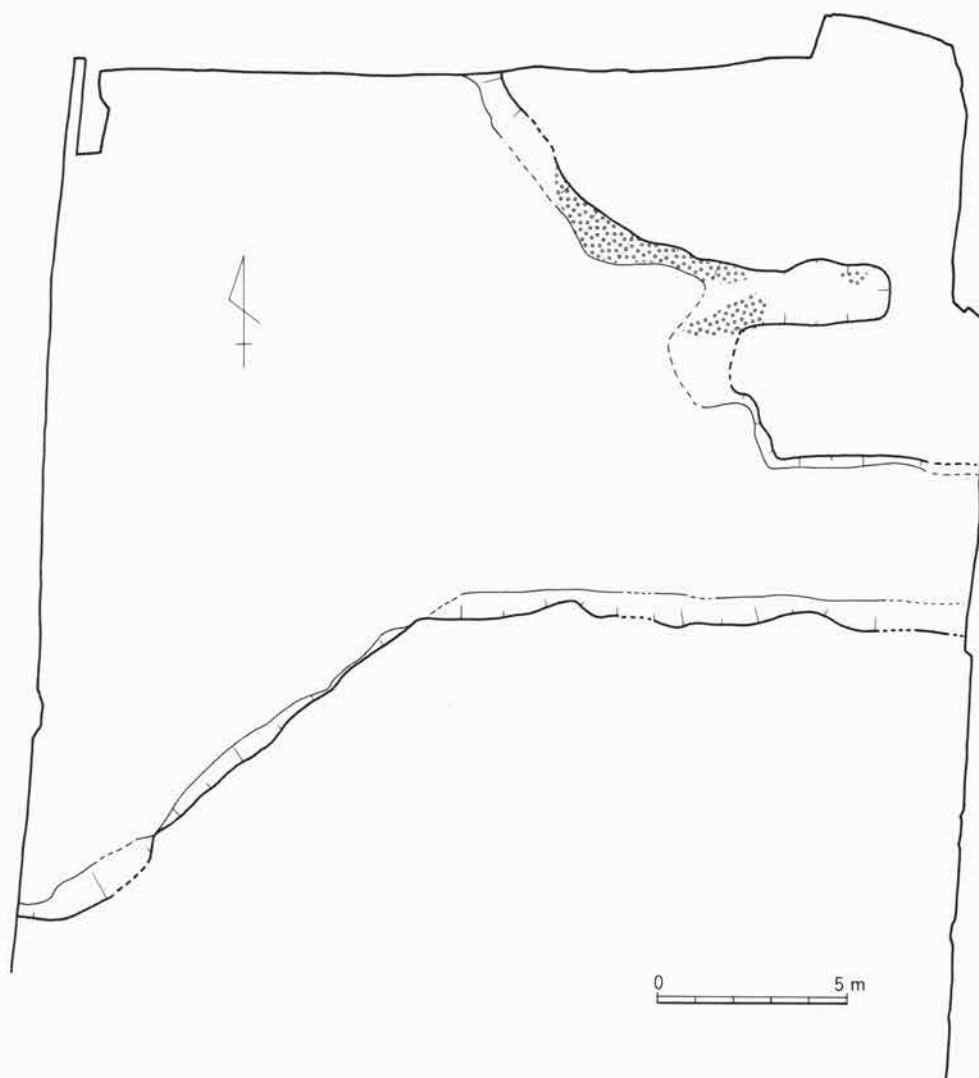
列が北にずれる。西側の端は池S G01-aに削平されて消失している。また西半が池S G01-aによって削平されており、埋土からは平安時代の瓦のみ出土したことから、平安後期以降、中世前期のある時点で築かれた柵または一本柱塀であると考えられる。この柱列は平坦で広い墾地部分を囲い込んで宅地化したものと考えられる。

柵S A03(第57・58図) トレンチ南部で柱列を検出した。二条大路の南端より約8 m北側に走る柱列である。15世紀のS X03に切られていることから、これ以前に建てられた柵であると考えられる。柱穴の掘形の直径は0.4m前後、深さ0.3m前後を測る。掘形の埋土はおおむね暗灰褐色粘質シルトであり、直径0.2m前後の柱痕跡が見られる。遺物は主に平安時代の瓦片である。

柵S A04(第57図) S A03の北側に柱列を確認した。これらも柱列S A01と同様に二条大路を囲い込んで宅地化したものと考えられる。柱穴の掘形の直径は0.3m前後・深さ0.3m前後を測る。掘形の埋土は概ね暗灰褐色シルトであり、直径0.2m前後の柱痕が見られる。

②室町時代の遺構

墓S X01(第59図) トレンチ南西で検出した西方頭位の木棺墓である。長軸1.42m、短軸0.6 m、深さ0.43mを測る。隅丸長方形の墓壇の中に木棺を納めている。木棺は土層断面にかろうじ



第55図 池S G01-b 平面図(網掛けは洲浜)

てその痕跡をとどめるのみである。最下層には拳大の礫が数個見られ、棺台として置かれた可能性がある。埋土からは縄目タタキ、布目圧痕のある瓦片や、口縁部に玉縁を持つ白磁・龍泉窯系青磁・土師皿などが出土しているが、1点信楽焼の播鉢が出土しており、この播鉢から16世紀前半の木棺墓であると考えられる。

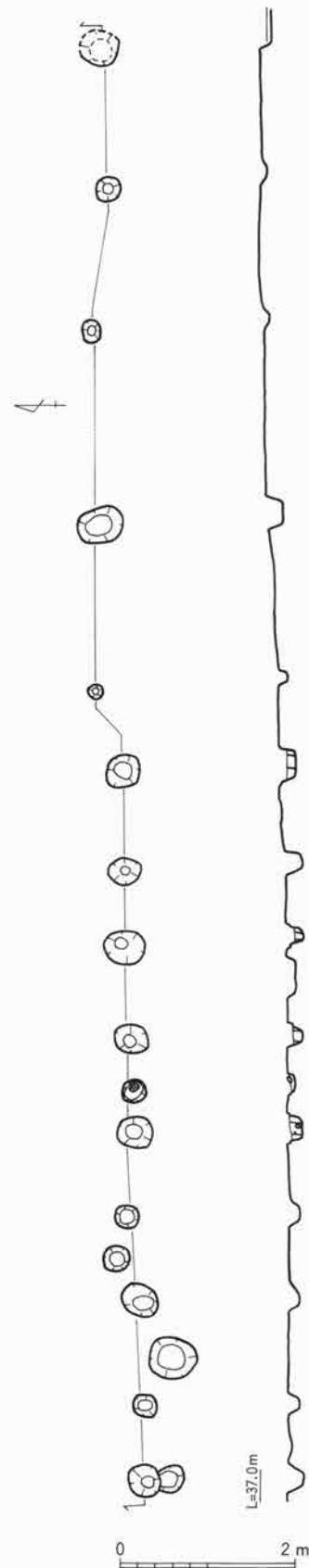
墓 S X 02(第58図) S X 01の南西で検出した北方頭位の木棺墓である。長軸1.65m、短軸0.65m、深さ0.3mを測る。隅丸長方形の墓壇の中に木棺を納めている。木棺は土層断面にかろうじてその痕跡をとどめるのみである。埋土の下層から宋銭などが出土している。

廃棄土坑 S X 03(第60・61図) トレンチの南端で検出した不整形の土坑である。東西6m、深さ0.2mを測る。床面には炭化物と人骨が混在して廃棄されているが、骨は多くの主要な部位を欠失しており、出土状況も規則性が見られないため、墓として埋葬されたものとは考えにくい。むしろ火葬に付された後、収骨した後の不要な部分を廃棄したと見るべきであろう。上層には礫・瓦等が多量に廃棄されており、この中に平安京の大学寮に伴う建物の地覆石として用いられた可能性が高い凝灰岩の破片や、石造物を作るときに出る花崗岩の剥片、青磁、土師皿、瓦質の羽釜の破片、馬か牛の歯などが含まれている。

③江戸時代の遺構

井戸 S E 01(第62図) トレンチ中央部やや西寄りで検出した井戸である。掘形の平面形は円形で、壁面に沿って石を組み上げ、さらにその内側に漆喰を厚さ5cmほど塗り付けて保護している。当調査区中最も手の込んだ作りの井戸である。掘形の直径1.47m、石組みの内径0.98m、漆喰の内径0.88mを測る。埋土は下層に大型の礫を詰めた層があり、その上層に投棄された木質の層や、崩落した漆喰の層を含みながら、暗褐色から暗灰褐色シルトの層が水平に互層となっている。上層の西寄りには一旦掘り返され、瓦や礫を投棄している土坑の痕跡が土層断面では見られる。埋土からは陶磁器類(伊万里・備前など)と棧瓦が出土した。播鉢の摺り目が隙間なく、細くなっているため、19世紀中頃、いわゆる幕末に埋め戻された井戸である。漆喰を塗っていることから野壺の可能性もある。

井戸 S E 02(第62図) S E 01の北西で検出した大型の井戸である。掘形の平面形は円形で、石組みの井戸であると思われるが、石のほとんどが崩落しており、旧態を留めてはいない。掘形の直径は1.35mを測る。暗灰色と黒灰色中粒砂の薄い層が互層となっ



第56図 櫛 S A 01実測図

ている。

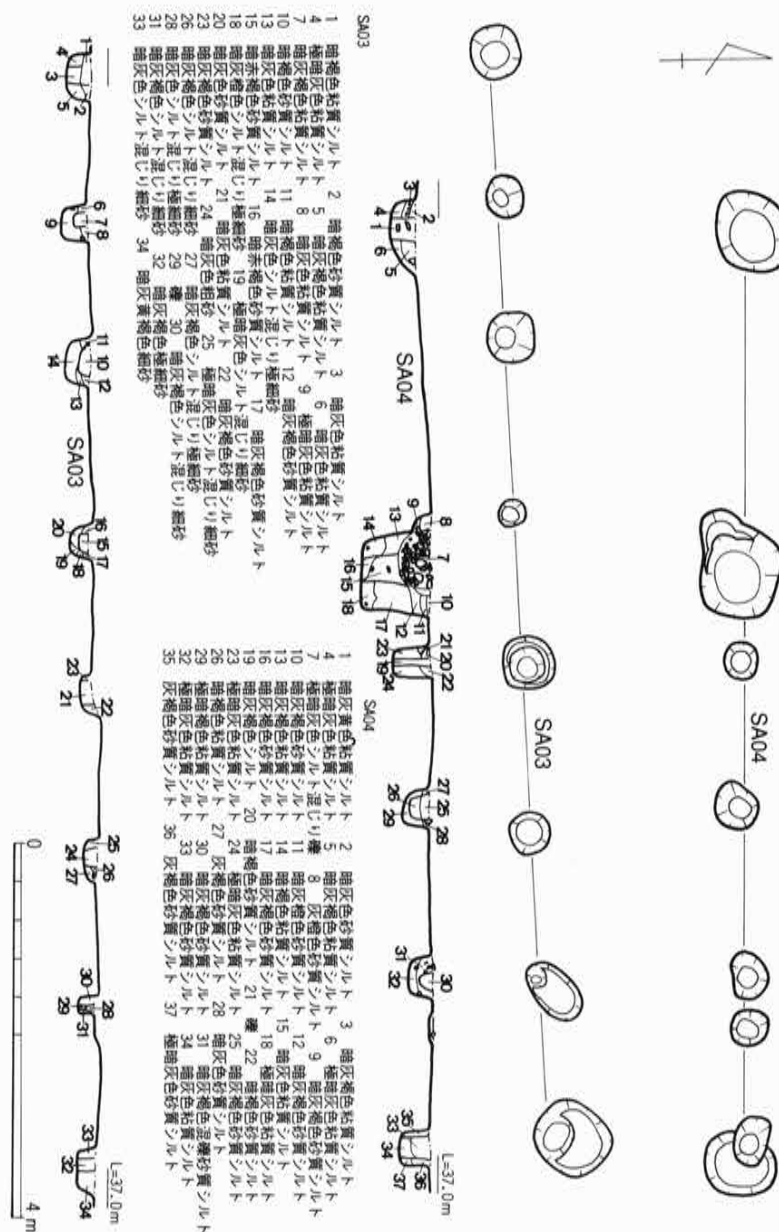
井戸 S E 03(第62図) S E 02の北東、池状遺構の付近で検出した井戸である。掘形の平面形は円形で、掘形の内側に漆喰を厚さ 4 cmほど塗って保護している。掘形の直径は1.39m、漆喰の内径は0.75mを測る。内部には椀瓦と礫、それと漆喰製の水受けが充填されており、ほとんど埋土は見られない。陶磁器片も少量ではあるが、出土している。漆喰を塗っていることから野壺の可能性もある。

井戸 S E 04 トレンチ東端、トレンチの壁面にかかって検出した素掘りの井戸である。直径 1.06mを測る。内部は直径 3 ~ 6 cmの礫が詰まっており、伊万里焼などの陶磁器と瓦が出土した。陶磁器の年代観から18世紀後半~19世紀前半に埋め戻された井戸である。

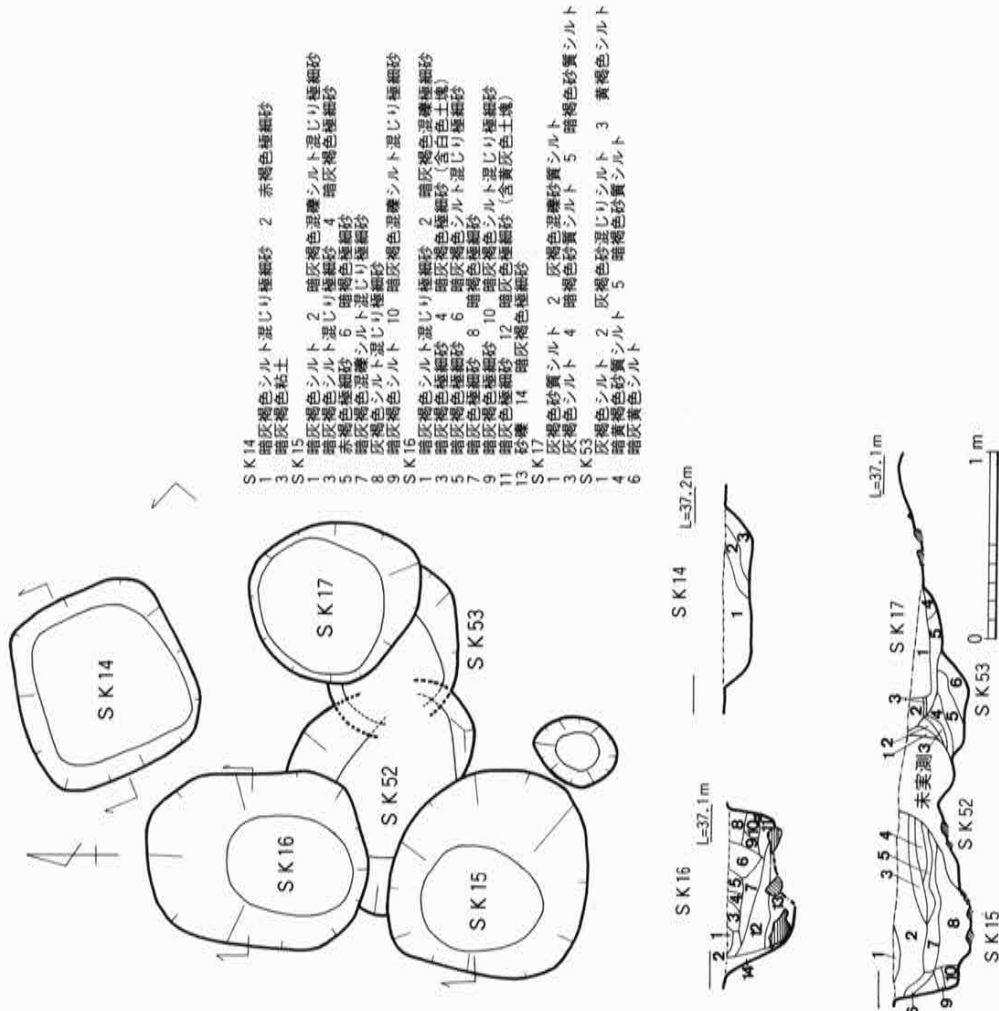
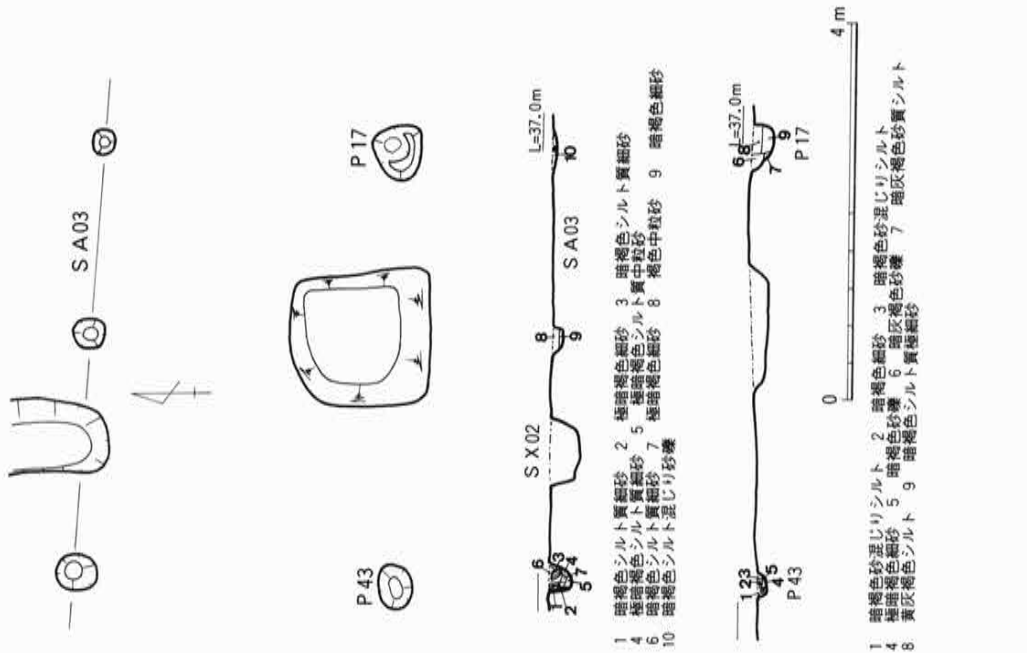
井戸 S E 05 トレンチの西端北寄りで見出した素掘りの井戸である。直径1.13mを測る。埋土は紫黒色砂礫で、陶磁器と瓦が出土した。出土した遺物からこの井戸は、17世紀後半に埋め戻された井戸である。

井戸 S E 06 S E 05の南で見出した素掘りの井戸である。直径0.9mを測る。埋土は主に暗灰褐色シルトで水平に互層をなしている。埋土から信楽焼の播鉢・瓦が出土しており、播鉢の年代観から17世紀後半に埋め戻されたと考えられる。

井戸 S E 08(第63図) トレンチの西部、後述する S E 14を掘り直した素掘りの井戸である。直径 1.04mを測る。東側の壁が崩落しており、袋状にえぐれている。埋土は灰褐色シルト、灰褐色粘土が水平に堆積している。上層には礫が多く投棄さ



第57図 柵列 S A 03・04平面・断面図

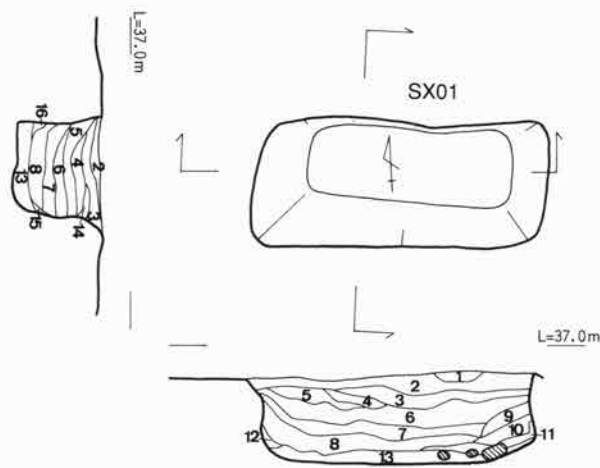


第58図 SA03および土坑SK14～17・52・53平面・断面図

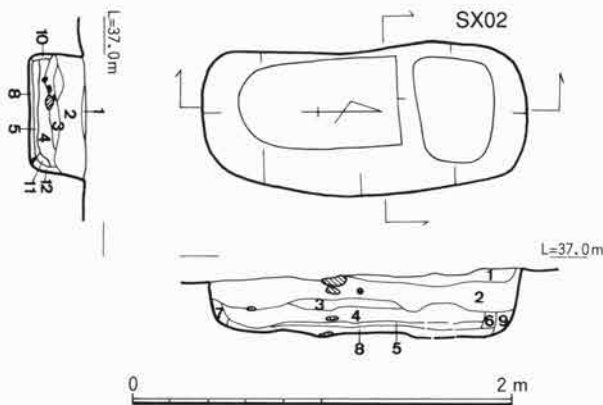
れている。埋土から遺物は出土していない。

井戸 S E 09(第62図) トレンチ東部で検出した素掘りの井戸である。直径1.2mを測る。東側の壁が崩落しており、袋状にえぐれている。下層は拳大の礫を充填しており、上部に暗灰褐色細砂が堆積している。埋土からは信楽焼の播鉢、瓦などが出土している。播鉢の年代観から17世紀前半に埋め戻されたと考えられる。

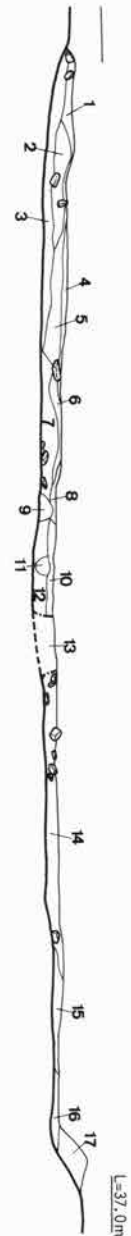
井戸 S E 10(第65図) トレンチ南西部で検出した素掘りの井戸である。平面形態は隅丸方形である。一辺0.92m、深さ0.5mを測る。当初、井戸として調査したが、土坑の可能性もある。埋土は主に暗褐色のシルト質細砂で、最下層のみ黒褐色シルト質砂礫である。埋土から伊万里焼などの陶磁器と、土師皿・瓦が出土しており、これらの年代観から17世紀後半に埋



- S X 01
 1 灰褐色細砂 2 暗灰褐色細砂 3 暗灰褐色細砂(含黄褐色土塊)
 4 灰褐色細砂 5 暗灰褐色中粒砂 6 暗灰褐色砂質シルト
 7 暗灰褐色砂混じりシルト 8 暗灰褐色シルト
 9 暗褐色中粒砂 10 暗灰褐色中粒砂 11 灰褐色シルト
 12 灰褐色シルト 13 暗褐色砂礫 14 暗灰褐色細砂
 15 灰褐色シルト 16 灰褐色シルト
- S X 02
 1 極暗灰褐色シルト質細砂 2 暗灰褐色シルト質細砂 3 極暗灰色砂礫
 4 暗黄灰色中粒砂 5 極暗灰褐色砂混じり粘土 6 極暗黄灰褐色細砂
 7 極暗灰色シルト 8 極暗灰褐色砂礫 9 暗灰色砂礫
 10 暗褐色シルト 11 暗灰褐色粘土 12 灰黒色シルト

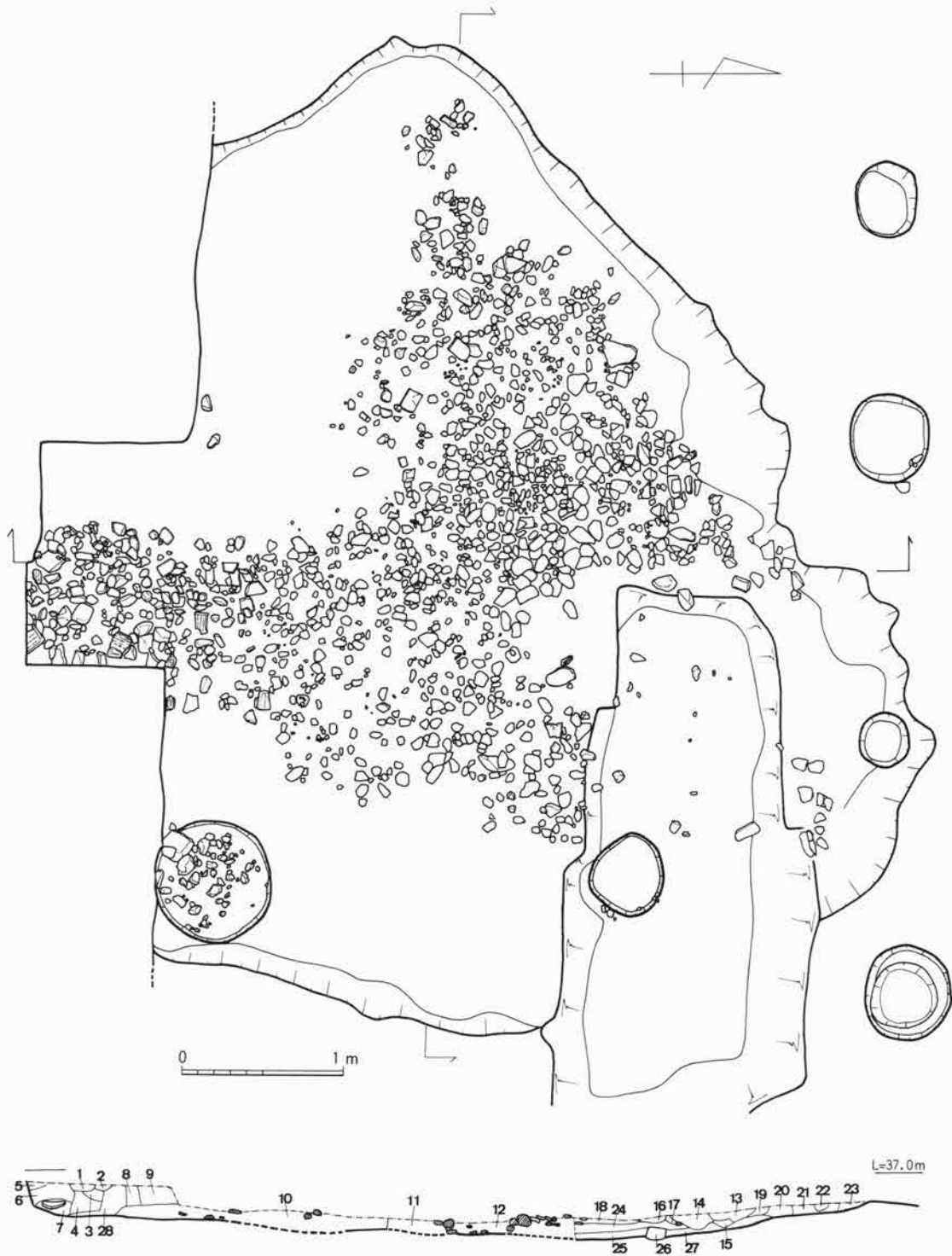


第59図 墓 S X 01・02平面・断面図



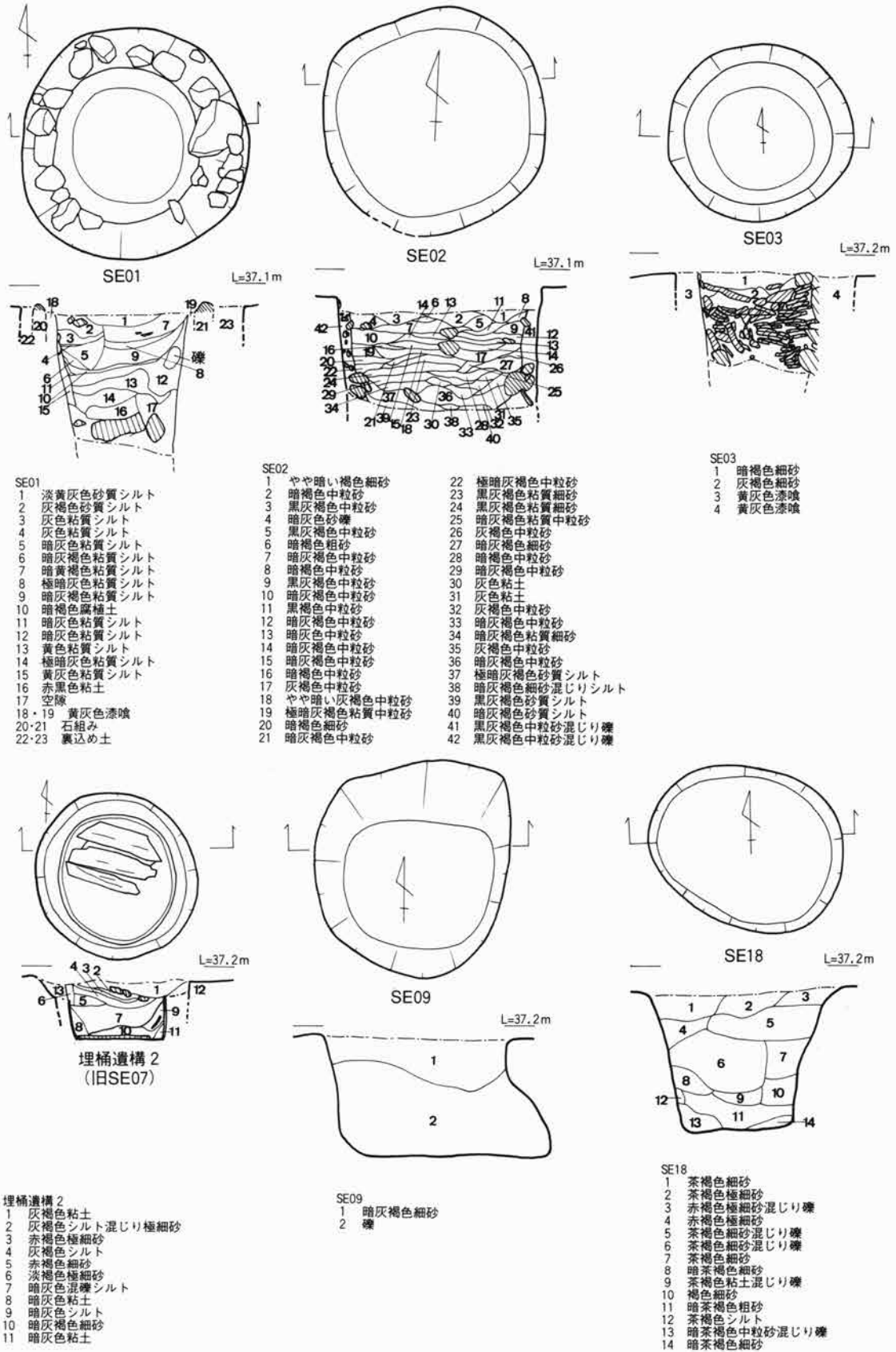
第60図 S X 03断面図

1. 暗褐色シルト
2. 暗灰色砂質粘土
3. やや暗い灰褐色砂礫
4. 暗褐色シルト
5. 暗赤灰褐色シルト
6. 暗赤灰褐色シルト
7. 暗灰褐色シルト
8. 極暗灰褐色砂質シルト
9. 暗灰色粘土ブロック
10. 暗赤灰褐色シルト
11. 暗灰色粘土ブロック
12. 暗灰褐色シルト
13. 未実測
14. 暗灰褐色シルト
15. 灰褐色砂質シルト
16. やや暗い灰色砂礫
19. 灰褐色砂質シルト



第61図 廃棄土坑S X03平面・断面図

- | | | | |
|----------------------|----------------------------|-----------------|----------------|
| 1. 暗灰褐色砂混じりシルト | 2. 暗灰褐色極細砂 | 3. 暗灰褐色砂質シルト | 4. 暗褐色砂質シルト |
| 5. 暗灰褐色シルト | 6. 暗灰褐色砂質シルト | 7. 暗灰褐色砂質シルト | 8. 橙灰褐色砂質シルト |
| 9. 橙灰褐色砂質シルト | 10. 暗赤灰褐色砂質シルト | 11. 未実測 | 12. 暗赤灰褐色砂質シルト |
| 13. 黄灰褐色シルト質極細砂 | 14. 極暗灰褐色極細砂 (含炭化物・骨片) | 15. 緑灰褐色シルト質極細砂 | |
| 16. 暗灰褐色極細砂 | 17. 極暗灰褐色砂混じりシルト (含炭化物・骨片) | 18. 暗褐色シルト質極細砂 | |
| 19. 極暗灰褐色極細砂 | 20. 暗灰褐色シルト質極細砂 | 21. 暗灰褐色砂質シルト | |
| 22. 暗灰褐色シルト質極細砂 | 23. 暗灰褐色砂質シルト | 24. 暗赤灰褐色砂質シルト | |
| 25. 暗灰褐色砂質シルト (含炭化物) | 26. 礫 | 27. 暗灰褐色砂質シルト | 28. 極暗灰褐色砂質シルト |



第62図 各井戸および埋桶遺構2平面・断面図

め戻されたと考えられる。

井戸 S E 11 S E 10の西で検出した素掘りの井戸である。直径0.9mを測る。埋土から唐津の皿・信楽の播鉢・瓦などが出土しており、17世紀前半に埋め戻されたと考えられる。

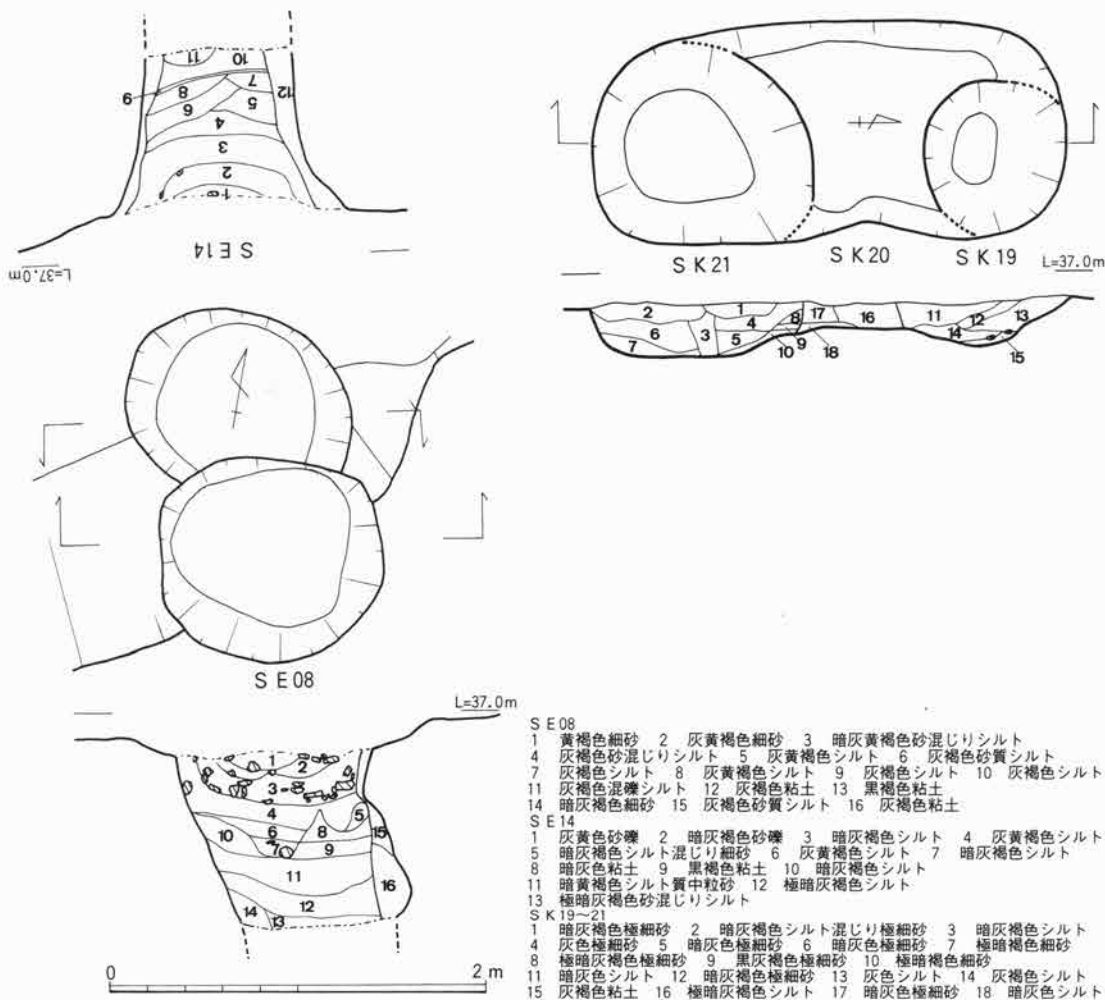
井戸 S E 12 トレンチ西端でトレンチの壁面にかかって検出した素掘りの井戸である。直径1mを測る。埋土は暗褐色砂礫である。遺物は出土しなかった。

井戸 S E 13 トレンチ南西隅で検出した素掘りの井戸である。直径1.25mを測る。埋土は灰褐色シルトである。埋土から土師皿の破片・土師質の鍋・瓦が出土している。

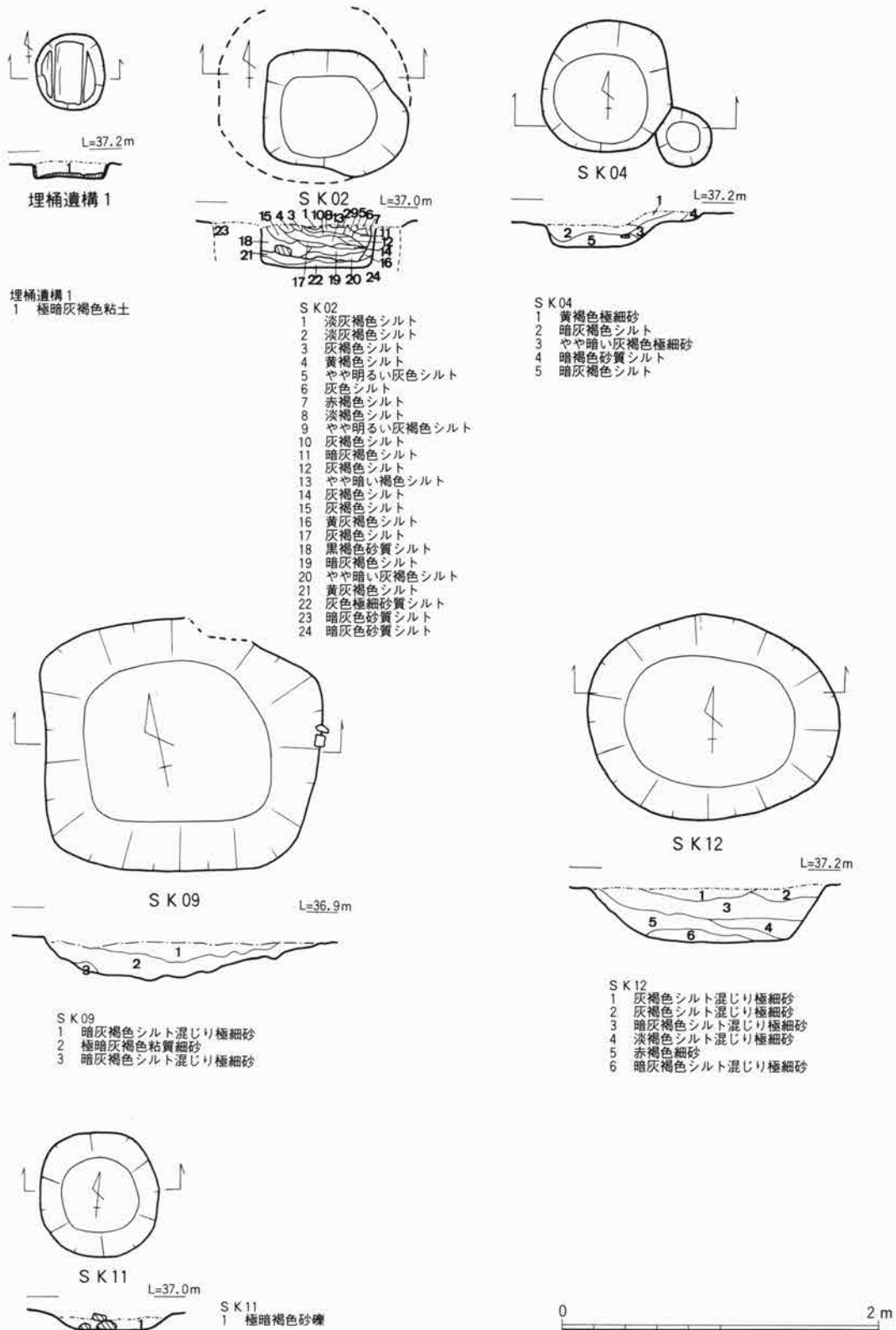
井戸 S E 14(第63図) S E 08に切られる素掘りの井戸である。直径0.9mを測る。埋土は暗褐色シルトを主体としている。出土遺物はない。

井戸 S E 15 トレンチ東部で検出した素掘りの井戸である。直径1.06mを測る。埋土は暗黄灰色シルトを主体とする。出土遺物はない。

井戸 S E 16 トレンチ北部で検出した木製の井戸枠を持つ平面円形の井戸である。掘形の直径1.36m、井戸枠の直径0.8mを測る。埋土から京焼き写しの抹茶茶碗・有田焼のなます皿・信楽焼や、美濃・瀬戸の播鉢などが出土している。これらの遺物から18世紀に埋め戻された井戸であ



第63図 井戸 S E 08・14および土坑 S K 19～21平面・断面図



第64図 埋桶遺構 1 および各土坑平面・断面図

ると考えられる。

井戸 S E 17 トレンチ北東部で検出した素掘りの井戸である。平面形は楕円形で、長軸1.82m、短軸1.5mを測る。埋土から瓦質の羽釜と瓦が出土している。

井戸 S E 18(第62図) トレンチ北部中央で検出した井戸である。当初土坑と認定し、S K 03という遺構番号を付したが、後の観察で、素掘りの井戸であることが判明した。直径1.28mを測る。埋土は砂礫を中心として、暗茶褐色細砂を含む。埋土から瀬戸・美濃の天目椀が出土している。

埋桶遺構 1(旧 S K 01、第64図) トレンチ北部東寄りで検出した桶を埋納した土坑である。平面形は円形で、掘形の直径は0.46m、検出面からの深さ0.1mを測る。桶の内径は0.44mを測る。上部の大半はすでに削平されている。埋土から遺物は出土しなかった。

埋桶遺構 2(旧 S E 07、第62図) トレンチの中央部で検出した桶を埋納した土坑である。平面形は円形で、掘形の直径は0.87m、桶の直径は0.63mを測る。桶の内部は暗灰色シルトが堆積しており、掘形は暗灰褐色粘土を充填している。埋土からは遺物は出土していない。以上、2つの埋桶遺構は便槽の可能性が考えられている^(注6)。

土坑 S K 02(第64図) S K 01の南で検出した平面円形の土坑である。素掘りの土坑を一旦埋め戻し、再び掘削してその内側に黄灰褐色シルトを貼って保護している。掘形の直径1.19m、土坑の内径0.72m、深さ0.26mを測る。埋土は灰褐色シルトを中心とした薄い層が数多く堆積している。埋土から遺物は出土していない。

土坑 S K 04(第64図) S E 18の南で検出した平面円形の浅い土坑である。直径0.99m・深さ23cmを測る。埋土は主に暗灰褐色シルトである。埋土から土師質の小型壺が出土している。

土坑 S K 05 トレンチ北部東側、平安宮南隍の南端を切る平面円形の土坑である。埋土は暗黄灰色シルトの単層で、遺物は出土していない。

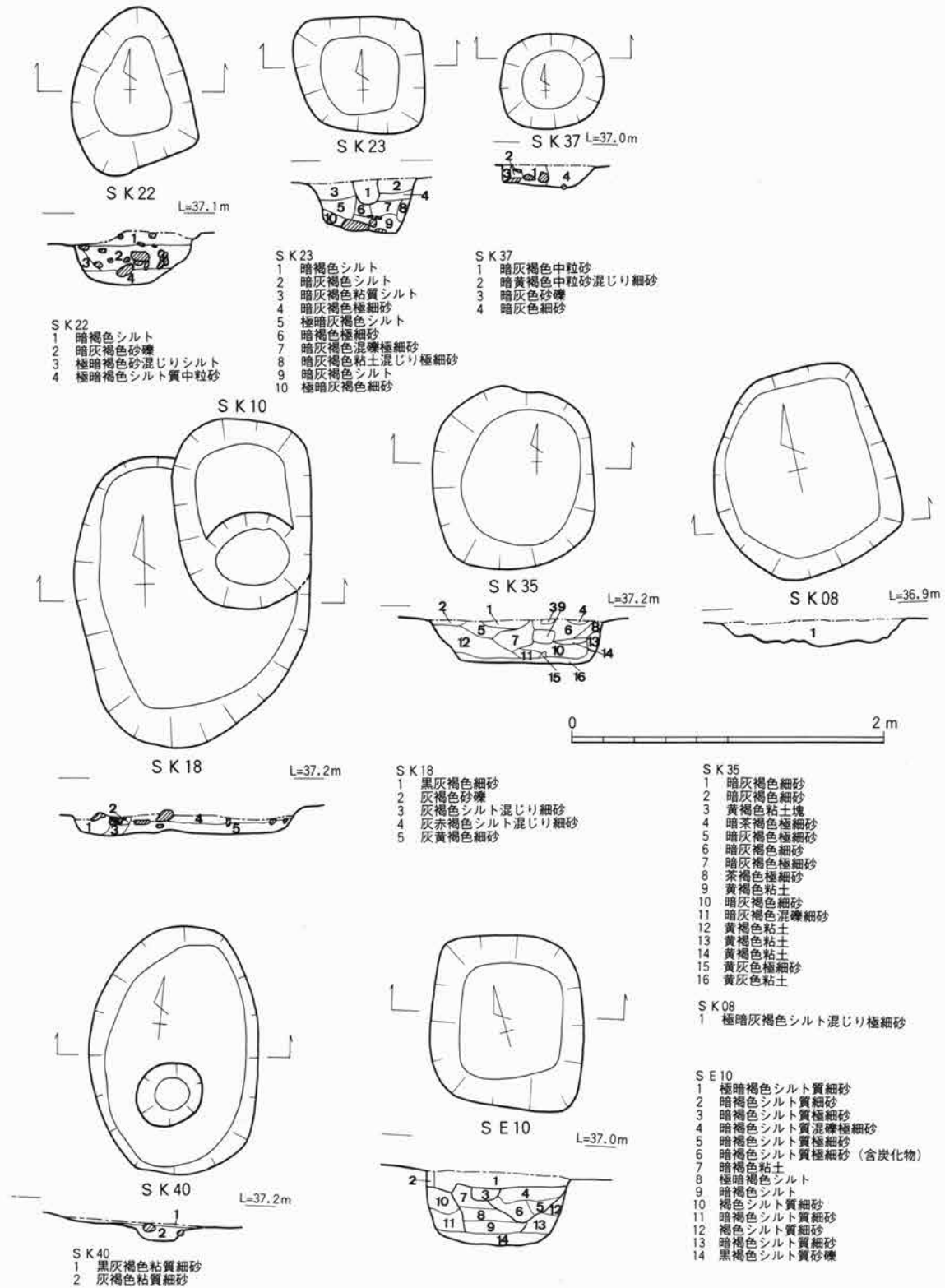
土坑 S K 06 トレンチ東端で検出した方形の土坑である。東側はトレンチ外にのびるため、東西の規模は不明である。南北は0.4m、深さ0.16mを測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトの単層である。埋土からは出土遺物はない。

土坑 S K 07 トレンチ中央部、後述する S D 02を切る長方形の土坑である。長辺1m、短辺0.6m・深さ0.19mを測る。埋土は主に暗灰褐色シルトである。埋土から土師質の鍋・伊万里焼片が出土している。

土坑 S K 08(第65図) トレンチ北部、平安宮南隍を切る平面円形の土坑である。直径1.18m、深さ0.17mを測る。埋土は極暗灰褐色シルト混じり極細砂の単層である。埋土から伊万里焼、青磁、瀬戸・美濃の天目椀、丹波焼、土師皿片のほか、混入の平安時代の瓦が出土している。

土坑 S K 09(第64図) トレンチ北部、平安宮南隍の北に位置する平面五角形の土坑である。東西1.72m、深さ0.27mを測る。埋土は上層が暗灰褐色シルト混じり極細砂で、下層が極暗灰褐色粘質細砂の2層からなる。埋土から伊万里焼の蛸唐草・松竹梅文の瓶、外面に梅花文の筒型椀、異体字文の椀、見込みに五弁花の筒型椀、櫛高台を模倣した椀、見込みに竹文、高台内部に渦福文の筒型椀、京焼き写しの椀、瀬戸・美濃の徳利、土師皿、土師質の人形片、棧瓦のほか、混入の平安時代の瓦が出土している。これらから18世紀の土坑であると考えられる。

土坑 S K 10(第65図) トレンチ中央西寄りで、S K 18を切る長方形の土坑である。長辺1.2m・短辺0.9mを測る。埋土から伊万里焼の陶磁器と、瓦が出土している。



第65図 各土坑平面・断面図

土坑 S K 11(第64図) トレンチ北部西寄りで検出した円形の土坑である。直径0.7m・深さ0.11mを測る。埋土は極暗褐色砂礫で、拳大の礫を多く含む。埋土からは土師皿片と混入の平安時代の瓦が出土している。

土坑 S K 12(第64図) トレンチ中央部で検出した楕円形の土坑である。直径1.49m・深さ0.33mを測る。埋桶遺構 2 に切られる。備前焼の播鉢の他、混入の平安時代の瓦が出土している。

土坑 S K 13 トレンチ北部で検出した隅丸方形の土坑である。

土坑 S K 14(第58図) トレンチ中央部西寄りで検出した隅丸方形の土坑である。一辺0.96m、深さ0.14mを測る。

土坑 S K 15(第58図) トレンチ中央部西寄りで検出した円形の土坑である。直径1.04m・深さ0.2mを測る。S K 52を切っている。須恵器片が出土している。

土坑 S K 16(第58図) トレンチ中央部西寄りで検出した不整円形の土坑である。直径0.9m・深さ0.35mを測る。最下層から土師質の羽釜が出土した。土坑の時期は15～16世紀である。S K 52を切っている。

土坑 S K 17(第58図) トレンチ中央部西寄りで検出した円形の土坑である。直径0.74m・深さ0.14mを測る。

土坑 S K 18(第65図) トレンチ中央部西寄りで検出した隅丸方形の土坑である。東西幅1.45m・深さ0.18mを測る。混入の平安時代の瓦が出土している。

土坑 S K 19～S K 21(第63図) トレンチ中央部で検出した円形の土坑である。S K 19～S K 21は切り合っており、S K 20をS K 19と、S K 21が切っている。S K 19は直径0.92m・深さ0.23mを測る。S K 20は深さ0.14mを測る。S K 21は直径1.13mを測る。

土坑 S K 22(第65図) トレンチ中央部西寄りで検出した円形の土坑である。直径0.8m・深さ0.34mを測る。瓦質の羽釜、信楽焼の播鉢、瀬戸・美濃の天目椀、土師質の鍋などの他、混入の平安時代の瓦が出土している。

土坑 S K 23(第65図) トレンチ中央部で西寄りで検出した隅丸方形の土坑である。一辺0.7m・深さ0.34mを測る。土坑の底に扁平な石が置かれていた。信楽焼の播鉢の他、混入の平安時代の瓦が出土している。

土坑 S K 25(第66図) トレンチ南部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸1.3m・深さ0.39mを測る。土壙墓の可能性はある。

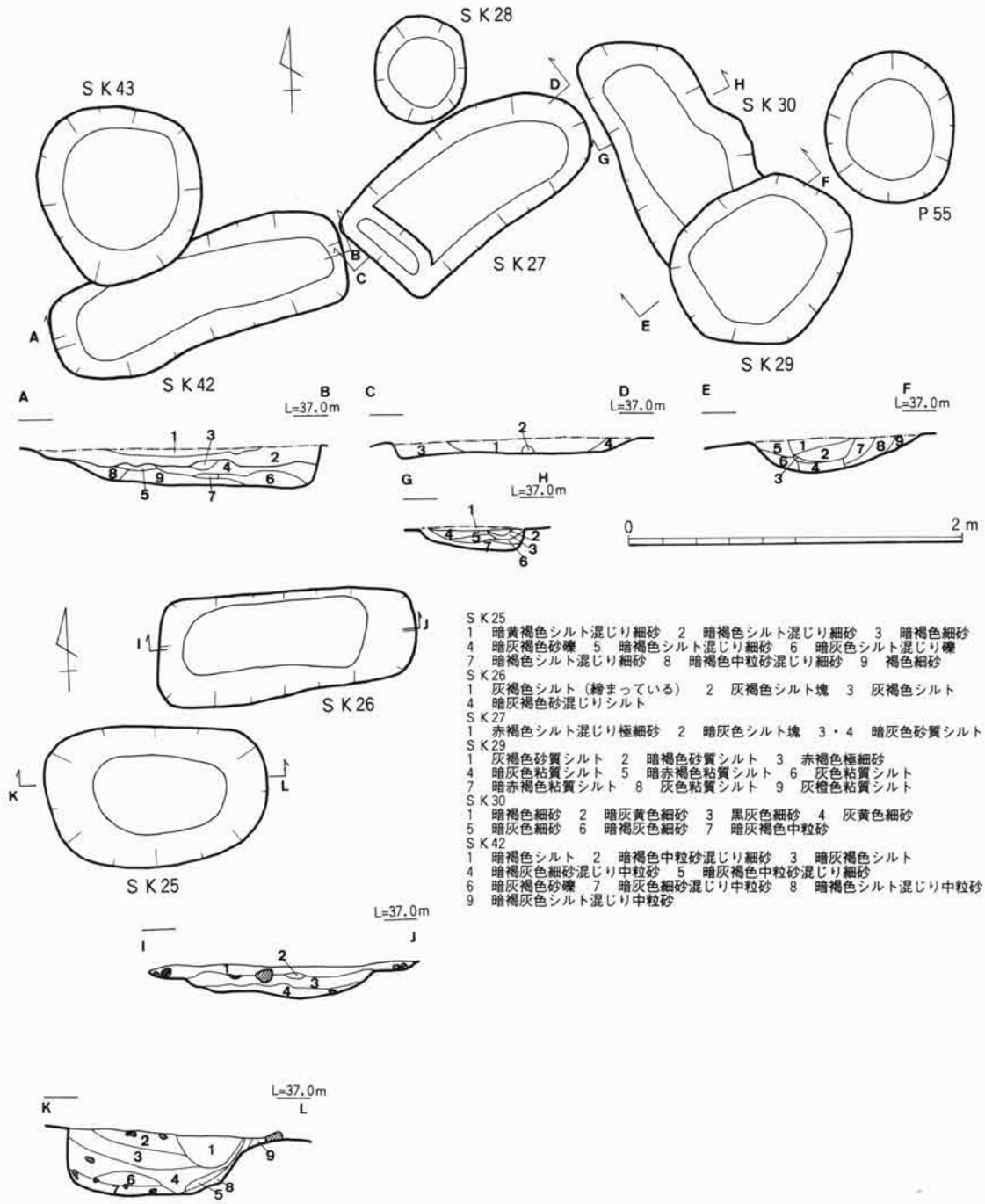
土坑 S K 26(第66図) トレンチ南部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸1.7m・深さ0.2mを測る。土壙墓の可能性はある。

土坑 S K 27(第66図) トレンチ南部で検出した隅丸方形の土坑である。長軸1.46m・深さ0.1mを測る。産地不明の陶器、土師皿片が出土している。

土坑 S K 29(第66図) トレンチ南部で検出した楕円形土坑である。長軸1.16m・深さ0.2mを測る。白磁片、三彩もしくは二彩片、土師質の鍋が出土している。

土坑 S K 30(第66図) トレンチ中央部南寄りで検出した円形の土坑である。直径0.63m・深さ0.12mを測る。S K 29に切られる。

土坑 S K 33 トレンチ中央部東寄りで検出した楕円形の土坑である。東西幅0.49m・深さ0.22mを測る。



第66図 各土坑平面・断面図

土坑 S K 34 トレンチの西寄りで検出した不整形の土坑である。長軸2.17m・短軸1.01m・深さ8cmを測る。

土坑 S K 35(第65図) トレンチの北西寄りで検出した円形の土坑である。直径1.1m・深さ0.26mを測る。

土坑 S K 37(第65図) S X 01の東に隣接した円形の土坑で、直径0.6m・深さ0.14mを測る。平安時代の瓦が出土している。

土坑 S K 40(第65図) トレンチ中央部で検出した楕円形の土坑である。東西幅0.92m・深さ最大0.11mを測る。土坑の中心部は一段深く掘り下げている。京焼き写しの皿(高台内部に刻印有り)、伊万里焼の椀、現川の椀、赤絵の椀が出土している。

土坑 S K 41 トレンチ北西部、S G 01が陸化した後に掘削された土坑である。平面形は円形で、直径1.4mを測る。瀬戸・美濃の天目碗と志野の皿が出土している。時期は17世紀前半と考えられる。

土坑 S K 42(第66図) トレンチ中央部南寄りで検出した隅丸長方形の土坑である。長軸1.7m、深さ0.25mを測る。

土坑 S K 44 トレンチ西壁にかかる円形土坑である。直径1.5mを測る。土師皿片のほか、混入の平安時代の瓦が出土している。

土坑 S K 45 S K 44に切られる楕円形土坑である。長軸1.1mを測る。混入の平安時代の瓦が出土している。

土坑 S K 52(第58図) S K 15・16に切られる不整形の土坑である。またS K 53とも切り合い関係を持つが、前後関係は不明である。直径はおよそ1.16m・深さ0.3mを測る。

土坑 S K 53(第58図) S K 17に切られる楕円形の土坑である。またS K 52とも切り合い関係を持つが、前後関係は不明である。直径はおよそ0.92m、深さ0.3mを測る。

溝 S D 02 トレンチ中央部を南流する溝である。幅0.81m、深さ0.24mを測る。下層は灰褐色極細砂が堆積し、上層は暗灰褐色シルト混じった極細砂が堆積し、ここから多量の陶磁器(第83図)と、混入の平安時代の瓦が出土した。これらの遺物から17世紀前半に埋め戻された溝であると考えられる。

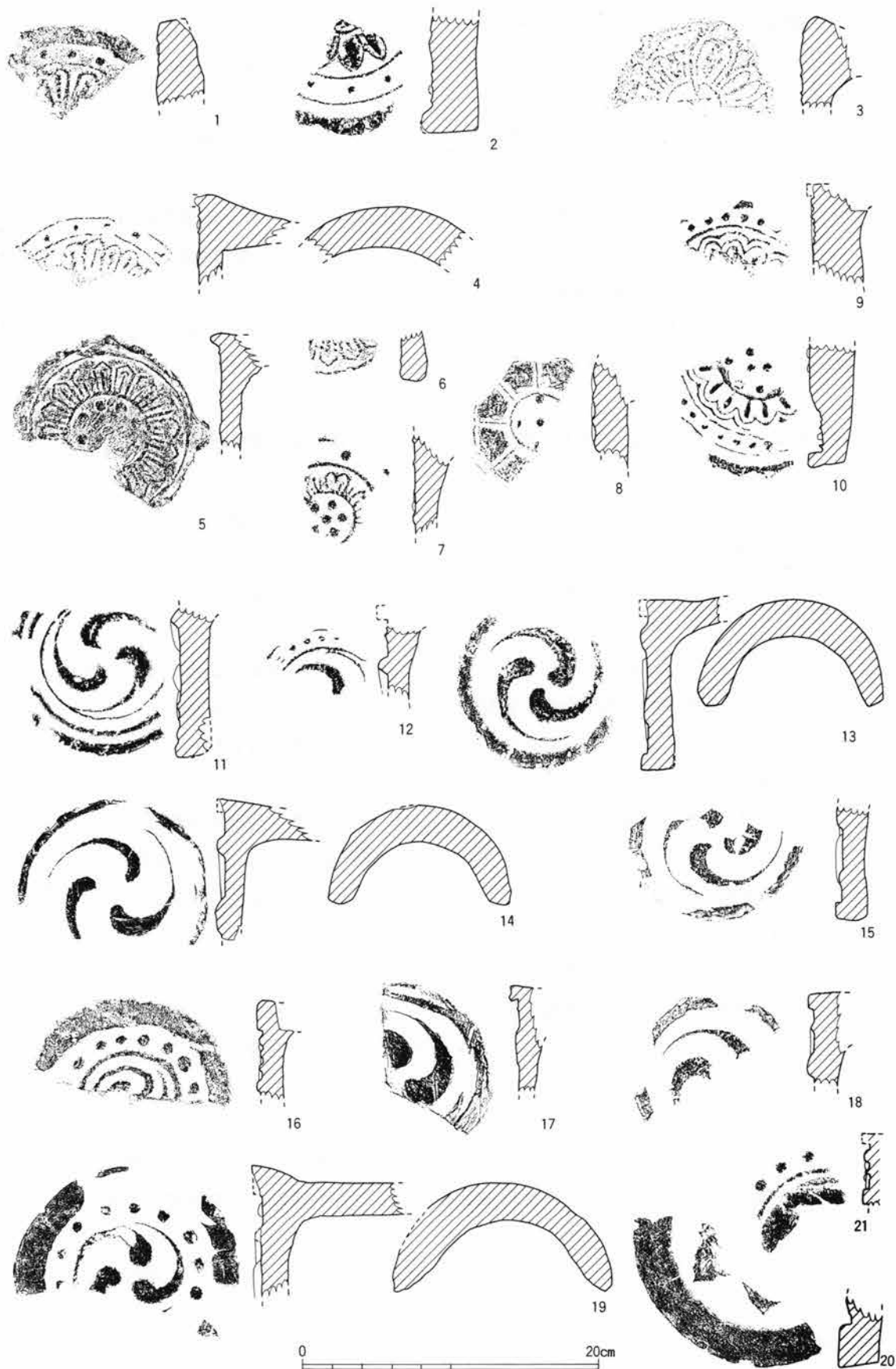
溝 S D 05 トレンチ北部を西流する溝である。幅1.05m、深さ0.5mを測る。この溝は、平安時代～近世の遺構検出面の上部に堆積した、遺物包含層の上部で検出した上層遺構の一つである。上層遺構は東西方向の溝が中心であるが、紙幅の都合で、今回は割愛した。

(3)出土遺物

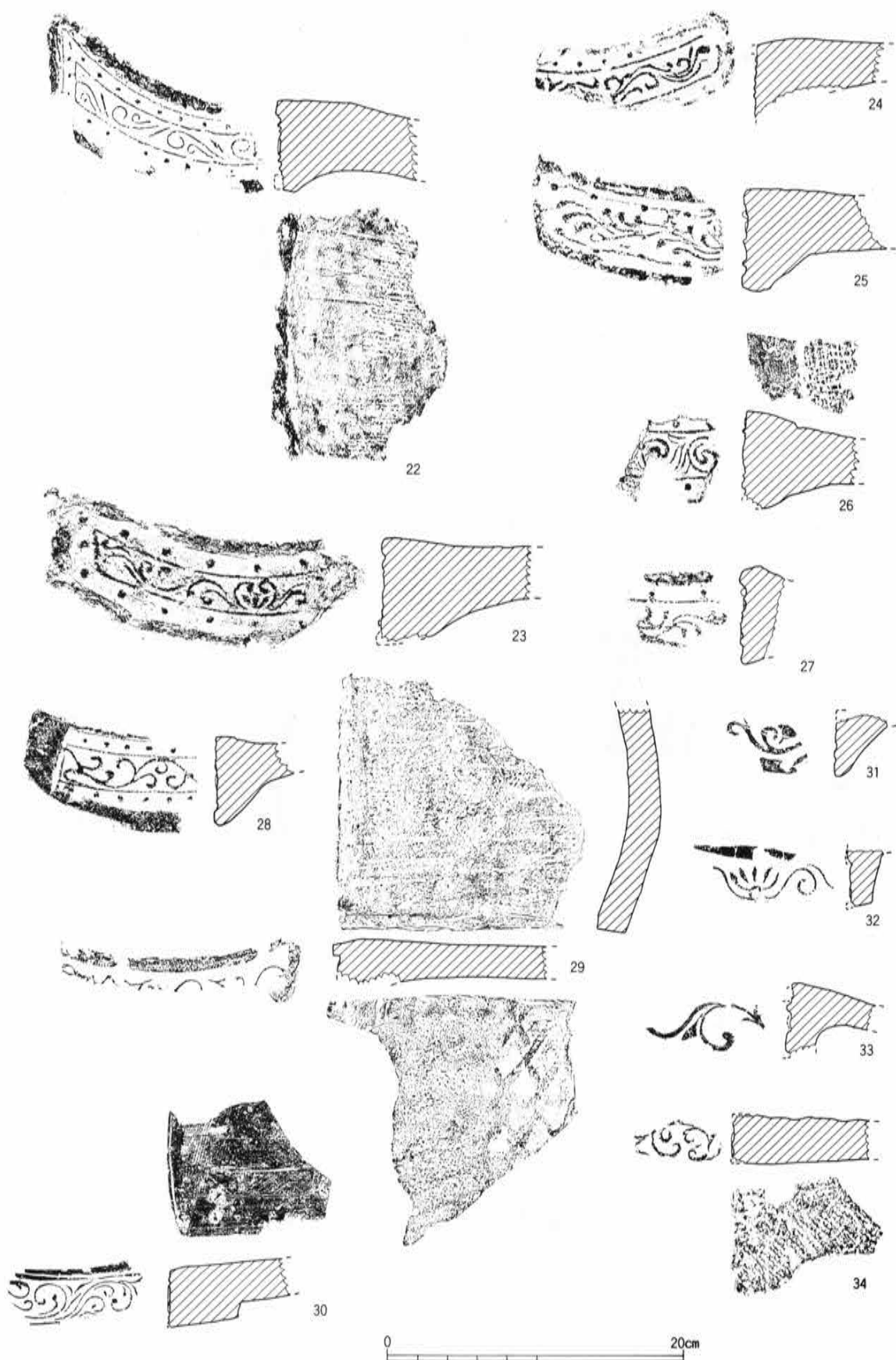
①瓦類

平安時代の遺物のほとんどが瓦である。ここでは軒丸瓦・軒平瓦とS G 01から出土した丸瓦・平瓦について概要を報告する。また近世以降からの出土遺物のほとんどが陶磁器である。このうち比較的時期のまとまりのあるものを報告する。

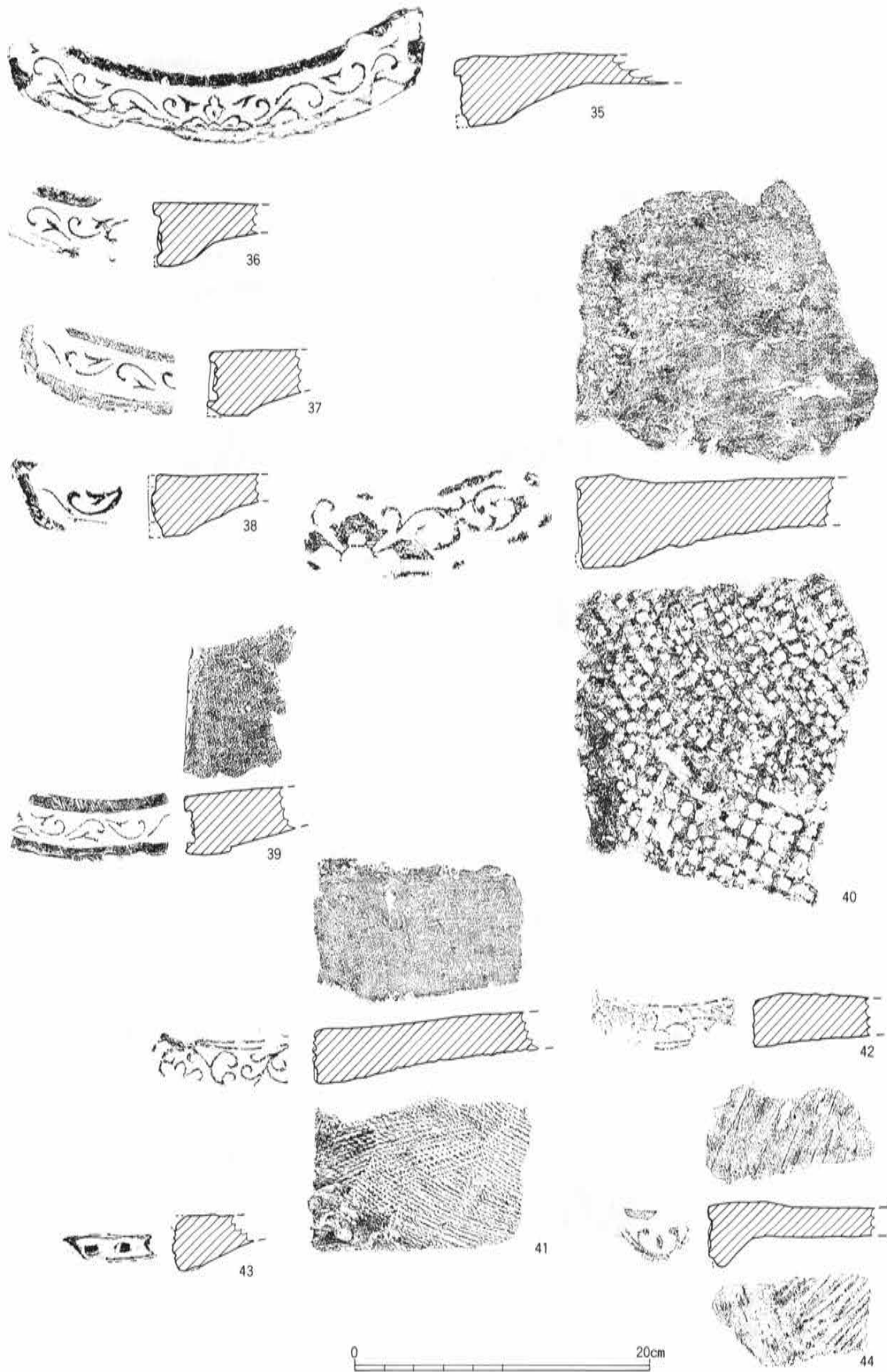
軒丸瓦(第67図) トレンチの北部の遺構内、包含層、南部のS X 03などから第67図に示したような軒丸瓦が出土している。12はS G 01底土坑から、7・14・15・18はS G 01底から、3はS G 01最下層から、2・13はS G 01下層から、19はS G 01上層から、9はS G 01埋土から、8はS X 03から出土した。蓮華文軒丸瓦では、1・2・4が平安前期の所産である。1は岸部瓦窯または



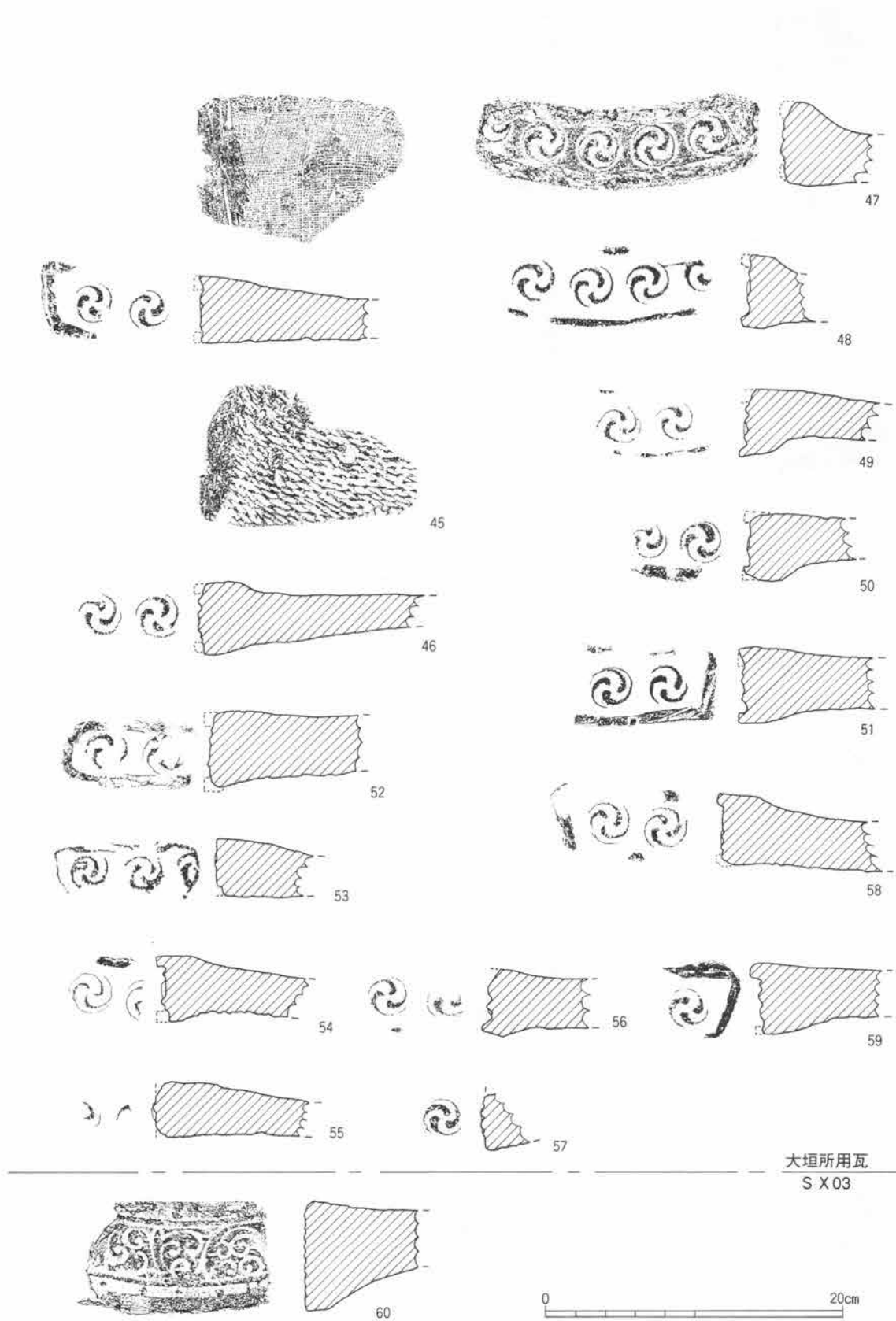
第67図 軒丸瓦実測図



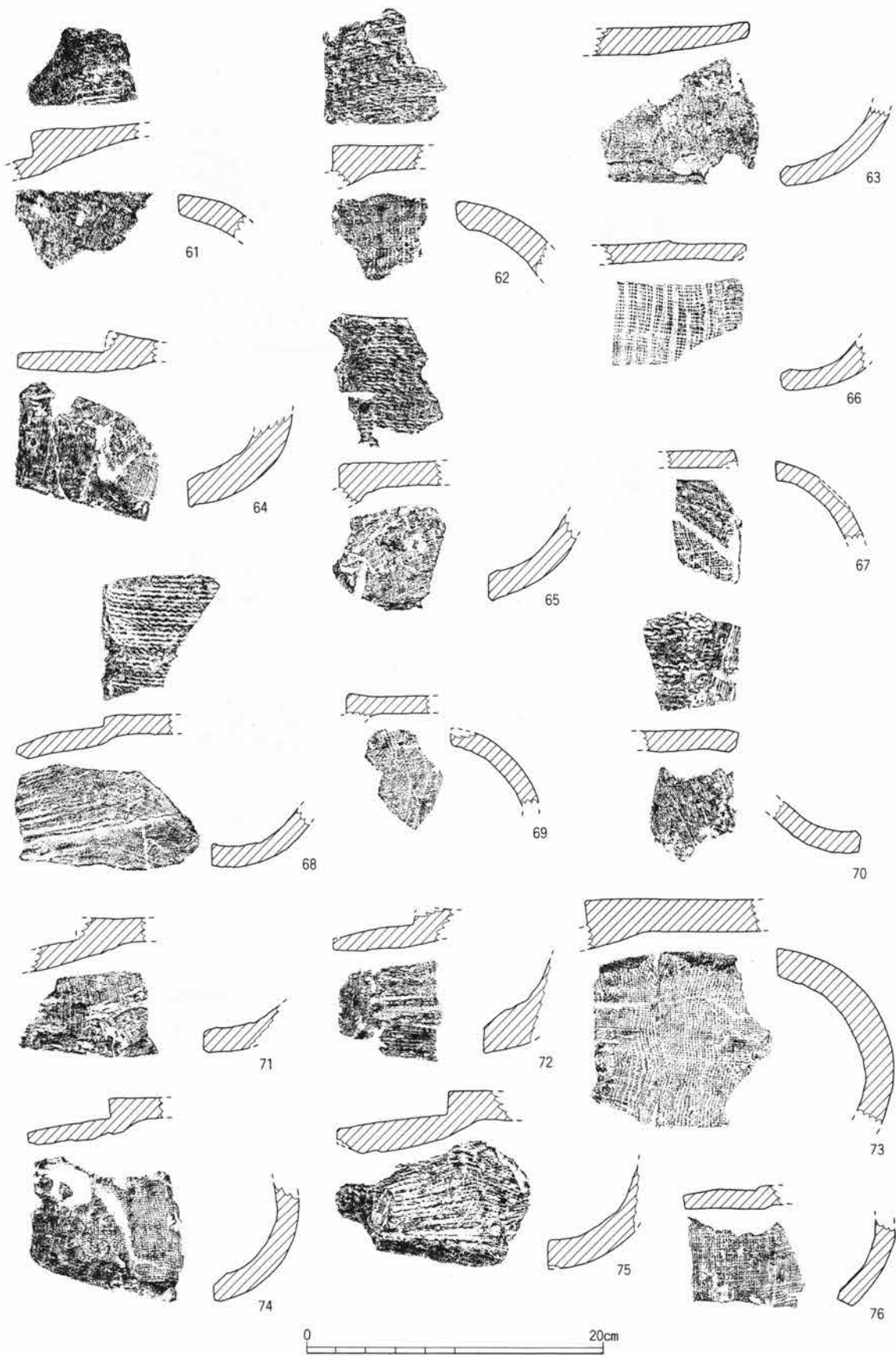
第68図 軒平瓦実測図 (1)



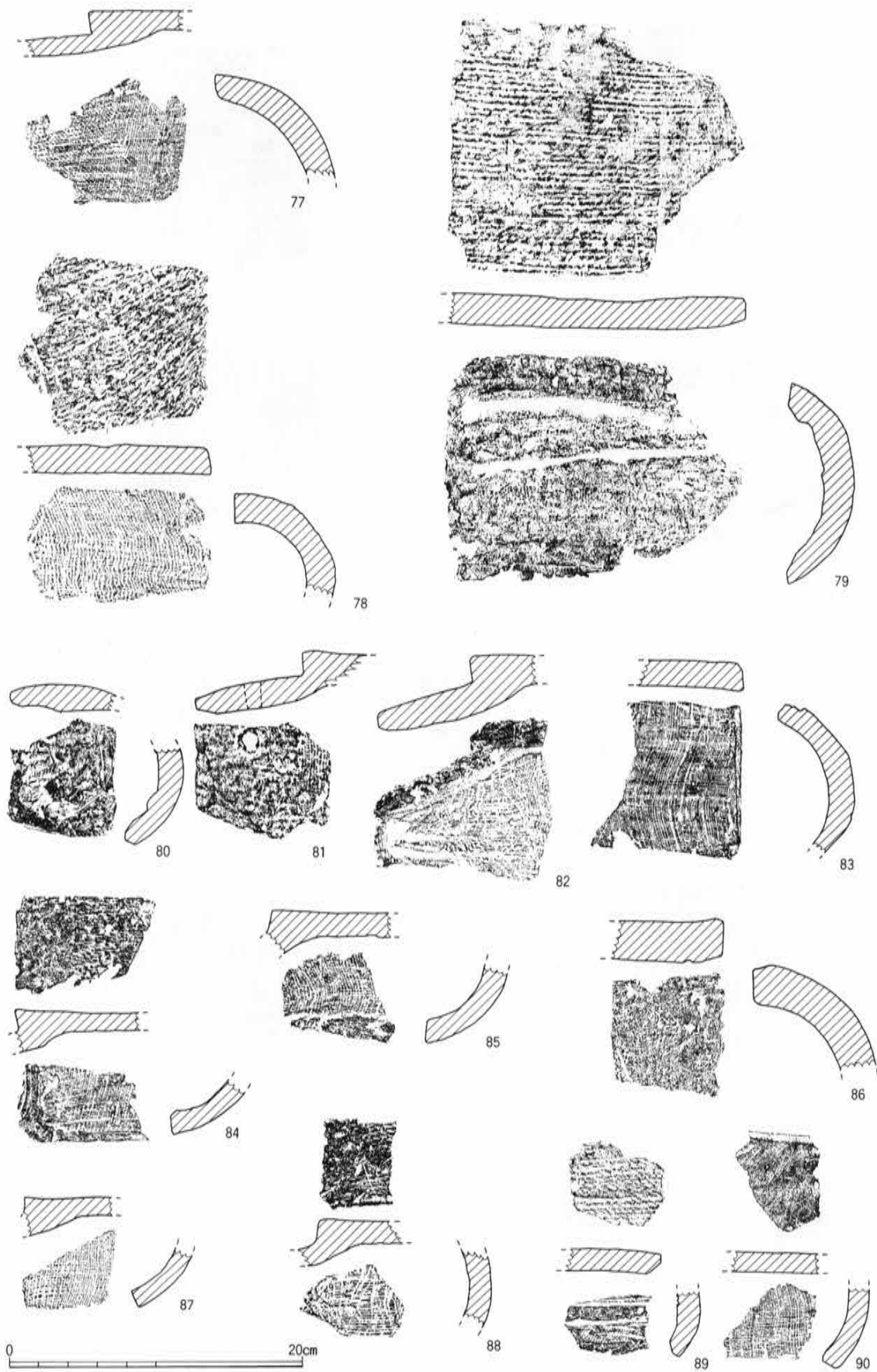
第69図 軒平瓦実測図(2)



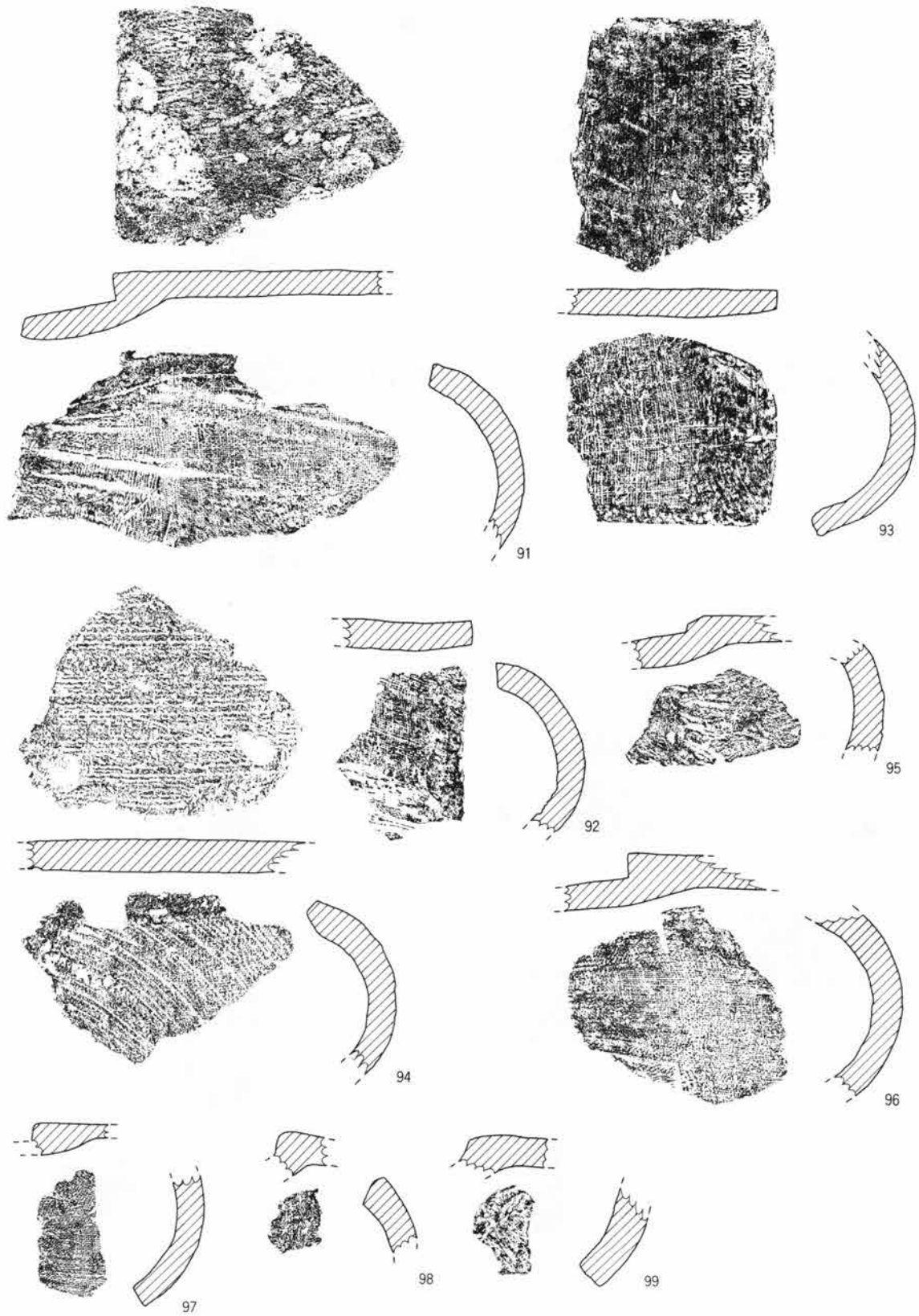
第70図 軒平瓦実測図(3)



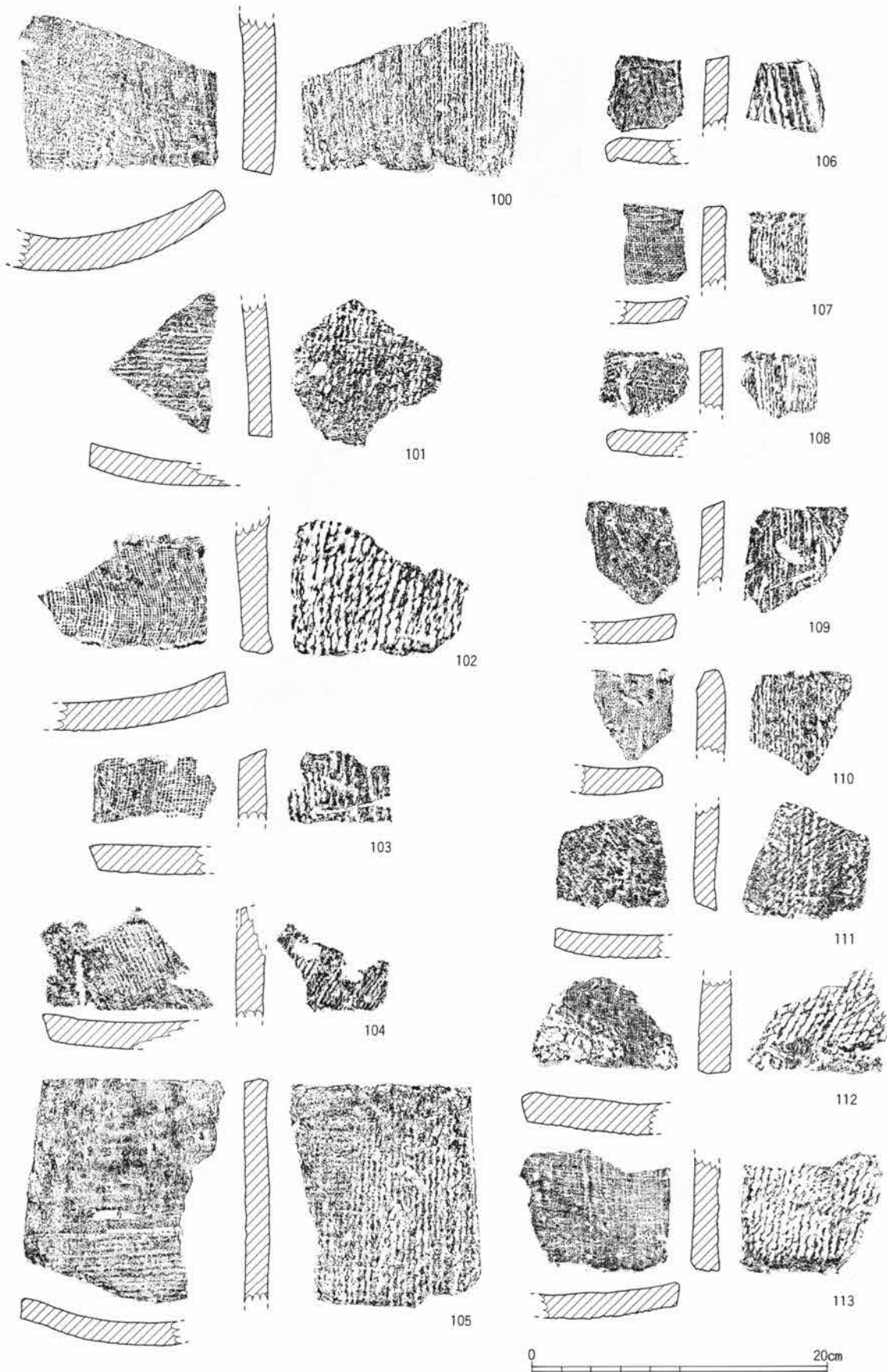
第71図 丸瓦実測図(1)



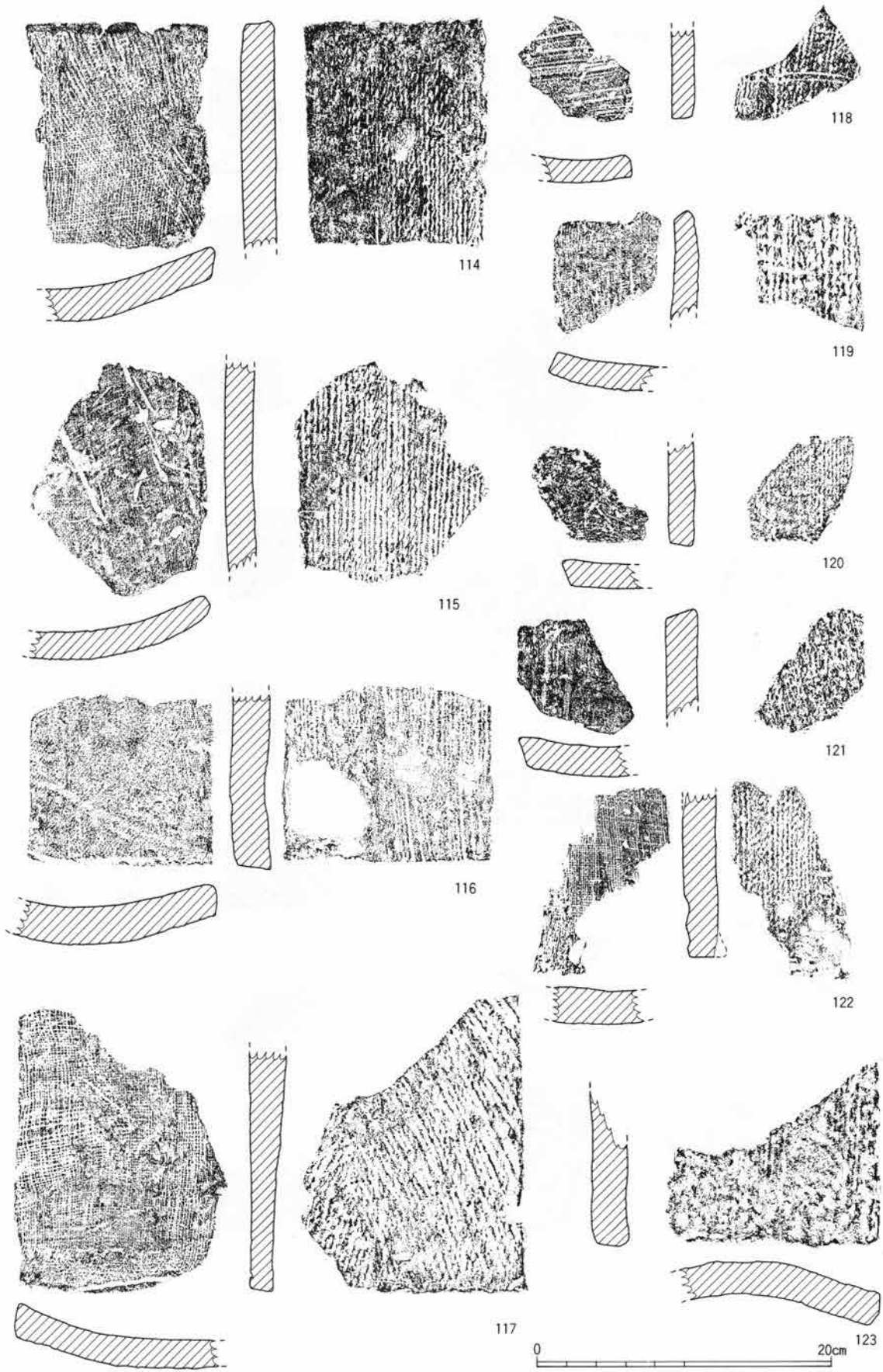
第72図 丸瓦実測図(2)



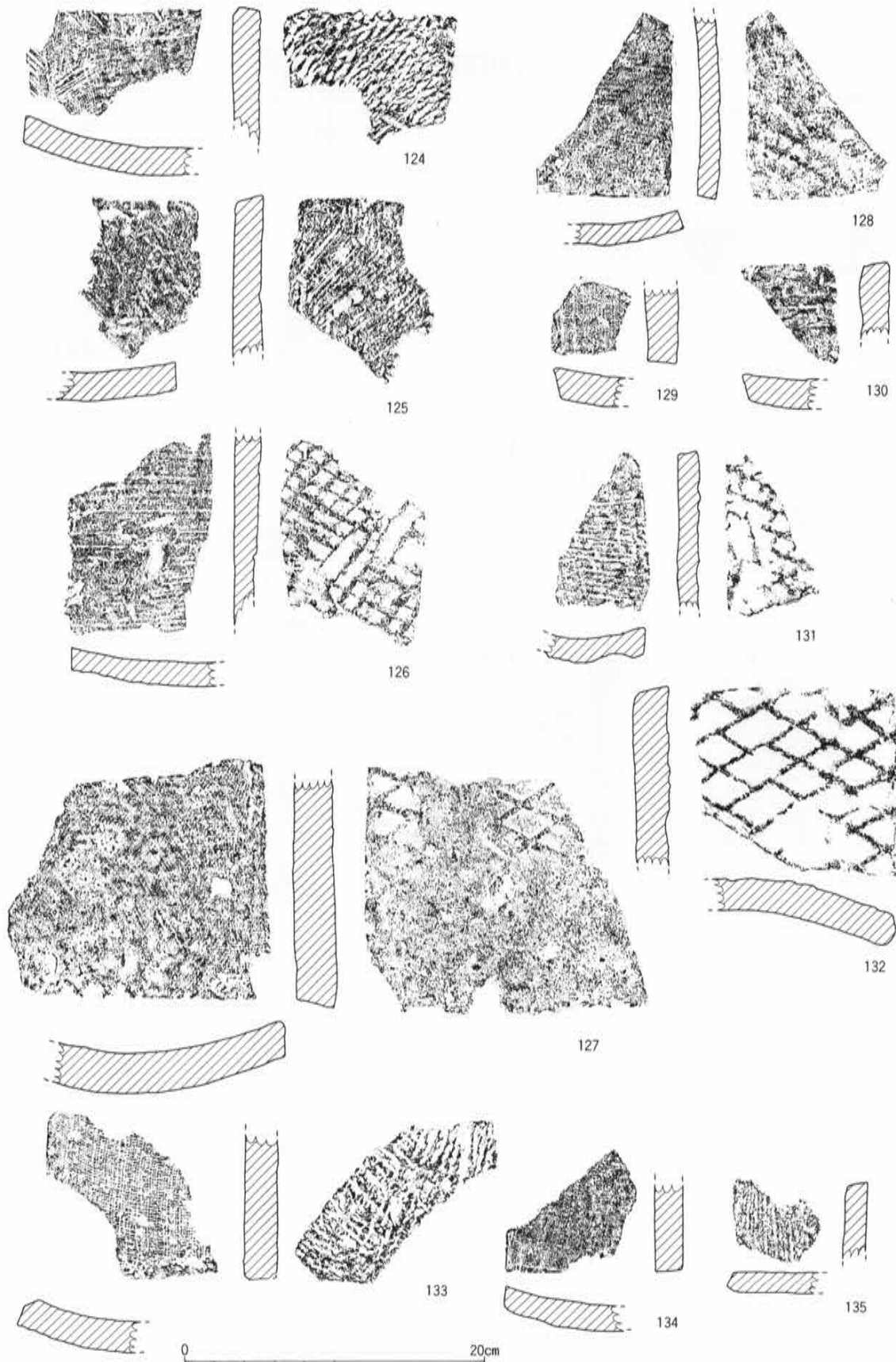
第73図 丸瓦実測図(3)



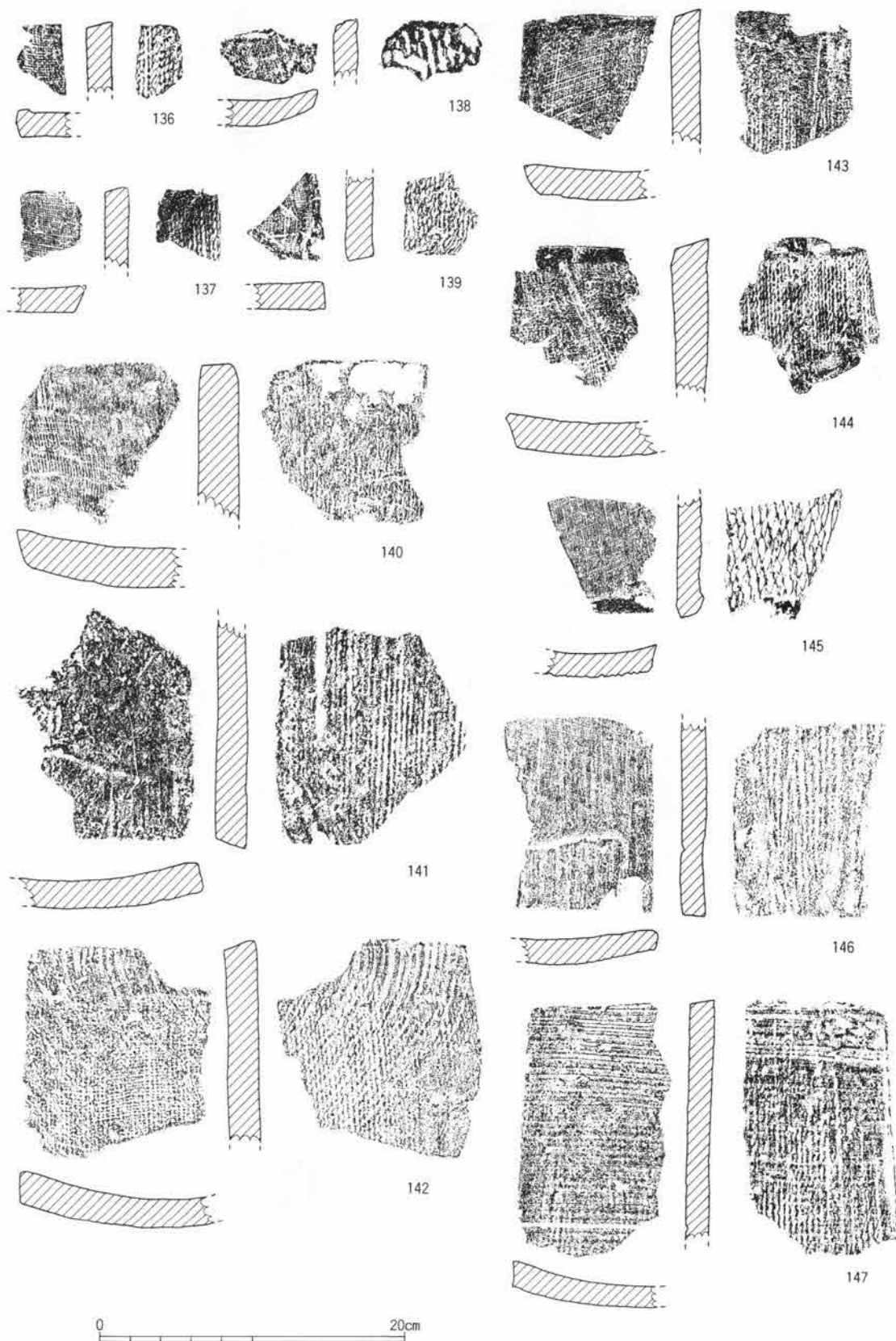
第74図 平瓦実測図(1) S G01-a底土坑



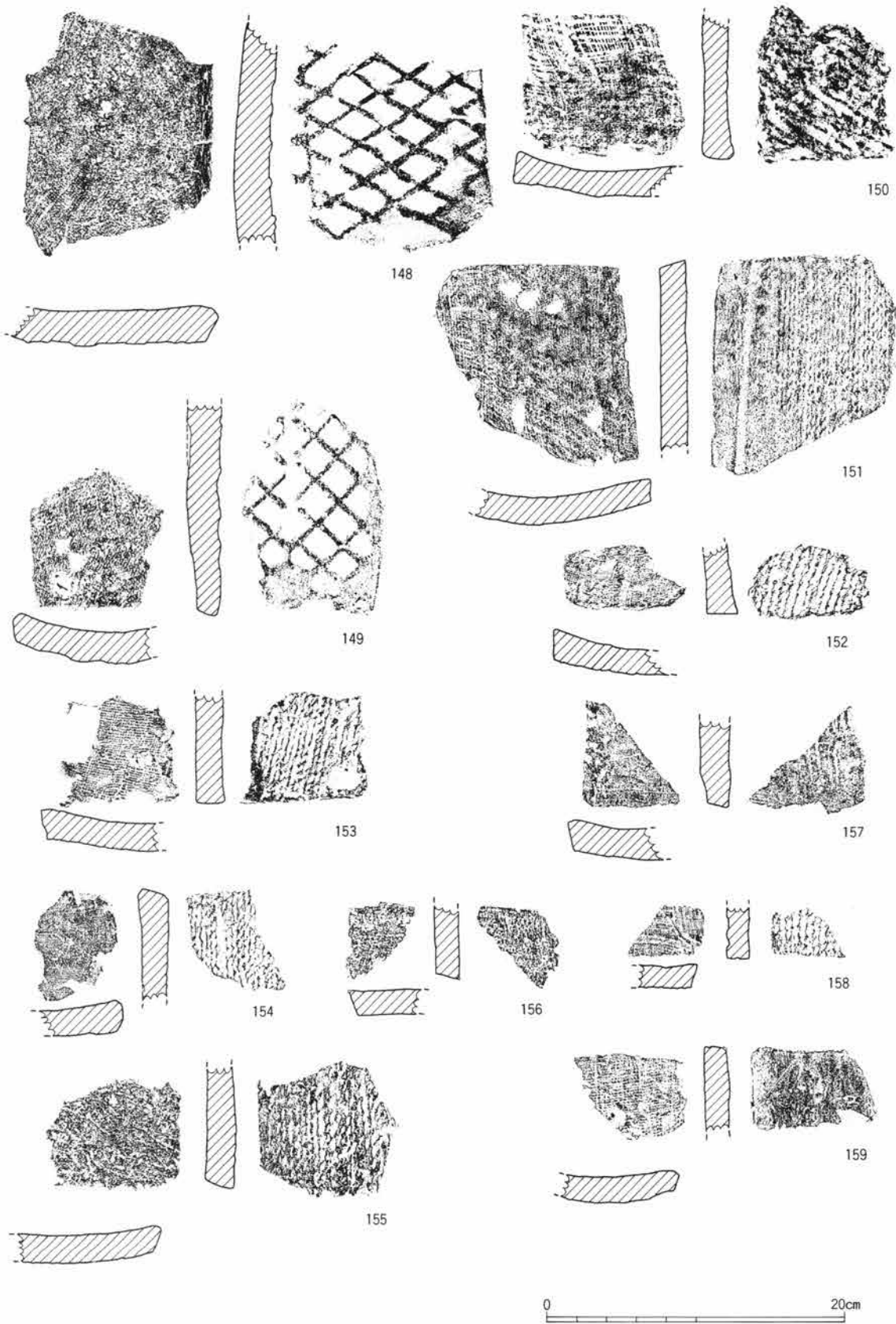
第75図 平瓦実測図(2) S G01-a底土坑



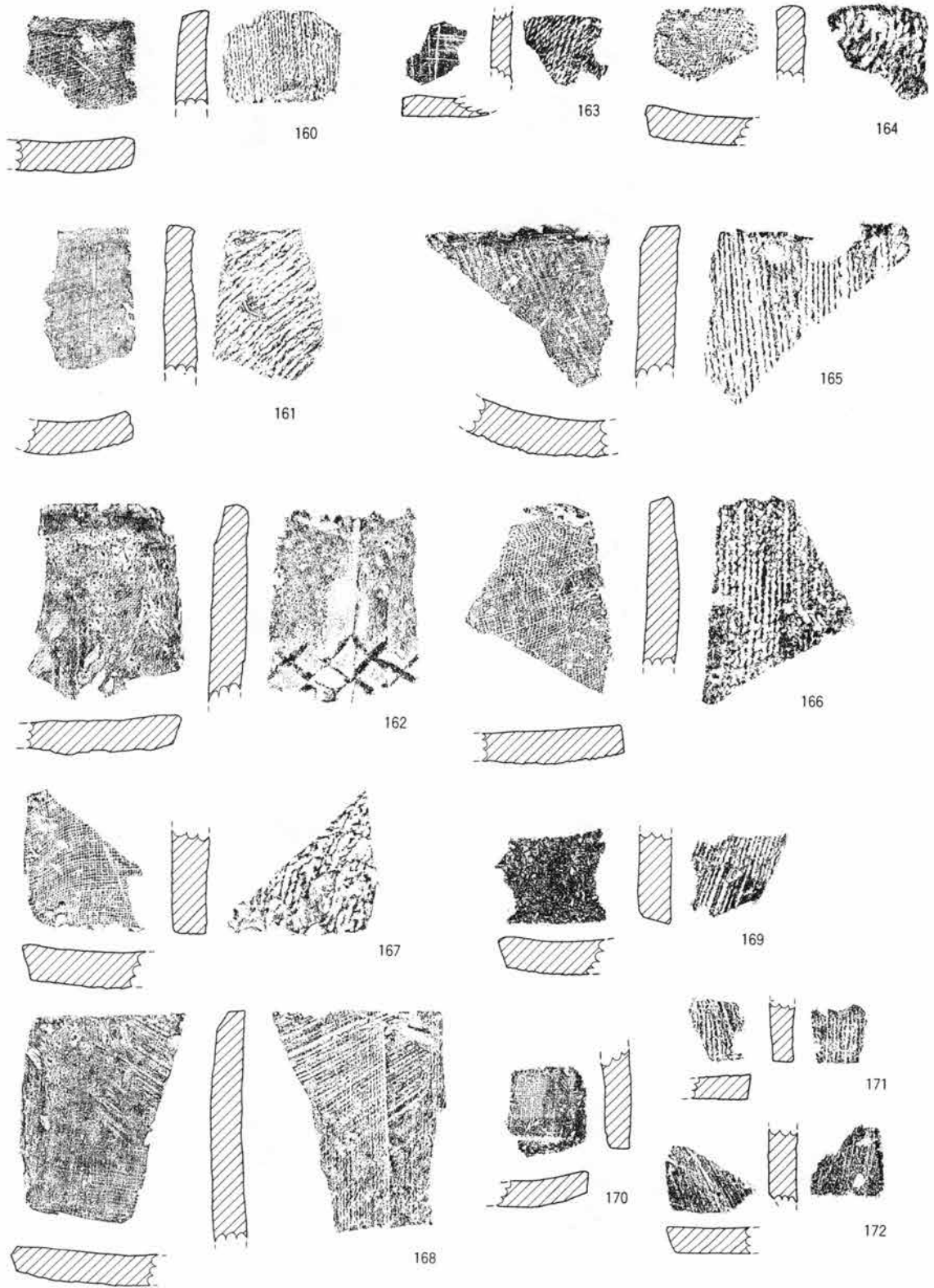
第76図 平瓦実測図(3) S G01-a底土坑・底



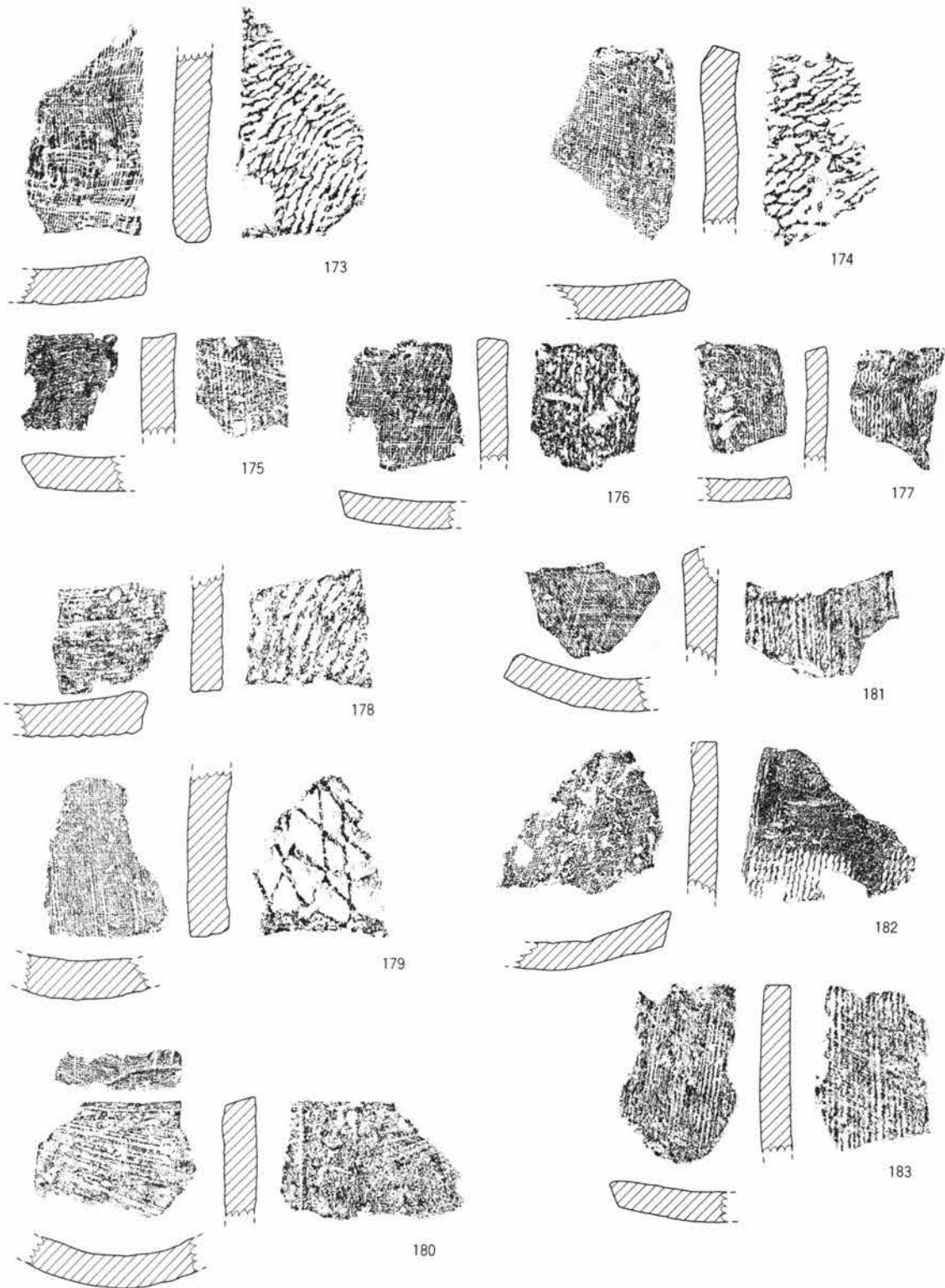
第77図 平瓦実測図(4) S G01-a 底



第78図 平瓦実測図(5) S G01-a底・S G01最下層・下層



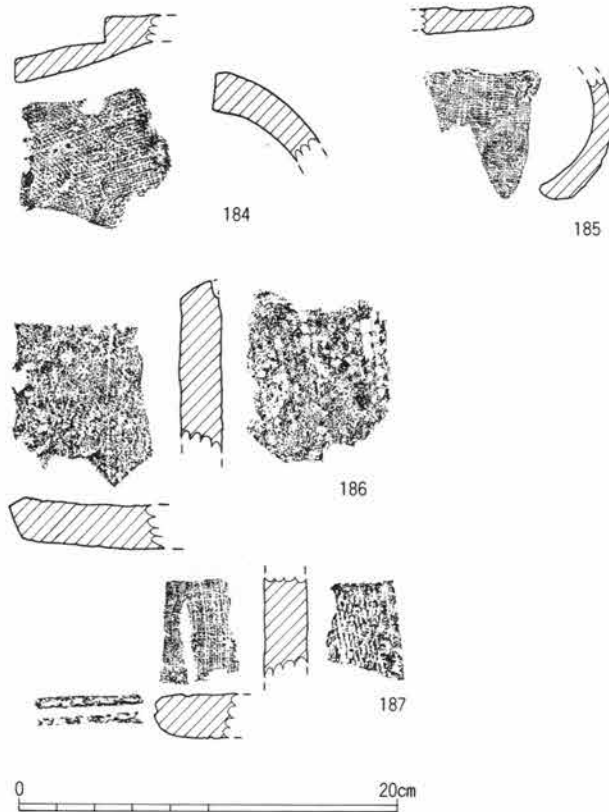
第79図 平瓦実測図(6) S G 01下層・上層



0 20cm

第80図 平瓦実測図(7)
S G 01洲浜・池岸付近埋土

西賀茂角社瓦窯産の可能性が高い。3は「森ヶ東」瓦屋産で、平安中期の所産である。5～10は平安後期の所産である。5・6は連弁が剣頭文化しており、山城産の可能性が高い。巴文では右三つ巴、左三つ巴の両者があり、圏線に尾が接続して外区も圏線のものや、圏線に尾が接続して外区は珠文のもの、尾が細長いいわゆる「餓鬼巴」などの文様がある。これら巴文の瓦はおおむね平安後期以降に属すると考えられる。こうした巴文は12・14・18のようにSG01の底土坑出土のもの、底部に貼り付いていたものがあり、池状遺構SG01-aの掘削は平安後期以降、さほど時を隔てずに行われたと考えられる。平安時代ではないが、近世の金箔瓦が出土している。文様は桐紋(20)と巴紋(19)が出土しており、桐紋の榿先瓦の可能性もあるものも出土している。金箔は外周と文様部に施されている。



第81図 隍S D 01出土瓦実測図

軒平瓦(第68～70図) トレンチ北部の遺構内、包含層などから第68～70図に示したような軒平瓦が出土している。SG01底土坑から46・48・52、SG01底から29・31・33・37・45・49・50・51・54・56・57・59、同最下層から41・44、同下層から26・43、同池岸付近から22、同隍部下層から58、同埋土から27・28・36・38がそれぞれ出土している。唐草文を用いたものには23のように平安遷都時所産のものや、22のように平城宮式の搬入瓦など、平安前期に属するものや、河上瓦屋産の25、栗栖野瓦屋産の26など平安中期のもの、播磨産の28のように平安後期のものがある。35～40は法相華文を用いるもの、または用いる可能性があるものであるが、35～39はよく似たモチーフを用い

第1表 各層位出土丸瓦集計表

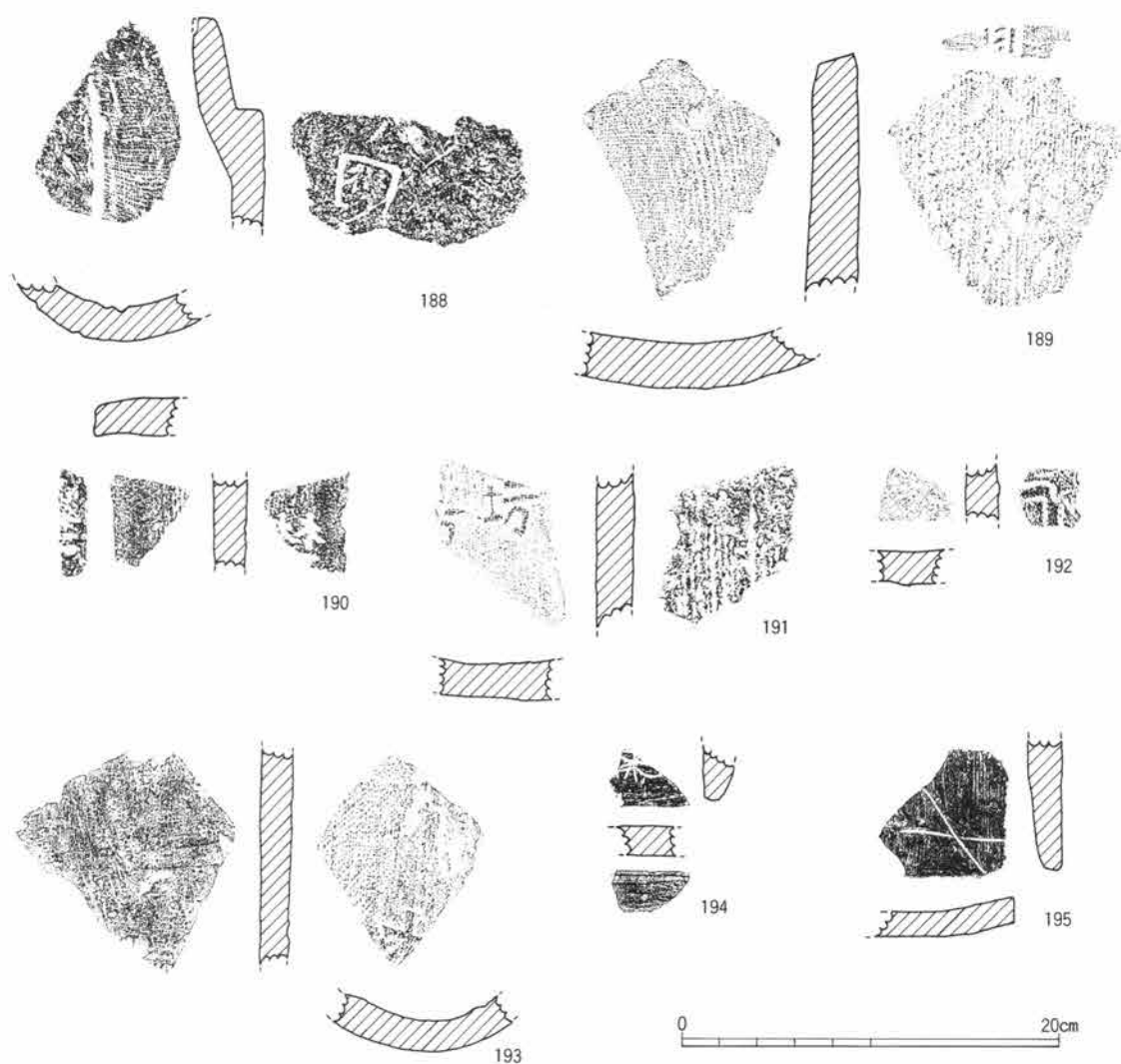
	底土坑	底	最下層	下層	上層	洲浜・池岸	隍部下層	隍部上層	埋土	合計
摺消	33 67.4%	13 86.7%	4 100.0%	9 52.9%	5 83.3%	1 50.0%	0 0.0%	5 71.4%	6 46.2%	76 66.7%
縄目叩	11 22.5%	0 0.0%	0 0.0%	4 23.5%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 7.7%	17 14.9%
不明	5 10.2%	2 13.3%	0 0.0%	4 23.5%	1 16.7%	1 50.0%	0 0.0%	2 28.6%	6 46.2%	21 18.4%
合計	49	15	4	17	6	2	1	7	13	114 100.0%

第2表 各層位出土平瓦集計表

	底土坑	底	最下層	下層	上層	洲浜・池岸	SG01隍部上層	埋土	合計
格子叩	4 5.6%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.0%	6 3.1%
離れ砂	15 21.1%	2 5.7%	0 0.0%	3 7.5%	0 0.0%	1 14.3%	0 0.0%	1 5.0%	22 11.5%
砂→格	2 2.8%	1 2.9%	0 0.0%	1 2.5%	3 30.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 2.1%
砂→縄	10 14.1%	3 8.6%	0 0.0%	2 5.0%	0 0.0%	2 28.6%	0 0.0%	1 5.0%	21 10.9%
縄目叩	25 35.2%	18 51.4%	4 80.0%	17 42.5%	1 10.0%	0 0.0%	5 100.0%	7 35.0%	77 40.1%
摺消	3 4.2%	5 14.3%	0 0.0%	8 20.0%	3 30.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 25.0%	24 12.5%
讃岐叩	1 1.4%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.5%	0 0.0%	3 42.9%	0 0.0%	0 0.0%	5 2.6%
未調整	1 1.4%	1 2.9%	0 0.0%	2 5.0%	2 20.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6 3.1%
不明	10 14.1%	4 11.4%	1 20.0%	6 15.0%	1 10.0%	1 14.3%	0 0.0%	5 25.0%	28 14.6%
合計	71	35	5	40	10	7	5	20	193

ている。40は讃岐、播磨などで見られる。凸面に細かい格子目タタキを用いている。巴文はおおむね平安後期以降のものであるが、やはり多くがS G 01-aの底や底土坑から出土しており、前述の想定を裏付けている。32は聚楽第などで出土している近世初頭の瓦である。60はトレンチ南部のS X 03から出土した陰刻の唐草文軒平瓦である。

平瓦・丸瓦 第71～80図は池S G 01から出土した平瓦・丸瓦である。第71図および第72図の77～79、第74・75図と第76図124～132はS G 01の底面に掘られた楕円形土坑内から出土した。第72図の80～90、第76図133～135、第77図、第78図148・149はS G 01の底部に貼り付いていた瓦である。第78図150・151は最下層出土瓦である。第78図152～159、第79図160～167下層出土瓦である。第79図169～172、第80図177は上層出土瓦である。第83図91～93、第80図173～176は、洲浜およ



第82図 文字瓦および銭貨実測図

び池の岸付近から出土した瓦である。第83図94～96は隍を池の取水口として掘り直した部分から出土した瓦である。第83図97～99、第80図178～183は調査当初、上下2層あることに気付かずに掘削した部分から出土した瓦である。紙幅の関係で、個々の瓦の観察結果を掲載することはできないが、凸面の調整等によって分類した集計表を第1表と第2表に掲げたので、参照されたい。集計方法は、出土した瓦の8割程度から、角のある部分を選択し、凸面の状況によって分類したものである。「砂→格」、「砂→縄」とは、叩き工具で叩く前に、離れ砂をまく手法である。この2表からまず分かることは、平瓦では縄目タタキが4割を越え、離れ砂、離れ砂をまいた後、縄目タタキ、摺消がそれぞれ1割前後存在する。丸瓦では技法のばらつきが見られず、6割以上が摺消で、縄目タタキが15%程度存在するが、その他の手法は存在しない。また、丸瓦と、平瓦の比較では、集計した丸瓦114個体に対し、平瓦は193個体を数える。角のある個体を選択した際に、意図的な選別をしなかったため、これがある程度、絶対量を反映していると考えられる。となれば、ほぼ倍の数量が出土したことには何らかの意味があるはずである。ただし、図を見ていただければ分かるように、出土した瓦は小片がほとんどであるため、その性格を明らかにすることはできない。ここでは、平瓦としたものの中に、鬘斗瓦が相当数、含まれている可能性を指摘するに留めたい。

文字瓦・記号瓦 出土した瓦の内、第82図に図示した文字瓦が出土した。188は陰刻の「修」の異体字である。189は陽刻の「修」の異体字である。190は「木工」の一部と見られる。逆字で陰刻である。191は「右坊」または「左坊」の一部と考えられる。正字で陽刻である。192、193は判読できない。194、195は線刻である。^(注8)

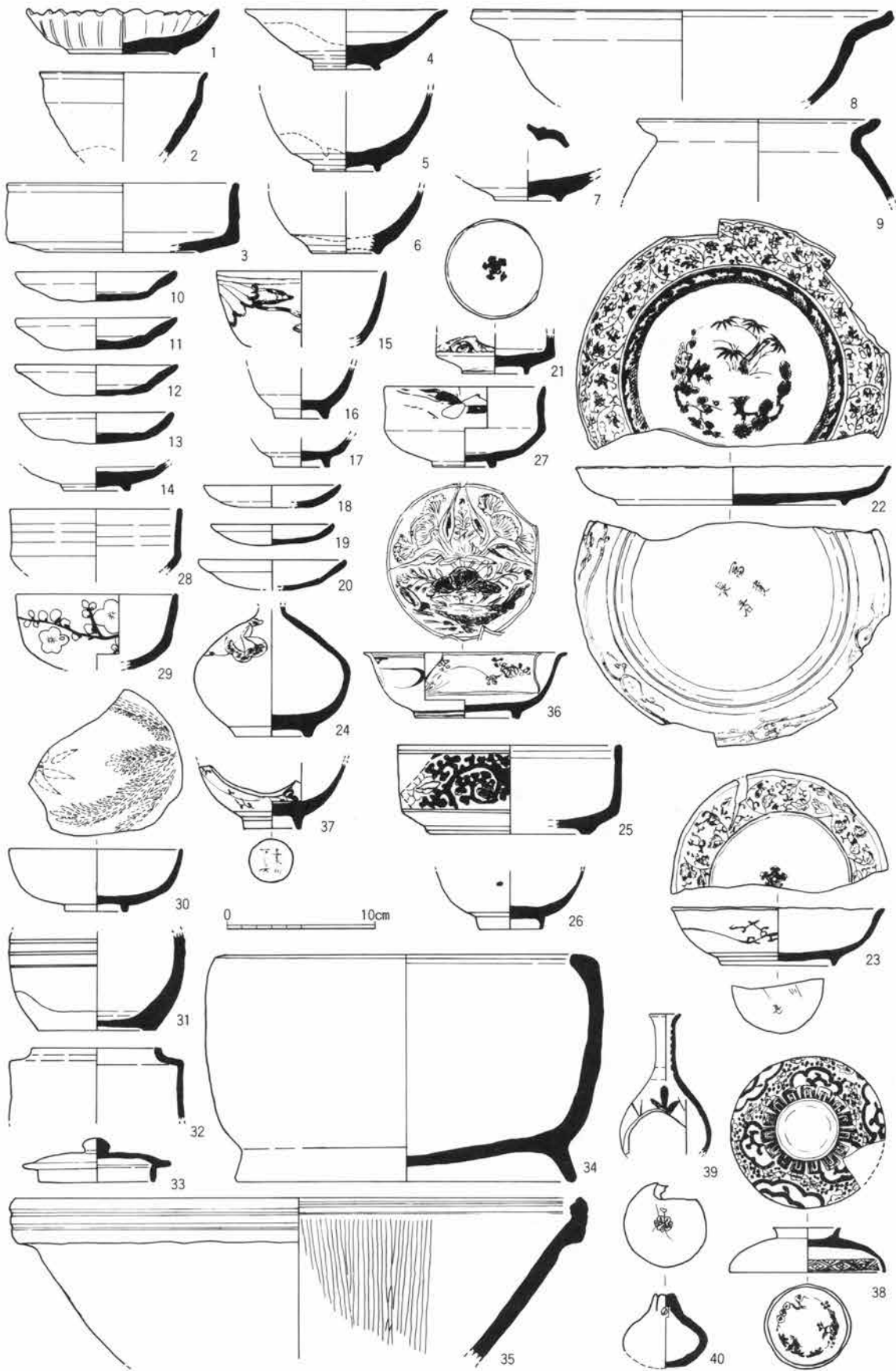
銭貨 銭貨には景德元寶(1004年初鑄)、祥符通寶(1008年初鑄)、皇宋通寶(1038年初鑄)、治平元寶(1064年初鑄)、聖宋元寶(1101年初鑄)などがある。

(福島孝行)

近世遺物 今回の調査では、溝・井戸・土坑などの近世遺構を検出し、それらの遺構等から、多数の近世遺物が出土した。ここでは、その一部について報告することにした(第83図)。

②溝S D02出土遺物

1～3は、瀬戸美濃陶器である。皿1は、菊花形の皿である。全面に白色の志野釉を厚く施す。口径12.8cm・器高3.0cm・高台径7.2cmを測る。碗2は、天目碗である。鉄釉を施す。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は外反する。口径11.2cmを測る。鉢3は、半筒形で、灰釉を施す。底部は碁桶底になる。大窯期の製品とみられる。口径14.4cm・器高4.8cm・低径10.4cmを測る。4～7は、肥前陶器である。皿4は、内面に大きい円刻(鏡)がある。釉は透明に近いものである。見込みに3個の胎土目痕があるが、本来は4個であったものとみられる。外面腰部にも胎土目痕とみられる火色の抜けが4か所にある。高台は三日月状である。口径13.5cm・器高4.0cm・高台径4.4cmを測る。碗5は、褐釉を施す。高台は三日月状である。高台径4.4cmを測る。碗6は、藁灰釉を施す。釉が斑状に青灰白色になる部分があり、いわゆる「斑唐津」である。高台は三日月状である。高台径4.6cmを測る。皿7は、見込みに抽象化した飛鳥文を鉄釉で描く。いわゆる「絵唐津」である。高台は三日月状である。高台径4.4cmを測る。鍋8は、土師質で、口径28cmを測る。外面には煤が付着する。甕9は、土師質で、口縁端部を折り返して肥厚させる。口径16cmを測る。このほか、瀬戸美濃陶器では梅文を鉄釉で描いた織部手付向付の把手や鉄絵を施した志



第83図 陶磁器実測図

野向付、鉄絵同心円文が描かれた志野皿、丹波や備前産の播鉢、中国製青花磁器皿(図版第48の41~46)などが出土している。この遺構出土遺物は、肥前陶器ではI期に属するものがあり、瀬戸美濃陶器でも大窯期のものが含まれるなど、近世陶磁器でも古い様相を示すものが目立つ。ただ、瀬戸美濃陶器では登窯期に属する高級食器も含まれており、全体的には17世紀前期頃の遺物の一様相を示すものと言えよう。

③井戸SE10出土遺物

皿10~13は、土師質で、内面の底部と口縁部の境に沈線をもつ。口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものとみられる。口径10.2~10.9cm・器高2~2.1cmを測る。皿14は、肥前陶器で、内面に大きい円刻(鏡)がある。見込みに砂目の目痕が3個ある。高台にも3個の砂目痕がみられる。釉は透明に近く、高台内にも施釉する。溝縁皿の底部と考えられ、II期に属するものとみられる。高台径4.4cmを測る。15~17は、肥前磁器である。碗15は、染付である。半裁菊花と流水状の文様を描く。体部はほぼ直線的に立ち上がる。口径11.3cmを測る。碗16は、白磁小碗である。高台径3.5cmを測る。碗17も、白磁小碗である。高台径3.8cmを測る。このほか、飛鶴文の染付小碗や柳文の染付碗などの肥前磁器や丹波焼とみられる播鉢(図版第48の47・48)が出土している。この遺構出土遺物は、砂目の溝縁皿や肥前磁器が含まれており、溝SD02出土遺物より新しい様相がみられる。ほぼ17世紀前半期頃の遺物とみられる。

④土坑SK10出土遺物

皿18・19は、土師質で、底部から口縁部が丸みをもって立ち上がる。やや薄手である。口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものか。口径8.1~9.1cm・器高1.4cmを測る。皿20は、土師質で、内面の底部と口縁部の境に浅い沈線をもつ。口径9.7cm・器高1.95cmを測る。21~26は、肥前染付磁器である。碗21は、筒形の湯飲み碗である。見込みにコンニャク印判による五弁花を施文する。高台径4.3cmを測る。皿22は、稜花形で周縁部に唐草文を描く。見込みには環状に松竹梅を描き、高台内には「富貴長春」銘がある。口径20.9cm・器高2.6cm・高台径15.1cmを測る。皿23は、稜花形で周縁部に皿22と同様の唐草文を描く。見込みには五弁花文を描き、高台内にはくずれた「大明年製」銘がある。口径14cm・器高4.1cm・高台径7.6cmを測る。壺24は、体部宝珠形の油壺である。胴部最大径10.4cm・高台径5.1cmを測る。鉢25は、半筒形で初期的な蛸唐草文を描く。口縁端部が無釉であり、段重になっていたものとみられる。口径15cm・器高5.8cm・高台径10.6cmを測る。碗26は、見込みの釉を蛇の目状に掻き取っている。高台径4.4cmを測る。27~30は、京焼系陶器である。碗27は、半筒形で、外面に簡略化された鉄絵山水文を描く。口径10.6cm・器高5.5cm・高台径4.2cmを測る。碗28は、半筒形で、残存する限りでは無文である。口径11.6cmを測る。碗29は、やや半筒形で、外面に鉄絵梅枝文を描く。口径10.4cmを測る。碗30は、扁平気味の丸碗である。内面に松竹文が上絵付けされているが、土中での風化によるものか、色が抜けている。口径11.6cm・器高4.2cm・高台径4cmを測る。31・32は、丹波焼とみられる。壺31は、胴部に白泥で線文を描く。徳利状の器形か。底径7.8cmを測る。壺32は、肩が張った器形で、薄手である。口縁部は無釉であり、蓋付きであったものか。口径7.9cmを測る。蓋33は、京焼系陶器とみられるつまみ付きのものである。上面には白釉を施す。壺等の蓋か。口径7.6cm・器高3.6cmを測る。火舎34は、土師質である。ハの字状に開く高台をもつ。口径25.4cm・器高15.3cm・高台径22.5cmを測る。播鉢35は、堺産とみられ、口径38cmを測る。鉢36は、

中国製青花磁器である。薄手で、口縁端部は外反する。高台内は無釉である。明時代末期の製品である。口径13.6cm・器高4.55cm・高台径6.8cmを測る。この遺構出土遺物は、一部伝世品とみられるものもあるが、おおむね18世紀のものと言えよう。

⑤土坑S K 09出土遺物

37～39は、肥前染付磁器である。碗37は、高台内にくずれた「大明年製」銘がある。高台径3.8cmを測る。蓋38は、蓋付碗の蓋で、環状つまみをもつ。内面に環状の松竹梅文を描く。口径10.4cm・器高3cm・つまみ径4.3cmを測る。徳利39は、小形のもので、いわゆる「御神酒徳利」と言われるものか。若松文を描く。口径2.2cmを測る。40は、土鈴である。器高5cm・最大幅5.6cmを測る。この遺構出土遺物は、おおむね18世紀後半期以降のものと思われる。

(引原茂治)

その他の遺物 瓦質の羽釜、龍泉窯系の青磁、土師皿、馬または牛の歯牙、花崗岩の剥片などがある。この内花崗岩の剥片は花崗岩の石製品を加工した際に出る剥片と考えられ、神戸市郡家遺跡などで出土例がある。近世に属する遺物としては金箔瓦がある。

3. ま と め

今回の調査では1973年の京都市の調査で検出されていた平安宮南隍の位置を再確認することができた。従前の調査によって算出された理論的な隍の座標ともほぼ重なる位置である。隍は後世に池などの再利用によって浚渫されており、上面幅は拡張され、また出土する遺物も平安後期を中心とするものでしめられている。また隍の北側に存在することが予想された大垣(築地塀)の検出に努めたが、大垣は中世、及び近世の池を伴う庭園によって破壊されていることが明らかとなった。瓦の検討から大垣に葺かれていた瓦は、平安遷都時に用いられた瓦および平安中期に大垣の修築に伴って葺かれたものを若干含む他は、平安後期以降の修築に伴うものであることが明らかとなった。この修築に該当する歴史事象は、既に常盤井智行が指摘している「保元の乱」後の藤原通憲(信西入道)による平安宮の大修造であろう。軒瓦の産地は山城の他、播磨や讃岐などがある。池は洲浜を形成しており、導水口として平安宮南隍を浚渫して再利用している。したがってこの地に池を含む庭園を営めるだけの邸宅が存在していた可能性が高い。中世は、京都の市街地は上京と下京の2地域に分かれているが、当該地はこれらに含まれない。S G 01-aを伴う邸宅は人里離れた荒野に建つ一軒家だったのであろうか。一方S G 01-bについて、17世紀前半の絵図には当該地は御土居の内側ではあるが、空き地となっており、池を伴う邸宅はこの時期にはなかった可能性があるが、絵図の記載はS D 02やS E 10の遺物とは齟齬を来す。絵図には記されていない邸宅の可能性もある。墾地や二条大路は柵・または塀によって囲い込まれて宅地などに転用され、蚕食されてゆく。その時期については、墾地上のS A 01は埋土に大垣所用の瓦を含み、13～14世紀頃の青磁片を含むS G 01-aに切られていることから保元2(1157)年以降、13世紀までの時期であろう。S A 03は15世紀の瓦質の羽釜や青磁などを含むS X 03に切られている。したがってそれ以前の時期が当てられる。S A 04はそれ以降であろう。なお、S K 14～17・52・53はS K 16から半完形の土師質の羽釜(16世紀)が出土しており、切り合い関係などからこれらの土坑はおおむね16世紀のものであると考えられる。17世紀以降にはかつて二条大路だった所にゴミ穴や、井戸などが盛んに形成されていることが追認された。特に二条城築城後は、道としての機能

をほぼ完全に失い、二条城に伴う官庁街・武家屋敷へと変化すると見られる。これらの調査結果から、平安京が解体し、二条城周辺の官庁街へと変化してゆく過程を見ることができる。

(福島孝行)

- 注1 井上満郎・浪貝 毅ほか「平安宮東・南限の発掘調査概要」(『平安宮跡』京都市埋蔵文化財年次報告 1973-I 京都市文化観光局文化財保護課) 1973
- 注2 平良泰久ほか「平安京跡二条大路」(『埋蔵文化財調査概報』(1980) 京都府教育委員会) 1980
- 注3 理論的な平安宮南陸の位置については、(財)京都市埋蔵文化財研究所の辻 純一氏よりご教示いただいた理論的な平安宮大垣の中心の座標を元に、『延喜式』の「京程」の記述に従って算出したものである。
- 注4 『延喜式』巻第42 「左右京職 京程」による。
- 注5 洲浜の判定は、(財)京都市埋蔵文化財研究所の鈴木久男氏に依頼し、氏は緩斜面に礫を配置し、その礫の上と間に池の堆積物が詰まっていることにより、洲浜と判断された。
- 注6 埋桶遺構については、岡崎正雄・小川良太ほか『有岡城跡・伊丹郷町』II 兵庫県教育委員会 1997で、便槽の可能性が指摘されている。
- 注7 軒丸瓦・軒平瓦の叙述については、以下の書籍を参考にした。
平安博物館編『平安京古瓦図録』 雄山閣 1977
廣田長三郎編『古瓦図考』 ミネルヴァ書房 1989
(財)京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収集瓦図録』 1996
- 注8 「修」・「木工」・「右坊」または「左坊」はそれぞれ「修理職」・「木工寮」・「修理左右坊城使」所管の瓦屋で生産された瓦であることを示すといわれている。
近藤喬一「平安京古瓦概説」(『平安京古瓦図録』 平安博物館) 1977
木村捷三郎「出土瓦の考察」(『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』 大谷高等学校法住寺殿遺跡調査会) 1984などによる。

参考文献

- 田口昭二『美濃焼 考古学ライブラリー17』 ニュー・サイエンス社 1983
大橋康二『肥前陶磁 考古学ライブラリー55』 ニュー・サイエンス社 1989
『古伊万里 別冊太陽No.63』 平凡社 1988

3. 森垣外遺跡第3次発掘調査概要

1. はじめに

森垣外遺跡は、京都府相楽郡精華町南稲八妻森垣外に所在する古墳時代中期から後期にかけての集落遺跡である。当該遺跡における一連の発掘調査は、京都府土木建築部が施行する山手幹線街路整備事業に伴う事前調査であり、平成8年度に第1次調査、平成9年度に第2次調査を実施した。特に、第2次調査では、朝鮮半島起源の大壁住居跡や陶質土器・韓式系土師器を確認し、渡来人との密接な関係が想定できる調査成果を得た。

ここに報告する森垣外遺跡第3次調査は、A2・B1・C地区において総計約3,670㎡を対象に発掘調査を行った。また、発掘調査は、平成10年6月16日から平成11年3月5日にかけて実施するとともに、平成10年9月11日には約150名、平成11年2月19日には約90名の参加者を得て、現地説明会を開催した。

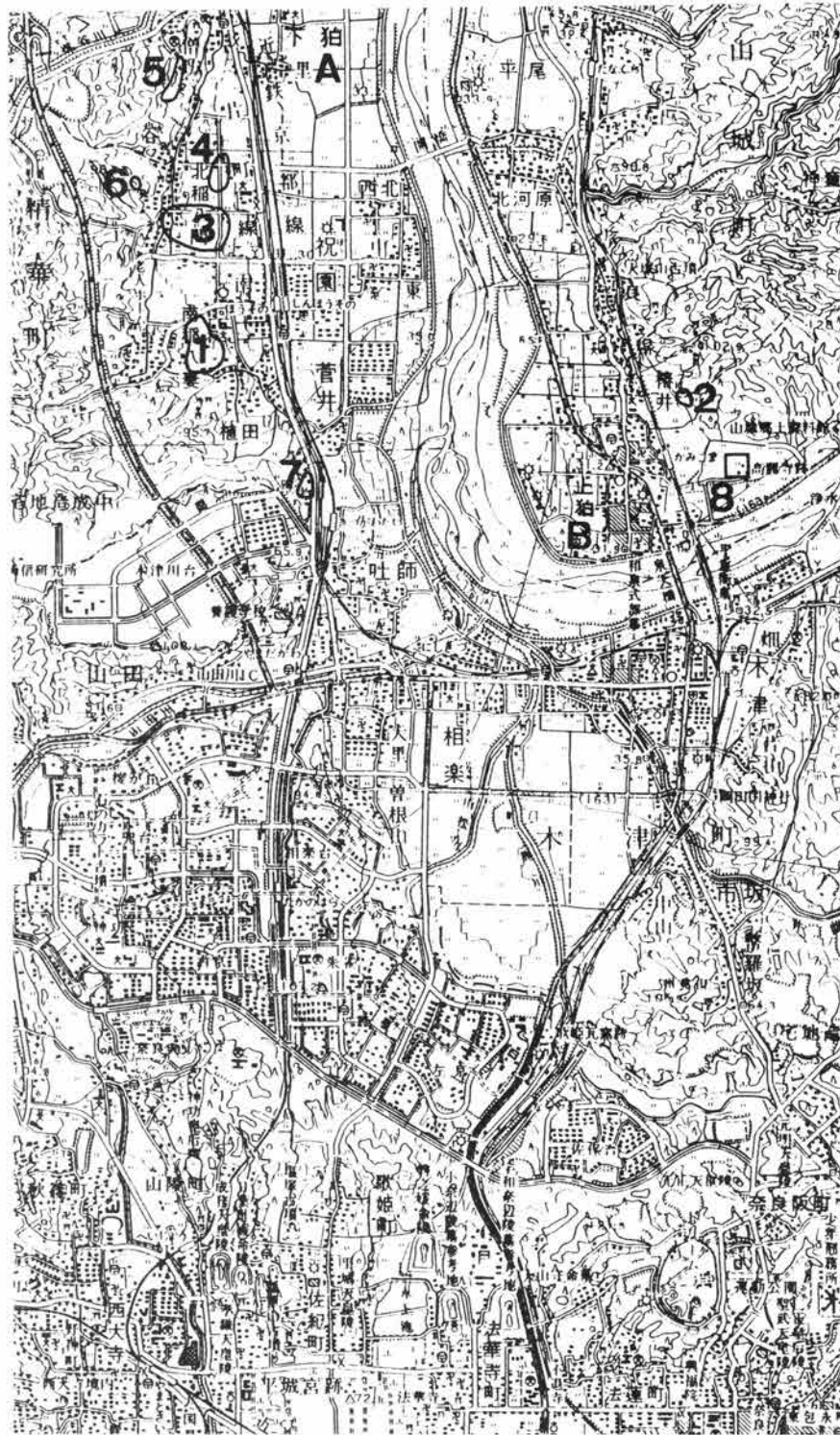
発掘調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、同調査員小池 寛、松尾史子、藤井 整が担当し、遺物整理は、小池・松尾が行った。本概要報告は、A2地区を松尾が、それ以外を小池が担当し、総括・編集は小池が担当した。なお、遺物挿図および蛍光X線試料整理では、田歙美紀氏(龍谷大学大学院生)の手を煩わせた。記して深謝したい。

本概要報告の巻末には、当該遺跡から出土した陶質土器および須恵器などの産地同定の分析結果と花粉分析についての報告を掲載した。特に、産地同定の分析では、公務ご多忙の中、奈良教育大学、三辻利一教授のご高配を得ることができ、また、早々に分析データと玉稿を賜わった。記して御礼を申し述べたい。また、京都府木津土木事務所には、さまざまなご協力を得た。御礼を申し述べたい。

2. 位置と環境

(1) 地理的・歴史的環境(第84図)

森垣外遺跡は、田辺丘陵と木津川に挟まれた低地帯のほぼ中間に位置し、南西から北東にかけてゆるやかに傾斜する段丘先端部に位置している。当該遺跡の最高所は、C地区中央部で標高46mを測り、最も低い北端部では標高39mを測る。その比高はおおむね5～6mであり、遺跡地内から城陽市南半部を含む南山城一帯を一望することができる。古墳時代において集落を営む条件としては良好であったことがうかがわれる。なお、森垣外遺跡の範囲としては、現行の府道精華生駒線沿いに小河川が東流することと、北方に隣接する北尻遺跡では、古墳時代の集落関係遺構を検出し得ていないことから、府道周辺に北限を設定できる。また、南限は、明確に集落を区画する溝などの施設は確認していないが、遺構密度が極端に低くなるC地区南端部に設定して大過



第84図 森垣外遺跡位置図(1/50,000)

- | | | | |
|------------|---------------|----------------|---------|
| 1. 森垣外遺跡 | 2. 山城町上狛天竺堂古墳 | 3. 北稲遺跡 | 4. 柿添遺跡 |
| 5. 鞍岡山古墳群 | 6. 城山古墳群 | 7. 木津町吐師七ツ塚古墳群 | |
| 8. 山城町高麗寺跡 | | | |
- A：地名(下狛) B：地名(上狛)

た精巧な鏡形石製模造品と酷似する石製品が、木津町吐師七ツ塚1号墳から出土しており、当該遺跡との関連が想定されるところである。

一方、集落遺跡としては、当該遺跡北方に軟質焼成の格子目タタキ痕を有する韓式系土師器が出土した北稲遺跡や琥珀製棗玉が出土した柿添遺跡などが所在している。森垣外遺跡との関係が、

はない。一方、東限は、精華中学校付近で現状地形に1m程度の落差が認められることと、区画整備事業に伴う試掘調査^(注1)成果から、この段差に東限を設定することができる。また西限は、南西方に所在する丘陵部下段にもとめることができる。

次に、森垣外遺跡周辺の遺跡について概観する。森垣外遺跡北方丘陵部には、川西編年Ⅱ期に比定できる円筒埴輪が採集された大谷古墳群や鼈龍鏡が出土した鞍岡山3号墳などが所在している。また、MT15型式に比定できる須恵器が、城山古墳から出土しており、時期的には森垣外遺跡と併行関係にある。なお、後述するC地区から出土した精巧な鏡形石製模

それらの位置関係から想定される。

南山城南半部には、木津川を挟んで上狛(かみこま)、下狛(しもこま)の地名があり、また、高麗寺(こまでら)など、高句麗を示す狛(こま)の名が見える。当該地域は、『和名抄』郡郷部に、山城国相楽郡大狛郷、下狛郷と見え、古代、高句麗系氏族狛氏の拠点であったと推測される場所である。南山城と高句麗系渡来人との関係については、『新撰姓氏録』山城国諸蕃に、黄文連、高井造、狛造など、南山城との関係をうかがわせる高句麗系氏族の名が見え、古代、南山城一帯に、高句麗を中心とする渡来系氏族が居住していたことを推察させる。また、『日本書紀』欽明天皇31年条には、山城国の相楽館の記事が、同欽明天皇26年5月条、『三代実録』貞観3年8月19日条には、6世紀には、高句麗系渡来人が、山城国に居住していたことをうかがわせる記事が見え、両者の関わりが、6世紀にまで遡り得る可能性があることを推察させる。

なお、周辺の遺跡については、平成9年度A1地区調査概報に詳述した。^(注2)ご参照頂きたい。

(2)平成9年度A1地区の調査成果概要(第85図・第142図)

平成9年度に実施したA1地区の発掘調査では、古墳中期後半の大壁住居跡や掘立柱建物跡、



第85図 調査地区設定図

陶質土器、鉄滓、製塩土器、石製模造品などが出土し、当該集落内に渡来人の参入を認めることができた。また、いち早く掘立柱建物跡を採用するなど、先進的集落であることがわかった。

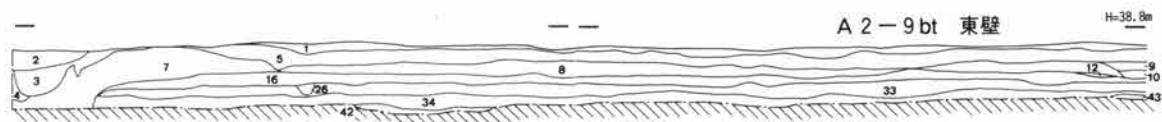
3. 調査概要

(1)地区設定と調査経過(第85図)

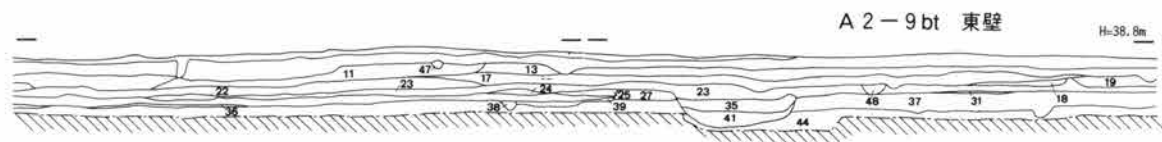
東西に貫通する2本の町道を境界として、北方からA・B・C地区とした。また、今年度は、A2地区・B1地区・C地区の順で調査を実施したが、特に、A2地区は、4筆に分割されているため、同時に空撮を行なえなかった部分がある。なお、危険防止程度の埋め戻し作業も最終的には実施した。

(2)A2地区(図版第49)

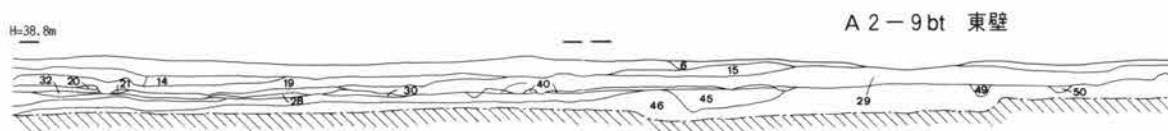
当該地区は、昨年度調査地の



1~4 : L.N.1 (耕作土) 5・7~10・12・16 : L.N.2 (床土)
 33・34 : L.N.3 (中世堆積層) 42・43 : L.N.4、暗茶褐色土(古墳時代包含層)



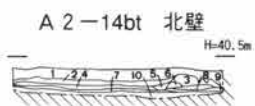
11・13・17~19・22 : L.N.2 (床土) 23~25・27・31・36・39 : L.N.3 (中世堆積層)
 35・37・41・44 : L.N.4、暗茶褐色土(古墳時代包含層)
 38・47・48 : ピット



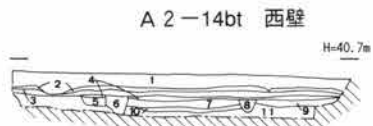
6 : L.N.1 (耕作土) 14・15・20・21・28・29 : L.N.2 (床土)
 30・32・40 : L.N.3 (中世堆積層) 45 : 暗褐色土(溝80埋土)
 46 : L.N.4 (古墳時代包含層) 49・50 : ピット



1~3 : L.N.1 (耕作土) 4~17 : L.N.2 (床土)
 18~20・22・23 : L.N.3 (中世堆積層)
 21 : 灰茶褐色砂質土(溝4) 24~27 : L.N.4 (古墳時代包含層)



1 : L.N.1 (耕作土)
 2~9 : L.N.2 (床土)
 10 : L.N.3 (中世堆積層)



1 : L.N.1 2~4 : L.N.2 5・7・9 : L.N.3
 6・8 : ピット 10・11 : L.N.4



第86図 A 2地区土層断面実測図

北側に位置し、水田の筆毎に北から9番地・10番地・11番地・14番地とした。古墳時代の遺構および中世耕作溝などを確認した。

A. 層位(第86図)

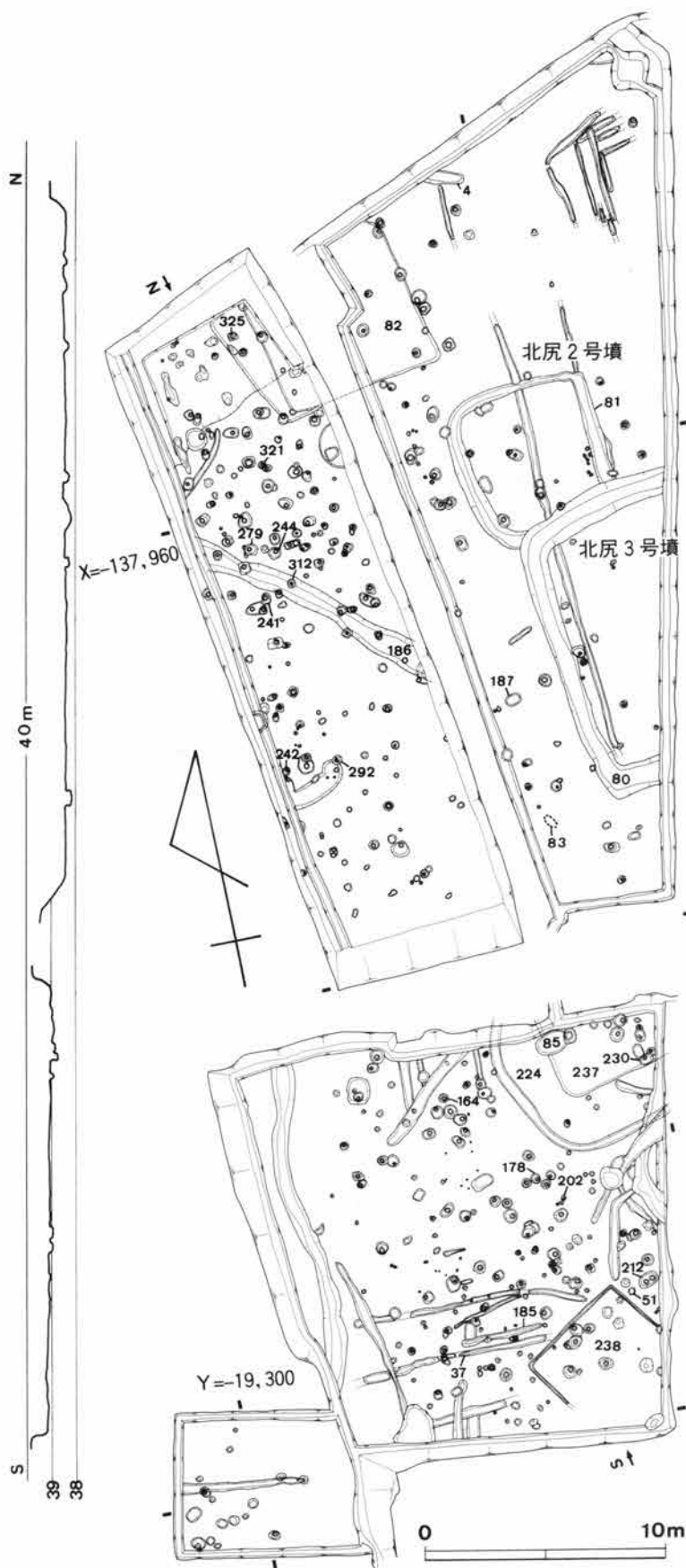
基本的には、水田の耕作土(L.N.1)が均一に堆積し、その直下に、床土(L.N.2)が堆積し

ている。その下に中世の堆積層(L.N.3)が0.2~0.3m堆積し、さらに古墳時代の遺物包含層である暗茶褐色土(L.N.4)が堆積している。なお、L.N.4は堆積時期の新旧関係によりL.N.4a・L.N.4bとして認識できる。その下層には茶褐色砂層が堆積しており、遺構はすべて地山面直上で検出した。また、調査地の地形は北東方向にゆるやかに傾斜しており、近世の水田開発の際の削平により9番地北端での遺物包含層の残存状況はよくなかった。

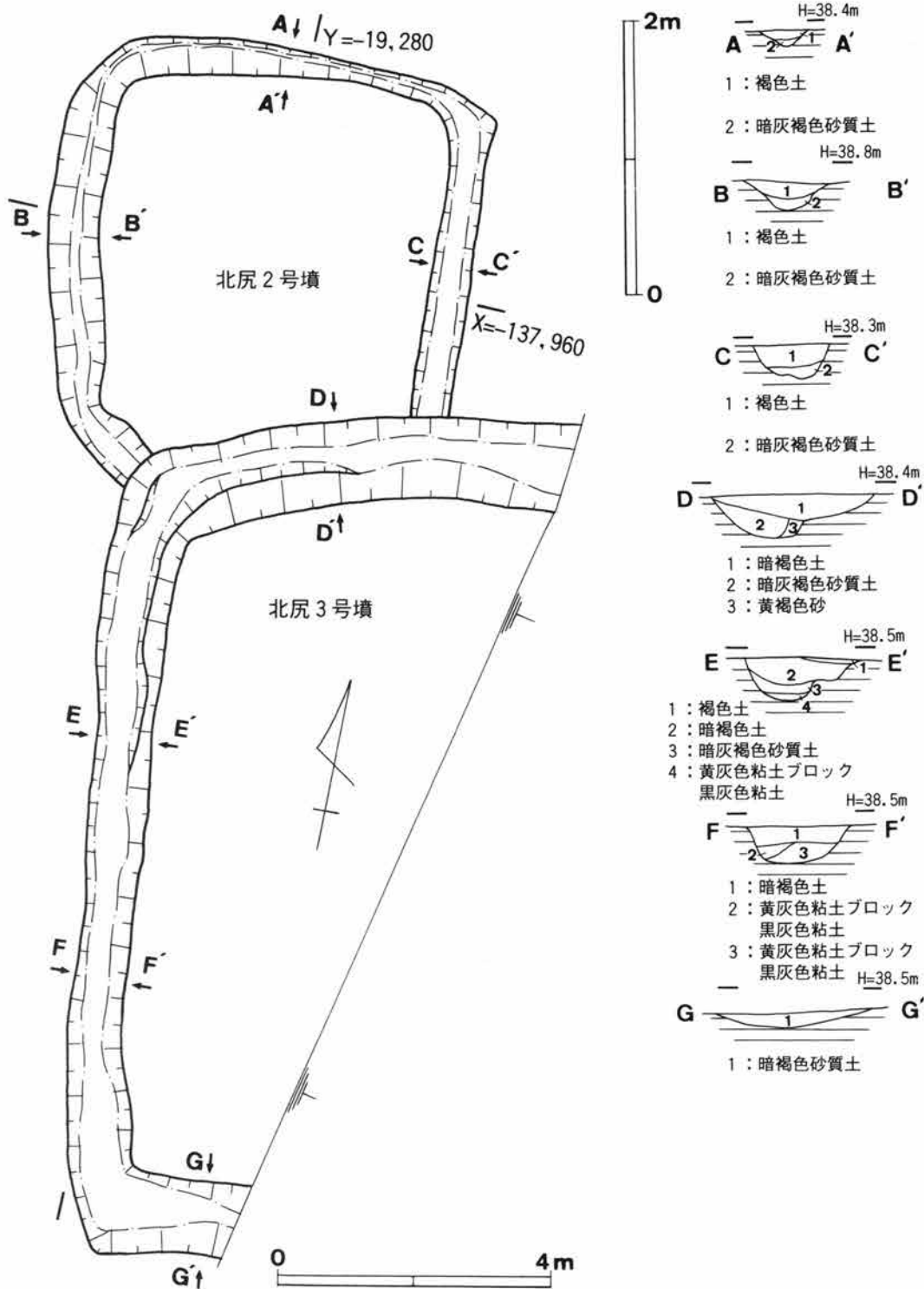
B. 遺構と遺物(第87図、図版第50-3)

今回の調査では、主な遺構として古墳時代前期の方墳、古墳時代中期後半から後期の溝・掘立柱建物跡・柱穴群・竪穴式住居跡・土坑、中世の溝および柱穴群を確認し、これらの遺構からTK47~TK10型式を中心とする遺物および13世紀後半の遺物が出土した。

9番地で検出した方墳80・81については、昨年度確認した方墳や今年度



第87図 A2地区遺構実測図



第88図 北尻2・3号墳実測図
(北尻2号墳：S X81 北尻3号墳：S X80)

の精華町教育委員会の調査で明らかになった方墳2基とあわせて、新規に発見された古墳群となり、精華町教育委員会の指導によって北尻古墳群と命名されることになった。方墳80が北尻2号墳、方墳81が北尻3号墳と名称変更を行った。以下、主に古墳時代の遺構について、概観していきたい。

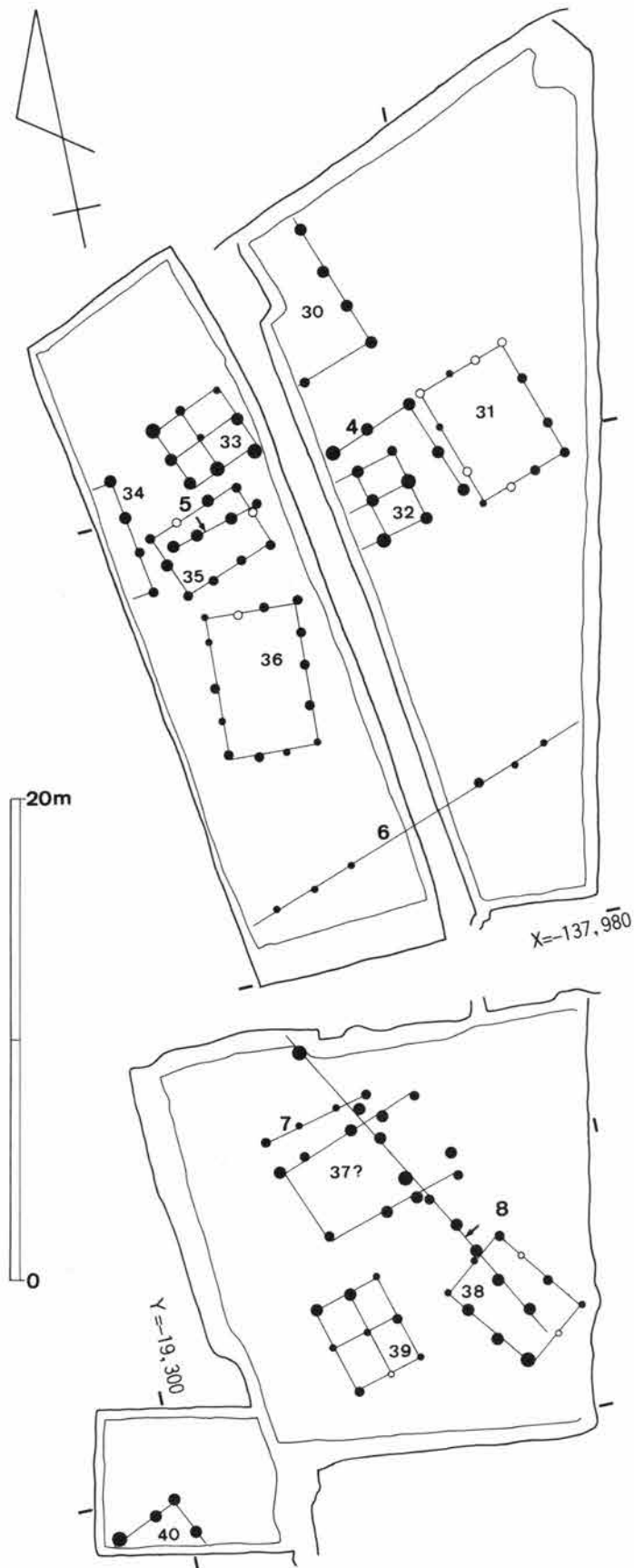
a. 方墳(第88図、図版第50-1・2)

北尻2号墳 一辺約6mの方墳で、南辺溝は北尻3号墳の北辺溝に切られる。溝は船底状を呈し、深さは0.3~0.5mを測る。上層には褐色土が、下層には暗灰褐色砂質土が堆積している。東辺溝上層から土師器片がまとまって出土した。土師器に複合口縁壺(第94図18)が含まれていることと須恵器が出土していないことから古墳時代前期には埋没していることが分かる。

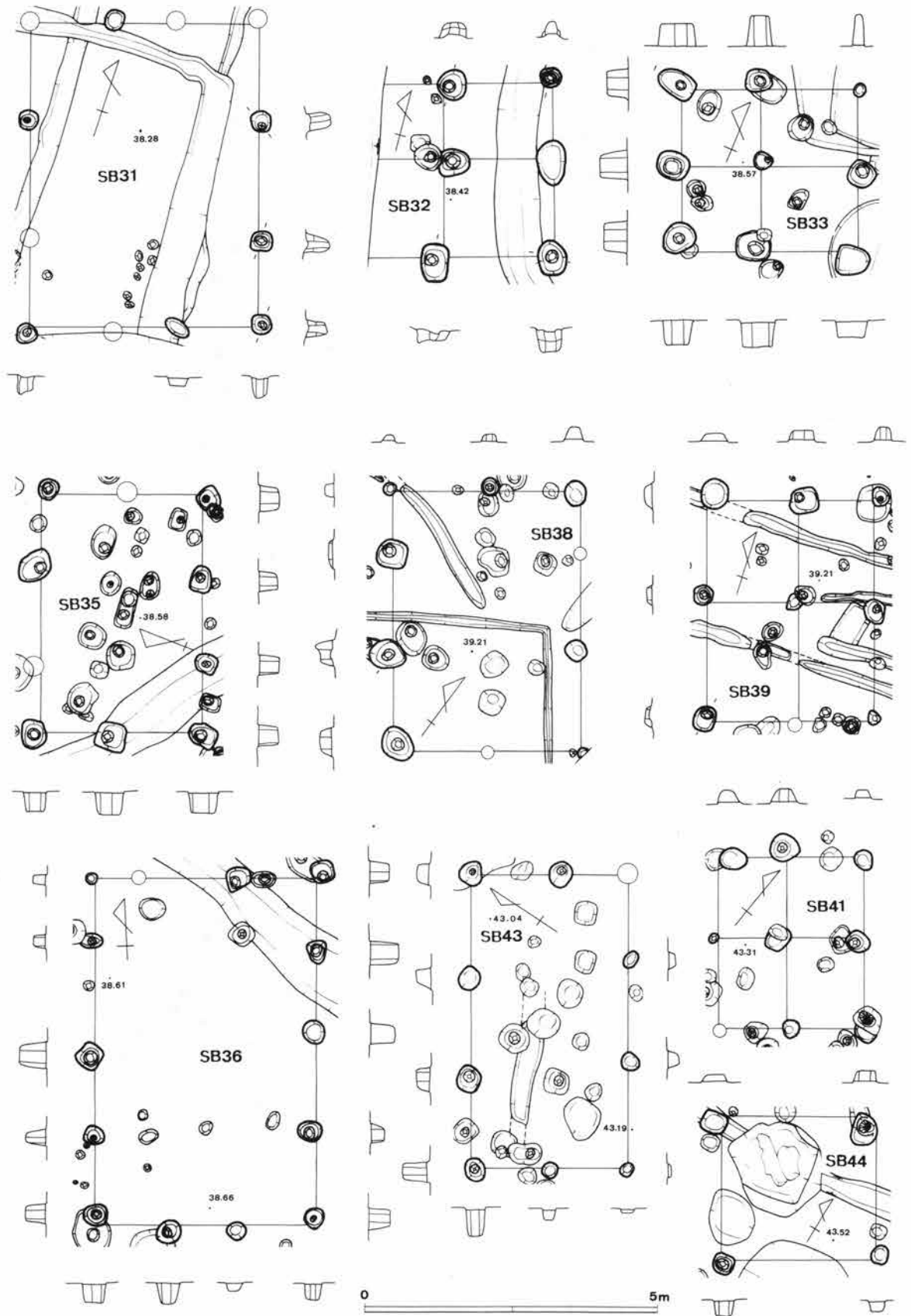
北尻3号墳 一辺約12mの方墳である。溝はマウンド側が若干傾斜して立ち上がり、深さは最深部で0.7mを測る。南辺溝は削平のため0.2mしか残っていなかった。上層には暗褐色土、下層には暗灰褐色砂質土が堆積している。出土遺物はなかった。2号墳と同じく当地に集落が営まれる前の古墳時代前期の築造と考えたい。

b. 掘立柱建物跡(第89図)

A2地区では総計250前後の柱穴を検出した。柱穴の埋土は、暗茶褐色土を主体とする一群と濁暗灰褐色土を主体とする一群に分類できる。これらはある程度時期差を示すものと考え、掘立柱建物跡復原の際の基準とした。今回復原し得た施設は、掘立柱建物跡11棟と柵列5本である。掘立柱建物跡の主軸の方向は地形の傾斜にほぼ並行ないし直交する。また、建物群は柵6によって南



第89図 A2地区掘立柱建物跡分布図



第90図 掘立柱建物跡31・33・35・36・38・39・41・43・44実測図

北のグループに区画され、南側の一群は昨年度調査の建物群に属すると考えられる。

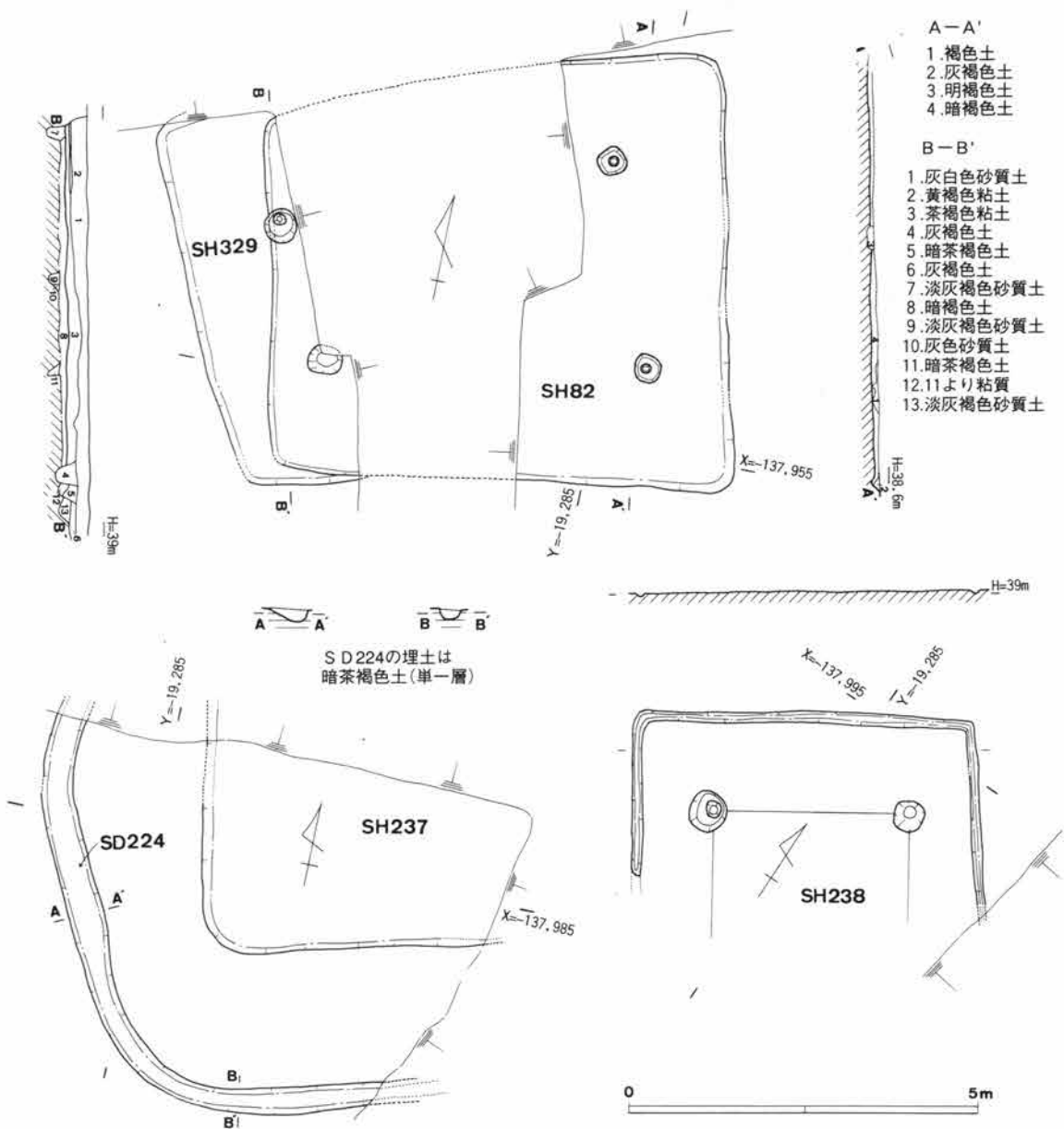
掘立柱建物跡31(第90図) 梁間3間(4m)×桁行3間(5m)で、床面積は20㎡である。北から西へ20°の主軸をもつ。柱穴の規模は直径0.3mと小規模である。

掘立柱建物跡32(第90図) 梁間2間(3m)×桁行2間(3m)以上の総柱建物跡であり、北から西へ15°の主軸をもつ。

掘立柱建物跡33(第90図) 梁間2間(3m)×桁行2間(2.8m)の総柱建物跡であり、床面積は8.4㎡である。北から西へ22°の主軸をもつ。

掘立柱建物跡35(第90図) 梁間2間(2.8m)×桁行3間(4m)で、床面積は11.2㎡である。北から東へ67°の主軸をもつ。

掘立柱建物跡36(第90図) 梁間3間(3.9m)×桁行4間(6m)で、床面積は23.4㎡である。北



第91図 竪穴式住居跡82・237・238・329実測図

から西へ35°の主軸をもつ。

掘立柱建物跡38(第90図) 梁間2間(3.2m)×桁行3間(4.5m)で、床面積は14.4m²である。北から西へ18°の主軸をもつ。

掘立柱建物跡39(第90図) 梁間2間(2.9m)×桁行2間(3.8m)の総柱建物跡であり、床面積は11.02m²である。北から東へ4°の主軸をもつ。

c. 竪穴式住居跡(第91図)

検出した竪穴式住居跡は合計4基である。

竪穴式住居跡82(図版第51-1) 9番地で検出した住居跡で南北約6m・東西約6.5mの長方形プランを呈し、床面積は約39m²である。床面までの深さは0.1mを測る。竪穴式住居跡329を建て替えたものと考えられる。上部構造を支える四柱穴は東側の2つを確認した。住居跡に伴う遺物には土師器・須恵器(第93図)があり、須恵器からTK10型式に比定できる。

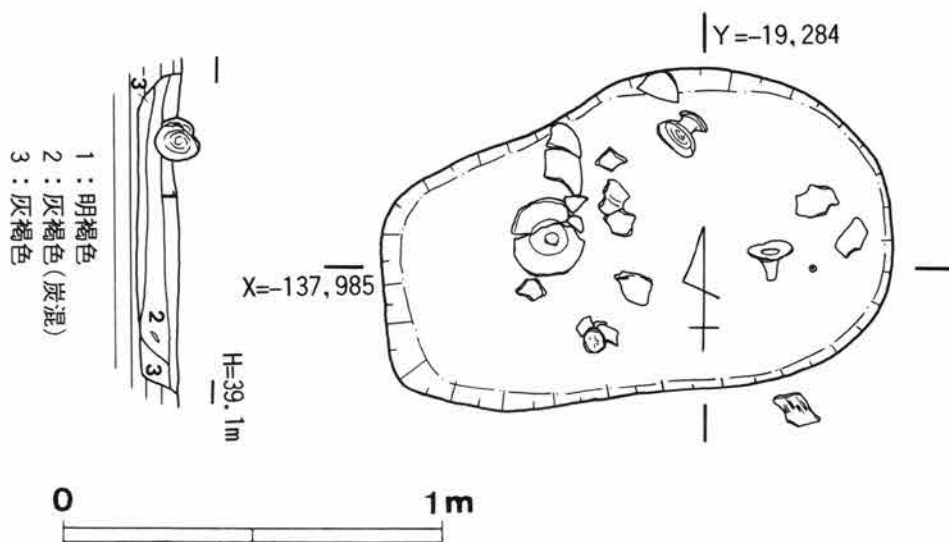
竪穴式住居跡329 竪穴式住居跡82を造る際に削平されているため、四柱穴2つを含む西側の一部が残っていただけであった。西辺は5.5mを測る。

竪穴式住居跡237 11番地で確認した住居跡で、南辺および西辺と周囲にめぐる溝を検出した。規模および平面プランは不明である。溝は幅0.5m・深さ0.2mである。上部構造を支える四柱穴は確認できなかった。時期の分かる遺物は出土していない。

竪穴式住居跡238 11番地で確認した住居跡で、北辺および西辺の周壁溝のみ検出した。周壁溝は幅0.2m・深さ0.1mである。5m四方で、上部構造を支える四柱穴は3m間隔で配置されていたと考えられる。

d. 土坑・溝

土坑85(第92図、図版第51-2) 長径1.4m・短径0.85mの楕円形を呈しており、深さは0.1mを測る。埋土は上から明褐色土、炭混じりの灰褐色土、灰褐色土である。土坑内からは土師器



第92図 土坑85実測図

の高杯2点、須恵器の高杯1点と滑石製紡錘車片が出土した。遺物の器種が高杯に限られることと炭が多量に含まれることから何らかの宗教的行為に伴う可能性が考えられる。

土坑83 10番地で検出した溝186の延長線上にあたる地点で、土師器の甑1点と甕2点が並んで押しつぶされた状態で出土した。削平のため平面の輪郭は確認できなかったが、遺物の出土状況から何らかの遺構に伴うものと考えられ土坑と判断していたが、溝186の延長線上にあたることから溝186の一部になる可能性もある。

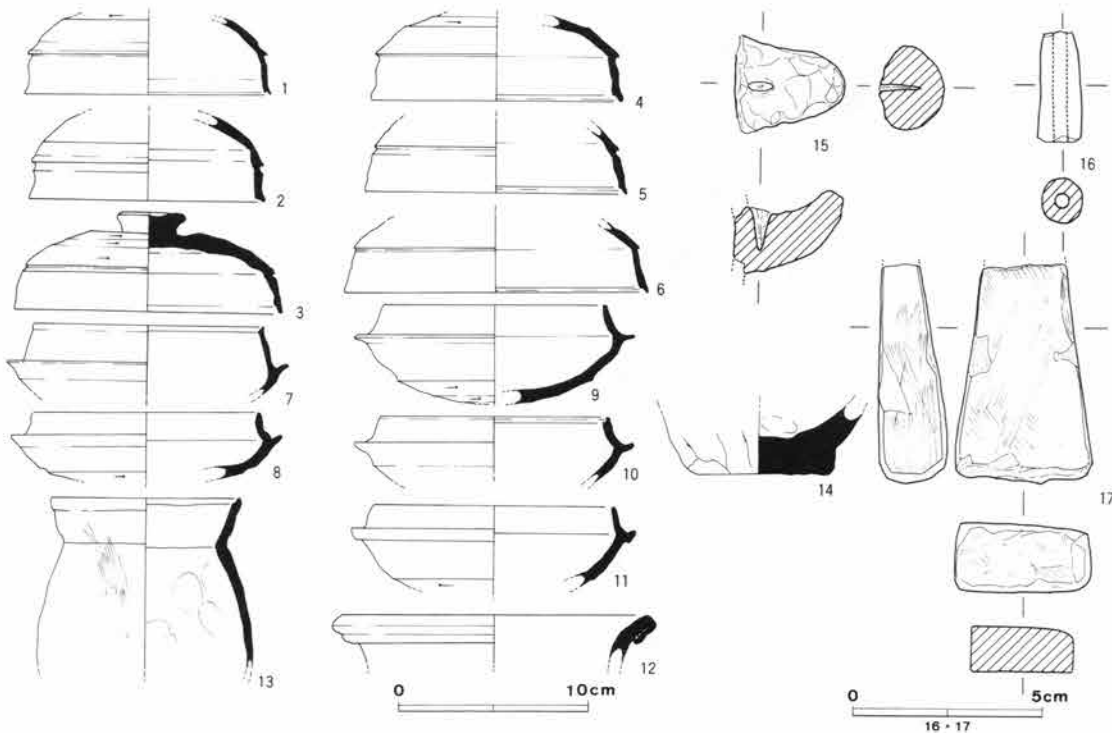
溝4 (図版第51-3) 10番地で検出した幅0.8mの溝で礎が出土した。

溝186 10番地で検出した北西方向に流れる溝である。さらに9番地に続くが、削平のため全く残っていなかった。断面は船底状を呈し、幅1m・深さ0.2mを測る。埋土は、上層が茶褐色土、下層が暗灰褐色砂質土で、下層から土師器がまとまって出土した。検出した柱穴群には溝186より古いものと新しいものの両方が存在する。

e. 出土遺物(第94~95図)

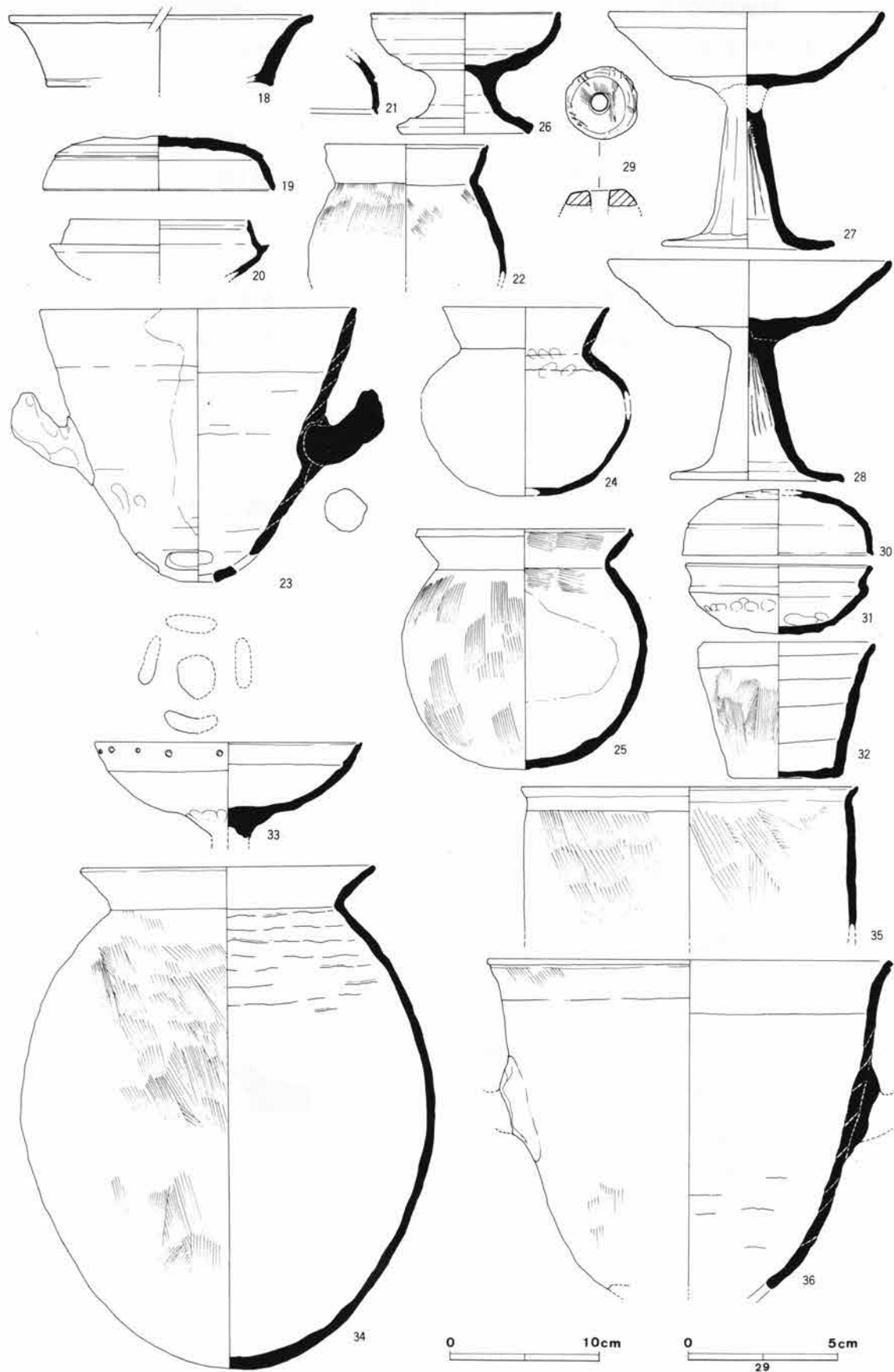
柱穴内出土遺物(第93図) 1~11は須恵器、12は土師器である。須恵器は稜線や口縁部の形態からTK47~MT15型式に併行すると考えられるが、MT15型式を中心とすると考えられる。15はヘラ工具による刺突痕をもつ甑の把手である。14は弥生土器の底部、16は土錘、17は砂岩製の砥石である。また、14番地の柱穴から鉄滓が出土した。

北尻2号墳出土遺物(第94図18) 東辺溝からまとまって出土した土師器片のうち図示できたのは土師器の壺だけである。山陰系の複合口縁壺の口縁部で、古墳時代前期のものである。



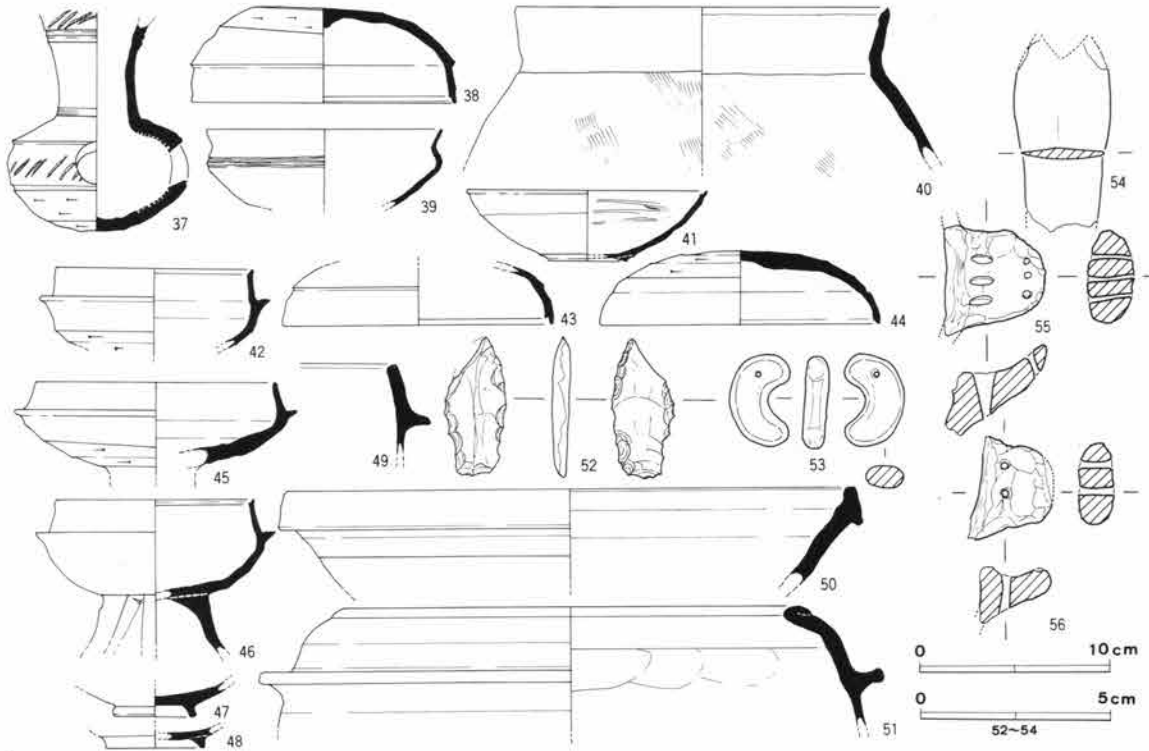
第93図 出土遺物実測図

1. S P 241 2. S P 185 3. S P 324 4. S P 202 5. S P 279 6. S P 244 7. S P 242 8. S P 292
 9. S P 51 10. S P 164 11. S P 325 12. S P 312 13. S P 321 14. S P 187 15. S P 230 16. S P 178
 17. S P 212



第94図 出土遺物実測図

18. 北尻3号墳・19~22. 竪穴式住居跡82・23~25. 土坑83・26~29. 土坑85・30~36. 溝186



第95図 出土遺物実測図

37.溝4 38.溝84 39・40.土坑134 41.溝136 54.溝37 42~53・55・56 L. N. 4 a層

竪穴式住居跡82出土遺物(第94図) 須恵器杯蓋19・21・杯身20と土師器の甕22がある。須恵器は稜線や口縁部の形態からTK10型式に併行する。いずれも住居跡の床面で出土していることから住居の使用時期を示すと考えられる。

土坑83出土遺物(第94図) 土師器の甌23と甕24・25がある。

土坑85出土遺物(第94図) 須恵器の高杯26、土師器高杯27・28、滑石製紡錘車29がある。土師器高杯はいずれも杯部の稜線が明瞭なタイプである。

溝186出土遺物(第94図) 須恵器には杯蓋30があり、形態からTK47~MT15型式に併行する。土師器には鉢31・32、高杯33、甕34、甌35・36がある。高杯33は口縁端部内面に沈線が、口縁部外面には等間隔に円形の刺突文が全部で16個施される。土師器の鉢32の類例は木津町弓田遺跡で見られ、ほぼ同時期の資料である。

土坑・溝および遺物包含層(第4 a層)出土遺物(第95図) 37・38・42~46は須恵器で、おおよそMT15~TK10型式に併行する。39は土師器鉢、40は甕で、55・56はヘラ工具による刺突痕をもつ甌の把手である。52はサヌカイト製石鏃、53は滑石製勾玉、54は鉄鏃である。41・49~51は中世の遺物で、他に土師器や青磁が出土した。41は瓦器碗、50は東播系の摺鉢、49は淀川水系の羽釜、51は大和H型羽釜であり、これらは13C後半の資料である。

(3) B1地区(図版第52)

A. 層位(第96図)

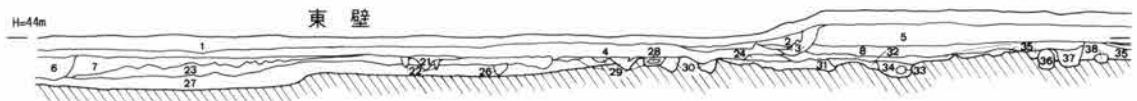
調査区は、南西から北東方向に傾斜しており、最上層には耕作土(L. N. 1)、直下に床土(L. N. 2)が他の調査地同様に堆積している。ほとんど遺物を含まないが、床土下に中近世の堆積層

(L.N.3)が、複雑に堆積している。古墳時代の遺物包含層および遺構検出面である暗茶褐色土層(L.N.4)は、北方に厚く、南方に薄く堆積しており、比較的均一な厚みを呈している。一方、暗茶褐色土層下には暗灰褐色系の砂質土が堆積しており、その下層には、わずかながら弥生土器片を含む暗茶褐色粘土層が堆積している。この層は、厚く堆積している部分で約0.3mを測るが、遺構の検出はできなかった。当該層については、平成9年度A1地区においても検出し、遺構検出作業を行ったが、遺構の検出はできなかった経過がある。

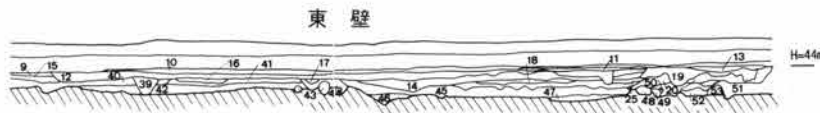
B. 遺構と遺物(図版第53・54)

検出した主な遺構は、掘立柱建物跡・方形区画溝・竪穴式住居跡・井戸・流路・土坑などであり、特に、溝22の上下層からまとまった遺物が出土している。検出遺構が多岐に及ぶため、森垣外遺跡の評価に係わる遺構を中心に概観する。また、出土遺物については、遺構についての記述を割愛した出土遺物についても図示し、概観した。

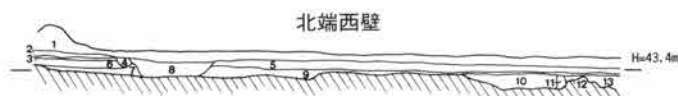
a. 掘立柱建物跡(第97~104図) B1地区において検出した柱穴は、おおむね800を数える。しかし、大半の柱穴は、方形区画溝13・22・979の内側において検出している。なお、委細は後述するが、区画溝13・22・979最下層からは、96~98・116・117・119・210~215などのTK23・47型式の土器が出土しており、最上層からは、TK43型式までの土器が出土している。一方、区画溝22の最上層では、MT15型式に比定できる竪穴式住居跡15・16を検出していることから、方



- | | | | | | |
|--------------------|-------------|--------------------|-------------------|----------|-------------|
| 1:L.N.1 | 2:L.N.1a | 3:灰色土
(水田畦畔下の溝) | 4:L.N.2 | 5:L.N.2 | 6:暗茶褐色土 |
| 7:暗茶褐色土 | 8:暗茶褐色土 | 21:淡黒褐色土
(やや黒い) | 22:淡黒褐色土
(杭あと) | 23:淡黒褐色土 | 24:淡黒褐色土 |
| 26:淡黒褐色土
(やや黒い) | 27:暗灰褐色粘砂質土 | 28:暗灰褐色砂質土 | 29:暗茶褐色土 | 30:淡黒褐色土 | 31:暗茶褐色土 |
| 32:暗灰褐色土 | 33:地山ブロック | 34:濁黄褐色土
(土坑埋土) | 35:濁暗茶褐色土 | 36:柱穴 | 37:柱穴 38:柱穴 |



- | | | | | | |
|-------------|------------|-----------|------------|-------------|-----------------------|
| 9:淡黒褐色土 | 10:L.N.2a | 11:L.N.2b | 12:灰褐色土 | 13:L.N.2b | 14:暗灰褐色砂質土
(やや明るい) |
| 15:淡黒褐色土 | 16:暗茶褐色土 | 17:暗茶褐色土 | 18:暗灰褐色砂質土 | 19:灰褐色砂質土 | 20:暗灰褐色砂質土
(やや明るい) |
| 39:濁茶褐色土 | 40:暗茶褐色土 | 41:暗灰褐色土 | 42:暗茶褐色土 | 43:暗茶褐色ブロック | 44:暗茶褐色土 |
| 45:L.N.13埋土 | 46:濁黄褐色土 | 47:暗茶褐色土 | 48:L.N.12 | 49:灰色ブロック | 50:黒土ブロック |
| 51:暗茶褐色土 | 52:暗灰褐色砂質土 | 53:L.N.13 | | | |



- | | | | | |
|-----------|----------|-----------|----------|------|
| 1:畦畔 | 2:床土 | 3:Fe沈着面 | 4:灰色土 | 5:床土 |
| 6:淡黒褐色土 | 7:暗灰褐色土 | 8:灰色砂 | 9:暗灰褐色土 | |
| 10:濁暗茶褐色土 | 11:暗灰褐色砂 | 12:濁暗茶褐色土 | 13:暗灰褐色砂 | |

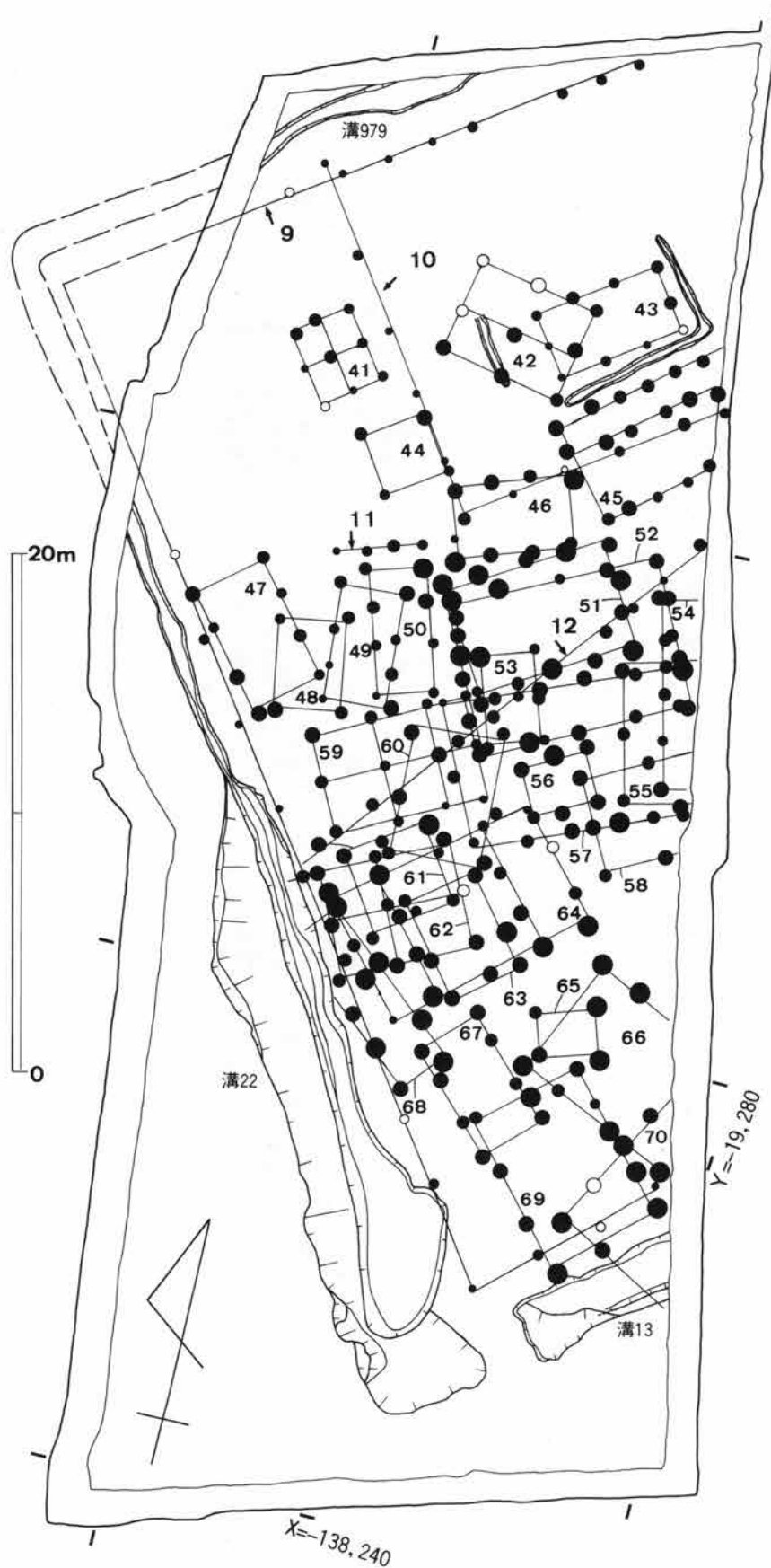


第96図 D1地区土層断面図

形区画溝13・22・979が少なくともMT15型式直前までは機能し、それ以後、TK43型式までの間に徐々に多くの土器などが堆積したと考えられる。なお、掘立柱建物跡として復原する際、柱穴埋土の色調・土質を根拠に作業を進め、地形の傾斜に建物の主軸をとるI期群とそれらとは著しく振れる主軸を有するII期群に分類した。先述した区画溝13・22・979と主軸がおおむね一致する群は、I期の掘立柱建物跡群であり、主要な掘立柱建物跡群としての認識



第97図 B1地区遺構実測図(復原した掘立柱建物跡は平安時代)



第98図 B1地区掘立柱建物跡分布図

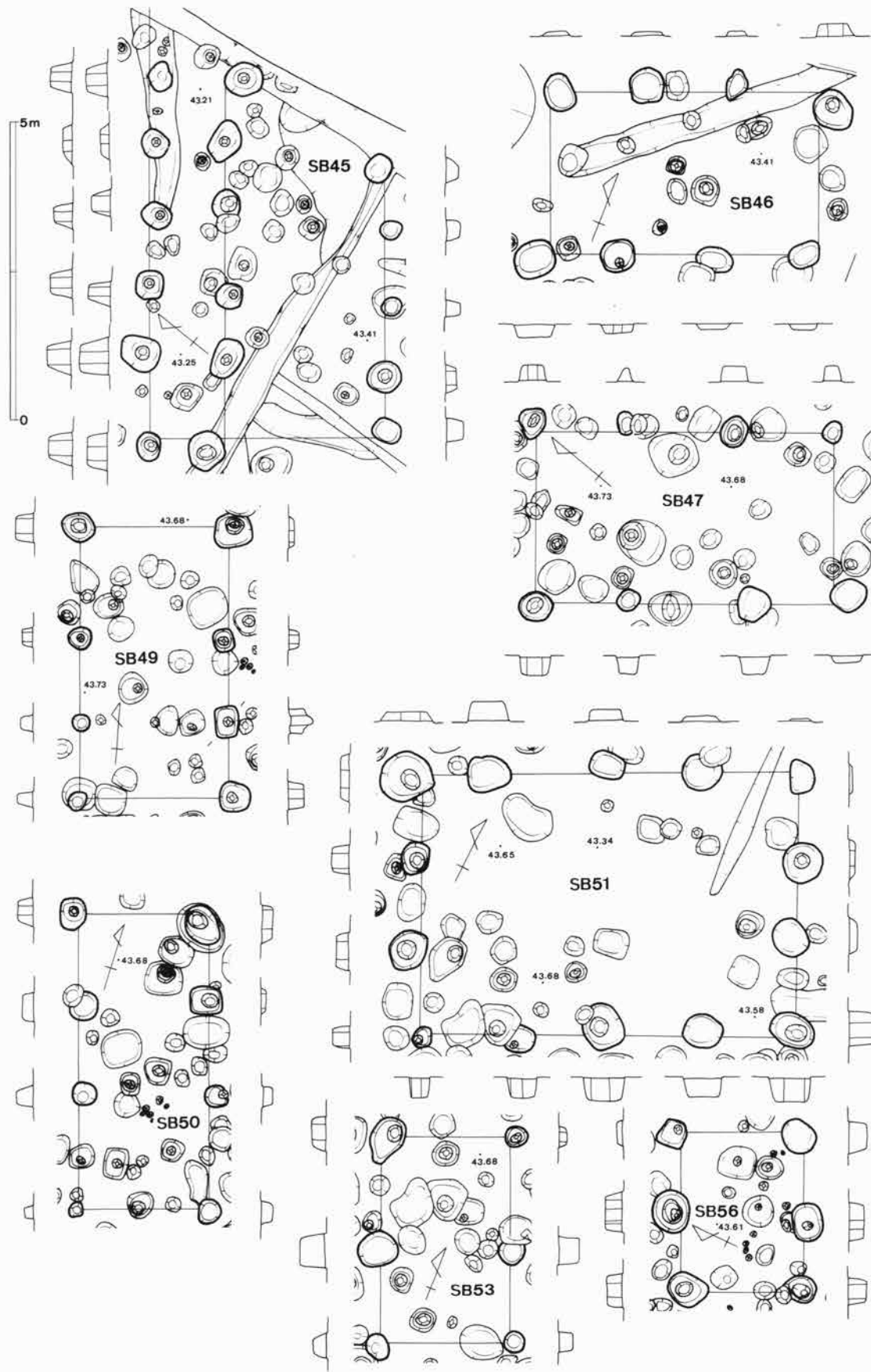
をもち、以下の記述を行った。

掘立柱建物跡 41(第90図) 梁間2間(2.5m)×桁行2間(3m)の規模を有し、北から西へ40°の主軸をもつ。I期に分類でき、床面積は8㎡である。

掘立柱建物跡 43(第90図) 梁間2間(2.7m)×桁行3間(5m)の規模を有し、北から東へ57°の主軸をもつ。検出した位置が、後述する小区画溝878内であるが、多少、主軸がずれており、関連するか否かは明確な根拠をもって認定できない状況である。I期に分類できる。床面積は、13.5㎡である。

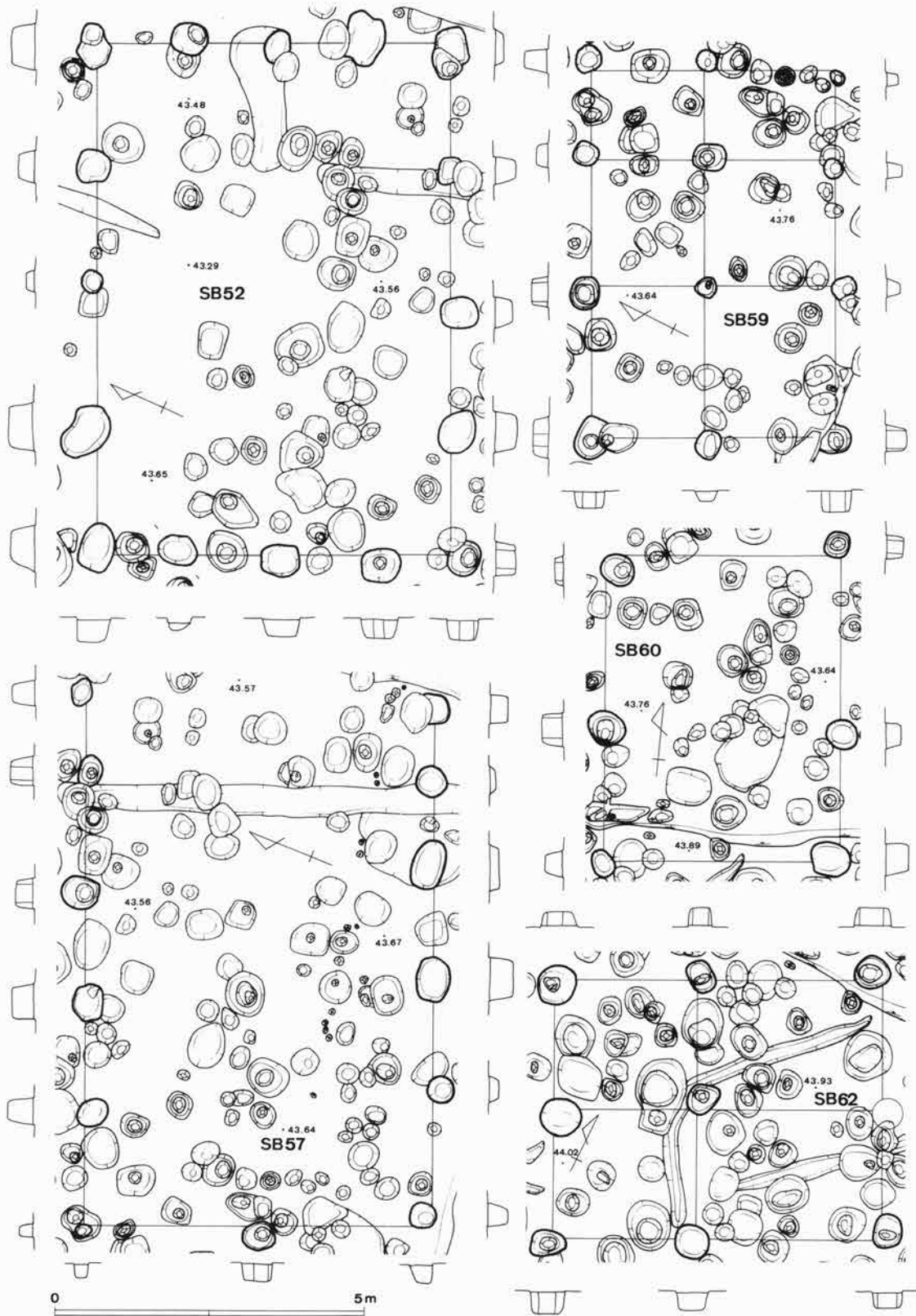
掘立柱建物跡 44(第90図) 梁間1間(2.5m)×桁行1間(2.6m)の規模を有し北から西へ30°の主軸をもつ。I期に分類でき、床面積は、6.5㎡である。

掘立柱建物跡 45(第99図) 梁間2

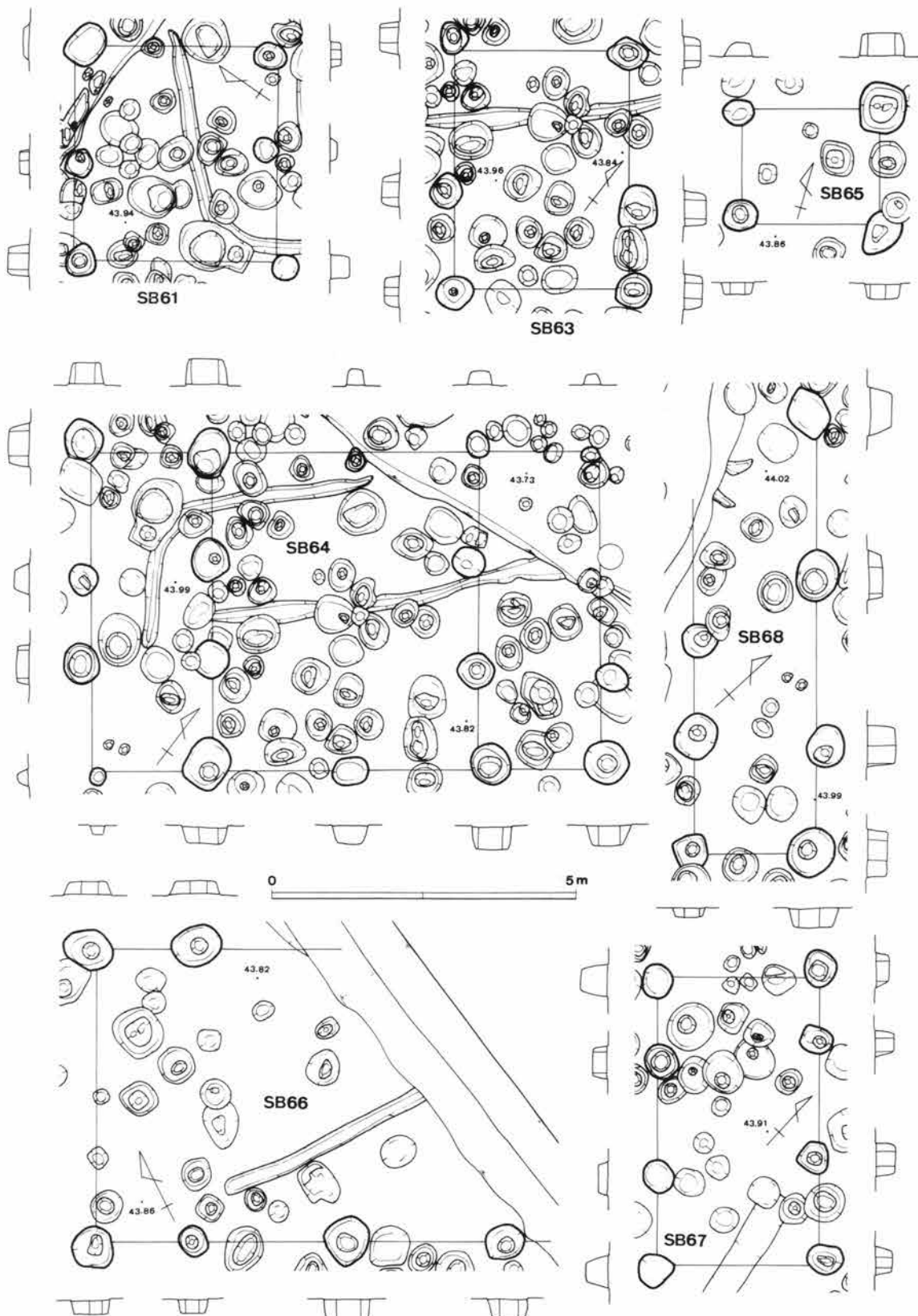


第99図 掘立柱建物跡45～47・49～51・53・56実測図

間(2.7m)×桁行5間(6m)以上の規模を有し、北西面には、1間(1.2m)の廂が付く。梁間の中央では、柱穴を検出していないが、桁行2間分に相当することから、2間として認識した。北から東へ52°の主軸をもつ。I期に分類できる。



第100図 掘立柱建物跡52・57・59・60・62実測図



第101図 掘立柱建物跡61・63～68実測図

掘立柱建物跡46(第99図) 梁間1間(2.7m)×桁行3間(4.6m)の規模を有し、北から東へ67°の主軸をもつ。Ⅱ期に分類でき、床面積は12㎡である。

掘立柱建物跡47(第99図) 梁間2間(2.9m)×桁行3間(5m)の規模を有し、北から西へ37°の主軸をもつ。Ⅰ期に分類でき、床面積は15㎡である。

掘立柱建物跡49(第99図) 梁間1間(2.6m)×桁行3間(4.6m)の規模を有し、主軸の方位は、おおむね真北と一致している。Ⅱ期に分類でき、床面積は12㎡である。

掘立柱建物跡50(第99図) 梁間1間(2.2m)×桁行3間(4.9m)の規模を有し、北から西へ20°の主軸をもつ。Ⅱ期に分類でき、床面積は11㎡である。

掘立柱建物跡51(第99図) 梁間3間(4.4m)×桁行4間(6.4m)の規模を有し、北から東へ62°の主軸をもつ。Ⅰ期に分類でき、床面積は28㎡である。

掘立柱建物跡52(第100図) 梁間4間(5.8m)×桁行4間(8.2m)の規模を有し、北から東へ62°の主軸をもつ。掘立柱建物跡51と同じく、規模の大きい掘立柱建物跡である。Ⅰ期に分類でき、床面積は48㎡である。

掘立柱建物跡53(第99図) 梁間1間(2.1m)×桁行2間(3.5m)の規模を有し、北から西へ23°の主軸をもつ。Ⅱ期に分類でき、床面積は7㎡である。

掘立柱建物跡56(第99図) 梁間1間(2.1m)×桁行2間(2.7m)の規模を有し、北から東へ65°の主軸をもつ。Ⅰ期に分類でき、床面積は6㎡である。

掘立柱建物跡57(第100図) 梁間2間(5.6m)×桁行5間(8.7m)以上の規模を有し、北から東へ67°の主軸をもつ。Ⅰ期に分類できる建物跡である。

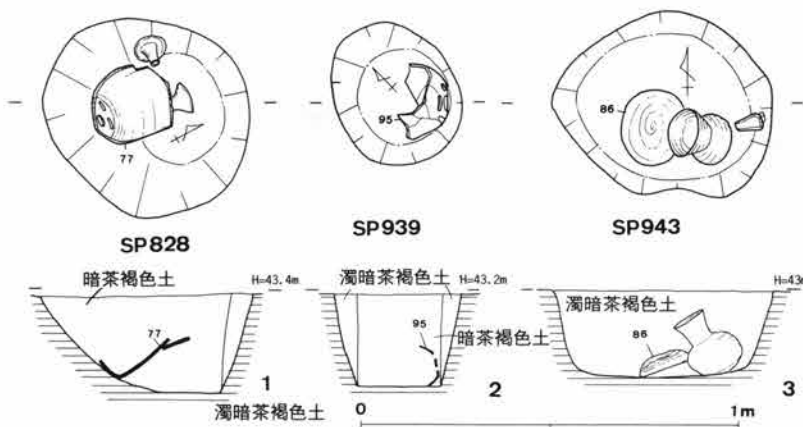
掘立柱建物跡59(第100図) 梁間2間(3.9m)×桁行3間(5.8m)の規模を有し、北から東へ60°の主軸をもつ。Ⅰ期に分類でき、床面積は23㎡である。

掘立柱建物跡60(第100図) 梁間2間(3.8m)×桁行2間(5m)の規模を有し、真北とおおむね一致する主軸をもつ。梁間の中央柱穴が未検出であるが、小規模な掘立柱建物跡であることを勘案すると、浅い柱穴が穿たれていた可能性もある。Ⅱ期に分類でき、床面積は19㎡である。

掘立柱建物跡61(第101図) 梁間2間(3.3m)×桁行2間(3.5m)の規模を有し、北から東へ57°の主軸をもつ。Ⅰ期に分類でき、床面積は12㎡である。

なお、梁間、桁行ともほぼ同じ長さを有し、正方形プランを呈することから、倉庫などの非居住空間であった可能性が高い。

掘立柱建物跡63(第101図) 梁間1間(2.9m)×桁行3間(3.9m)の規模を有



第102図 柱穴828・939・943実測図

し、北から東へ39°の主軸をもつ。I期に分類でき、床面積は11㎡である。

掘立柱建物跡64(第101図) 梁間2間(4.4m)×桁行3間(5.3m)の規模を有し、北から東へ37°の主軸をもつ。東西両面に廂をもち、廂を含めた長さは8.4mを測る。I期に分類でき、床面積は23㎡である。一連の掘立柱建物跡の中で中核をなす建物である可能性が想定できる。

掘立柱建物跡65(第101図) 梁間1間(1.8m)×桁行1間(2.3m)の規模を有し、北から東へ72°の主軸をもつ。II期に分類でき、床面積は4㎡である。

掘立柱建物跡66(第101図) 梁間2間(4.8m)×桁行3間(7.3m)以上の規模で、北から東へ30°の主軸をもつ。II期に分類できる。

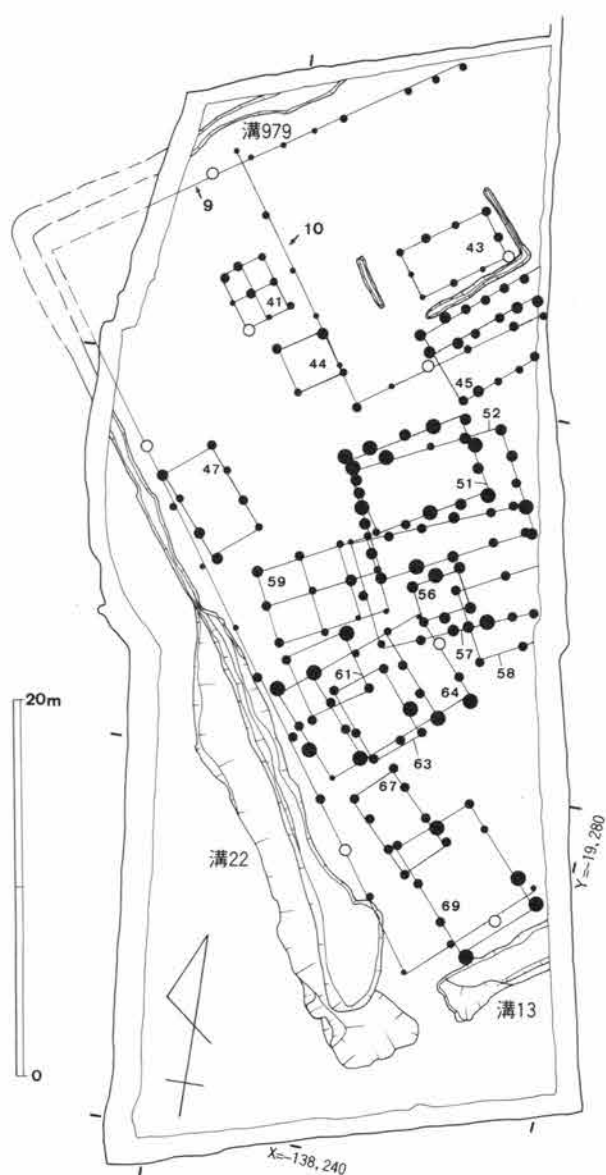
掘立柱建物跡67(第101図) 梁間1間(2.7m)×桁行3間(4.8m)の規模を有し、北から東へ42°の主軸をもつ。I期に分類でき、床面積は13㎡である。

以上が検出した主要な掘立柱建物跡の概観である。しかし、各時期毎においても重複して掘立

柱建物跡を検出しており、さらに、細かく時期設定を想定する必要がある。今後の課題としておきたい。

これらの掘立柱建物跡群は、基本的には区画溝13・22・979によって圍繞された範囲内に位置しているが、区画溝の内側には、溝と平行して小柱穴が穿たれており、柵の存在が想定される。柵9は、区画溝の北・西・南辺において1列で構成されており、柱穴自体は、掘立柱建物跡を構成する柱穴よりもやや直径が小さい傾向が見られる。一方、柵10は、柵9の西辺から10.5m、同じく柵9の北辺から16mの交点を中心に直角に配置されている。柵9とは直角ないしは平行関係にあることから、両柵は、同時併存していた可能性が高い。この2条の柵は、中核期をなすI期の掘立柱建物跡群とも併行関係にあり、方形区画溝と柵、そして、掘立柱建物跡からなる中核的施設の構造が、明らかになった。なお、溝22の堆積土から土手などに生育するイラクサの花粉が検出されており、区画溝内外のいずれかに堤が構築されていた可能性が高い。次に、特徴的な柱穴について概観しておきたい。

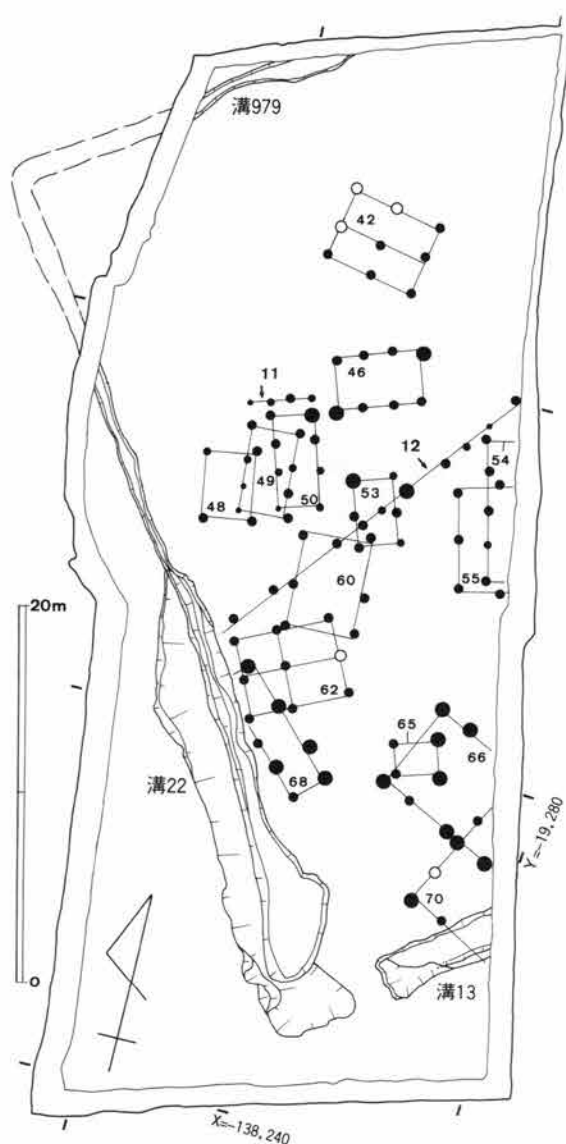
柱穴828(第102図1、図版第55-3) 検出



第103図 I期掘立柱建物跡分布図

面における掘形直径は、おおむね0.6mであり、やや不整円形を呈している。深さは0.28mであるが、南西部分については、ゆるやかな傾斜面を形成していることから、柱根の抜き取り時に柱穴の肩部を削り込んだことが想定できる。一方、北東部では、掘形の埋土がわずかではあるが確認できた。抜き取り痕を示す明確な埋土の輪郭は、断面においても十分、認識できなかったが、抜き取り跡から土師器の甑(77)と土師器の高杯脚部が2点出土した。各個体の一部が地山面に接していることから、柱根抜き取り直後に投棄されたと考えられる。出土状況からていねいに埋納されたとは考えられないが、甑および高杯脚部であることから、何らかの宗教性を看取できる。

柱穴939(第102図2、図版第56-1) 検出面における掘形直径は、おおむね0.34mを測り、深さは0.25mを測る。また、柱痕の直径は、0.2mであり、ほぼ垂直に樹立されていたことが断面で観察できる。柱痕の最下部から柱穴828と同じく土師器の甑底部(95)が横位の状態で出土した。出土状況からていねいに埋納されたとは考えられないが、破碎された甑の出土は、何らかの宗教的意義を看取すべきである。



第104図 II期掘立柱建物跡分布図

柱穴943(第102図3、図版第55-2) 検出面での掘形直径は、0.58mを測り、深さは0.25mである。ていねいな断面観察を繰り返したが、柱痕を示す輪郭線は確認できなかった。柱穴底面からは須恵器の杯蓋(86)と土師器の直口壺が埋納された状況で出土した。おそらく、柱根の抜き取り直後に埋納されたと考えられるが、建物と密接に関係する宗教的儀礼に使用された土器を意図的に埋納した可能性が指摘できる。なお、古墳時代後期前半の埋葬施設の副葬品として土師器の直口壺が、1点のみ出土する事例が、多くの地域で確認されているが、埋葬に係わる宗教的儀礼と建物に係わる宗教的儀礼で使用する土器に共通器種および器形が使用される事実は、興味深い現象である。当該柱穴の埋納土器をその典型例として認識しておきたい。なお、柱穴587からは土師器の甑(図版第57-3)、柱穴889・945(図版第57-1・2)では柱根を確認した。最後に、掘立柱建物跡群の時期設定についてふれておきたい。

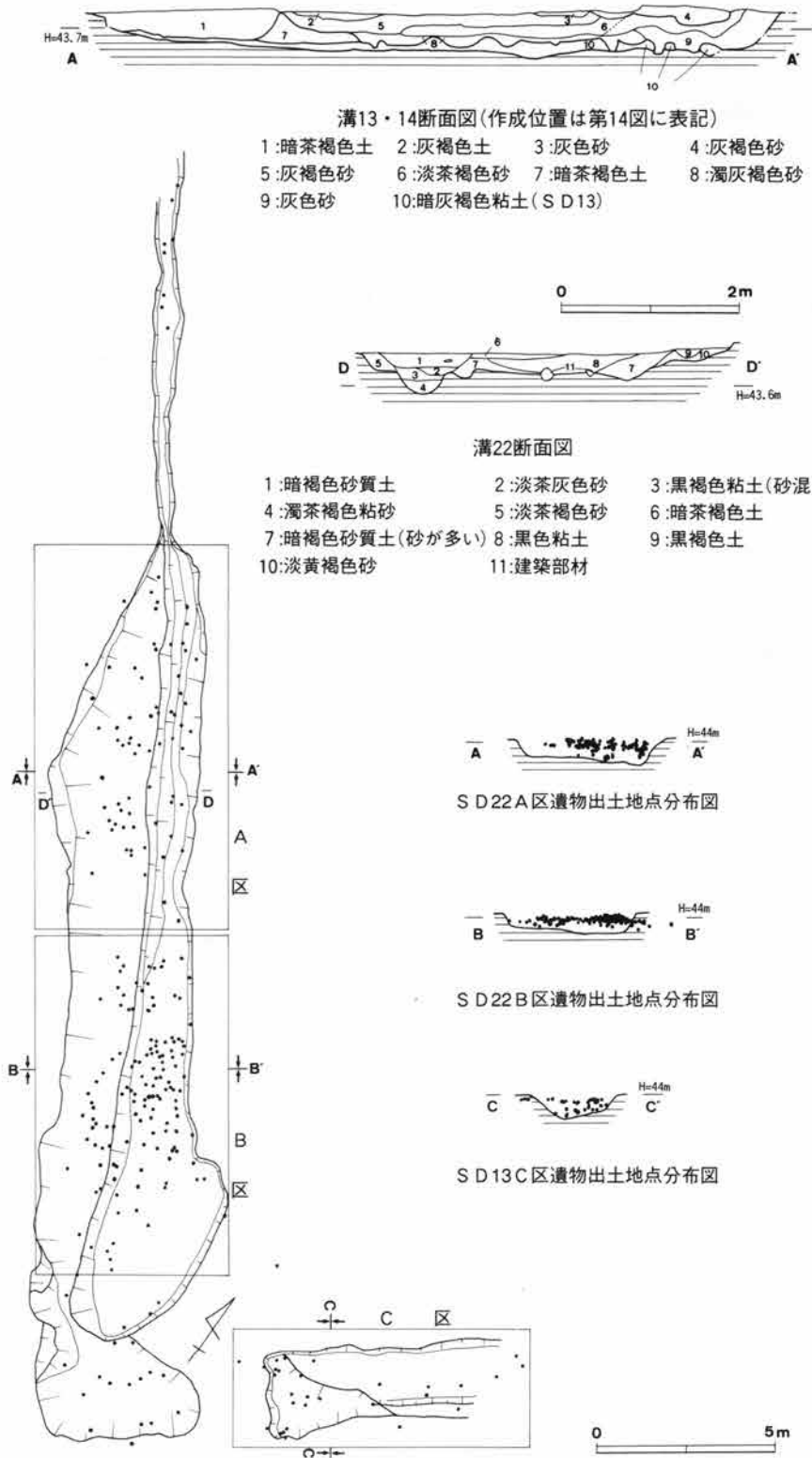
掘立柱建物跡の主軸が、方形区画溝13・22・979および柵9の主軸と一致するI群とおおむね磁北に主軸をもつII群に分類することができ

ることは先述した。掘立柱建物跡の規模が相対的に大きく、区画溝と主軸が一致するⅠ期の掘立柱建物跡群(第103図)こそが、森垣外遺跡での集落成立期の一群であり、比較的小規模の掘立柱建物跡が主体をなすⅡ期の一群(第104図)は、それより後出する掘立柱建物跡である可能性が指摘される。しかし、具体的な時期比定は、森垣外遺跡全体の中で考慮すべき問題でもある。今後

の調査成果を勘案し、検討を深めていきたいと思う。

b. 方形区画溝13・22・979(第97図、図版第55-1・2) Ⅰ期の掘立柱建物跡群を圍繞する方形区画溝は、南辺を溝13、西辺を溝22、北辺を溝979として調査をすすめた。

溝13は、遺構検出面での最大幅は、2.6mを測り、最深部で0.38mを測る。溝の最上層は、奈良時代の池沼状遺構S X14によって削り取られており、明確な輪郭は認識できなかったが、土層断面を確認する目的で設定した断ち割り断面(第105図)の観察により堆積状況などが把握できた。一方、溝13の下層には、幅4~6mの流路内でよく見られる堆積土を確認しており、C地区北端部で検出した流路4・5との関連が想定される。明確な

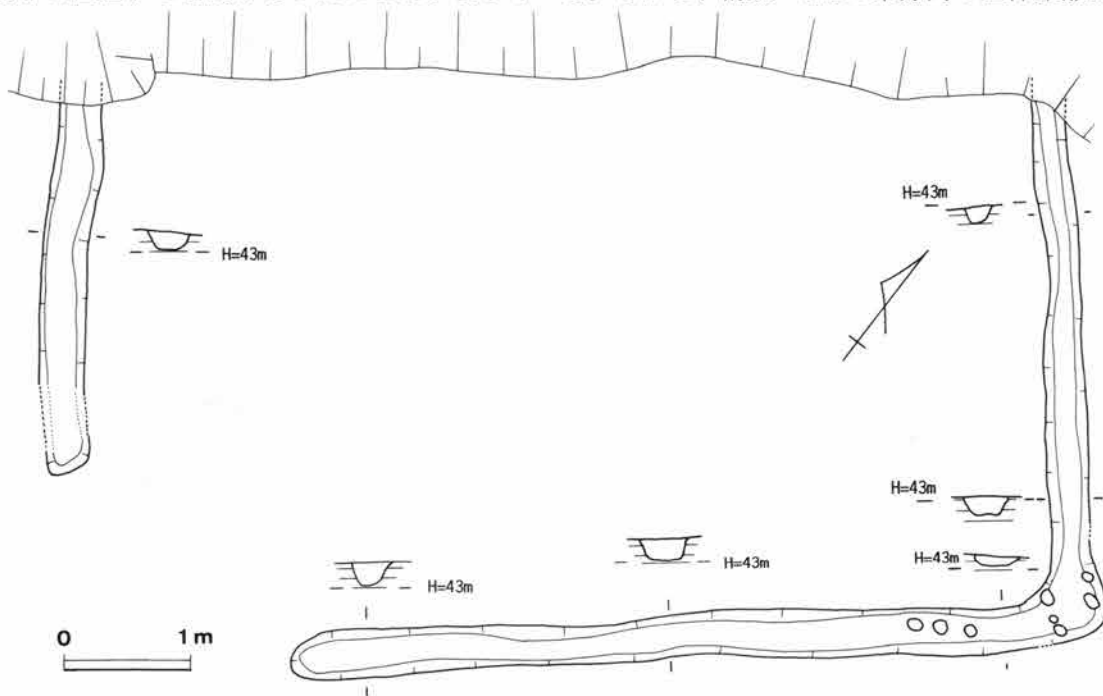


切り合いが確認できなかったが、溝13とC地区流路4・5は、同時に併存した可能性がある。最下層からは、TK23～47型式に比定できる土器が出土している。

一方、溝22(図版第58-3)は、検出幅が約5m、深さが0.3mを測り、その内側には幅0.7～2m・深さ0.63mの溝が一段深く掘り込まれている。上面の溝は、地形が傾斜し、削平深度が深くなるB1地区北方ではすでに消失している。しかし、内側の一段深く掘り込まれている溝は、掘削深度が深いため、徐々に検出面の幅は狭くなるが、調査区西壁部にまで及んでいることが確認できた。溝内から須恵器や土師器とともに建築部材などの製品と考えられる木器が出土している。溝の下層では、概してTK23・47型式に比定できる土器が出土する傾向が見られ、上層では、MT15からTK43型式の須恵器が混在している状況である。特に、下層から出土する土器群は、溝全体の出土量に比べると少なく、土器の出土地点を垂直面(第105図下段)に投影し、出土地点を見れば、多くが上層に集中する傾向が見られる。なお、堆積土から土手に生育するイラクサなどの草本類の花粉が検出されている。区画溝内外のいずれかに堤が築かれていたのであろうか。

溝979は、方形区画溝の北辺をなす幅0.4～0.8m・深さ0.4mを測る溝である。断面は、「U」字形を呈しており、わずかに蛇行している。基本的な埋土は、暗茶褐色土であるが、部分的に暗茶褐色砂質土の堆積が観察できる。出土遺物の大半は土器であるが、木片の出土がわずかながら認められる。土器には第115図210～215に見られるように、TK23～47型式に比定できる蓋杯や壺・蓋などがある。これらの土器群は、溝22下層出土土器と同型式である。

これらの直交ないし平行する3条の溝は、位置関係と出土遺物から同時期に併存したと考えられ、また、区画内部で確認された掘立柱建物跡とも同時期であることから、中核的な掘立柱建物跡群を区画する目的があったことを示唆している。しかし、溝13・979の東方向の延伸距離は測



第106図 溝878実測図
溝の埋土は暗茶褐色土の単一層

定できず、全体の規模については不明であり、今後の発掘調査に期したい。溝22の直線距離は、おおむね46mである。

c. 小区画溝878(第106図、図版第61-3)

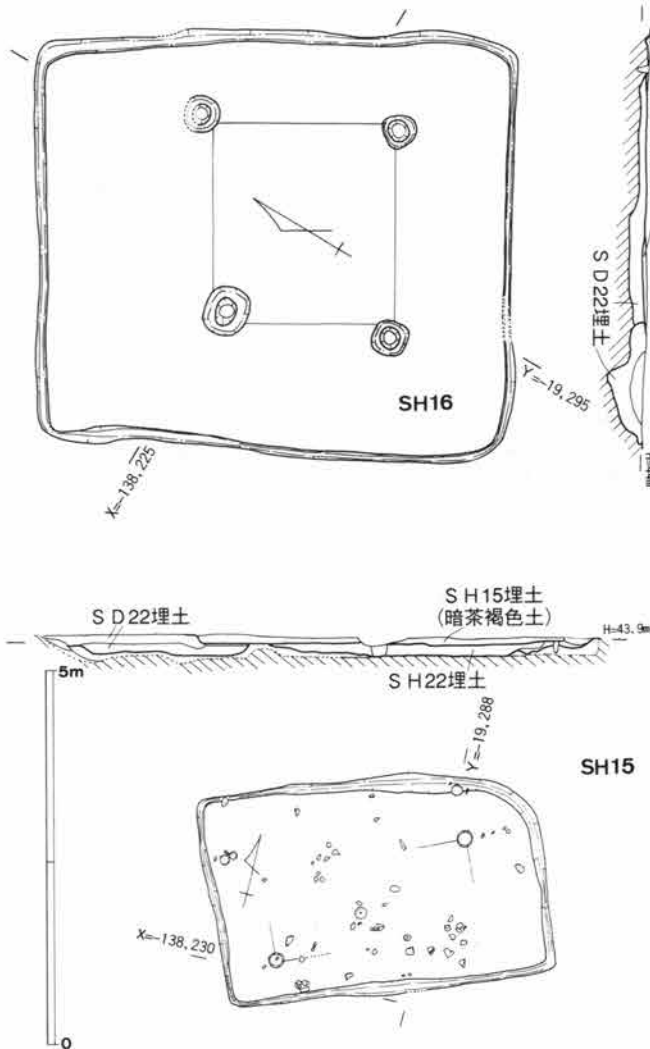
B1-3地区の流路875の南部分で検出した方形溝である。北西辺は、TK10~43型式の土器を多く含む流路875により消失していることから、開削時期は、流路875埋没以前に想定できる。検出した3方向の溝幅は、0.3mであり、深さはおおむね0.2mと均一である。削平部分を想定する必要があるが、溝底は凸凹せず、意図的に均一に開削されたと考えられる。西方の溝と南方の溝は、接続せず、区画溝南隅には、掘り残し部がある。溝の開削深度が約0.2mであることから、後世の削平を免れ、陸橋状を呈したとは考えられず、意図的に掘り残したと考えるべき状況である。平成9年度のA1地区で検出した大壁住居跡635と類似する性格も視野に入れる必要があるが、溝底には柱穴や杭跡もなく、当該溝が建物の基礎であった可能性は少ない。I期の掘立柱建物跡群と主軸がおおむね一致していることから、中核的な掘立柱建物跡群を形成する一部の施設として考えておきたい。なお、溝で区画された内側では、掘立柱建物跡43を検出しており、その

関連を検討する必要がある。また、溝内から第119図316・322に見られるようにTK208型式ないしTK23・47型式の土器が出土している。溝875との切り合い関係に矛盾はない。

d. 竪穴式住居跡15・16(図版第58-1・2)

B1地区において明確な輪郭を認識できた竪穴式住居跡は、2基のみである。しかし、他に竪穴式住居跡の隅部の周壁溝らしき溝23(第97図)なども検出しており、2基以上の竪穴式住居跡が存在した可能性は極めて高い。

竪穴式住居跡15(第107図)は、先述した方形区画溝22の最南端部で検出したため、下層の溝と竪穴式住居跡の埋土の識別が極めて困難であった。そのため、平面的な遺構輪郭の検出とともに断ち割りによって断面観察を行った。その結果、東西4.4m、南北2.9mの不整形な長方形プランを呈し、検出面から床面までの深さは、0.2mを測



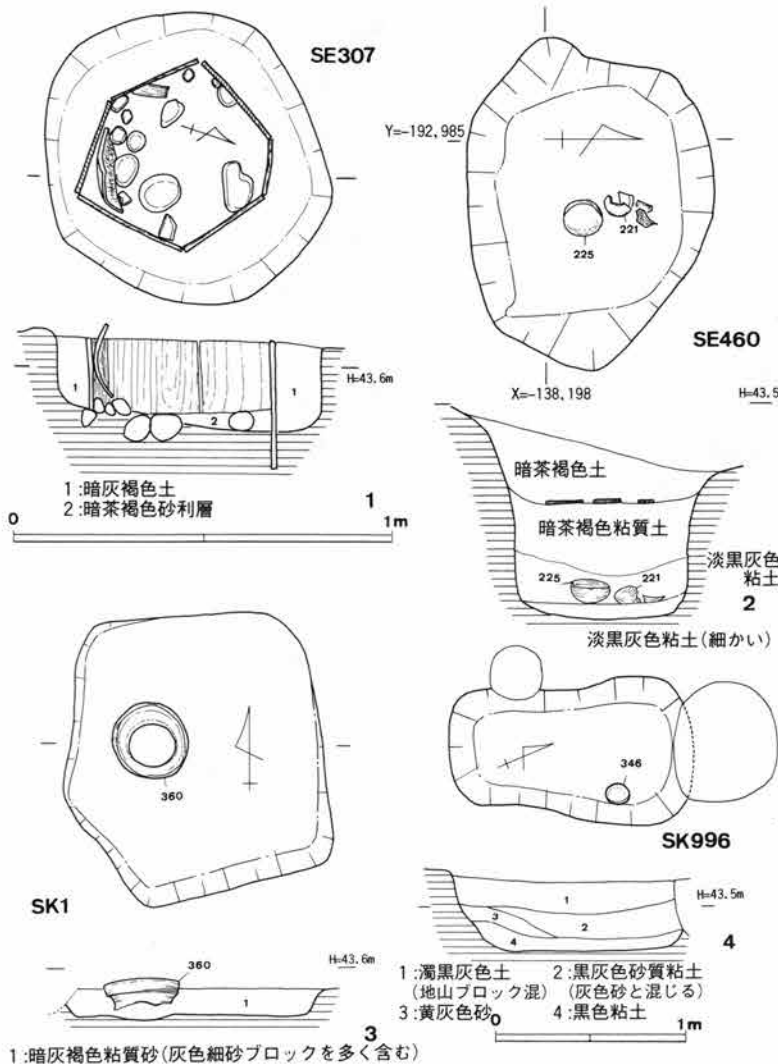
第107図 竪穴式住居跡15・16実測図

る。上部構造を支える四柱穴は、2か所では検出できたが、他は、確認できなかった。埋土も暗茶褐色土の単一層であり、床面から第115図231～246の土器が出土した。

竪穴式住居跡16(第107図)は、同じく溝22の最上面で検出したが、溝22の上面で検出した部分は、埋土がほとんど残存しておらず、溝22以西において暗茶褐色土の埋土を確認したに過ぎない。上部構造を支える四柱穴は、南北が2.4m、東西が2.6mの間隔で配置されている。床面からわずかな遺物が出土している。なお、床面で検出した井戸307(第108図)は、後述するように、当該住居跡にともなう遺構である可能性が高い。

これら2基の竪穴式住居跡は、出土遺物からおおむねMT15型式に比定できる。先述した溝22の開削時期がTK23～47型式であり、その上位に位置する竪穴式住居跡群がMT15型式であることから、方形区画溝の存続時期を決する上で重要な根拠を提示する遺構でもある。それとともに、掘立柱建物跡から竪穴式住居跡へと変化する現象が確認できたことは、森垣外遺跡の遺構変遷を考慮する上で重要な根拠を得たといえる。

e. 井戸・土坑・流路等(第108図) B1地区では、多くの遺構を検出した。ここでは、主要な遺構を抽出し、概観するに止めたい。

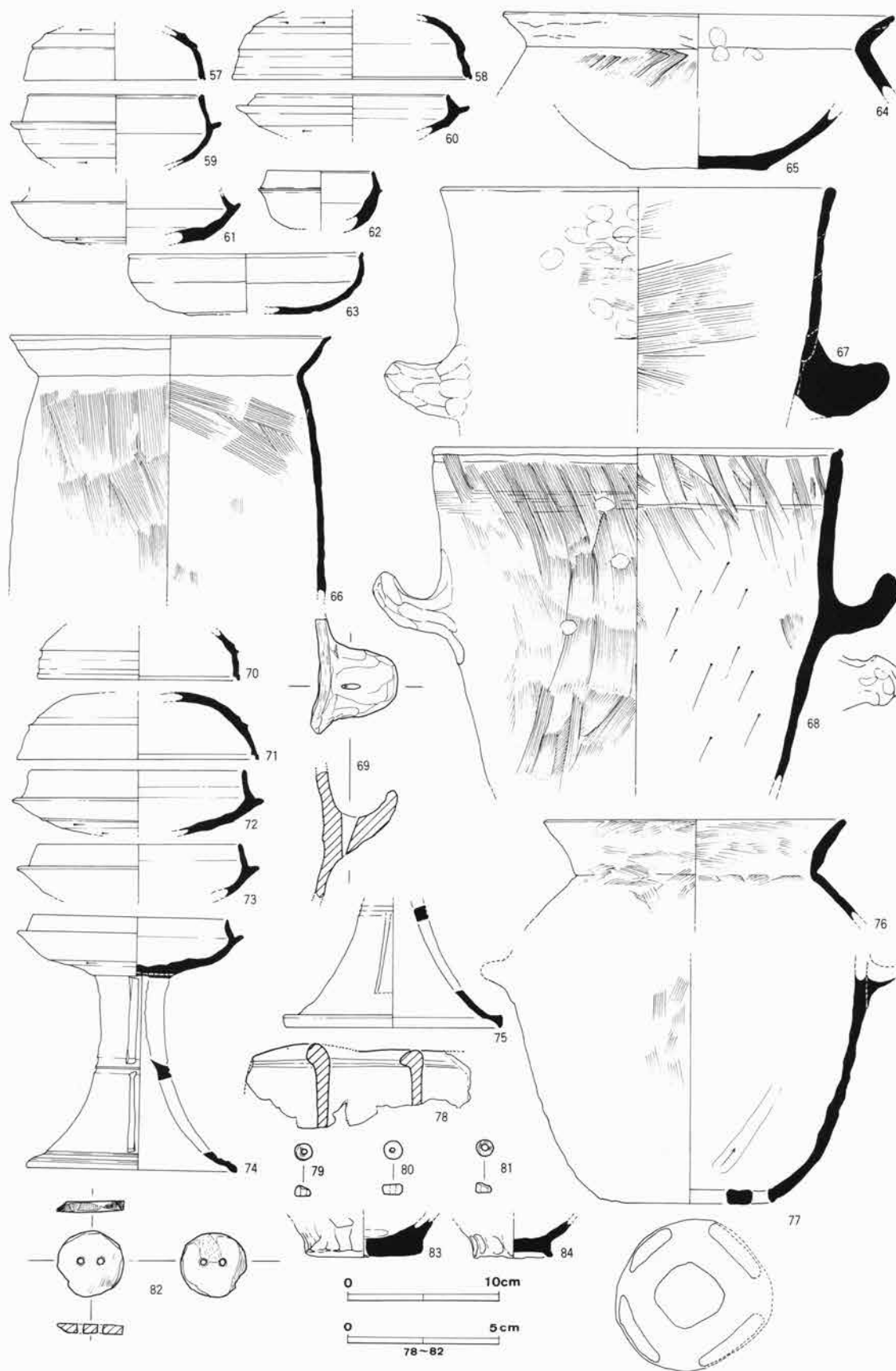


第108図 井戸・土坑実測図

1. 井戸307 2. 井戸460 3. 土坑1 4. 土坑996

な遺構を抽出し、概観するに止めたい。

井戸307(第108図1、図版第59-1・2) 竪穴式住居跡16床面で検出した井戸跡である。直径0.75mの不整円形の掘形内に、不整六角形を呈するように打ち込まれた薄い木板の井筒からなる。大半の木板は、掘形底面の礫群上面まででとまっているが、北端の木板は、掘形底面が細砂層であるため、掘形底部を貫通し、下層に堆積する砂利層まで打ち込まれている。きわめて小規模な井戸であるため、集落内で必要な飲料水を確保するための用途は想定できず、竪穴式住居跡16の屋内に設けられた取水施設と考えておきたい。なお、当該遺構は、井筒内の堆積状況と井筒底面が砂層であるこ



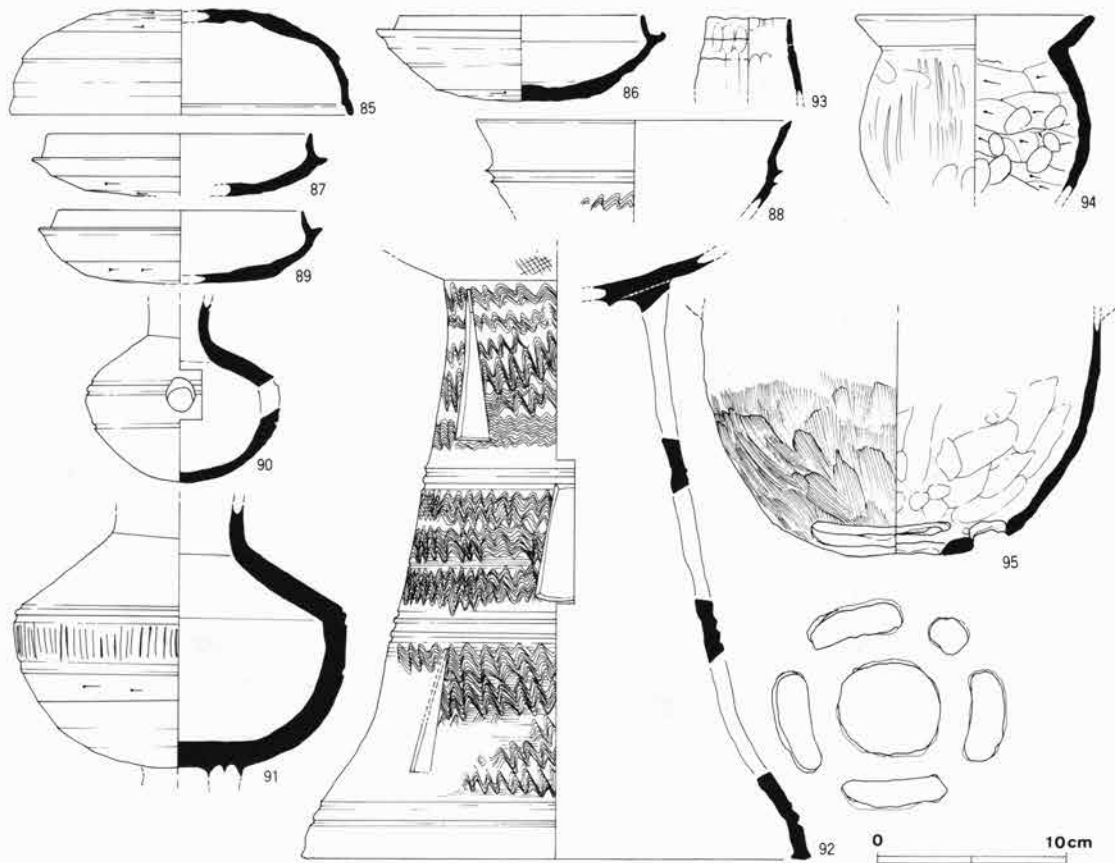
第109図 出土遺物実測図

- | | | | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|----------------|-------------|
| 57. S P 613 | 58. S P 420 | 59. S P 31 | 60. S P 497 | 61. S P 496 | 62. S P 525 | 63. S P 494 | 64・65. S P 425 | 66. S P 370 |
| 67. S P 843 | 68. S P 80 | 69. S P 712 | 70. S P 813 | 71. S P 782 | 72. S P 650 | 73. S P 695 | 74. S P 815 | 75. S P 698 |
| 76. S P 481 | 77. S P 828 | 78. S P 438 | 79. S P 7 | 80. S P 8 | 81. S P 11 | 82. S P 565 | 83・84. S P 783 | |

とから、湧水を目的にした井戸としての機能を有していたと判断できる。住居跡16と当該遺構が密接に関連する決定的な根拠がないため、別に記述した。

井戸460(第108図2、図版第60-1・2) B1-2地区とB1-3地区の境部で検出した遺構である。検出面の輪郭は、不整な方形を呈しており、南北1.3m・東西1.65mを測る。また、井戸底面は、南北0.9m・東西1.15mを測ることから元来、方形の井戸枠を有していたことが分かる。検出面から井戸最深部までは、南端で1m、北端で0.8mを測る。井戸内の堆積状況は、放置された井戸枠を確認した層が、暗茶褐色土層であり、中間層として暗茶褐色粘質土層が堆積している。また、まとめて土器が出土した層は、淡黒褐色粘土層であり、その下層にわずかではあるが、淡黒褐色砂質土層が堆積している。基本的には、井戸枠材は抜き取られているが、抜き取り作業以後に、第115図216・219・221・225に図示した土器群が、埋納されたと考えられる。

土坑1(第108図3、図版第57-3) B1-2地区最南端で検出した南北1.34m・東西1.2mの方形プランを有する土坑である。土坑検出面から底部までの深さは、0.15mであり、埋土は、暗茶褐色土の単一層である。土坑からの出土遺物には、埋土中に土師器細片が混入しているが、須恵器の甕360が、口縁部を上位にした状態で埋納されていた。土師器細片が出土していることから廃棄を目的に穿たれた土坑である可能性も指摘されるが、甕の口縁部のみを埋納している点を考慮すれば、何らかの宗教的要素をその出土状況に見出すことができる。



第110図 出土遺物実測図

- | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 85. S P 886 | 86. S P 943 | 87. S P 913 | 88. S P 923 | 89. S P 958 | 90. S P 888 |
| 91. S P 916 | 92. S P 883 | 93. S P 941 | 94. S P 980 | 95. S P 939 | |

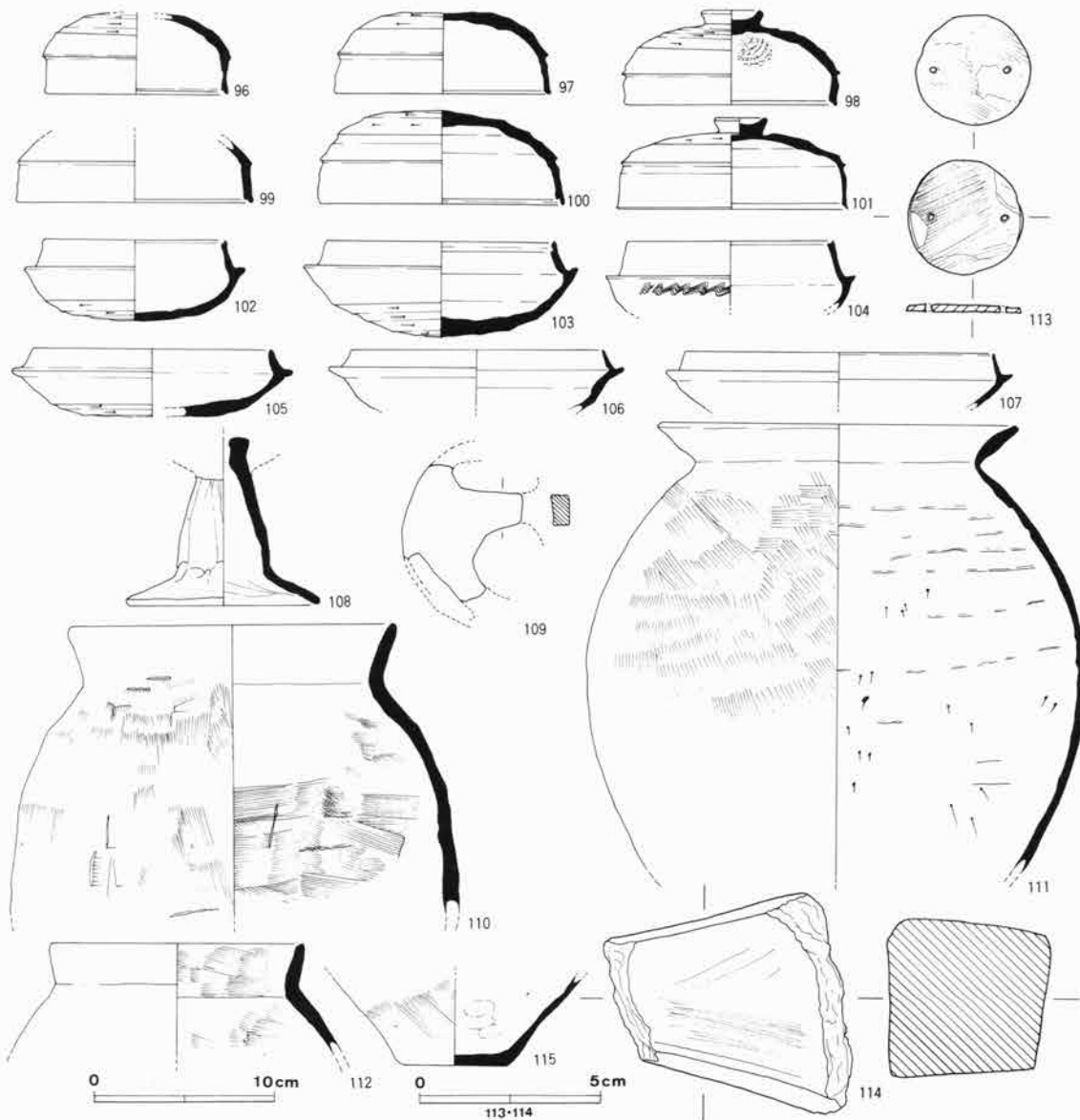
土坑996(第108図4) 南北1.3m・東西0.65~0.8mを測る不整な隅丸方形土坑である。土坑の深さは0.4mを測り、基本的には図示したように3層に分層できる。土坑内から第120図345~346の土器が出土している。

流路875・887(第97図、図版第60-3・図版第62-1・2) B1地区最北端で検出した流路跡であり、流路887が流路875を切り込んでいることが判明した。出土遺物には、TK23~47型式の須恵器も含んでいるが、多くはTK43型式に比定できる土器が多いことから、当該時期に集落内の雨水を効果的に排水する目的で開削されたと考えられる。

土坑876(第97図)は、直径3.5m・深さ0.3mを測る正円形を呈する土坑である。先述した流路875・887を切り込んでおり、TK43型式に比定できる土器が出土している。

f. 出土遺物

集落跡の発掘調査では、古墳の埋葬主体部の調査と異なり、遺構一括資料を中心に図示するだ



第111図 出土遺物実測図(96~115.溝22)

けでは、遺跡そのものの年代観を表出できない場合が多い。そのため、説明を加えていない遺構出土遺物や包含層出土遺物も図示し、型式を中心に概観する。

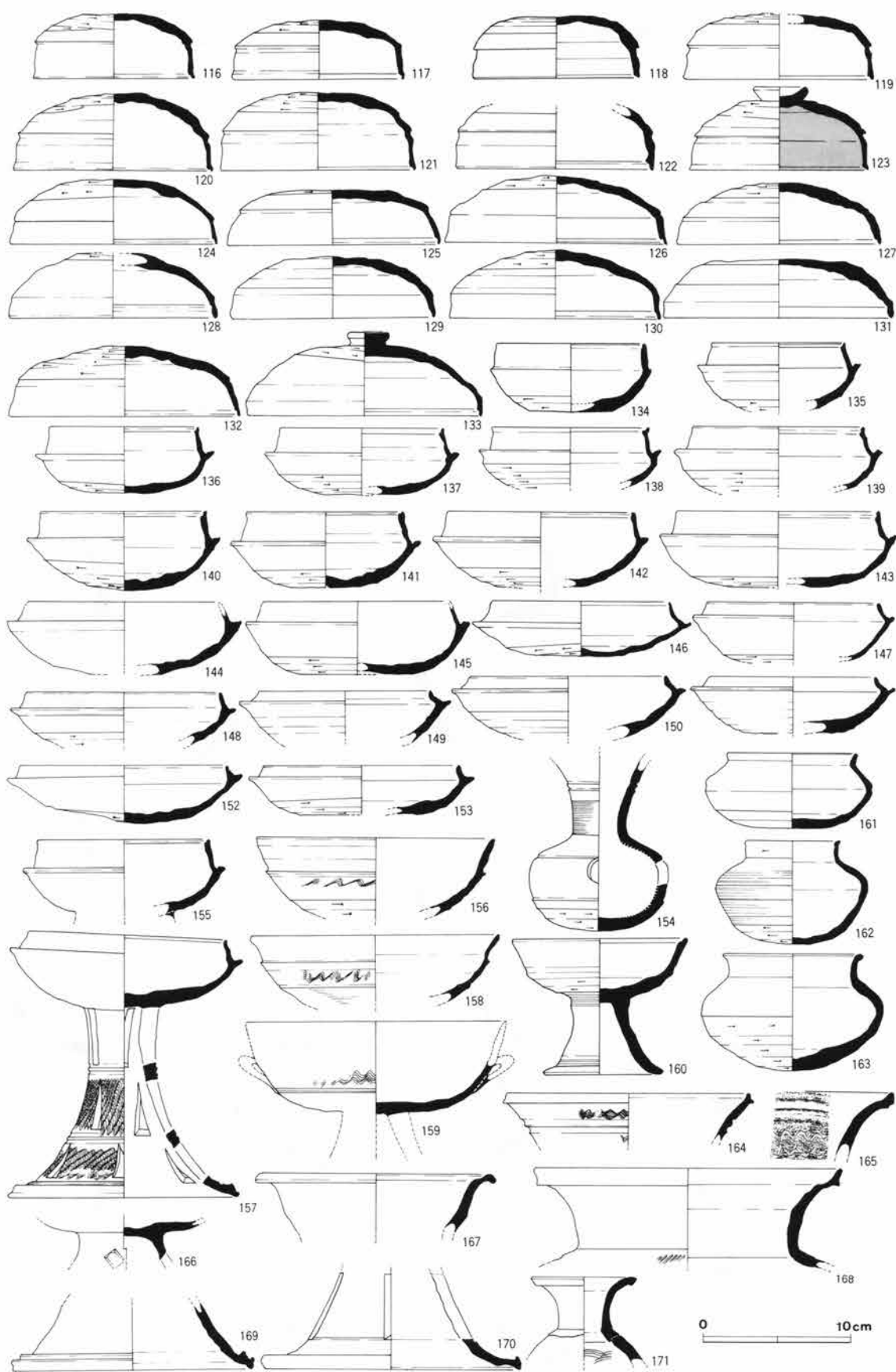
柱穴内出土遺物(第109・110図) 57は、柱穴613出土の須恵器、蓋である。おおむね、MT15型式に比定できる。同型式に比定できる須恵器は、柱穴420・31からも出土している。また、70は、柱穴813から出土したTK23～47型式に比定できる須恵器である。60は柱穴497、61は柱穴496、72～74は柱穴650・695・815から出土したTK43型式に比定できる須恵器である。その他、69は柱穴712から出土した土師器、甑把手である。把手中央部に上位から穿たれた刺突孔がある。77は柱穴828から出土した土師器、甑である。底部中央に隅丸方形の穿孔部を有し、四方に長楕円形の穿孔部を有する。78は、柱穴438から出土した端部が肥厚する鉄製品である。残存率が不良で、全体の形状は不明であるが、内方に肥厚する端部がわずかに湾曲することから、鉄製容器であることも考えられる^(注4)。93は柱穴947から出土した硬質の製塩土器である。胎土・焼成・色調から和歌山県紀淡海峡付近に原籍を求められる。88は柱穴923から出土した無蓋高杯である。鋭く突出する稜からTK23～47型式に比定できる。92は柱穴883から出土した須恵器、器台脚部である。ていねいな波状文と規則的な円形・方形の透かし孔を有しており、TK23～47型式に比定できる。95は、柱穴939から出土した土師器、甑底部である。中央に1孔を穿ち、四方に長楕円形の穿孔をもつが、長楕円形の穿孔部間に直径1.6cmの円孔が穿たれている。このような穿孔は、他の甑には見られず、当該土器の特性であろう。

方形区画溝13出土遺物(第111図) 最下層からは、TK23～47型式に比定できる96・97・101の須恵器が出土しており、最上層ではMT15～43型式に比定できる土器群が出土している。98は、有蓋高杯の蓋であり、内面に青海波文がある。109は、中央に1孔、3方に長楕円形の孔が穿たれた土師器、甑の底部である。石製品としては、113の有孔円板、114の砥石などがある。

方形区画溝22出土遺物(第112～114図) 溝22の最下層からは116～119に見られるようなTK23～47型式に比定できる土器が出土しており、中間層・最上層からはMT15～43型式に比定できる土器が出土している。全体的な傾向としては、先述したようにTK23～47型式の土器が少ないことが指摘できる。なお、123は、有蓋高杯の蓋であり、内面に漆が付着している。

116～119は、内傾する口縁端部を有し、肩部の稜は比較的明確であることから、TK23～47型式に比定して大過ないところである。また、120～123は、天井部も丸く肩部の稜が鈍いことからMT15型式に比定できる。124～126は、口径が14cmを測ることと形骸化した口縁端部を呈していることからTK10型式に比定できる。131は、天井部が低く、口径も124～126に比べて小型化が見られることから、TK43型式に比定できる。一方、杯身は、杯蓋におおむね対応する形態的特徴を各々の個体に見出すことができる。157は、TK43～209型式に比定できる須恵器、高杯である。杯部は通有に見られる形態であるが、脚部外面にはていねいな波状文が施されている。160は、無蓋高杯で、精緻な成形である。166は、高杯の脚部に方形透かし孔が穿たれている。

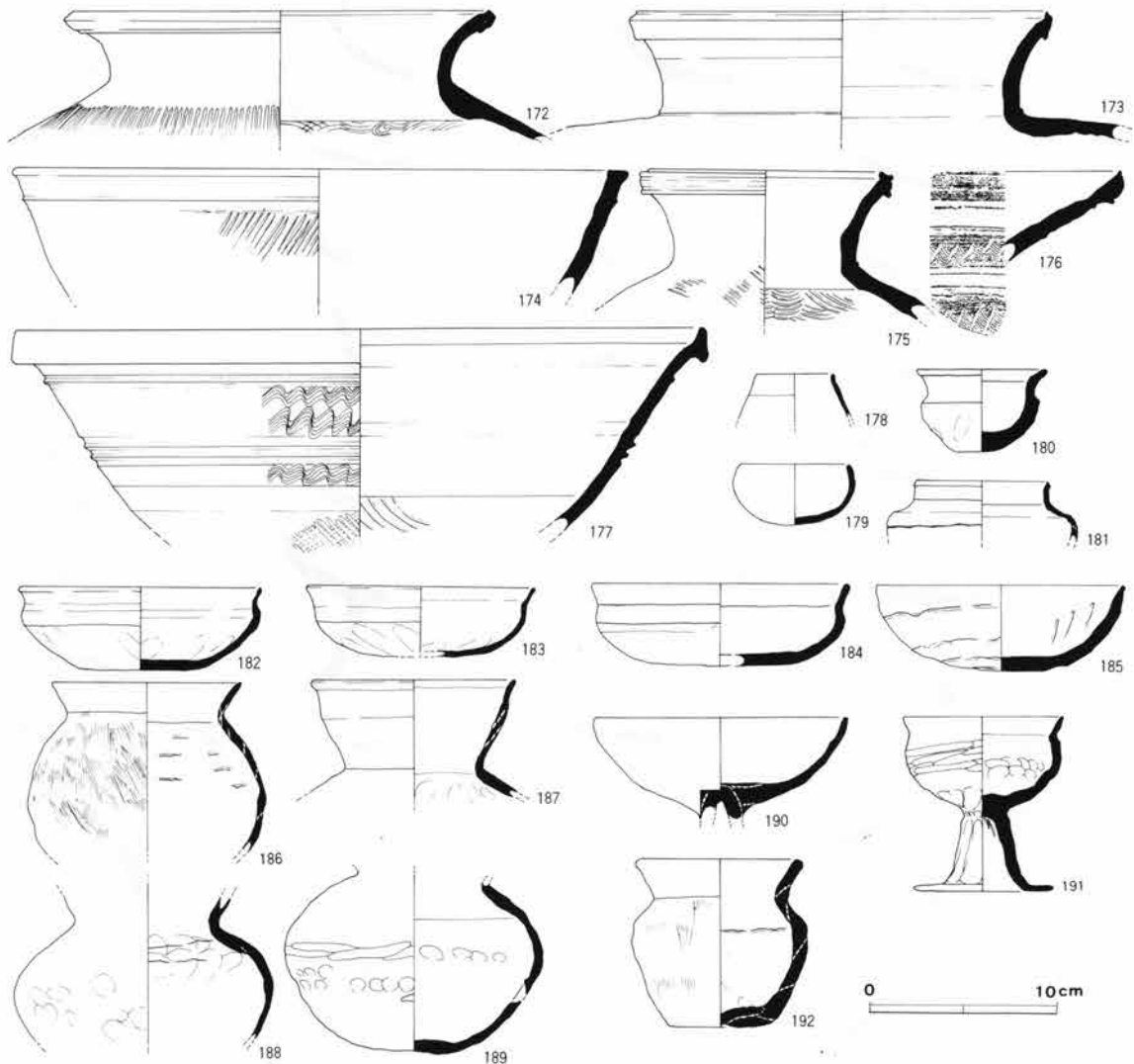
177は、須恵器、器台である。口縁部に面をもち、2条の波状文帯が施される。底部内面には青海波文、外面には平行タタキ目が観察できる。全体的な形態と胎土・焼成・色調から陶邑古窯



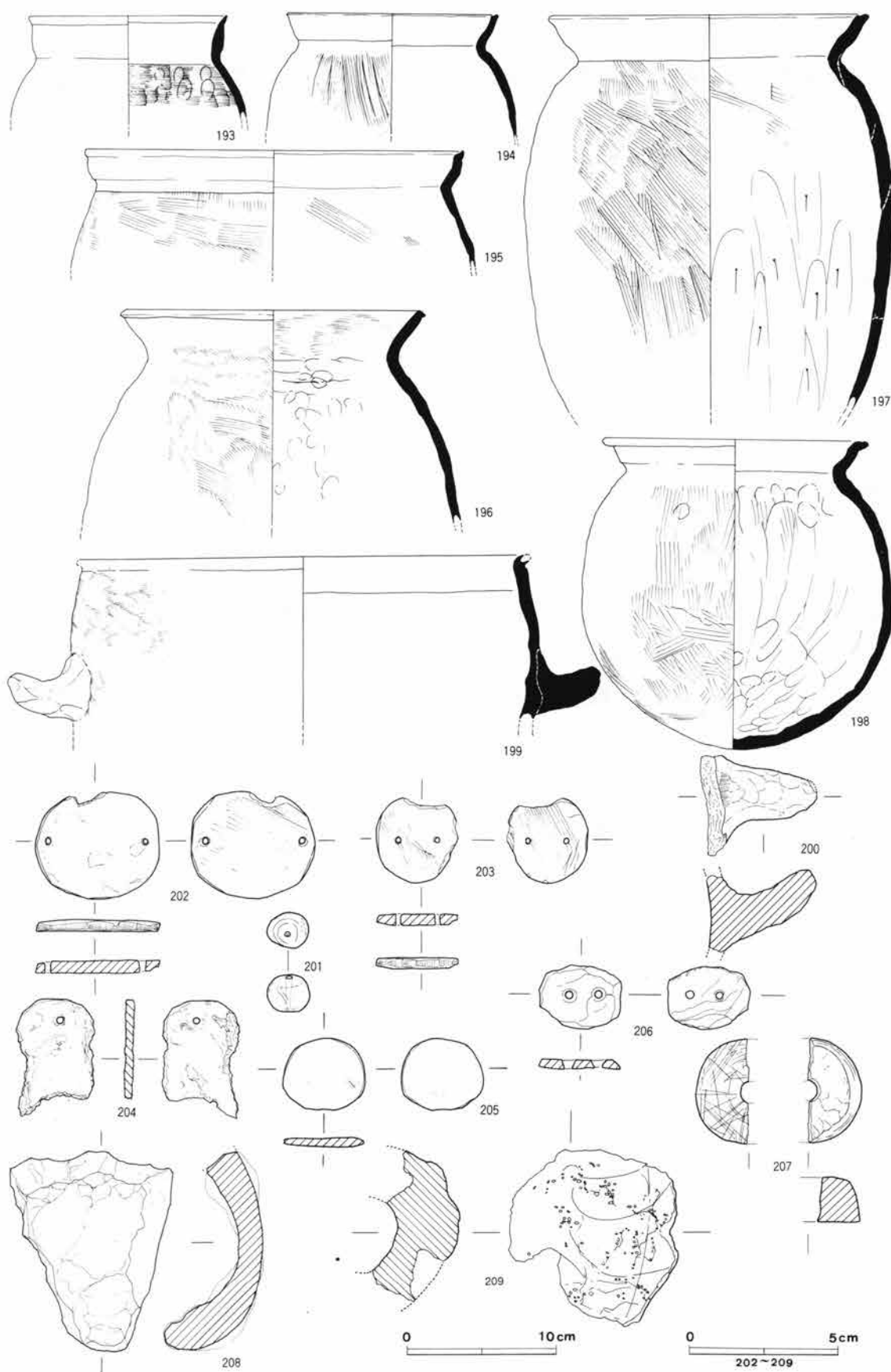
第112図 出土遺物実測図(116~171.溝22)

址群産の須恵器である可能性が高い。178は、灰褐色を呈し、胎土が緻密な製塩土器である。口径が4cmを測り、形態的特徴から和歌山県紀淡海峡付近に原籍を求めることができる。180は、口径6.8cm・器高4.4cmを測るミニチュアの土師器である。同じ形態的特徴をもつ個体として192が出土している。182・183は、口縁部下に屈曲部をもつ土師器、鉢である。191は、外面をていねいに磨いた脚付きの鉢である。鉢の形状は、182・183に近似しているが、小型である点と脚が付く点に当該土器の特性がある。土師器、甕は、口縁端部に面をもつ個体194～197と尖頭状を呈する個体193に分類できる。また、口縁端部が外方に屈曲する土師器198・199も認められる。

201は、直径1.4cmを測る土玉である。集落出土例としては、希有な事例である。202・203・206は、粗雑な成形ではあるが、直径は2.6～4.2cmを測る有孔円板である。205は、不整ながら円形に成形されているが、未穿孔であることから有孔円板の未製品であろう。207は、滑石製紡錘車である。208は、最長6.8cm、最大の厚み1.4cmを測る椀形鉄滓である。部分的に錆膨れが見られ、多くの砂粒が付着している。単なる鉄滓ではなく、椀形を呈していることから、集落内での、鍛冶以外の作業も視野に入れる必要がある。209は、内径2.4cmを測る鞆羽口である。



第113図 出土遺物実測図(172～192. 溝22)



第114図 出土遺物実測図(193~209.溝22)

以上が、溝22から出土した遺物であるが、図化にあたり、遺構の年代がおおむね把握できる数量に留めたことを付記しておきたい。

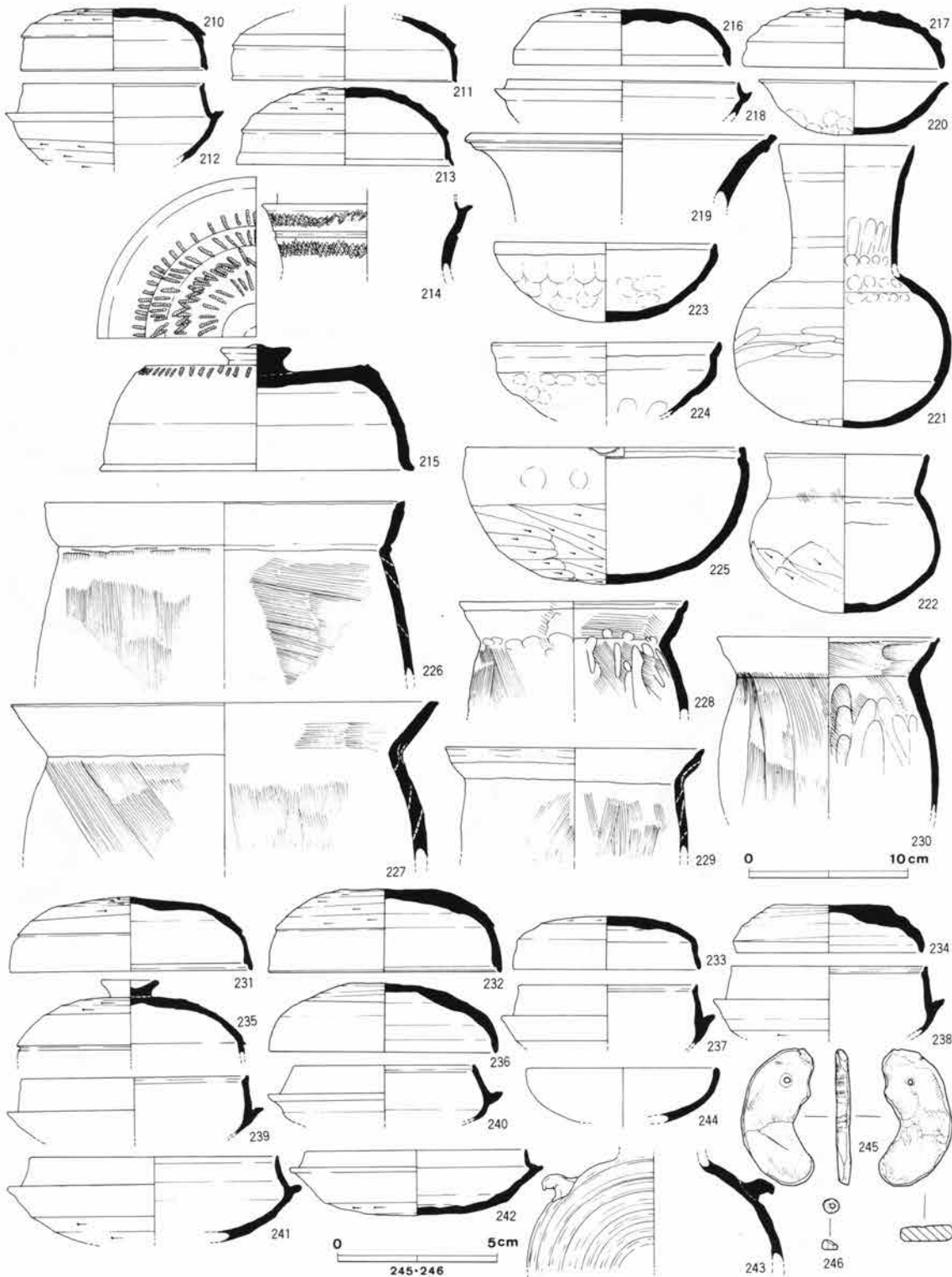
方形区画溝979出土遺物(第115図) 溝最下層から一括で出土した土器群である。須恵器蓋には、内傾する口縁部を有し、肩部稜が比較的明瞭な210と、シャープに仕上げた口縁端部と器高が低く、稜が鋭い211、そして、それらよりは後出する要素をもつ213が出土している。基本的にはTK23～47型式に比定して大過ないところである。また、214は、口縁端部が欠損するものの、受け部の直径が、13.6cmを測る須恵器の有蓋長頸壺である。外面に波状文帯が2帯施され、外面の色調が、淡黒色を呈している。胎土は緻密で、焼成は堅緻である。215は、口径20cm・器高10cm・天井部直径14cmを測る蓋である。口縁端部が外反し、天井部中央に扁平なつまみが付く。天井部には、4分割された圏線内にヘラ工具による刺突文帯が施されている。胎土は緻密、焼成は良好、色調は淡褐色を呈している。陶邑古窯址群においてもあまり確認できない事例であり、系譜や編年の位置付けが検討課題である。

井戸460出土遺物(第115図) 井戸の底部からまとめて216・219・221・225の土器が出土した。216は、須恵器蓋であり、TK43型式に比定できる。221は、口縁部と体部は接合しないが、胎土および焼成・色調・成形技法から同一個体と認識できる還元焰焼成の長頸壺である。口径8.4cm・頸径6.8cm・体部最大径13.6cm・復原器高18cmを測り、器壁は均一である。頸部内面・肩部内面には指ナデ痕が顕著であり、体部外面には、不整方向のヘラミガキが観察できる。底部外面には、ヘラケズリ痕が顕著に観察できる。当該土器の色調は、灰白色を呈しており、胎土も緻密であることから、還元状態で焼成されたことを示しているが、ヘラミガキや指押さえ痕、そして、肩部内面には粘土接合痕が明瞭に残存している点などは、一般的に土師器に見られる特徴である。保守性の強い土師器の技法を踏襲して焼成された須恵器と解釈できることから、何らかの宗教的な用途が、焼成段階から意識された可能性を指摘したい^(注3)。なお、和歌山県紀淡海峡付近の硬質製塩土器に胎土などが酷似している。225は、口径17.4cm・器高8.6cmを測る片口の土師器鉢である。口縁端部内面には、沈線がめぐり、体部下半は、斜め方向のヘラケズリによって成形されている。焼成後に口縁端部の一部を打ち欠いて、片口にしている。なお、217は、TK43型式に比定できる須恵器蓋であり、220は、口縁部が外反する土師器鉢である。同型式の一括資料として好例である。

竪穴式住居跡15出土遺物(第115図) 溝22上面で検出した遺構であるため、竪穴式住居跡の埋土上層には、わずかながらTK43型式に比定できる土器も散見できる。しかし、平成9年度A1地区で検出した竪穴式住居跡群が、おおむねMT15型式に比定できることと床面直上の土器がMT15型式であり、上層出土土器と年代的なヒアタスがあることから、当該遺構の帰属時期を示す土器群を231・232・235・237・238と考えておきたい。243は、角状耳をもつ提瓶であり、245は、全長4.3cmを測る扁平な滑石製勾玉、246は直径0.5cmの滑石製白玉である。

流路875出土遺物(第116図) 基本的には中核的な掘立柱建物跡群を検出した遺構面の一部を削り込んで形成された流路であるため、元来、TK23～MT15型式の遺構に伴う遺物群が、混入し

ている可能性が高い。247は、尖頭状をなす口縁端部ではあるが、口径および口縁部の形態からMT15型式に比定できる。249は、口径と口縁端部の形態からTK10型式に比定できる。これらに伴う杯身も出土している。また、259・262は、立ち上がりが短く内側に傾いていることからTK43型式の特徴を有している。266は、口径15.2cmを測る甕の口縁部である。胎土は緻密、焼成

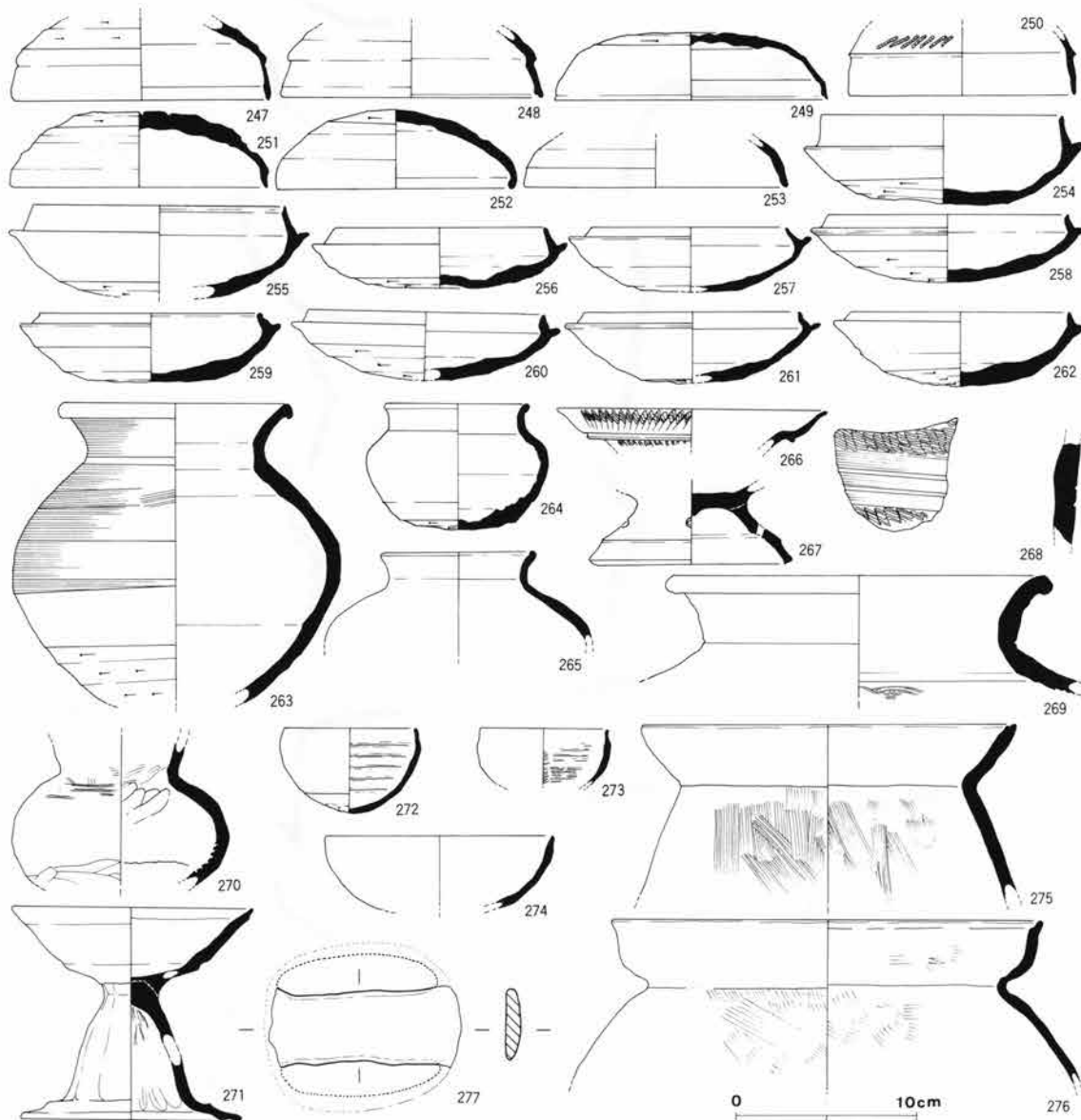


第115図 出土遺物実測図

210~215. 溝979 216~230. 井戸460 231~246. 竪穴式住居跡15

は堅緻、破断面の色調は暗紫色を呈していることから陶邑古窯址群産の須恵器である。268は、法量など不明であるが、波状文を施した器台脚部と考えられる。272は口径7.2cm・器高4.8cm、273は口径7.2cmを測る製塩土器である。内面には貝殻条痕による成形痕が顕著に残存しており、色調は茶褐色を呈している。色調・形態的特徴から和歌山県紀淡海峡周辺で生成された製塩土器である。森垣外遺跡では、多くの製塩土器細片が出土しているが、同地域からの搬入品も一定量確認できる。271は、脚部がスカート状に開く土師器高杯である。杯部は、ほぼ直線的に開き、形骸化が著しい。277は、土師器甌底部である。底部両側に長楕円形の穿孔部をもつ。276は、受け口状の口縁部をもつ把手付き甕である。

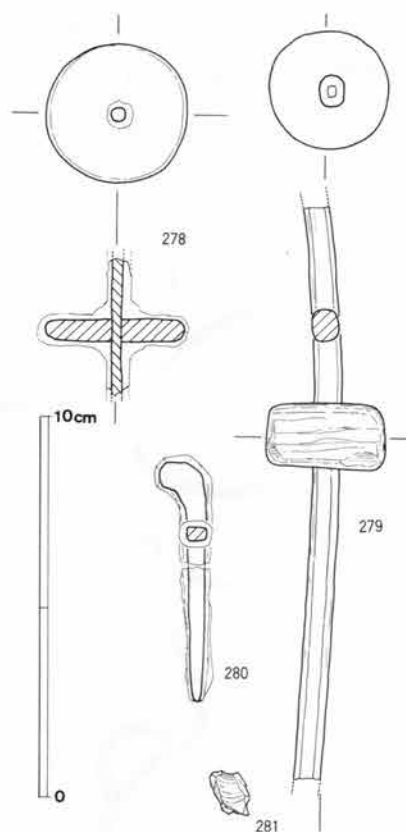
第117図278は、直径3.8cmを有する鉄製紡錘車である。軸の上下端はすでに欠損している。279は、断面が隅丸長方形のやや彎曲した棒状鉄製品に、直径3.4cm・厚み1.8cmのていねいに加工された木製品が装着された用途不明の鉄製品である。棒状体の両端は欠損しており、本来の長さ



第116図 出土遺物実測図(247~277. 流路875)

不明であるが、彎曲する特徴に、用途を理解する要素がある。280は、全長8.4cmの釘である。281は琥珀片である。

流路887出土遺物(第118図) 流路887は、流路875に隣接した地点で検出した遺構であり、流路が形成される以前の遺物が混入している可能性が高い。282は、口径が11.2cmを測る須恵器蓋である。内傾する口縁端部が、形骸し沈線下しているが、稜は明確である。天井部の形態からMT15型式に比定して大過ないであろう。283・284については、282と比べてやや口縁端部の沈線化が進行し、稜の突出度も低くなっているが、次型式のTK10型式に比定するには古い要素が残存していることから、おおむねMT15型式の範疇で把握しておきたい。285はTK43型式、266はTK209型式に比定できる。一方、杯身では、287がMT15型式、288がTK10型式に比定でき、289～295がTK43・209型式に比定できる。296は口径11.2cm・脚径7.2cm・器高8cmを測る無蓋高杯である。脚部には3方透かし孔、ヘラ記号がある。全体的にシャープな成形と胎土・焼成・色調から陶邑古窯址群産の須恵器である。303は、中央に1穴、四方に長楕円形の穿孔部をもつ土師器の甌である。



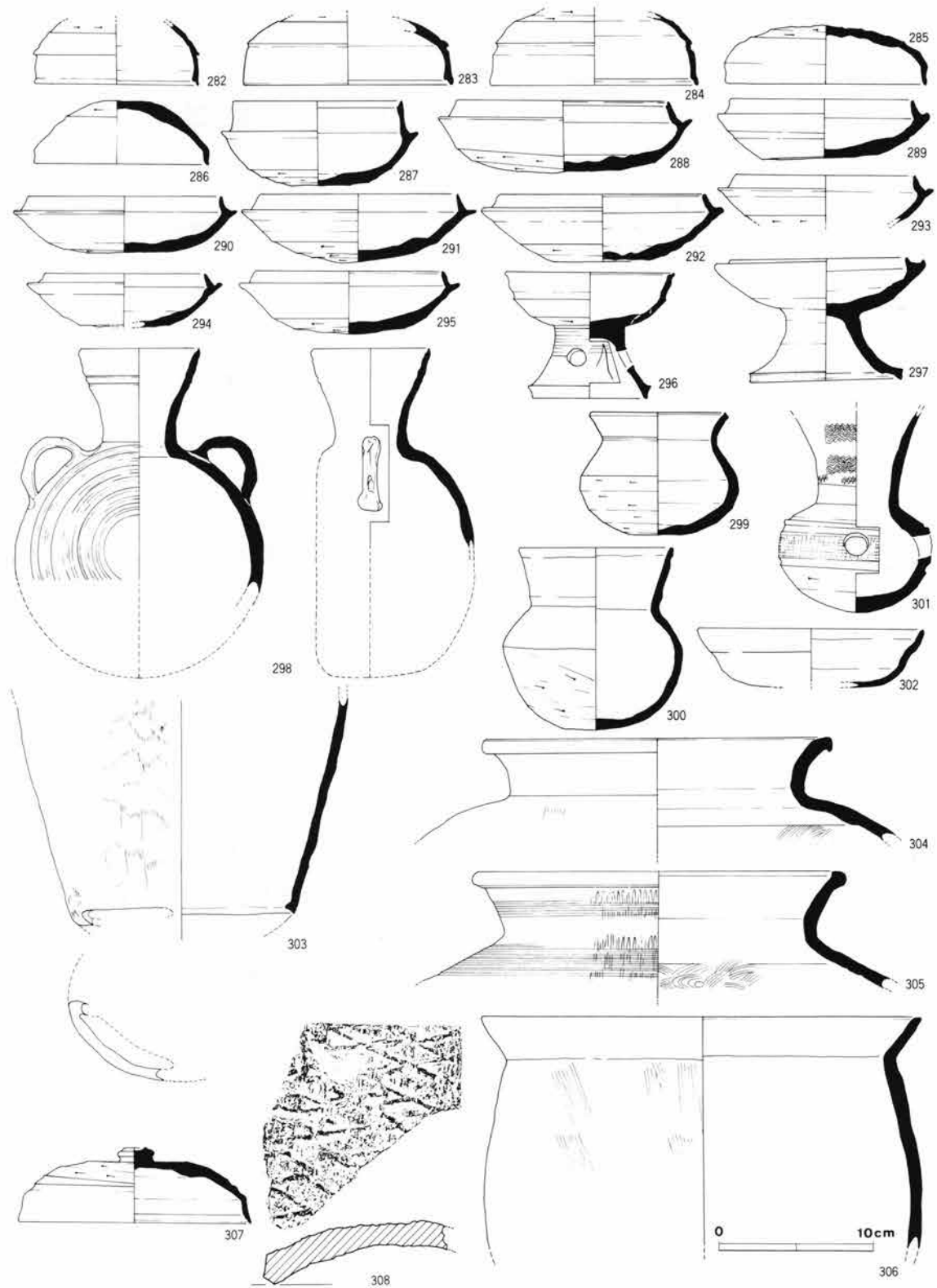
第117図 出土遺物実測図
278～281. 流路875

土坑876出土遺物(第119図) 流路875・887を切り込んで掘り込まれた土坑である。309・310は、TK43型式に比定できる杯身である。311は、口径13.6cm・脚径7.2cm・器高5.5cmを測る脚付盤である。脚部には3方に小孔が穿たれている。314は、球体をなす体部と大きく開く口縁部からなる甕である。315は、最大長9.6cm、最大の厚みが1.4cmを測る三角形の滑石原石である。共雑物を多く含んでおり、良質ではないが、集落出土の滑石の原石として重要である。供給源の特定が待たれる。紀淡海峡周辺の製塩土器とともに搬入された可能性もあろう。

溝878出土遺物(第119図) 中核をなす掘立柱建物跡群が位置する区画溝内の小区画溝として認識した溝からの一括資料である。316は、口径14.6cm、器高5.2cmを測る杯蓋である。317は、口径12.8cmを測る須恵器、杯身であり、口縁端部はシャープに仕上げている。319は、口径11.2cmを測り、高い立ち上がり口縁端部はシャープに仕上げられる特徴がある。322は、口径8.8cmを測り、内傾する口縁端部とほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもつ。318は口径12cmを測る壺の蓋である。沈線化した口縁端部を有し、丸い天井部をもつ。天井部には中央部が窪むつまみが付く。325は、口径46cmを測る須恵器、器台である。口縁端部が肥厚し、シャープな稜と波状文が施されている。色調・焼成・胎土から陶邑古窯址群産の製品と考えられる。これらの土器群は、先述した溝22および979出土土器の型式に酷似しており、TK23～47型式に比定して大過ないところであるが、317・322の全体的な形態からTK208型式にまで遡る可能性も高い。326は、砂岩製砥石である。

四面には溝状の擦痕などが観察できる。

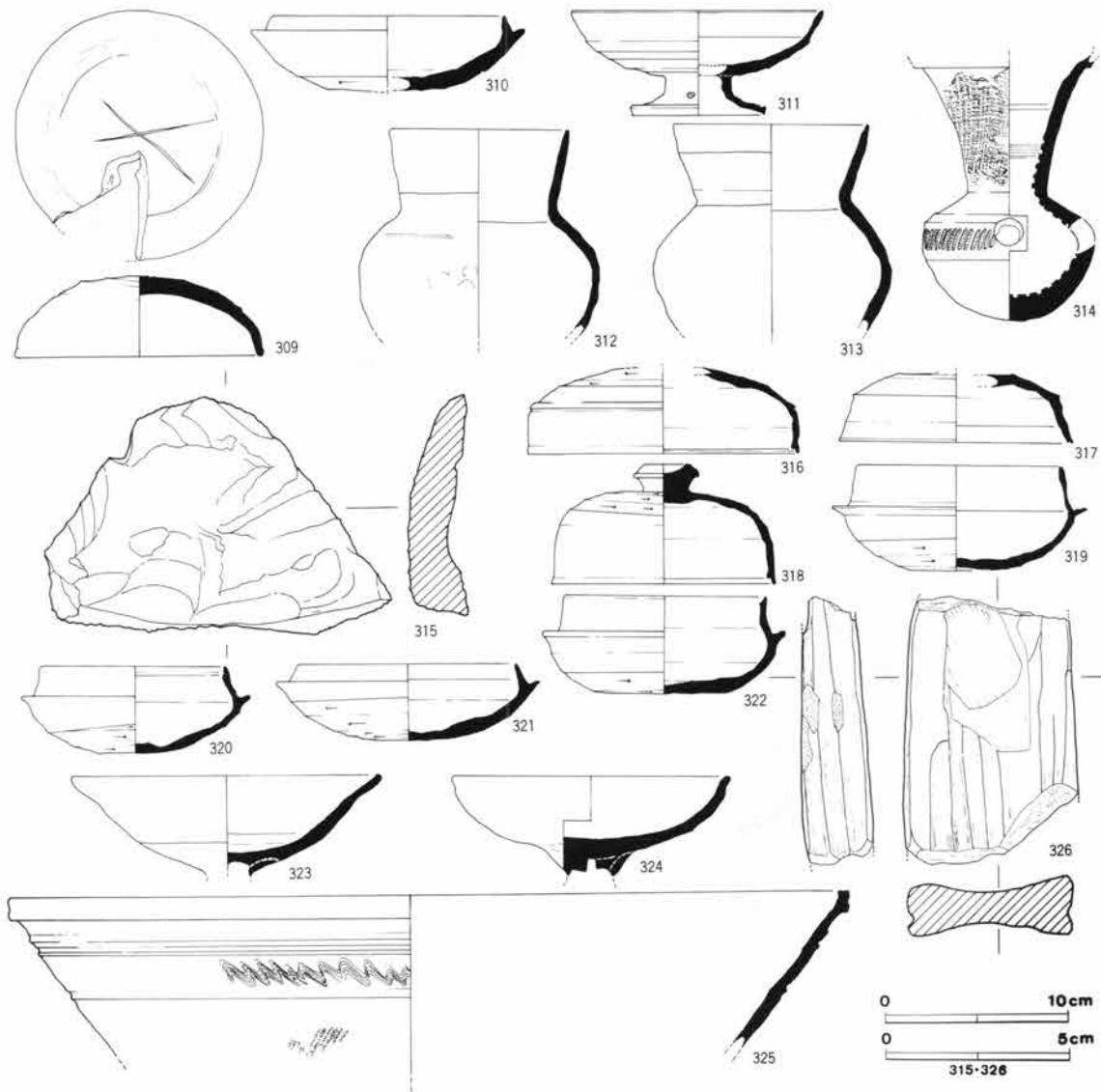
流路869出土遺物(第120図) 流路875とほぼ同一地点で検出した遺構である。329は、口径15.4cmを測る須恵器杯蓋である。肩部の稜は明瞭であるが、沈線化する口縁端部と器高からTK



第118図 出土遺物実測図(282~306.流路887 307・308.溝873)

10型式に比定できる。330の口径は14cmを測り、329と同一型式に認定できる。331は口径12cm、333は口径14cm、326は口径12.8cm、337は口径13.2cmを各々測る。口縁部の形態と口径からやはりTK10型式に比定できる。334は、口縁端部の一部が外方に鋭く突出する直口壺である。341は、内反する口縁部をもつ甕である。いわゆる直口甕の系譜上に位置付けられる土器である。343は、口径18.4cmを測る土師器高杯である。平らな杯部から鋭く屈曲し、口縁端部は外方へ屈曲している。大型高杯に分類でき、TK10型式においてもなお存続することが本例をもって確認できたことは、須恵器出現以後の土師器編年の基礎資料となる。344は、全長8cmを測る鉄製鎌である。柄装着用の折り返し部がある。

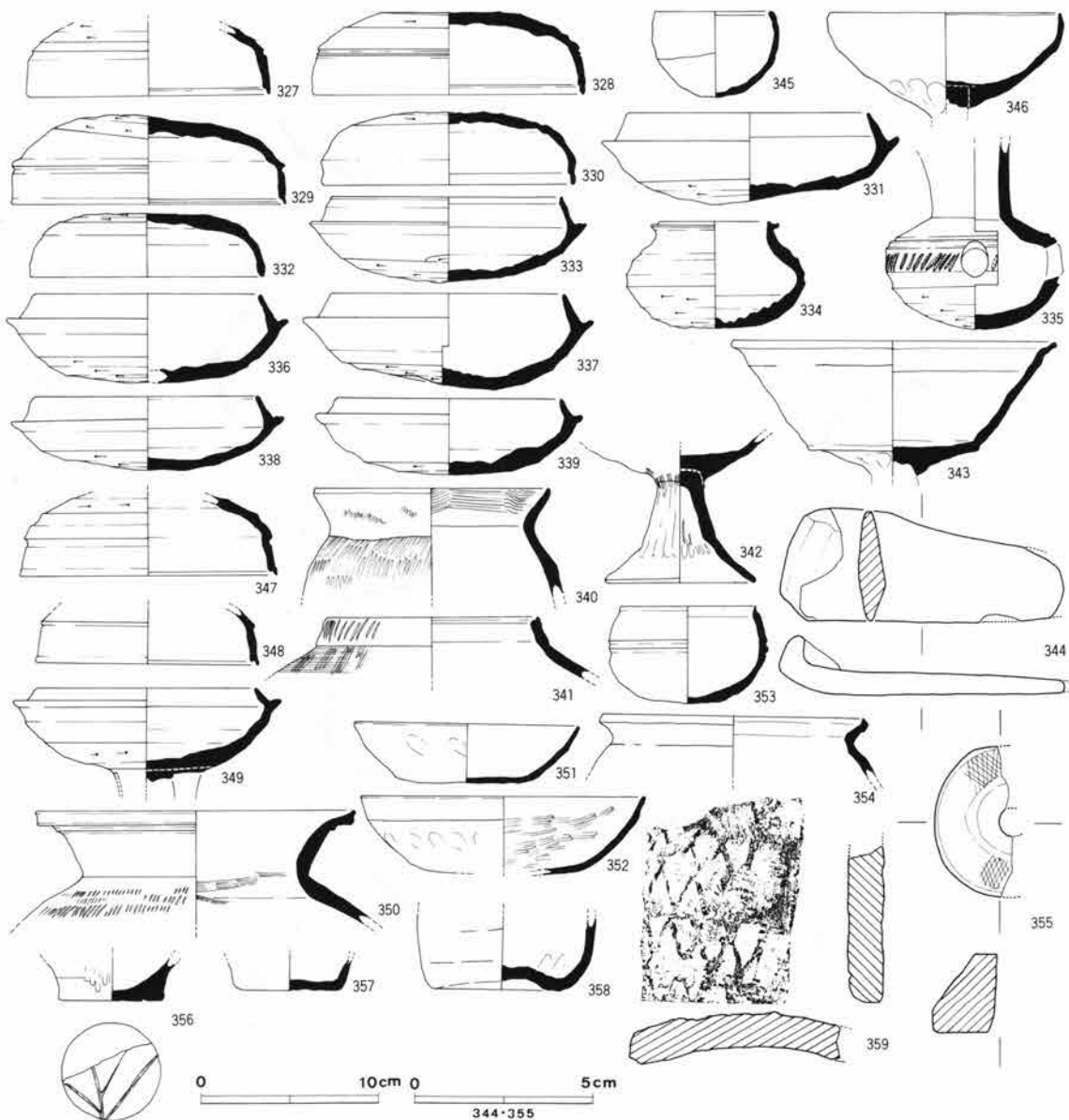
土坑996出土遺物(第120図) 345は、口径6.6cm・器高4.8cmを測る土師器椀である。内外面はナデ調整を行なっているが、外面に粘土接合痕が観察できる。ミニチュア土器の範疇に入る土器であろう。346は口径13cmを測る土師器高杯である。内湾する杯部をもち、脚上部には、縦方向の不整な面取り状の調整が見られる。



第119図 出土遺物実測図(309~315.土坑876 316~326.溝878)

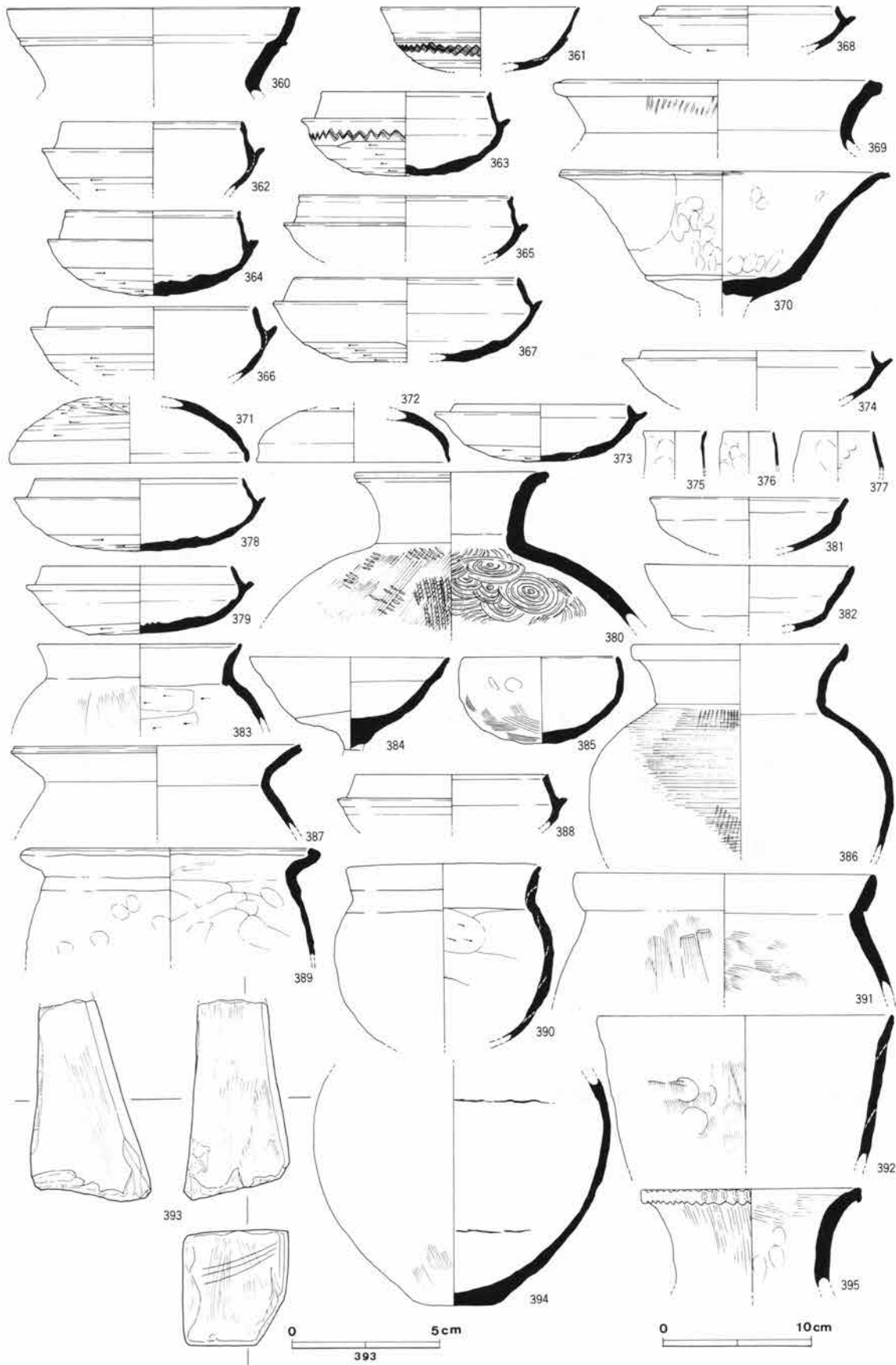
流路14出土遺物(第120図) 方形区画溝13の南隣接部で検出した溝であるが、出土遺物には奈良時代の土器を含んでいる。348は、MT15型式に比定できる須恵器杯蓋である。また、349は、TK43型式に比定できる有蓋高杯である。358は、底部中央がわずかに隆起する土師器である。平底を意図して成形された可能性があり、甕の底部として把握しておきたい。また、357は、平底を呈する土師器の底部である。後述する弥生中期前半の356とは胎土などが異なっているため、古墳時代の土師器と捉えたい。このようにMT15型式からTK43型式にいたる土器が出土していることから、奈良時代以前の遺物が原位置から遊離し、流路14に混入したと考えられる。

351は口径12.4cm、352は口径16cmをそれぞれ測る土師器碗である。355は、滑石製紡錘車であり、傾斜面に印刻による斜格子状の文様をもつ。359は、斜格子タタキ目をもつ平瓦である。端面は、ヘラ切りによる成形痕が観察できる。当該溝からは、同様な瓦片の出土を他にも確認して



第120図 出土遺物実測図

327~344. 流路869 345・346. 土坑996 347. 土坑920 348~355・358・359・385. 流路14
356・357. 土坑18



第121図 出土遺物実測図

360. 土坑1 361~357. 溝373 368~370. 土坑723 371~377. 土坑459 378~382. 土坑9 383. 溝17
 384・385・394・395. 土坑44 386. 溝23 387. 溝348 388. 土坑726 389. 溝463 390~392. 土坑4

おり、出土地点より南西方向に関連施設が存在する可能性がある。一方、356は、底部に葉脈の圧痕が残存する弥生土器である。おおむね中期前半に比定できる。森垣外遺跡では、弥生土器片やサヌカイト製の石鏃や剥片が出土するが、すでに削平を受けた弥生時代の遺構が存在した可能性を示唆している。

土坑1出土遺物(第121図) 360は口径19.6cmを測る須恵器甕である。頸部以上のみを土坑に埋納しており、体部は残存していない。口縁部中央でわずかに屈曲し、端部に面をもつ、いわゆる古式土師器、甕の口縁部に近似する形態を有しており、初期須恵器の範疇で捉えておきたい。

溝373出土遺物(第121図) 361は、口径13.2cmを測る無蓋高杯である。全体的にシャープな成形である。363は、口径11.2cmを測る杯身である。受け部下段に波状文を施しており、胎土・焼成・色調から陶邑古窯址群産と判定できる。当該遺構から出土した須恵器は、全体的にMT15型式に比定できる個体が多いが、363は、先行型式として認定することもできる。

土坑723出土遺物(第121図) 370は、大型の土師器高杯である。平らな底部から外彎する口縁部からなる。共伴する368の須恵器杯身とは、型式差がある。

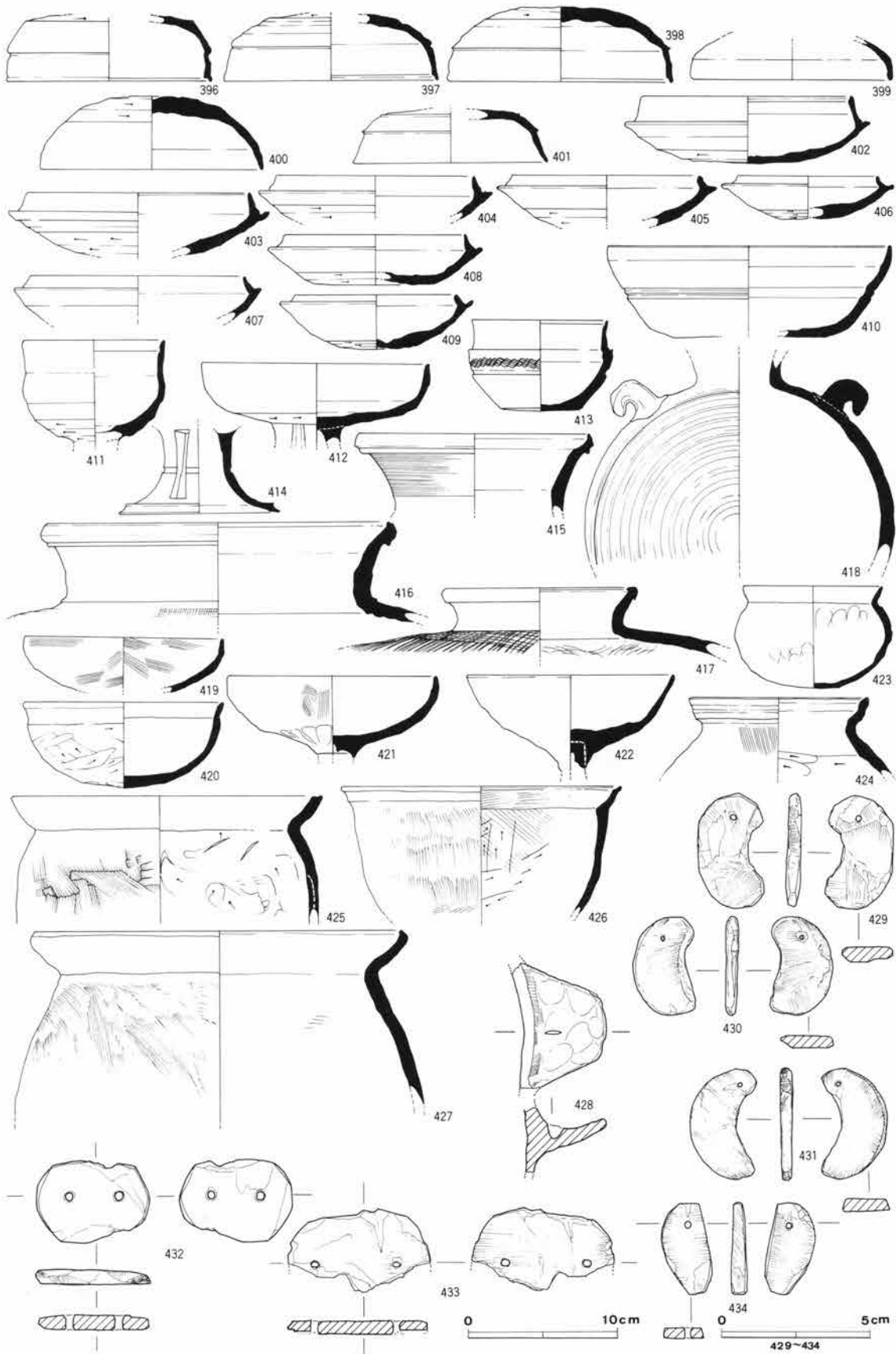
土坑459出土遺物(第121図) 上面で検出した方形土坑であり、おおむねTK43型式の特徴を有している。しかし、375～377に見られる製塩土器は、還元焰焼成で、色調は灰褐色を呈していることから、和歌山県紀淡海峡付近からの搬入土器と考えられる。紀淡海峡に所在する西ノ庄遺跡などが、供給源と考えられるが、これらの遺跡の存続期間は、TK43型式までは到らないことが判明しており、土坑開削時に下層遺構に包含される土器が混入した可能性も高い。

土坑9出土遺物(第121図) 378は、おおむねTK10型式に比定でき、379は、おおむねTK43型式の特徴を有している。

土坑879出土遺物(第121図) 393は、白色砂岩系の方形柱状体を呈する砥石である。森垣外遺跡からは多くの砥石が出土しており、本例に見られる形態を有する個体が多く見られる。

土坑44出土遺物(第121図) 394は、体部最大径が20cmを測る弥生時代の壺形土器である。平らな底部と精緻な球体をなす体部から弥生時代中期前半の特徴を有している。また、395は、口径14.8cmを測る弥生時代の壺形土器である。口縁端部外面には、刻み痕が観察でき、394と同じく、弥生時代中期前半に比定できる。

包含層(L.N.4A・4b)出土遺物(第122図) 包含層からの出土遺物は、多量であり、第122図に図示した遺物は、ごく一部である。396は、口径14cmを測る須恵器杯蓋である。内傾する口縁端部を有し、形骸化した肩部稜であることから、MT15型式に比定できる。397・398は、肩部稜が明瞭ではあるが、口径が15.2cmを測ることからTK10型式に比定できる。TK10型式に比定できる杯身には、402がある。404～409は、TK43～209型式に比定できる形態的特徴を有している。410は口径19.2cmを測る鉢である。411は脚付の鉢であり、口径は9.6cmを測る。類例に乏しい器形である。413は口径9.2cm・器高6.2cmを測る椀である。波状文の施文が見られる。418は体部最大径が21.2cmを測る提瓶である。肩部に彎曲する角状の耳が付されている。421は、椀状の杯部を有する口径14.4cmを測る土師器高杯である。422とは同じ土師器高杯であるが、形態差が



第122図 出土遺物実測図(396~434.L.N. 4層)

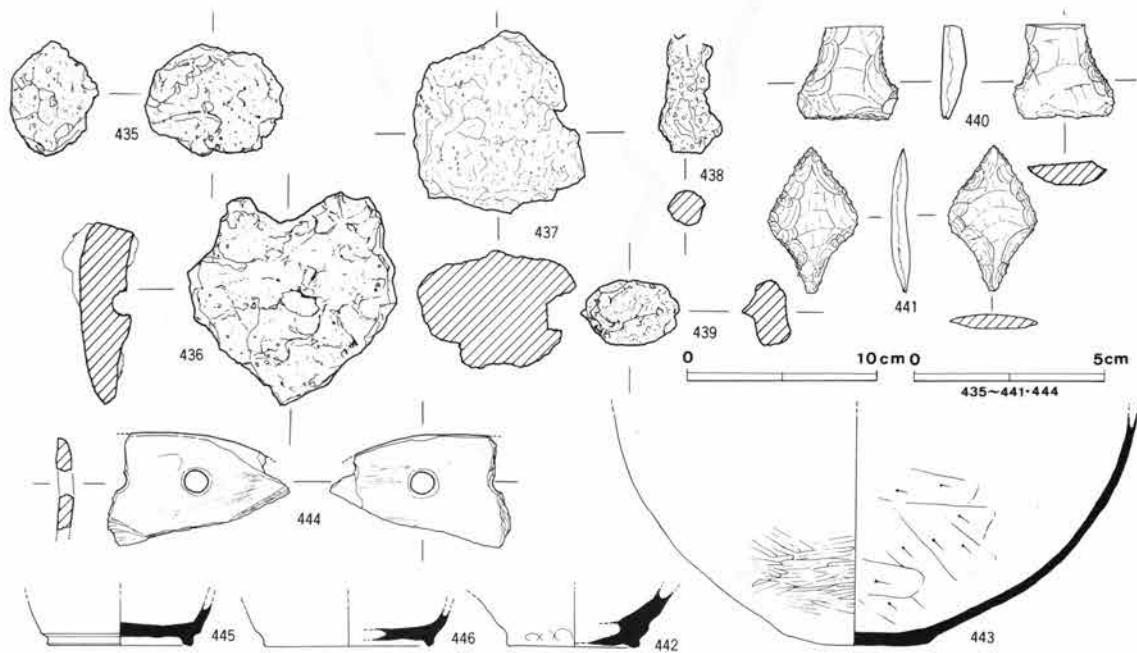
認められる。424は、口径12cmを測る土師器甕である。口縁端部がわずかにS字状を呈している特徴が見られる。426は、口径が18.8cmを測る土師器甕である。口縁部からほとんど屈曲しない体部に個体の特性が見られる。429は全長3.9cm、430は全長3.3cm、431は全長3.8cmを測る扁平な滑石製勾玉である。これら3点の滑石製勾玉は、法量や形態に異なった要素が多く認められるが、基本的には粗い成形であることから森垣外遺跡において製作された可能性が高い。これは、滑石原石の出土とも密接な関連があるが、集落内で日常的使用が頻繁であったからこそ、粗雑な滑石製模造品を大量に製作したのであって、技術的に未発達であったことに粗雑化の原因を求めることはできない。これについては、432・433の有孔円板にも認められる。434は、剣形石製模造品であろうか。

第123図435～439は、法量・形態が異なる鉄滓である。440・441は、サヌカイト製の石鏃であり、444はサヌカイト製の石包丁である。また、443は、平底を有する弥生土器の壺である。石鏃・石包丁も含め弥生時代中期前半に比定できる。445・446は、平城Ⅰ・Ⅱ型式に比定できる須恵器杯身である。

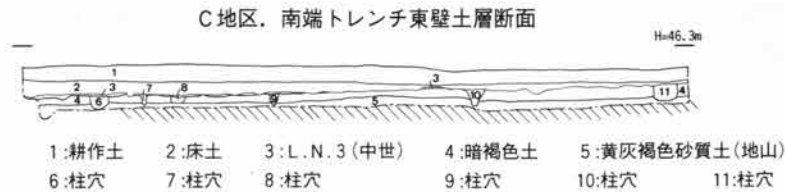
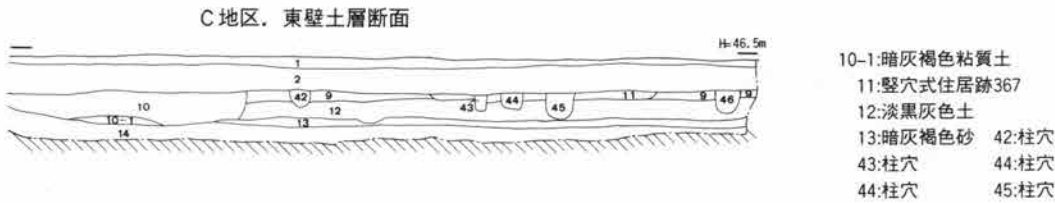
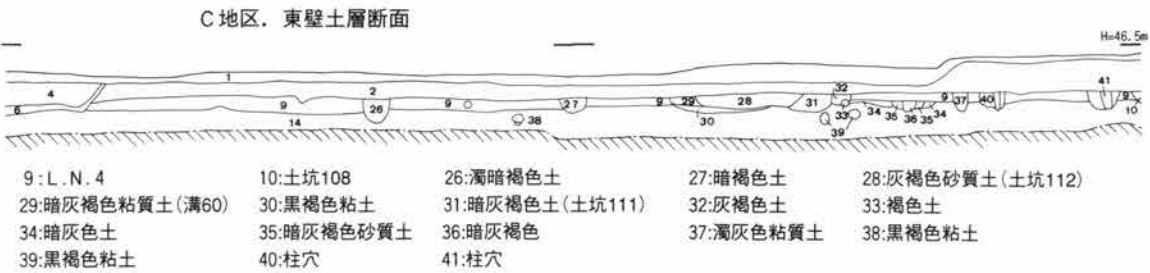
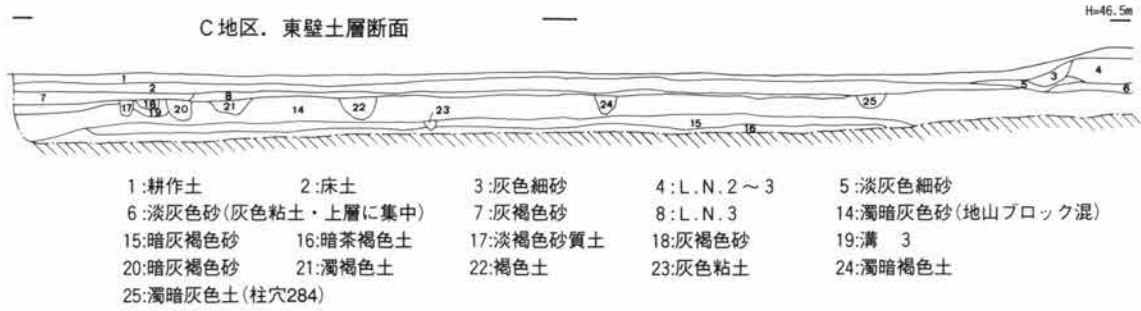
g. その他の時代

森垣外遺跡は、古墳時代中期から後期にかけての集落遺跡であり、南山城地域では、類例が知られていなかった集落構造であることから、本概要報告においても、古墳時代に焦点を当てて報告している。しかし、弥生時代中期前半の遺構・遺物や奈良時代前期の遺構・遺物については、わずかに記述したが、ここでは、奈良・平安時代以降の遺構について、概観しておきたい。

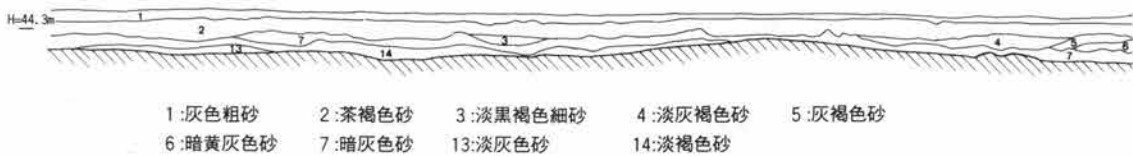
第97図において、復原した掘立柱建物跡は、主軸が磁北とほぼ一致する平安時代前期の建物跡である。柱穴の埋土は、暗灰褐色砂質土であり、古墳時代の柱穴とは容易に見分けられる。また、B1-2・3地区の境で検出した井戸2からは、須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土し



第123図 出土遺物実測図(345～346.L.N. 4 b層)

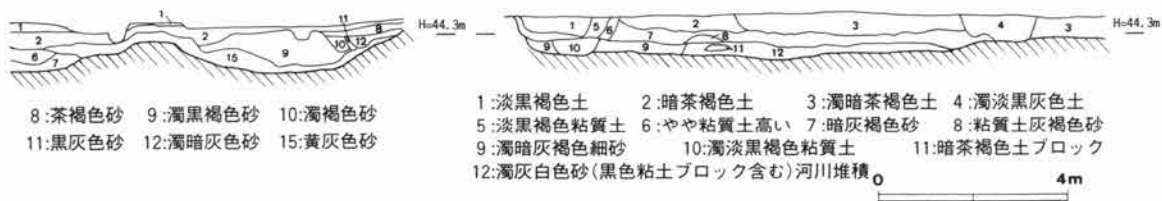


C地区. 流路4・5断面図(断面1)

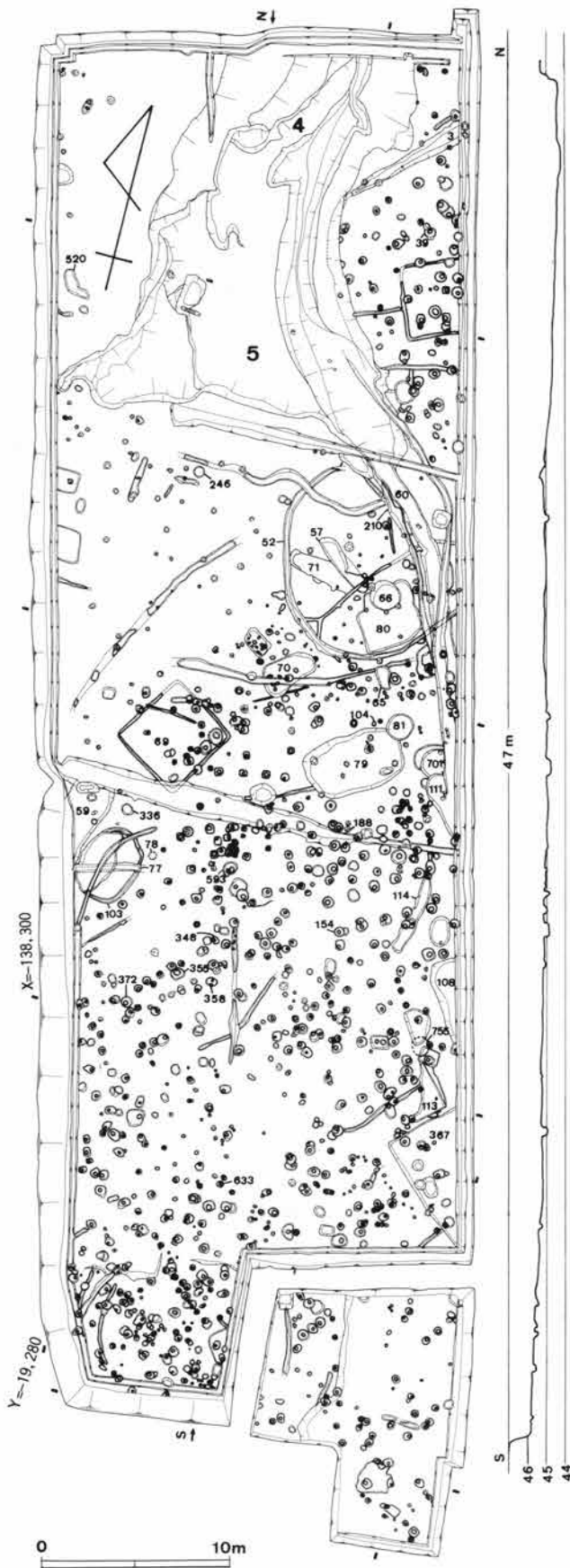


(断面1)

C地区. 流路4・5断面図(断面2)



第124図 C地区土層断面図



第125図 C地区遺構実測図

ている。一方、B1-3地区で検出したほぼ平行して東流する溝871・873からは、第128図308の斜格子タタキ目を有する平瓦が出土している。平行していることから、道状の遺構であることも考えられる。また、3筆の水田畦畔の下層に打ち込まれた杭周辺から広東碗や端反り碗の近世磁器が出土している。現行の地割りが18世紀後半から19世紀前半に執行された新田開発によることが追認できた。なお、B1-2地区溝463は、5m東で検出した溝と平行している。奈良時代の土器が出土しており、道状遺構の可能性も視野に入れておきたい。

(4) C地区(図版第63・64)

森垣外遺跡における最南端に位置する調査区である。地表面の標高は46mを測り、遺跡地内では最高所である。

A. 層位(第124図、図版第62-3)

基本的な層位は、現行水田の耕作土(L.N.1)下に床土(L.N.2)が堆積している。床土下には、黄褐色土(L.N.3)が数層堆積している。一方、古墳時代の遺物包含層であり、一部の遺構を検出した暗茶褐色土(L.N.4)が、黄褐色土層下に堆積している。この層は、水田造成の削平が深かったため、ほとんど残存しておらず、基本的には、地山である黄褐色粘質土を遺構検出面とした。また、調査区北方には、流路4・5が位置し、きわめて複雑な堆積であった。そのため、当該堆積層上面では、遺構検出はできなかった。

B. 遺構と遺物

C地区では、B1地区で検出したような掘立柱建物跡群を区画する溝と古墳時代に形成された流路、円形を呈する溝群、土坑などを確認した。以下、検出遺構を概観する。

A. 掘立柱建物跡(第125~130図)

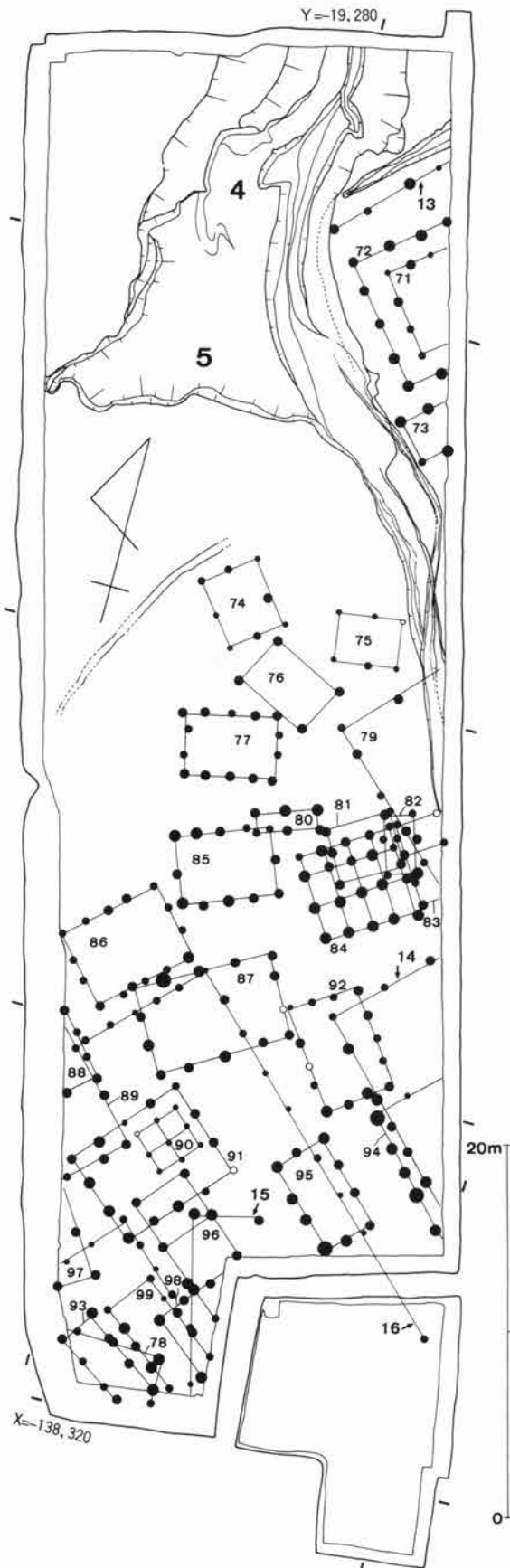
掘立柱建物跡69(第127図) 梁間2間(4.4m)×桁行3間(7.5m)の規模を有し、北から西へ43°の主軸をもつ。比較的規模の大きい掘立柱建物跡である。床面積は33m²である。

掘立柱建物跡72(第127図) 梁間3間(4.8m)×桁行3間以上(3.5m以上)の規模をもち、周囲に4間(7.2m)×3間以上(5.5m以上)の廂をもつ。掘立柱建物跡の主軸は、北から西へ40°振れる。方形区画溝3の内側に位置しており、B1地区で検出したような中核的な施設が当該地区にも存在することが判明した。この建物跡は、C地区において最も規模の大きい掘立柱建物跡であり、流路4・5を挟んで検出した掘立柱建物跡群とは、その成立した要因に相違点が存在する可能性もある。なお、廂については、建物を全て検出してはならず、流動的要素を勘案し、図中では掘立柱建物跡71の遺構番号を付している。

掘立柱建物跡74(第127図) 梁間2間(3.2m)×桁行2間(3.8m)の規模を有し、北から西へ35°の主軸をもつ。床面積は12m²である。

掘立柱建物跡75(第127図) 梁間1間(2.6m)×桁行3間(3.3m)の規模を有し、北から西へ7°の主軸をもつ。梁間中央には柱穴を検出していないが、2間分を有していることから、削平を受け、消失した柱穴を想定することも可能である。床面積は9m²である。

掘立柱建物跡76(第128図) 梁間1間(2.9m)×桁行2間(4.2m)の規模を有し、北から

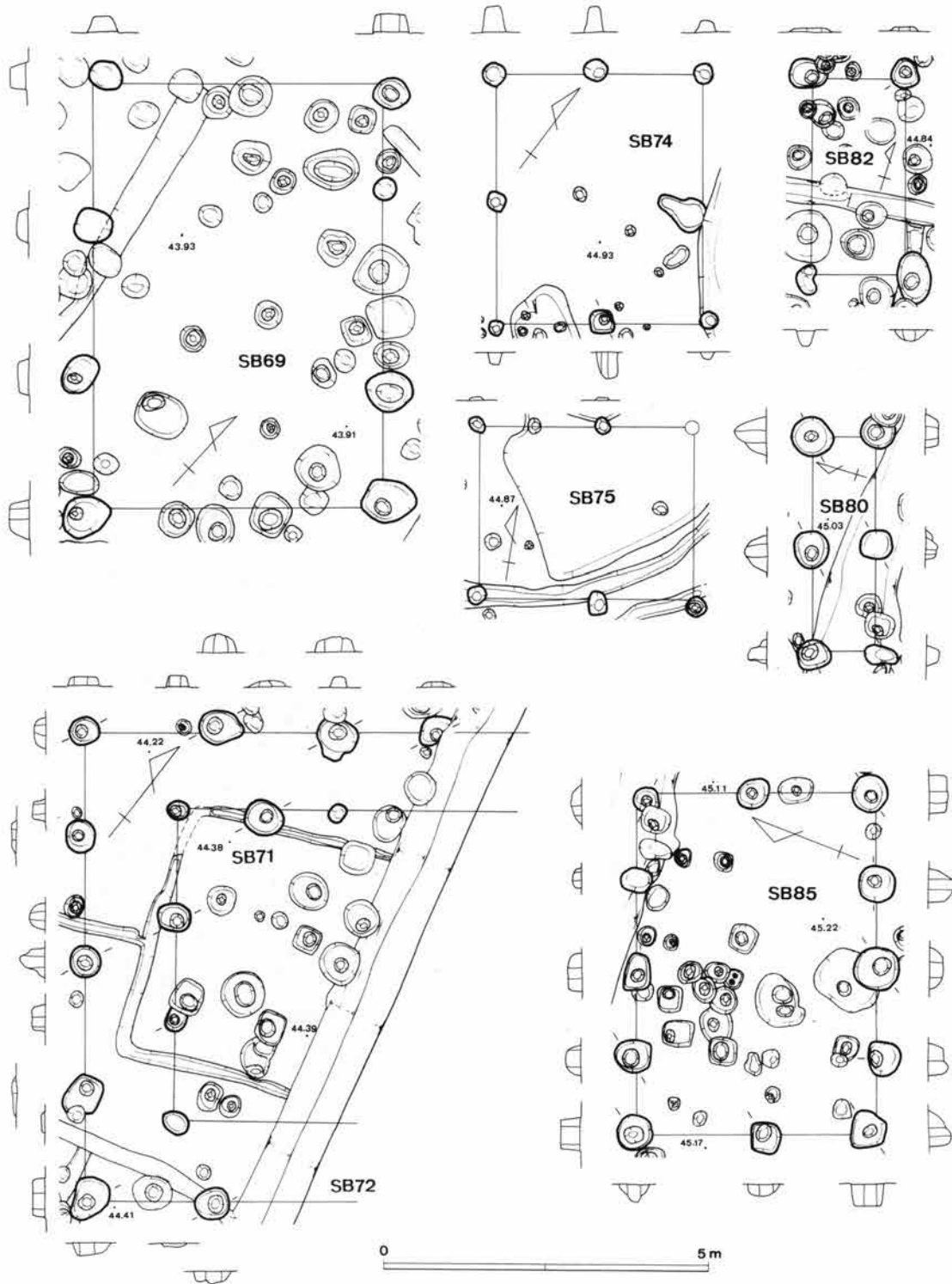


第126図 C地区掘立柱建物跡分布図

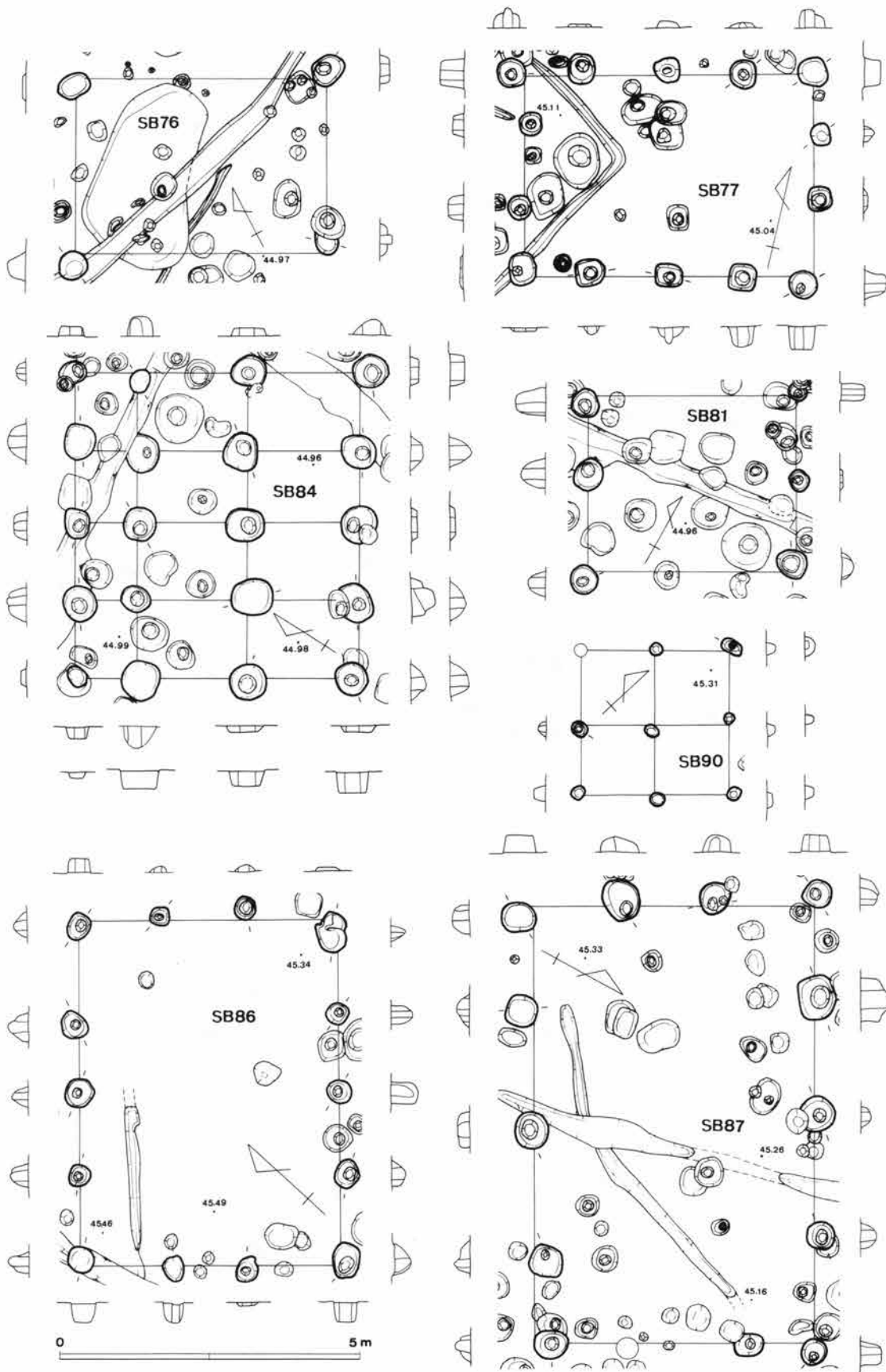
西へ62°の主軸をもつ。梁間中央には消失した柱穴の存在を想定できる。床面積は12m²である。

掘立柱建物跡77(第128図) 梁間3間(3.3m)×桁行4間(4.8m)の規模を有し、北から東へ70°の主軸をもつ。床面積は16m²である。

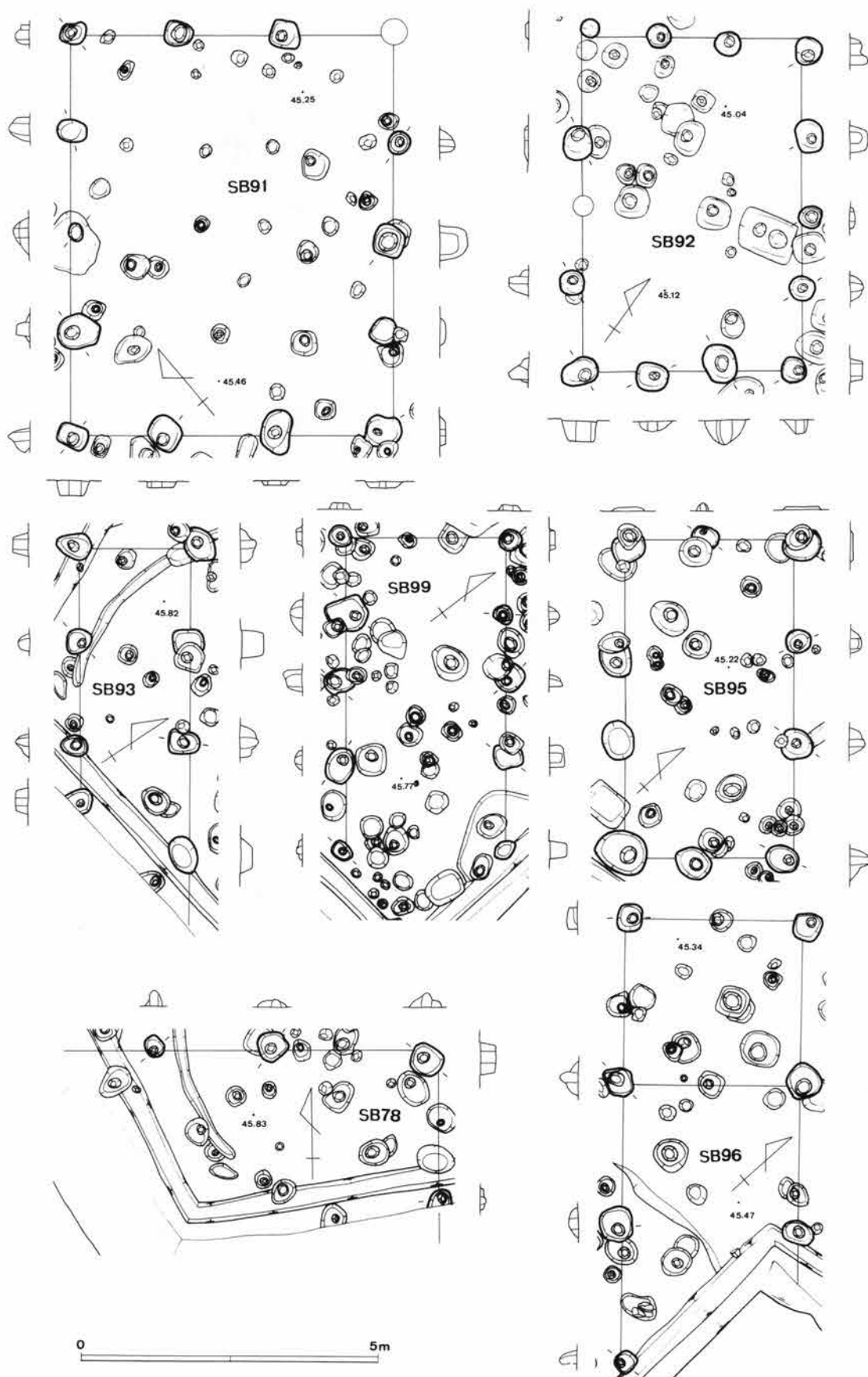
掘立柱建物跡78(第129図) 調査地最南端で検出した掘立柱建物跡である。梁間2間以上(2.6m)×桁行2間以上(5.6m)の規模を有し、真北に対し直交する主軸を有している。



第127図 掘立柱建物跡69・71・72・74・75・80・82・85実測図



第128図 掘立柱建物跡76・77・81・84・86・87・90実測図



第129図 掘立柱建物跡78・91～93・95・96・99実測図

掘立柱建物跡80(第127図) 梁間1間(1m)×桁行2間(3.3m)の規模を有し、北から東へ70°の主軸をもつ。桁行に対して梁間の柱間距離が極端に狭い構造であることから、居住空間としての機能はなく、特別な施設である可能性が高い。奈良県南郷遺跡や同布留遺跡においても検出例が報告されている。床面積は3m²である。

掘立柱建物跡81(第128図) 梁間2間(2.8m)×桁行3間(3.4m)の規模を有し、北から東へ60°の主軸をもつ。検出した柱穴は、やや不明瞭である。床面積は10m²である。

掘立柱建物跡82(第127図) 梁間1間(1.4m)×桁行2間(3m)の規模を有し、北から東へ18°の主軸をもつ。桁行に対して梁間の柱間距離が狭い構造は、掘立柱建物跡80に類似しており、これらの掘立柱建物跡は「L」字形に配置されている。床面積は4m²である。

掘立柱建物跡84(第128図) 梁間2間(3.7m)×桁行4間(5.1m)の総柱の掘立柱建物跡であり、北から東へ58°の主軸をもつ。また、北西面には建物から1間(1m)分の廂がある。C地区で検出した掘立柱建物跡では、掘立柱建物跡72と同じく中核をなす施設であり、隣接する建物との関係が重要である。床面積は19m²である。

掘立柱建物跡85(第127図) 梁間2間(3.7m)×桁行4間(5.3m)の規模を有し、北から東へ65°の主軸をもつ。掘立柱建物跡77・84・86とほぼ同規模であることから、これらが群をなして中核的施設を形成していたことを想定できる。床面積は20m²である。

掘立柱建物跡86(第128図) 梁間3間(4.3m)×桁行4間(5.2m)の規模を有し、北から東へ47°の主軸をもつ。床面積は22m²である。

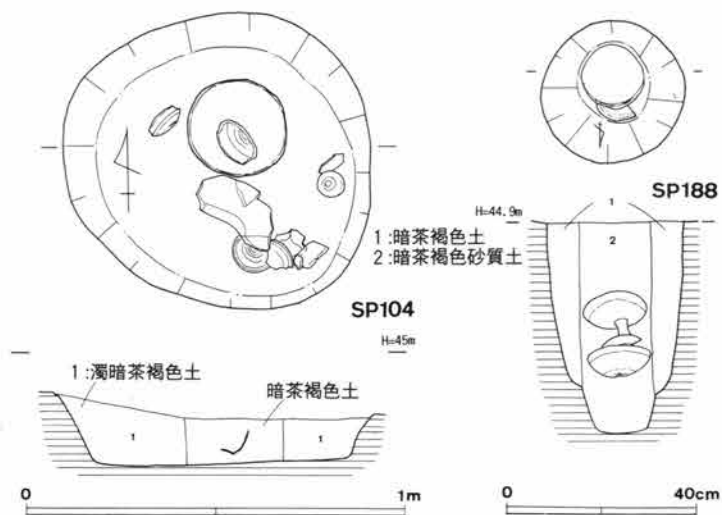
掘立柱建物跡87(第128図) 梁間3間(4.6m)×桁行4間(7.3m)の規模を有し、北から東へ61°の主軸をもつ。床面積は34m²である。

掘立柱建物跡90(第128図) 梁間2間(2.4m)×桁行2間(2.4m)の規模を有し、北から東へ40°の主軸をもつ総柱の建物跡である。床面積は6m²である。

掘立柱建物跡91(第129図) 梁間3間(5.4m)×桁行4間(6.7m)の規模を有し、北から東へ41°の主軸をもつ。床面積は36m²である。

掘立柱建物跡92(第129図) 梁間3間(3.7m)×桁行3間(5.6m)の規模を有し、北から西へ38°の主軸をもつ。床面積は21m²である。

掘立柱建物跡93(第129図) 梁間1間(1.8m)×桁行3間以上(5.3m以上)の規模を有し、北から西へ58°の主軸をもつ。構造的に酷似する点から掘立柱建物跡80・82



第130図 柱穴104・188実測図

と同じ用途が想定できる。

掘立柱建物跡95(第129図) 梁間2間(2.8m)×桁行3間(5.4m)の規模を有し、北から西へ48°の主軸をもつ。床面積は15m²である。

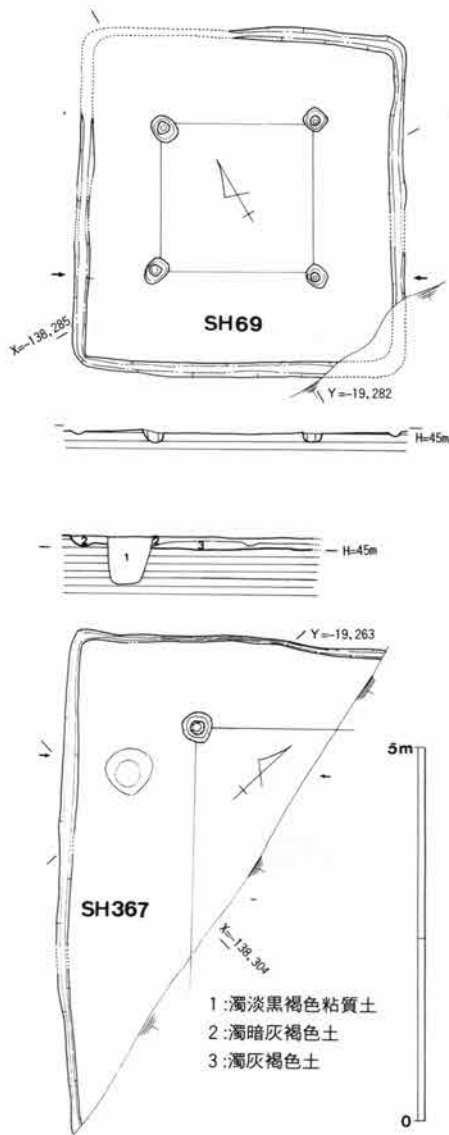
掘立柱建物跡96(第129図) 梁間2間(3m)×桁行6間以上(7.2m以上)の規模を有し、北から西へ47°の主軸をもつ。北西面から2間目には、東柱が想定できる。全体的な構造復原には、疑義の残るところであるが、単に居住を目的に設営された掘立柱建物跡ではないことを想定しておきたい。

掘立柱建物跡99(第129図) 梁間2間(2.7m)×桁行4間以上(6.7m以上)の規模で、北から西へ51°の主軸をもつ。

以上が、掘立柱建物跡についての概観である。流路4・5以東に展開する掘立柱建物跡72は、区画溝3を伴っていることから、B1地区で検出した区画溝13・22・979と掘立柱建物跡群と同規模の施設が存在することを示唆している。一方、それ

らより以南に展開する掘立柱建物跡群は、南西方から北東方に傾斜する地形に主軸をもつ掘立柱建物跡が大半であることから、明確な切り合い関係がない限り、同時期と判定しても良い状況にある。掘立柱建物跡毎に主軸が、少なからず異なっているが、それは、磁北に主軸を一致させていないことに最大の要因があると考えられる。奈良県南郷遺跡における掘立柱建物跡も建物毎に角度が異なっている。多くの事例を検証してはいないが、古墳時代における掘立柱建物跡の位置関係は、律令期の掘立柱建物跡とは異なり、厳格に建築基準を踏襲する制度が未発達であったと考えられる。そのため、掘立柱建物跡毎の主軸が一定しないと考えられる。今後、森垣外遺跡全域の発掘調査が終了した時点で、総合的に捉え直す必要を指摘しておきたい。

C地区では遺物出土状況において、特記すべき柱穴は少ない。柱穴104(第130図、図版第65-3)は、直径0.8mを測る不整な円形を呈しており、0.25mの柱痕を検出した。柱痕および掘形から第135図447~451に図示した土器が出土している。柱痕および掘形出土の土器には、わずかながら型式差が存在することから、この型式差が掘立柱建物跡の存続時期を表出している可能性がある。委細は後述するが、掘形内からはTK208型式を下限とする土器が出土しており、掘形からはTK23~47型式を上限と

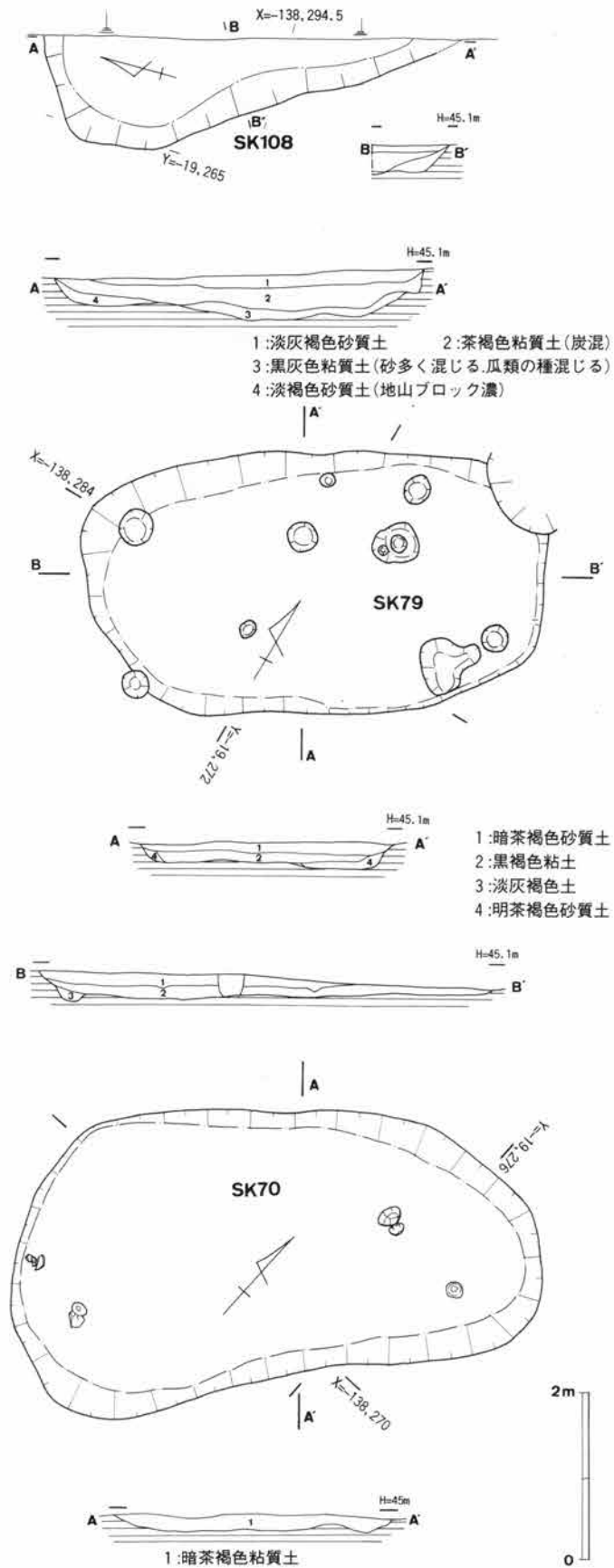


第131図 竪穴式住居跡69・367実測図

する土器が出土している。C地区の掘立柱建物跡の時期を検討する上で一級資料である。一方、柱穴188(第130図、図版第65-1・2)は、直径0.3m・深さ0.4mを測り、正円形を呈している。検出面から0.2m地点に土師器、高杯を完形品の状態で検出し、直下に脚部を故意に打ち欠いた状態の土師器高杯を検出した。柱痕自体は、上部構造物の重量により、多少、陥没した可能性が高いが、柱痕底部には到らないレベルでこれらの土器群を検出している。土師器高杯には、何らかの宗教的側面を付加させる見解が一般的であり、本例も埋納されている土器が土師器高杯であり、さらに、下位の高杯は脚部を打ち欠いていることから、掘立柱建物跡の解体に伴う宗教的儀礼に使用された土器群の埋納と解釈しておきたい。森垣外遺跡では、このような状況で土器が出土する柱穴は、数基検出しており、行為自体の系譜についても検証する必要がある。今後の課題としたい。

b. 流路4・5(第125・126図)

調査地最北端で検出した最大幅14mを測る流路である。流路4と5は、検出段階での切り合い関係は明確ではなかった。しかし、堆積状況を把握するための断面(第124図下段)により、流路4の埋没後に流路5が形成されたことが把握できた。この切り合い関係が、人為的であるのか自然の作用であるのかを検討しておきた

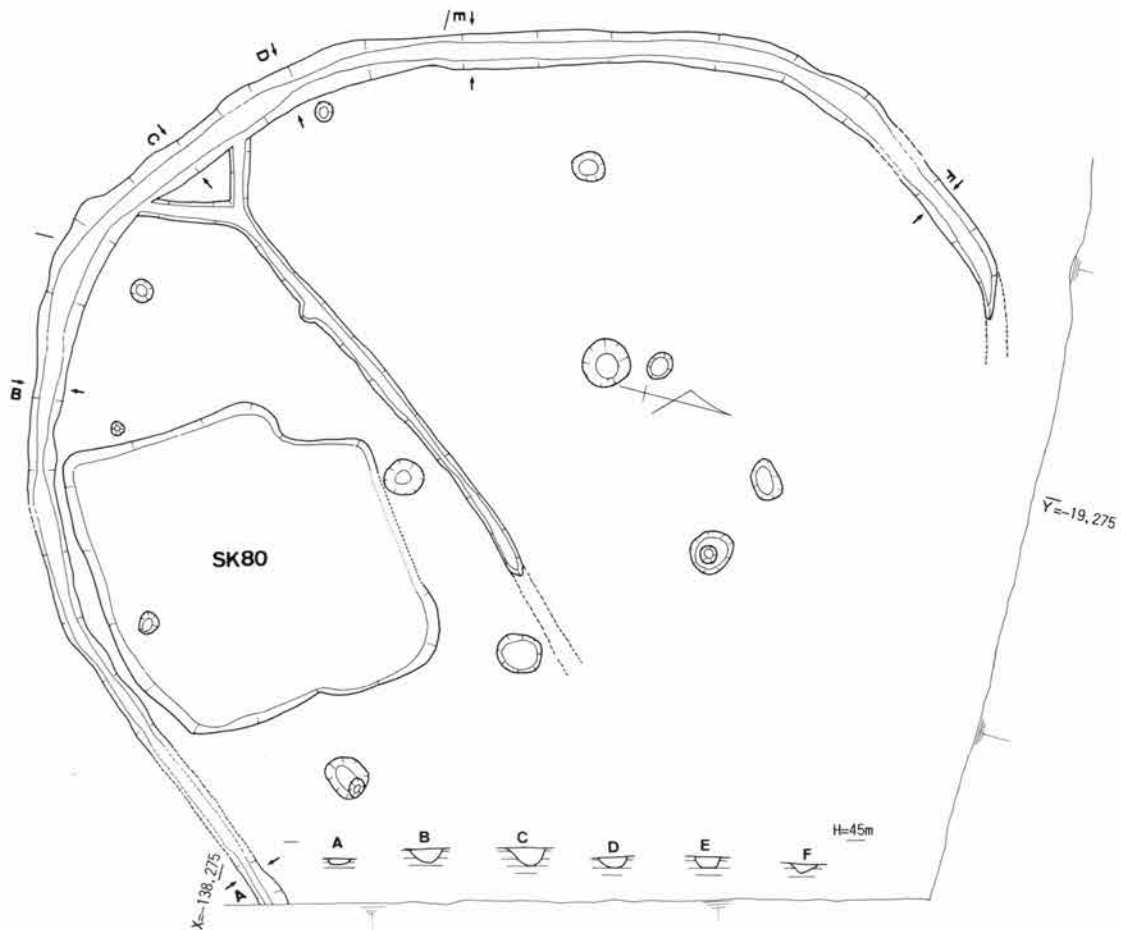


第132図 土坑70・79・108実測図

い。流路西端部は、徐々に落ち込んでいることから、地形の傾斜方向に沿って自然に形成されたことを示している。ここから流入した雨水は、おそらく北東方向へと流出したと考えられる。しかし、掘立柱建物跡72・73の西側を彎曲して流れる流路は、流出方向が、地形の傾斜とは一致しておらず、また、これらの掘立柱建物跡群を圍繞するように流れていることから人為的に開削されたと考えられる。このことから、掘立柱建物跡72・73の区画溝としての機能をもちながら、西方からの雨水を排水する目的で、流路4が形成されたと想定できる。それらがほぼ埋没した後、効果的に雨水を排水する目的で、流路5が掘り込まれたと考えられる。流路内の最下層には、第137図495・496のようにTK208型式前後に比定できる土器も見られる。しかし、最上層にはTK43型式の土器も出土し、また、B1地区流路14のように奈良時代前期の土器も出土している。このことから古墳時代中期に開削された流路が、幾多の改修作業を経て、湿地化し、大量の降雨の度に流路として固定された経緯を復原することができる。また、出土遺物には、精巧な滑石製鏡形模造品517(図版第66-1)とともに多くの土器(図版第66-3)、建築部材(図版第66-2)なども出土しており、宗教的行為の後に、使用した土器などを流路へ投棄したことも想定できる。

c. 竪穴式住居跡69・367(第131図)

竪穴式住居跡69は、一辺4.7mの方形プランを呈している。南北隅部が、後世の造作などによ



第133図 溝52実測図
溝の埋土は、暗茶褐色土の単一層

り消失している。検出面から床面では、5 cm程度の埋土を確認したに過ぎない。上部構造物を受ける四柱穴は、2 m間隔に穿たれており、深さ0.1mの周壁溝を検出した。出土遺物は検出していないため、時期については不明である。

竪穴式住居跡367は、西隅部を検出したに過ぎず、規模などの詳細は不明である。床面からTK10型式の杯546・547が出土している。

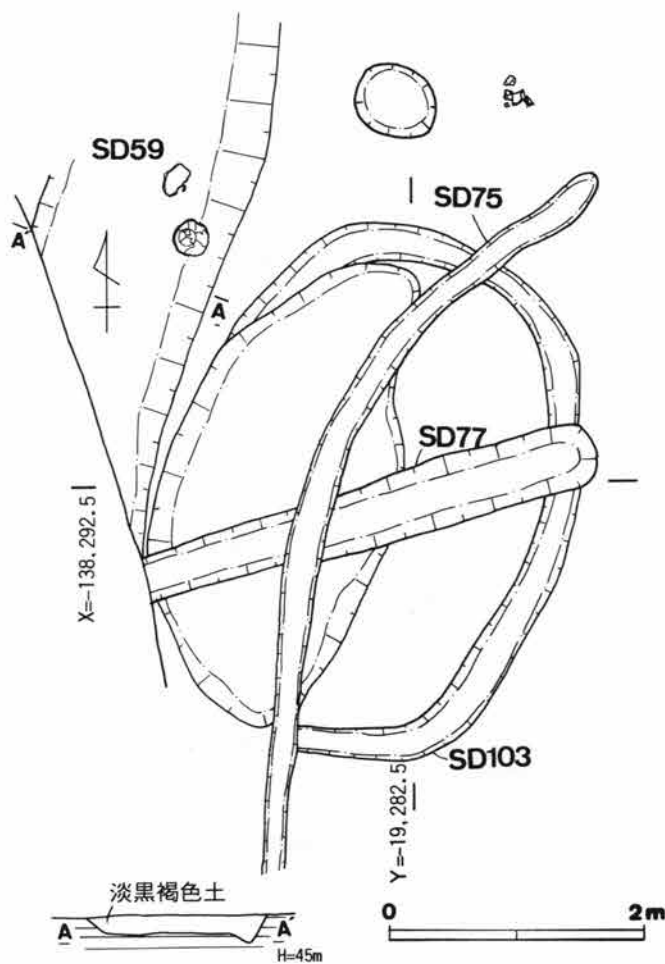
d. 土坑・溝

土坑108(第132図) 調査区東端で検出した隅丸長方形の土坑である。検出面から土坑底面までは0.6mを測り、基本的には3層の堆積層を確認した。土坑内から第139図534～543の土器が出土しており、MT15型式に比定できる。

土坑79(第132図) 長軸6.7m・短軸3.8mを測る隅丸方形の土坑である。底面までの深さは0.4 mであり、基本的に3層の堆積層を確認している。第138図519～526の遺物が出土しており、TK43型式に比定できる。

土坑70(第132図) 長軸7.7m・短軸4.5mを測る不整形土坑である。土坑自体は比較的浅く、0.3mを測るに過ぎない。土師器高杯が出土している。

溝52(第133図、図版第68-1) 流路4・5の南隣接部で検出した円形の区画溝である。溝の東半が調査地外になるため、平面プランなどは不明であるが、検出範囲での直径は12.5mを測る。基本的な溝幅は0.3mであり、深さ0.2～0.3mの断面「U」字形を呈している。円弧を描く溝の南西部分は、地形の傾斜がわずかではあるが最も高くなっており、この地点から円形区画溝52で囲繞された中央部に「Y」字形を呈する溝が穿たれている。この「Y」字形の溝底は、溝52の上半部に位置していることから、溝52に流入した雨水全てが、「Y」字形の溝に流入せず、水質が比較的安定した上澄み水のみが流入する構造になっている。円形区画溝52内では、小規模の柱穴を検出し、また、第139図575の白玉が出土した土坑80が位置している。その関連については不明であるがこの円形区画溝が、竪穴式住居跡としては、規模が大きいことと溝の断面形



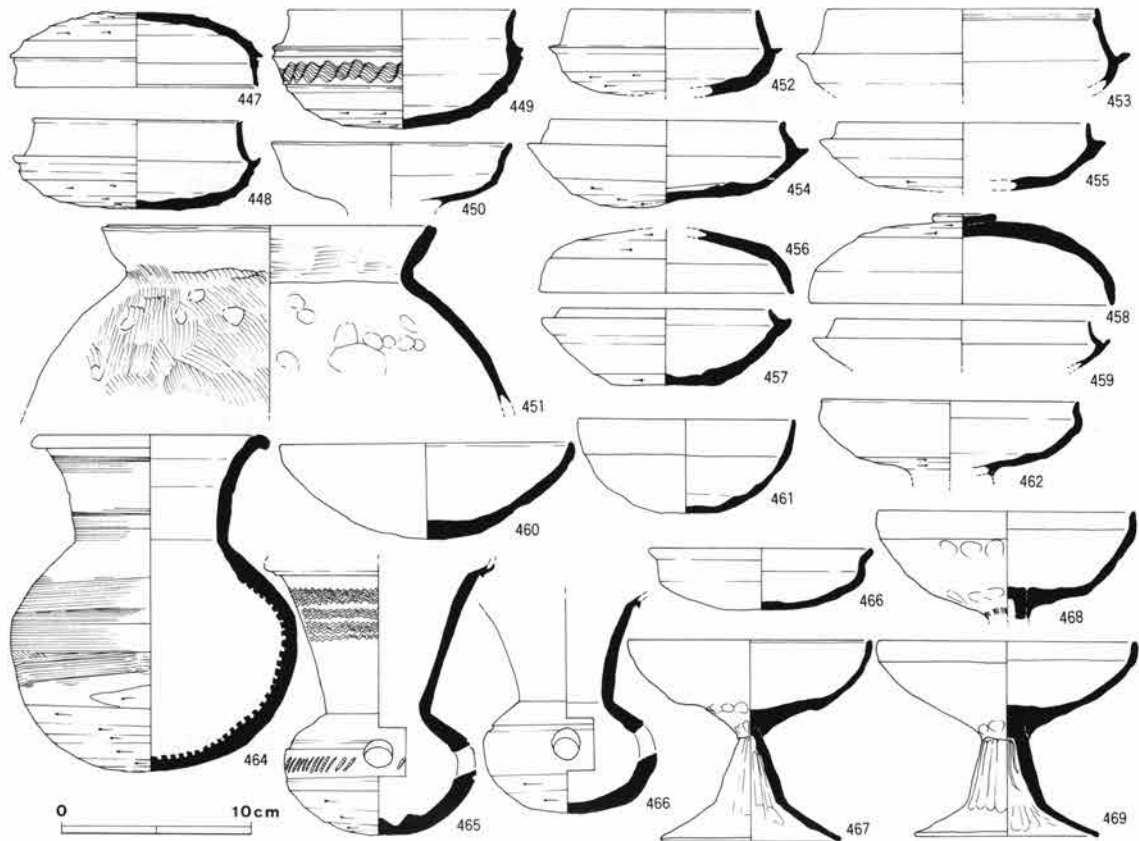
第134図 溝59・75・77、周溝103実測図

態が、浅い「U」字形を呈していることから首肯できない状況である。円形区画溝内へ安定した水質の雨水を引き込み、何らかの作業を行ったことを想定しておきたい。

周溝103(第134図、図版第67-2) 長径4m・短径3.2mの楕円形を呈している。当該遺構は、溝75・77に切られており、西隣接部では幅1.5mの溝59が、北流している。溝幅は、0.4mを測り、深さは0.2mである。埋土は、暗茶褐色土の単一層であり、第138図529・530の遺物からMT15型式に比定できる。小規模であることから、竪穴式住居跡とは考えられないが、当該遺構の用途については不明である。その他、調査地内では、多くの溝や土坑を検出しているが、その配置については第125図を参照していただきたい。

e. 出土遺物(第135~140図)

柱穴出土遺物(第135図) 447~451は、柱穴104から出土した土器である。447は、天井部が平らで、肩部稜も明瞭であることから、TK216型式からON46型式の範疇に比定できる。449は、外面に波状文をもつ杯身であるが、器形自体は、高杯の杯部に共通する要素が抽出できる。448は、シャープな成形の立ち上がりを有しており、ON46型式からTK208型式に比定できる。C地区において出土した土器の中で最古型式に比定でき、掘立柱建物跡の成立時期を表出する遺物として重要である。452は、柱穴358出土の杯身である。口径10cmを測り、MT15型式に比定でき

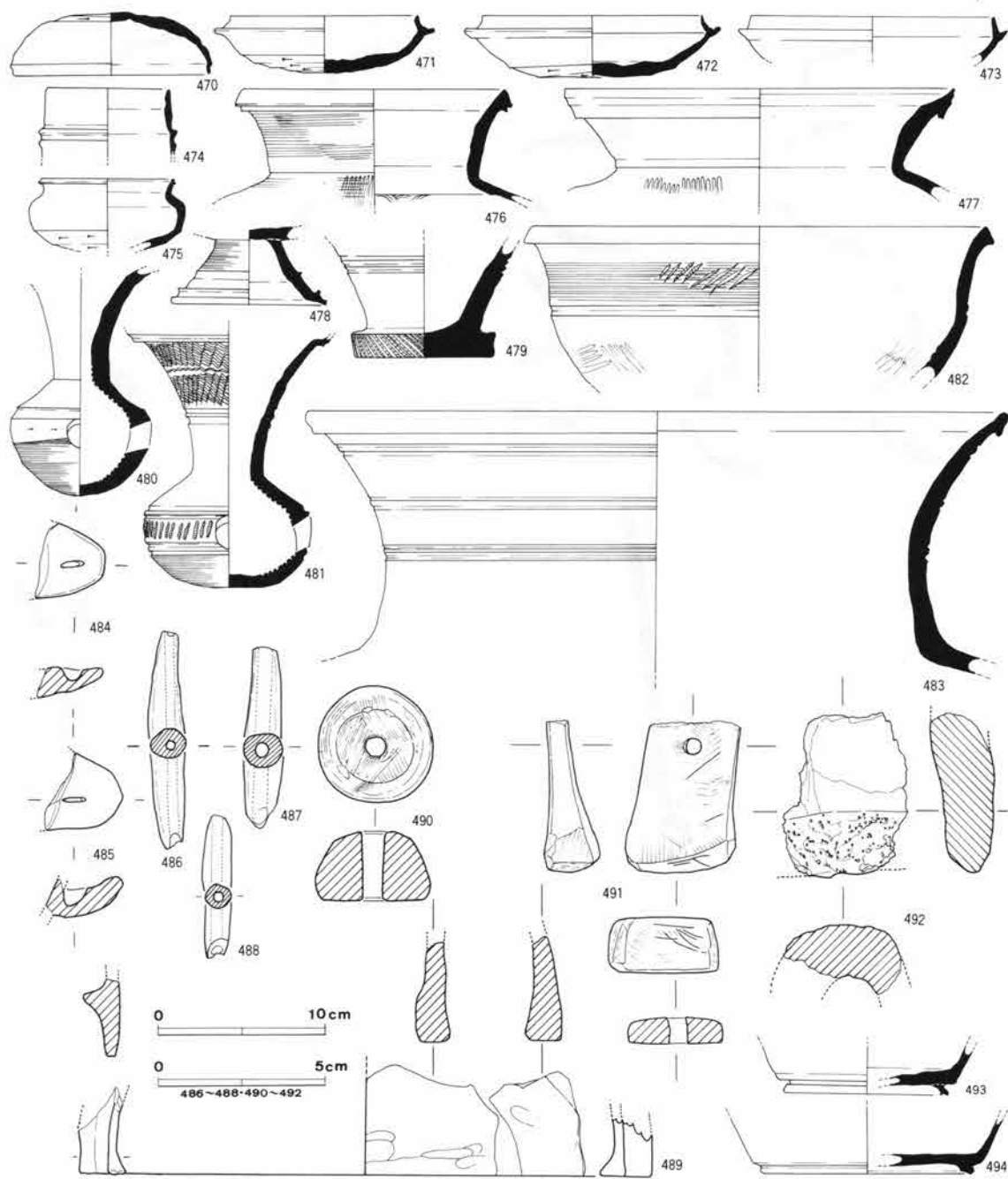


第135図 出土遺物実測図

447~451. S P 104 452. S P 358 453. S P 633 454・463~465. S P 78 455. S P 39 456・457. S P 336458. S P 593 459. S P 372 460. S P 546 461・462. S P 355 466. S P 348 467. S P 154 468・469. S P 188

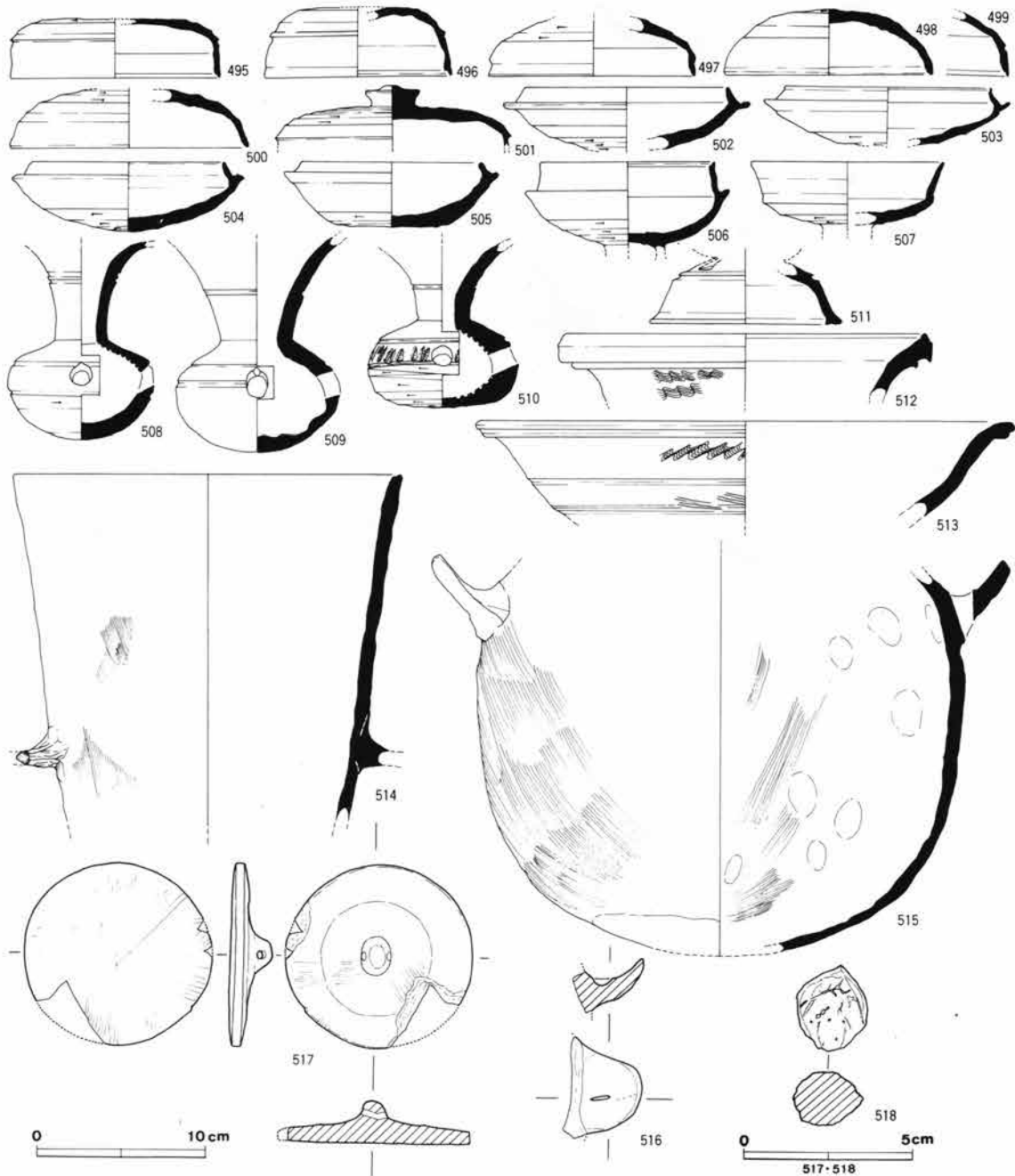
る。453は、柱穴633から出土した杯身で、口径は14.2cmである。形態的にはMT15型式の要素をもっているが、口径からTK10型式に比定できる。柱穴78からは、杯身454・広口壺463・甕464・465がまとまって出土しており、TK43型式に比定できる。460は柱穴246、461は柱穴355から出土した土師器鉢である。468・469は、柱穴188から出土した土師器高杯である。脚部を故意に欠損させており、何らかの宗教性を看取できる。

流路4出土遺物(第136図) 須恵器蓋杯470~473は、TK43~TK209型式に比定できる。474は、口径7.4cmを測る直立する口縁部である。壺に類する土器であろうか。478は、明瞭な稜が2条施された高杯の脚部である。透かしはなく、TK73型式前後に比定できよう。479は、底部厚



第136図 出土遺物実測図(470~494. 流路4)

が1.4cmを測る鉢である。底部粘土板外面には平行タタキ痕が顕著に残存している。482は、口径27cmを測る器台である。通有に見られる器台に比べ、内湾している。483は、口径41.8cmを測る大型の須恵器甕である。484・485は、ヘラ状工具による刺突孔を有する甑の把手である。486～488は、直径1cm前後の土錘である。489は、残存状態がきわめて不良であるが、移動式竈の底部である。底部復原直径は、34.7cmである。490は、直径3.5cmを測る滑石製紡錘車、491は上端部が欠損しているが、白色砂岩系の携帯用砥石である。492は、金属滓が熔着した鞆羽口である。493・494は、奈良時代前期の須恵器杯である。B1地区溝14出土土器と同時期である。なお、TK43型式の熔着した杯身と壁体473が出土しており、森垣外遺跡周辺で須恵器生産が行われてい



第137図 出土遺物実測図(495～518. 流路5)

たことが指摘できる。類似資料の増加が期待される。

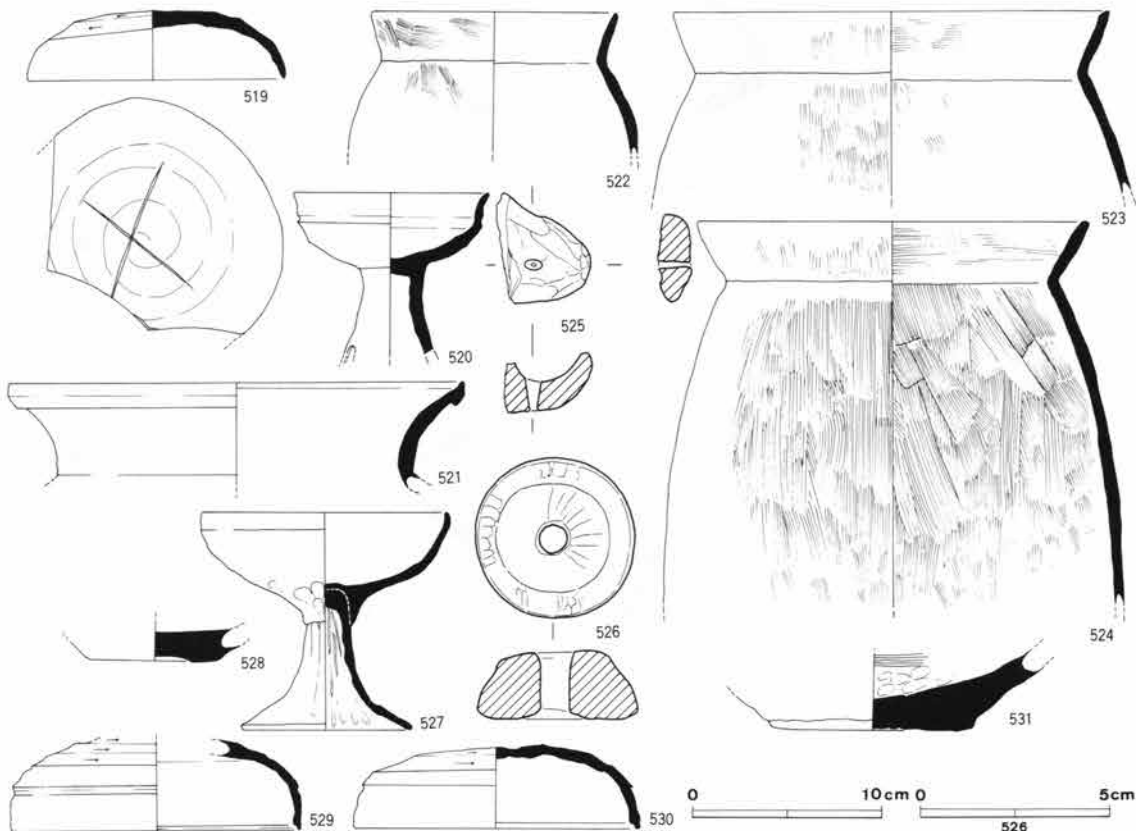
流路5出土遺物(第137図) 495は、口径12.3cmを測る須恵器蓋である。内傾する口縁端部と平らな天井部からTK216型式に比定できる。496は、直径10.9cmを測る蓋である。諸特徴からTK23~47型式に比定できる。その他、TK43型式に比定できる須恵器などが出土している。なお、513は、口径32cmの須恵器器台であり、514はほぼ直立する体部を有する甑、515は胴部最大径が29cmを測る把手に穿孔部をもつ土師器の甕である。517は、直径5.4cm、鈕を含む厚みが1.4cmを測る精巧な鏡形模造品である。鏡背には、文様帯を区画する圏線が表現してある。府内では、木津町吐師七ツ塚1号墳および京都市鏡山古墳に類例がある。特に、前者は、森垣外遺跡から南方1kmに所在していることから、何らかの関連を想定することができる。518は、全長2.5cmの桃種子である。当該流路からは、大小の桃種子が多く出土している。栽培種であろうか。

土坑79出土遺物(第138図) 519および520はTK43型式に比定できる須恵器である。525は、穿孔部を有する土師器の把手であり、526は、直径4.2cmの滑石製紡錘車である。

土坑70出土遺物(第138図) 529・530は、口径が14.8cmを測る須恵器杯蓋である。MT15型式に比定できる。

溝3出土遺物(第139図) 532は、TK47型式前後に比定できる須恵器杯身である。533は、残存長約3cmの鉄滓である。

土坑108出土遺物(第139図) 539は、口径21.2cmの無蓋高杯である。胎土・焼成・色調から陶



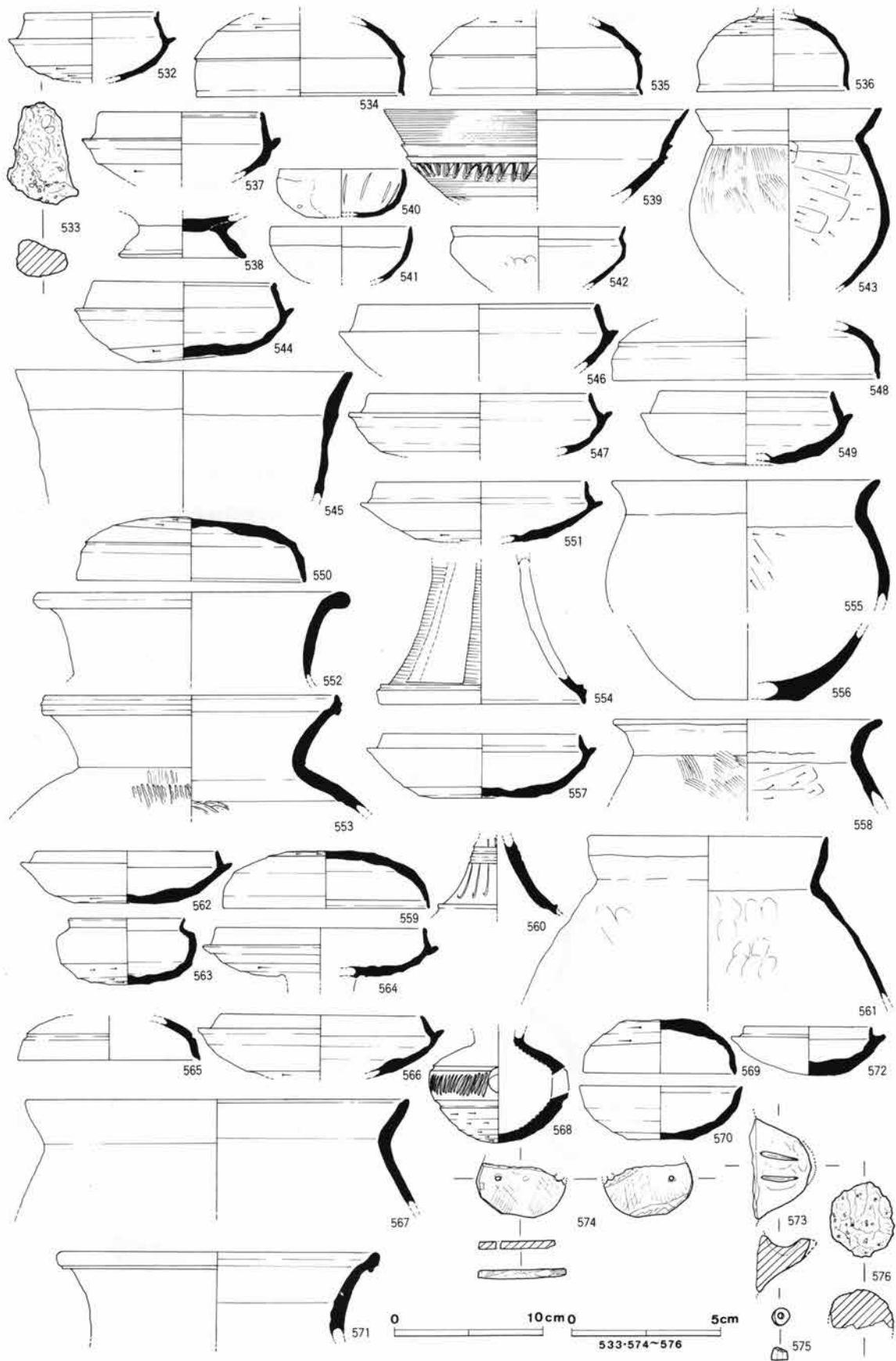
第138図 出土遺物実測図

519~526. 土坑79

527・528. 土坑70

529・530. 溝52

531. 土坑71



第139図 出土遺物実測図

532・533.溝3 534~543.土坑108 544・545.溝77 546・547.竪穴式住居跡367 548・549.土坑65 550~556.土坑113 557・558.溝114
 559~561.溝59 562・563.土坑701 564.土坑755 565~567.土坑520 568~571・573・574.溝60 572.土坑111 575.土坑80

邑古窯址群産である。540は、内面にヘラ工具の圧痕が等間隔に残存する土師器の椀である。共伴土器からMT15型式に比定して大過ない。

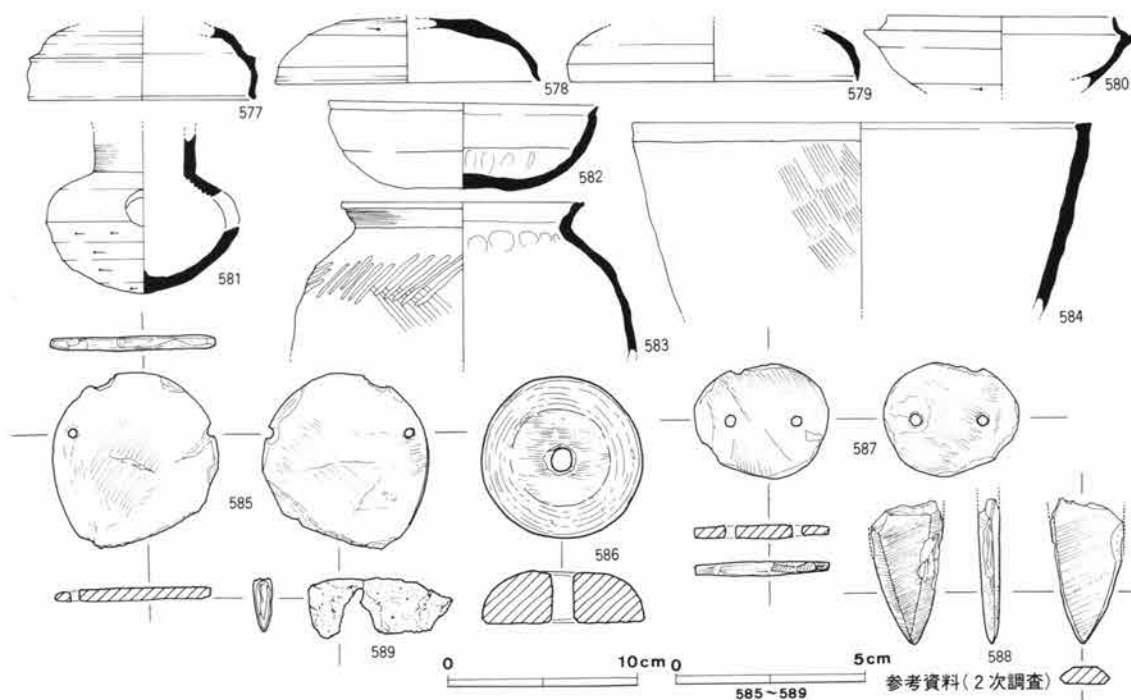
竪穴式住居跡367出土遺物(第139図) 546は、口径16cm、547は、口径14.8cmを測る杯身であり、TK10型式に比定できる。その他、560は、溝59から出土した外面に釣針状の線刻紋様を有する須恵器高杯の脚部である。573は、溝60から出土した貫通しない切り込みをもつ土師器の把手である。574は、同じく溝60から出土した直径3cmの滑石製有孔円板である。

遺物包含層出土遺物(第139図) 基本的には、実測図に型式など委ねるが、585は、直径4.3cm、587は直径3.6cmの有孔円板である。586は、直径4.3cmを測る滑石製紡錘車である。なお、588は、平成9年度A1地区から出土した剣形石製模造品である。剣形は、この遺跡では初出である。

以上が、出土遺物の概観である。概観にとどめたが、詳細は、実測図を参照して頂きたい。最後に、当該遺跡の特色を表出し得る遺物を第141図にまとめた。590は、全長3.9cmを測る土製品である。古墳時代集落から一般的に出土する方形柱状体の砥石に形態的に近似している。しかし、用途は不明である。591～593は、いわゆる縄蓆文土器と称される陶質土器である。縄目タタキ痕が、縦方向に認められる592と、斜交する591・593がある。特に、593には、沈線が2条認められる。これらは、朝鮮半島から搬入された土器と見るべきであり、さらに、地域を限定すれば、加耶地域からの搬入土器と理解される。594は、全長4.9cm、厚み1cmの鍛冶道具である。上端は金槌による鍛打により形崩れがみられる。

f. その他の時代

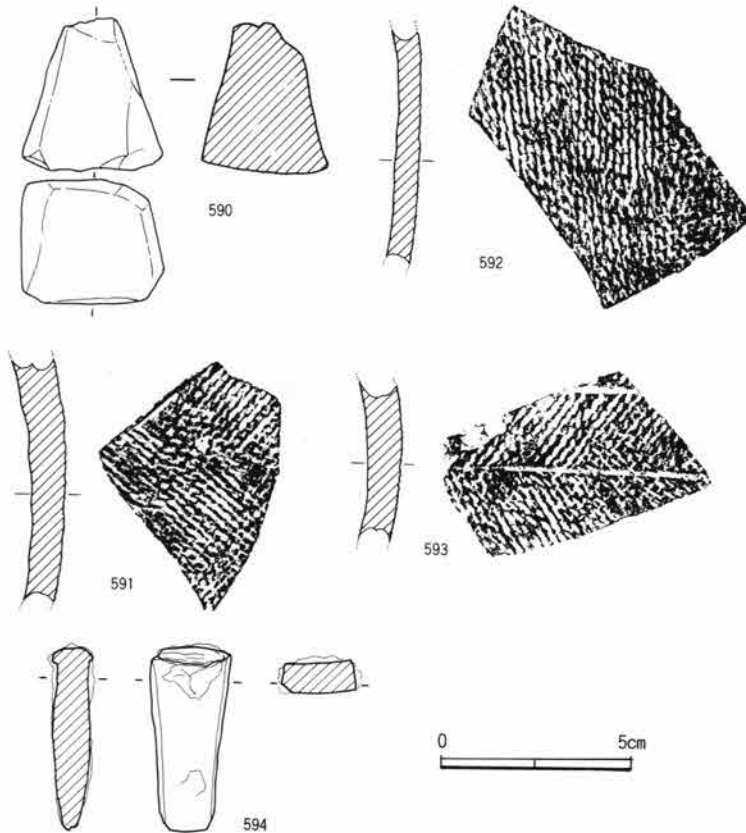
流路4・5最上層からは、奈良時代前期に比定できる土器が出土していることについては、記述したが、ここでは、弥生土器が出土した焼土坑71(第142図)について概観しておきたい。土坑



第140図 出土遺物実測図(577～589.L.N. 4 a・b層)

長軸は4.6m、幅は1.1mを測る長方形プランを呈している。深さは、最深部で0.2mを測り、土坑の全面において、第142図に見られるように炭と焼土、そして、細片化した土器が散乱している状況であった。当該土坑は、古墳時代の溝52の中央を東流する「Y」字形の溝に切られていることから、MT15型式以前であることを示している。また、土坑内から古墳時代の遺物が出土し

ておらず、第138図531の底径10.4cmを測る弥生中期前半の壺形土器が出土している。その性格については、憶測の域を出ないが、土器の焼成坑なども視野に入れる必要がある。

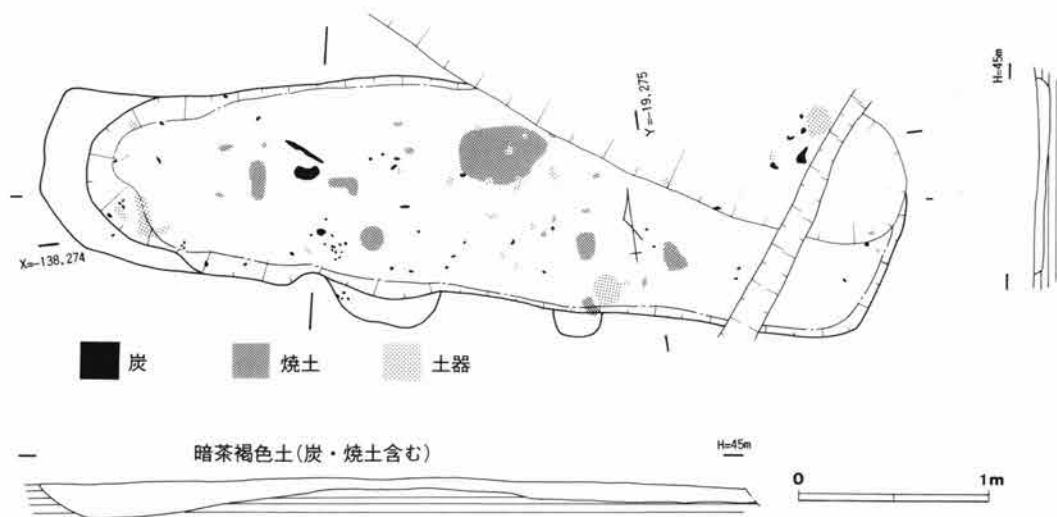


第141図 出土遺物実測図

590.L.N. 4 b 591. 流路4 592・593. 流路 5 594. B 1 地区流路875

4. まとめ

以上が、森垣外遺跡における平成10年度に実施した第3次発掘調査の概要である。概要報告であるため検出遺構すべてについては、記述できなかったが、代表的な遺構・遺物については一定度、記述できた。ここでは、これらの事実報告を基に古墳時代に焦点を絞



第142図 土坑71実測図

り、遺構の変遷や森垣外遺跡が有する特質などについて記述しておきたいと思う。なお、ここでは、第3次発掘調査成果を中心に記述することとし、第2次調査を含めた全体の成果については、当該遺跡の発掘調査の終了後に行いたいと思う。第143図には、A1地区およびA2地区の平面図を合成し、第144図には、B1地区およびC地区の平面図を合成した。各遺構の位置関係を把握する上で有用である。特に、B1地区およびC地区に展開する古墳時代中期から後期の掘立柱建物跡群とそれらを圍繞する方形区画溝の位置関係については、本図を参照頂きたい。

まず、遺構の変遷であるが、最も古い遺構としては、A2地区で検出した北尻2・3号墳を挙げることができる。古墳の周溝から出土した土師器壺(第94図18)は、いわゆる古式土師器の様相を呈している。しかし、小破片のため単体では、型的検討を加えられないが、精華町教育委員会が発掘調査を実施した北尻4・5号墳^(注5)では、古墳の周囲にめぐる区画溝から最も新しい特徴を有する布留式土器が出土している。これらは、一辺17mを測る方形墳であり、A2地区で検出した北尻2・3号墳は、それらよりは小型であることから、北尻4・5号墳が先行して築造された可能性が高い。北尻2・3号墳では、須恵器が出土していないことから、当該地における須恵器出現以前に比定できる。

以上のように北尻古墳群は、現時点では5基から構成されるが、全て方墳である。当該時期には、前方後円墳や円墳が主流をなしているが、それらとは異なり、弥生時代の方形周溝墓の系譜を引く低墳丘方形墓によって構成されていることが指摘できる。低墳丘方形墓の被葬者像については、各地域首長に帰属する階層の長であることが指摘できる。北尻2・3号墳の被葬者についても、一辺17mを測る北尻4・5号墳の被葬者下において、活動した有力者と解しておきたい。

その低墳丘方形墓が、埋没後、当該地には、事実報告で記述したように、古墳時代中期から後期にかけての集落が形成される。現時点における集落の成立期については、平成9年度のA1地区、柱穴653から出土した甕からTK73型式前後に想定できる状況にある。しかし、その段階における掘立柱建物跡群の棟数や規模については定かではない。方墳と集落成立時期には年代差があることから、低墳丘方形墓を築造した集団と中期集落を造営した集団は同一ではないと考えておきたい。

これらの掘立柱建物跡群の中心時期は、先述したようにTK23～47型式に比定できるが、建物群を圍繞する区画溝13・22・979の上面からMT15型式～TK10型式に比定できる竪穴式住居跡15・16を検出している。一般的に古墳時代の集落は、竪穴式住居跡から掘立柱建物跡へと発展的に変化することが認識されているが、森垣外遺跡では、何らかの要因によって中核的な掘立柱建物が廃絶し、その後、竪穴式住居が造られていることが把握できた。集落の小規模化とともに、質的变化としてこの現象を捉えた場合、遺跡地を取り巻く自然環境などが急変したり、あるいは、疫病などが蔓延したことも考慮する必要があるが、中核をなす掘立柱建物群と竪穴式住居群には、あまり時期差を想定できないことから、廃絶の要因を畿内政権との関係における政治的な変化と結び付ける見解が、支持されるべきであろう。しかし、全ての掘立柱建物が急激に廃絶したのではなく、MT15型式～TK10型式以後も掘立柱建物が存在していることが柱穴内出土土器から確

認できた。このことから、竪穴式住居の区画溝13・22・979上での検出は、あくまで中核的掘立柱建物群の廃絶を意味するのであって、集落全体の廃絶を示す根拠にはならないことを念頭におくべきであろう。



第143図 A1・A2地区平面図

このように、中核的集落の廃絶以後も集落が継続されることが把握されたが、6世紀末に比定できる須恵器なども出土していることから、規模などはわからないが、当該時期まで集落が存続した可能性が指摘できる。なお、奈良時代にはB1地区において2条の溝を検出しており、古道である可能性を指摘できる。また、平安時代前期の緑釉・灰釉陶器が出土し、井戸・掘立柱建物跡などを確認していることから、相楽郡内での歴史的意義付けを、今後、検討しなければいけない。以上が遺構変遷の概略である。

次に、森垣外遺跡を特徴付ける古墳時代の集落構造などについて考えたい。

当該遺跡の集落成立時期は、TK73型式に比定できる資料も出土しているが、その中心的な時期は、おおむねTK23～47型式に比定できることは既述した。しかし、他の集落とは異なり、掘立柱建物跡が中心となっている点に当該集落の特異性が看守できる。掘立柱建物自体は、弥生時代以降にも存在するが、しかし、集落内の全ての掘立柱建物が、生活用施設として使用されている事例は、古墳時代中期を待たなければならない。南山城地域に焦点を当てれば、現時点でTK23～47型式に比定できる掘立柱建物跡を生活用施設として汎用している遺跡は、森垣外遺跡以外には確認できない。まず、この点において当該遺跡の先進性を読み取ることができる。また、これらの掘立柱建物跡群は、単に遺跡地内に点在している状況ではなく、B1地区で検出した一辺46mの方形区画溝13・22・979によって隔絶されており、まさに首長が住まう施設として明示されていることが把握できた。今後は、A2地区やC地区で確認した掘立柱建物跡との関係が集落を検討する上で重要な要素となろう。

また、今回の調査においても、朝鮮半島の陶質土器である縄蓆文土器が出土している。韓式土器や韓式系土師器の出土も確認できることから、朝鮮半島からの渡来人である「今来伎人」が当該集落に参入していたことが、把握できた。数点の土器によって渡来系技術者の集落内参入を首肯することは、厳に戒めねばならないが、TK23～47型式に比定できる鍛冶関連遺物やA1地区で大

壁住居跡等を確認していることから、集落内への参入についてはおおむね首肯できる状況であろう。

一方、森垣外遺跡からは、大量の須恵器が出土しているが、胎土・焼成・色調などの肉眼観察から大阪府陶邑古窯址群で生産された個体が多く認められた。これに関しては、奈良教育大学、三辻利一教授の分析結果もあわせて参照して頂きたい。南山城における集落出土須恵器をつぶさに実見したわけではないが、陶邑古窯址群産の須恵器の出土絶対量は、いままで確認されている集落址の中では最も多いことがうかがえる。陶邑古窯址群は、基本的には畿内政権によって掌握されていた生産地であるが、その製品が多く出土している事実は、朝鮮半島の陶質土器の出土とともに、森垣外遺跡を評価する上で重要な要素である。

次に、集落内での生産活動について概観しておきたい。森垣外遺跡では、遺構および遺物包含層から多くの石製模造品が出土している。特に、有孔円板や勾玉形模造品が量的に多い。排出される掘削土を全て洗浄すれば、現行の出土量をはるかに凌ぐ出土量に達することは必至であろう。出土する石製模造品の中でC地区流路5で出土した精巧な鏡形模造品517の出土は、府内の事例では、2遺跡しか知られていない。集落出土としては初出であり、1km南方に所在する木津町吐師七ツ塚1号墳から出土していることと当該遺跡からの出土に何らかの関係を想定することも可能であろう。森垣外遺跡では、滑石原石や砥石が出土していることから集落内で石製模造品を製作していたことが把握できているが、集落内で石製模造品を頻繁に多用したため、粗い成形の模造品が多く出土することはすでに予想したところである。一方、遺跡地内では、鉄滓や鞆羽口などが出土していることから、集落内で鍛冶に類する作業が行なわれていることが想定できる。また、椀形鉄滓の出土は、鍛冶以外の生産行為をも示唆している。その他、紀淡海峡や大阪湾岸、備讃瀬戸周辺から搬入された製塩土器や、琥珀・軽石などの出土は他地域との交易が存在したことを示唆している。なお、馬歯の出土は、集落内での馬飼いを示しており、製塩土器以外の塩の搬入方法なども、今後、検討しなければならない。

このように、中核的掘立柱建物跡を圍繞する区画溝をもつこ



B1地区



C地区

第144図 B1・C地区平面図

とや「今来伎人」の集落内参入を示す遺構・遺物の検出、滑石原石や製塩土器などの交易品の出土は、当該遺跡の歴史性を勘案する上で重要な要素であろう。

最後に、森垣外遺跡の南山城地域における歴史的位置付けについて概観しておきたい。南山城地域では、全長180mの城陽市久津川車塚古墳や全長110mの同芭蕉塚古墳が、古墳時代中期中葉から後半にかけて築造されるが、それ以後、大型前方後円墳は築造されなくなる。これは、当該時期に、何らかの政治的変動が生じたことを示している。この時期に先進的集落である森垣外遺跡が生成されることは、大型前方後円墳の消失と無関係ではない。おそらく、大型の前方後円墳に表出される政治的体制が、森垣外遺跡のような先進的集落の生産力の向上により、崩壊を余儀なくされた過程を想定することができる。また、このような集落には、盟主墳としての前方後円墳や円墳の存在を想定するケースが多いが、山城町上狛天竺堂古墳^(注6)のようにTK23~47型式に比定できる初期の横穴式石室を有する小型墳が、すでに、同じ南山城地域においても出現していることから、森垣外遺跡周辺にも同様な古墳が所在する可能性が指摘できる。

また、中核をなす掘立柱建物跡群が廃絶した後、竪穴式住居跡を中心とする小規模集落が造営される事実は、古墳時代中期に生成された地域首長を介在とした畿内政権による地域支配体制が崩壊し、より直接的な支配体制へと変化する見解^(注7)と符合している。政治的に解体を強いられた中核集落は、集落規模が小型化するものの、古墳時代後期末まで存続したことを多くの遺構・遺物が示している。

以上のように森垣外遺跡は、南山城地域の政治的変動を如実に表出する遺跡であることが判明した。今後、古墳の動態以外の観点から南山城地域の歴史的背景を再構築すれば、古墳が有する歴史的意義をより明確にできるであろう。また、奈良県布留遺跡や同南郷遺跡、同藤原宮東方官衙下層の高殿遺跡、大阪府大園遺跡、同長原遺跡、兵庫県松野遺跡などとの比較が進展すれば、森垣内遺跡がもつ歴史性を、さらに明確にできるであろう。

5. おわりに

森垣外遺跡発掘調査は、ここに報告したように3回目を数える。その間、遺跡の範囲を限定したり、基本的な遺跡の年代を明らかにするなど、実に多くの調査成果をあげてきた。南山城ではきわめて希少な遺跡であることが、徐々に明らかになってきたと思う。これは、調査に従事していただいている方々の尽力によるところが大きいが、発掘調査を効率的に進行できるように有形無形の協力を惜しまれなかった京都府木津土木事務所所員の方々のご配慮も忘れることはできない。文末ではあるが、記して感謝の意を表したい。

最後に、調査期間中から概報作成に到るまで有益な助言をいただいたの方々のご芳名を記し、感謝の意を表したい。(敬称略・順不同)

小田富士雄・井上満郎・亀田修一・中島 正・橋本清一・日野 宏・金 圭東・広瀬和雄・大竹弘之・白石耕治・塚本敏夫・北野隆亮・田中清美・武末純一・穂積裕昌・酒井清治・森下章司・杉本 宏・上田真一郎

- 注1 精華町教育委員会村川俊明氏にご教示頂いた。
- 注2 小池 寛・中村周平「森垣外遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第86冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注3 清水眞一「土師器・長頸壺に関する一考察」(『橿原考古学研究所論集』第9 奈良県立橿原考古学研究所) 1988
- 注4 (財)元興寺文化財研究所の塚本敏夫氏にご教示頂いた。
- 注5 村川俊明「精華町北尻遺跡」(『第7回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集』 京都府埋蔵文化財研究会) 1999
- 注6 山城町教育委員会の中島 正・上田真一郎両氏には、現地および出土遺物について、多くのご教示いただいた。感謝したい。
- 注7 和田晴吾「南山城の古墳―その現状―」(『京都地域研究Vol. 4』 立命館大学人文科学研究所) 1988

参考文献

- 宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』 中央公論美術出版 1996
- 平良泰久「精華の古墳時代」(『精華町史』本文篇 精華町史編さん委員会) 1996

調査および概報作成参加者(敬称略・順不同)

田鍛美紀・高木 彩・大坪由美香・宮本香織・村上雅紀・山村智美・福岡正春・西置純子・辻 俊祐・高江かおり・木下一誠・井上あい子・木藤洋介・菊池孝典・坂本直子・大田正孝・伊達優子・奥島かおり・平林千佳・佐伯全子・齊藤和子・小川布子・吉川三子・金戸康子・六車美保・寺尾貴美子・古賀友佳子

付 載 報 告 1

森垣外遺跡出土古式須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

蛍光X線分析法の特長は大量の土器試料の分析が可能であるという点にある。

古代土器の胎土研究の原点は窯跡出土須恵器にある。須恵器窯跡は全国各地に残っており、そこからは大量の破片が出土している。これらの破片を長い年月をかけてこつこつと分析し、集積された分析データの上に須恵器産地推定法が開発されたのである。

この方法を消費地遺跡出土須恵器に適用し、産地を推定してみても、即、須恵器の伝播・流通論にはならないのである。ここでもまた、伝播・流通論の展開のための方法論研究が必要である。例えば、各地の古墳出土の初期須恵器の伝播・流通論の研究はまず、地方窯周辺古墳出土の初期須恵器に適用され、地元窯と陶邑群間の2群間判別分析、また、陶邑群、伽耶群間の2群間判別分析が行われた。その結果、陶邑産の須恵器が一方向的に各地の古墳へ供給されていたことが見出された。このことはかつて、田辺昭三氏が唱えた初期須恵器の陶邑一元供給説を裏付ける。ここでも蛍光X線分析の特徴が生かされ、陶邑産須恵器が、1・2点供給されていたというのではなく、供給の流れとなっていることが示されている。これに対して、朝鮮半島産の陶質土器は検出されてはいるものの、決して、供給の流れにはなっていないのである。逆に、畿内の遺跡出土の古式須恵器も大量に分析されているが、ほとんどが陶邑産須恵器と判定されており、地方窯産の須恵器の供給例は皆無である。また、陶質土器については、奈良県天理市の小路遺跡、星塚1号墳から比較的まとまって出土しているが、一般には、それ程まとまって出土していない。このようにして、1遺跡から出土した、土器型式もよく把握できる一級資料を大量に分析してみるのも、一つの方法である。

本報告では、森垣外遺跡から出土した古式須恵器の一級資料を多数分析したので、その結果について報告する。

資料はすべて、一旦、100メッシュ以下に粉碎したのち、高圧をかけて一定形成のペレットに固め、分析を行った。理学電機製の完全自動式蛍光X線分析装置(波長分散型)、3270型機が使用された。

分析値は表1にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料、JG-1による標準化値で示されている。この値から%濃度やppm濃度に変換することは容易であるが、データ解析にはJG-1による標準化値を利用する方が便利である。筆者は通常、JG-1による標準化値でデータ解析を行っている。

データ解析はまず、K-Ca, Rb-Sr分布図上に分析値をおとし、分析された資料の化学

図1 両分布図(1)

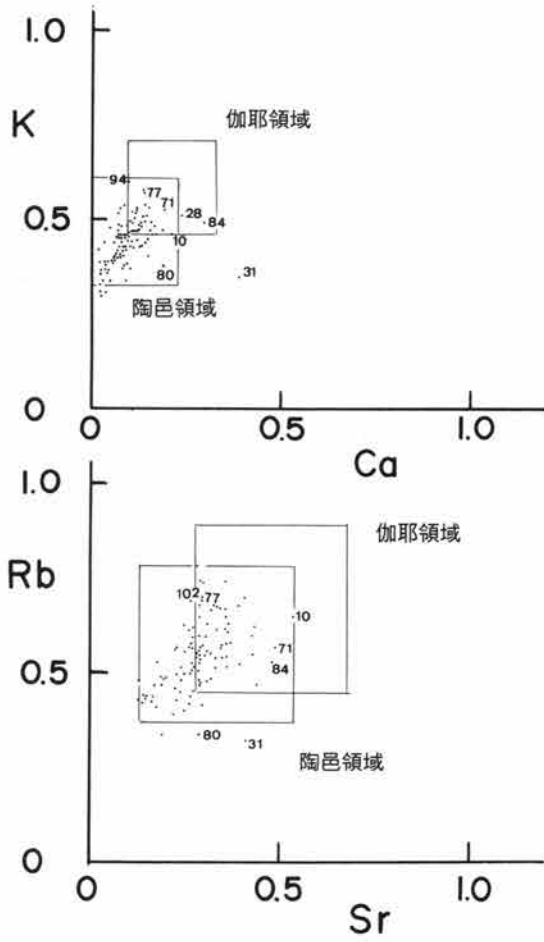


図2 両分布図(2)

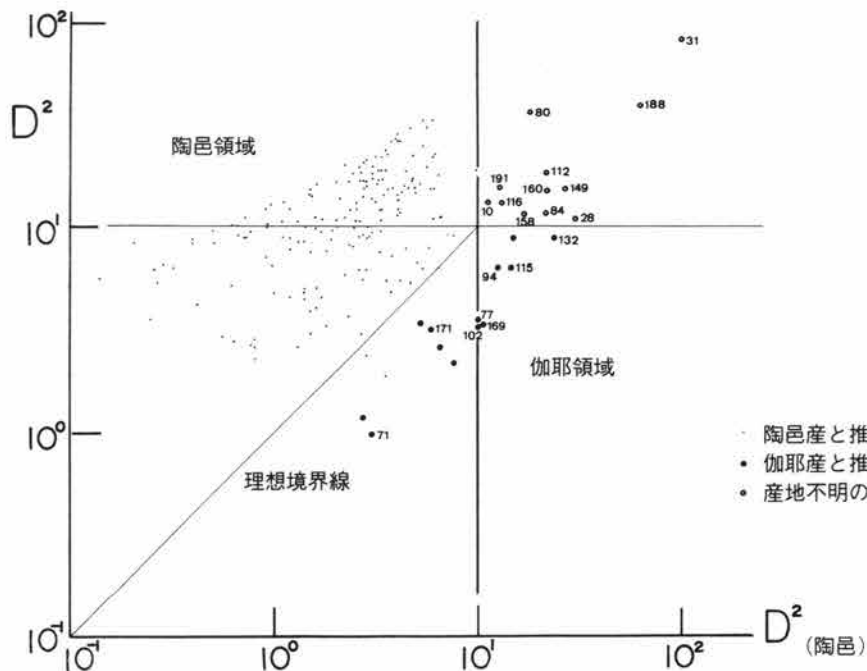
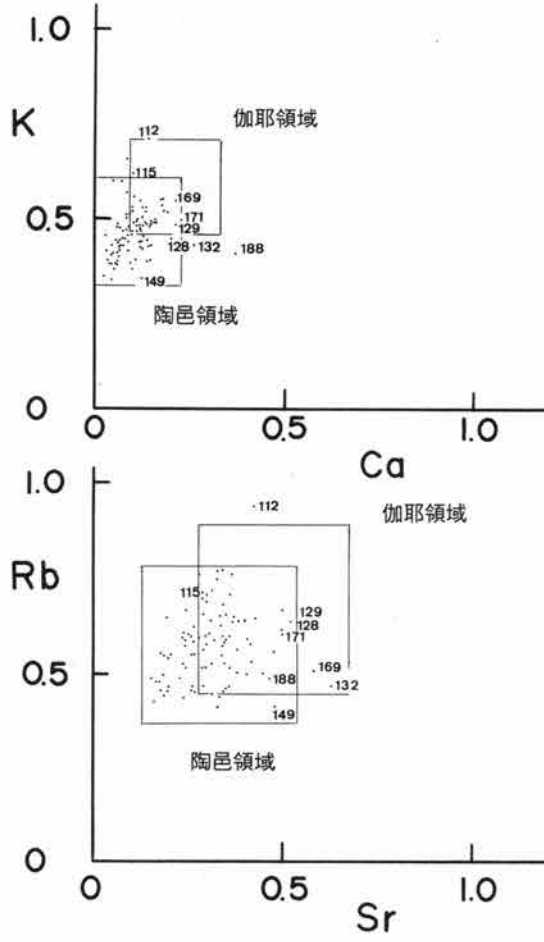


図3 判別分析図

- 陶邑産と推定されたもの
- 伽耶産と推定されたもの
- 産地不明のもの

両分布図および判別分布図

特性を定性的に把握するところからはじめる。図1にはNo1～No108の資料の両分布図を示す。両図には比較対照のために、陶邑領域と伽耶領域を示す。この領域は両母集団の平均値から $\pm 2\sigma$ (標準偏差)を両軸に沿ってとってあり、長方形に描いてあるが、本来は95%の試料を含む等確率楕円で描かれるものである。しかしここでは定量分析した試料集団を一旦アナログ化し、両分布図上で定性的に考えるのであるから、わざわざコンピュータを使って等確率楕円を描くまでもない。図1から大部分の資料は陶邑領域に分布し、伽耶領域には分布しないことがわかる。

同様に、図2にはNO109～204までの資料の両分布図を示す。この図でも大部分の資料は陶邑領域に分布し、伽耶領域には分布しないことがわかる。

このようにして、アナログ化された両分布図から、今回分析した資料の大部分は陶邑領域に分布することが定性的にも把握できた。

しかし、分析データはこのままで放置しておく訳にはいかない。再びデジタル化し、定量的に両母集団への帰属を決めなければならない。そのためにとられる方法が2群間判別分析法である。この方法に使われる重要因子がマハラノビスの汎距離の二乗値である。今回分析した全資料について、両母集団の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値の計算結果も表1に示されている。

各母集団への帰属条件は5%の危険率をかけたホテリングのD検定によって導き出される。この結果、陶邑群への帰属条件は $D^2(\text{陶邑}) \leq 10$ であり、伽耶群への帰属条件は $D^2(\text{伽耶}) \leq 10$ である。この結果を導入して産地推定をした結果も表1に示してある。なお、両母集団の重心からのD値がともに10以下である場合、つまり、両母集団への帰属条件がともに満足された場合、より距離の近い母集団を産地として採用した。また、両母集団の重心からのD値がともに10以上である場合、産地不明とした。

この結果は判別分析図として図3に示されている。これも一つのアナログ化である。このように図形化することによって、資料集団の性格がよく把握できる。とりわけ、土器のように生産地の多いものは定量化(デジタル化)と図形化(アナログ化)の繰り返し作業によって、次第に産地推定の結果や、産地推定のデータの集積である伝播・流通が理解できるようになる。根気の要る仕事なのである。

図3をみると、陶邑領域 [$D^2(\text{陶邑}) \leq 10$, $D^2(\text{陶邑}) < D^2(\text{伽耶})$] に大部分の資料が分布し、伽耶領域 [$D^2(\text{伽耶}) \leq 10$, $D^2(\text{伽耶}) < D^2(\text{陶邑})$] に分布するものは少数であることがわかる。

両母集団の資料をこの図におとしてみても、重複領域 [$D^2(\text{陶邑}) < 10$, $D^2(\text{伽耶}) < 10$] に分布するものがかなりある。このうち、理想境界線周辺に分布する資料は誤判別される危険性がある。この点を考慮に入れても、今回の結果から陶邑産と推定される資料が圧倒的に多いことはわかる。そして、確かに陶質土器であると推定される資料(例えば、No. 77, 102, 169, 94, 115)もあるが、その数はきわめて少ない。かくして、図1・2に示した定性的な結果はよく理解できることになる。

なお、図3には不明領域に分布した資料もある。No. 10, 31, 28, 80, 84, 112, 116, 149, 158, 160, 188などである。これらは産地不明とした資料であるが、このうち、No. 31, 80, 112, 188などは両領域

から明らかにずれていることが図1・2からもわかる。産地不明になった資料については当面、放置しておくしか仕方がない。

畿内に、他に古式須恵器の窯があれば、その製品は陶邑産の須恵器と類似した化学特性をもつ。今回は畿内にある、陶邑以外の地にある窯については考慮に入れなかったが、もし、その製品が混ざっていたとすれば、陶邑産と推定された須恵器の中に包含されている。

産地推定の問題は一挙に解決できるものではない。一番中心に近いところのものから逐次、検討されていくべきものであろう。こつこつと産地推定のデータを集積してはじめて、伝播・流通に結び付いてくるのである。完全自動式蛍光X線分析装置が市販されるようになってはじめて、このような研究への道が開かれてきたのである。遺跡から出土する遺物の中に土器の占める割合が大きいだけに、土器の胎土を研究する自然科学の手法は今後、考古学者の深い関心を集めることになるだろう。

表1 出土土器の分析データ

NO.	器形	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D ⁺ 陶邑	D ⁻ 伽耶	判定	NO.	器形	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D ⁺ 陶邑	D ⁻ 伽耶	判定
7	蓋	0.495	0.103	2.91	0.515	0.362	0.164	2.70	5.50	陶邑	47	甕	0.438	0.105	2.18	0.557	0.311	0.173	0.21	8.40	陶邑
8	身	0.341	0.094	2.59	0.423	0.266	0.119	4.80	21.90	陶邑	48	身	0.470	0.115	2.41	0.745	0.294	0.160	4.90	14.50	陶邑
9	身	0.311	0.035	2.29	0.411	0.177	0.054	5.50	30.10	陶邑	49	蓋	0.456	0.076	3.34	0.571	0.228	0.082	2.00	10.70	陶邑
10	蓋	0.454	0.213	1.85	0.652	0.537	0.179	11.00	12.80	非陶	50	蓋	0.467	0.185	2.33	0.649	0.359	0.201	5.70	7.80	陶邑
11	身	0.386	0.060	2.65	0.434	0.233	0.062	2.60	18.30	陶邑	51	甕	0.450	0.070	3.32	0.455	0.273	0.095	3.10	12.90	陶邑
12	身	0.479	0.074	1.79	0.626	0.311	0.140	1.80	7.60	陶邑	52	甕	0.388	0.030	3.09	0.442	0.169	0.161	3.60	22.40	陶邑
13	蓋	0.390	0.019	2.21	0.493	0.191	0.045	3.50	18.70	陶邑	53	蓋	0.483	0.123	1.72	0.672	0.356	0.131	0.91	7.10	陶邑
14	蓋	0.400	0.062	2.04	0.560	0.248	0.117	1.50	15.00	陶邑	54	蓋	0.393	0.056	2.30	0.444	0.266	0.139	3.60	15.10	陶邑
15	蓋	0.483	0.167	2.45	0.469	0.437	0.264	4.20	5.40	陶邑	55	蓋	0.457	0.076	3.40	0.566	0.225	0.085	2.20	10.90	陶邑
16	蓋	0.421	0.067	2.21	0.547	0.286	0.152	1.60	11.10	陶邑	56	蓋	0.399	0.072	2.60	0.448	0.244	0.073	2.00	16.50	陶邑
17	甕	0.446	0.093	3.06	0.477	0.312	0.082	1.70	9.40	陶邑	57	高杯	0.361	0.040	3.16	0.426	0.163	0.049	3.70	26.00	陶邑
18	甕	0.429	0.130	2.54	0.483	0.242	0.051	6.30	17.60	陶邑	58	身	0.402	0.078	2.32	0.506	0.269	0.126	1.10	13.20	陶邑
19	甕	0.466	0.114	2.16	0.585	0.346	0.187	0.14	5.60	陶邑	59	器台	0.451	0.074	2.34	0.595	0.272	0.165	0.77	9.40	陶邑
20	身	0.468	0.072	2.47	0.477	0.293	0.128	3.30	10.40	陶邑	60	身	0.455	0.170	2.04	0.624	0.437	0.150	3.30	7.50	陶邑
21	蓋	0.472	0.107	2.65	0.598	0.306	0.249	0.26	6.20	陶邑	61	甕	0.543	0.080	2.25	0.649	0.294	0.183	4.60	5.30	陶邑
22	身	0.413	0.074	2.26	0.527	0.269	0.121	0.90	12.10	陶邑	62	身	0.473	0.159	2.27	0.552	0.428	0.352	1.80	3.30	陶邑
23	身	0.335	0.027	2.56	0.465	0.171	0.060	4.00	26.30	陶邑	63	身	0.424	0.079	2.65	0.519	0.275	0.081	0.72	11.00	陶邑
24	身	0.336	0.050	2.56	0.391	0.222	0.087	5.30	24.60	陶邑	64	身	0.372	0.080	2.37	0.413	0.300	0.150	5.10	16.00	陶邑
25	蓋	0.440	0.074	2.33	0.570	0.264	0.112	0.62	10.10	陶邑	65	身	0.471	0.107	2.55	0.515	0.332	0.242	0.99	6.50	陶邑
26	身	0.436	0.142	1.95	0.541	0.351	0.161	1.20	7.70	陶邑	66	身	0.440	0.032	2.57	0.492	0.203	0.086	3.80	15.40	陶邑
27	身	0.395	0.058	2.56	0.498	0.272	0.162	2.70	13.80	陶邑	67	蓋	0.446	0.145	2.97	0.675	0.337	0.133	3.30	12.00	陶邑
28	甕	0.512	0.240	3.49	0.578	0.360	0.159	19.70	10.60	非陶	68	蓋	0.516	0.114	2.53	0.675	0.344	0.148	1.20	4.60	陶邑
29	蓋	0.369	0.100	2.17	0.539	0.282	0.115	3.00	17.90	陶邑	69	甕	0.516	0.070	1.63	0.668	0.318	0.223	3.70	7.20	陶邑
30	身	0.434	0.100	2.39	0.546	0.319	0.160	0.51	8.40	陶邑	70	壺	0.465	0.100	2.99	0.576	0.264	0.214	1.40	8.40	陶邑
31	甕	0.347	0.393	3.10	0.321	0.409	0.139	97.50	82.00	非陶	71	甕	0.526	0.193	2.58	0.568	0.488	0.345	3.00	0.99	伽耶
32	身	0.486	0.072	2.78	0.627	0.249	0.103	2.40	8.00	陶邑	72	壺	0.384	0.096	1.62	0.576	0.299	0.104	2.80	16.60	陶邑
33	高杯	0.408	0.063	3.40	0.395	0.254	0.143	4.40	18.60	陶邑	73	身	0.431	0.069	2.25	0.536	0.293	0.130	1.60	9.90	陶邑
34	身	0.301	0.021	2.34	0.444	0.149	0.037	5.90	33.20	陶邑	74	身	0.399	0.063	2.36	0.499	0.252	0.140	1.50	14.30	陶邑
35	甕	0.429	0.104	2.35	0.545	0.359	0.176	2.30	8.10	陶邑	75	身	0.448	0.096	2.73	0.619	0.273	0.137	0.92	9.80	陶邑
36	甕	0.407	0.147	2.77	0.505	0.286	0.235	4.90	15.30	陶邑	76	蓋	0.528	0.114	2.03	0.612	0.365	0.236	1.50	3.00	陶邑
37	身	0.449	0.085	2.79	0.552	0.283	0.222	0.40	8.60	陶邑	77	壺	0.569	0.137	3.11	0.684	0.293	0.179	9.90	3.50	伽耶
38	蓋	0.456	0.163	2.22	0.603	0.433	0.219	2.80	6.20	陶邑	78	身	0.455	0.074	2.12	0.604	0.292	0.161	1.10	8.90	陶邑
39	高杯	0.522	0.105	2.48	0.742	0.298	0.139	4.40	7.80	陶邑	79	身	0.429	0.080	2.17	0.548	0.287	0.147	0.66	10.00	陶邑
40	身	0.333	0.021	2.57	0.424	0.138	0.040	4.60	30.10	陶邑	80	甕	0.382	0.188	3.12	0.335	0.292	0.142	18.10	36.40	非陶
41	蓋	0.312	0.021	2.25	0.427	0.130	0.042	5.30	33.40	陶邑	81	器台	0.477	0.094	2.37	0.687	0.295	0.125	1.90	9.60	陶邑
42	甕	0.450	0.072	3.27	0.475	0.288	0.097	2.50	10.70	陶邑	82	高杯	0.476	0.047	2.52	0.516	0.240	0.098	4.10	11.70	陶邑
43	甕	0.506	0.133	2.73	0.538	0.333	0.164	2.20	5.90	陶邑	83	身	0.355	0.021	2.60	0.443	0.145	0.046	3.90	26.50	陶邑
44	身	0.422	0.013	2.66	0.477	0.132	0.049	6.10	22.40	陶邑	84	蓋	0.491	0.296	3.21	0.532	0.481	0.266	21.50	11.60	非陶
45	身	0.370	0.033	3.08	0.430	0.146	0.114	4.10	26.60	陶邑	85	甕	0.431	0.125	3.14	0.470	0.291	0.306	2.50	13.00	陶邑
46	身	0.486	0.107	2.60	0.479	0.315	0.209	2.80	9.80	陶邑	86	身	0.383	0.035	2.31	0.472	0.190	0.064	2.60	19.70	陶邑

蛍光X線分析による産地同定に供した土器について

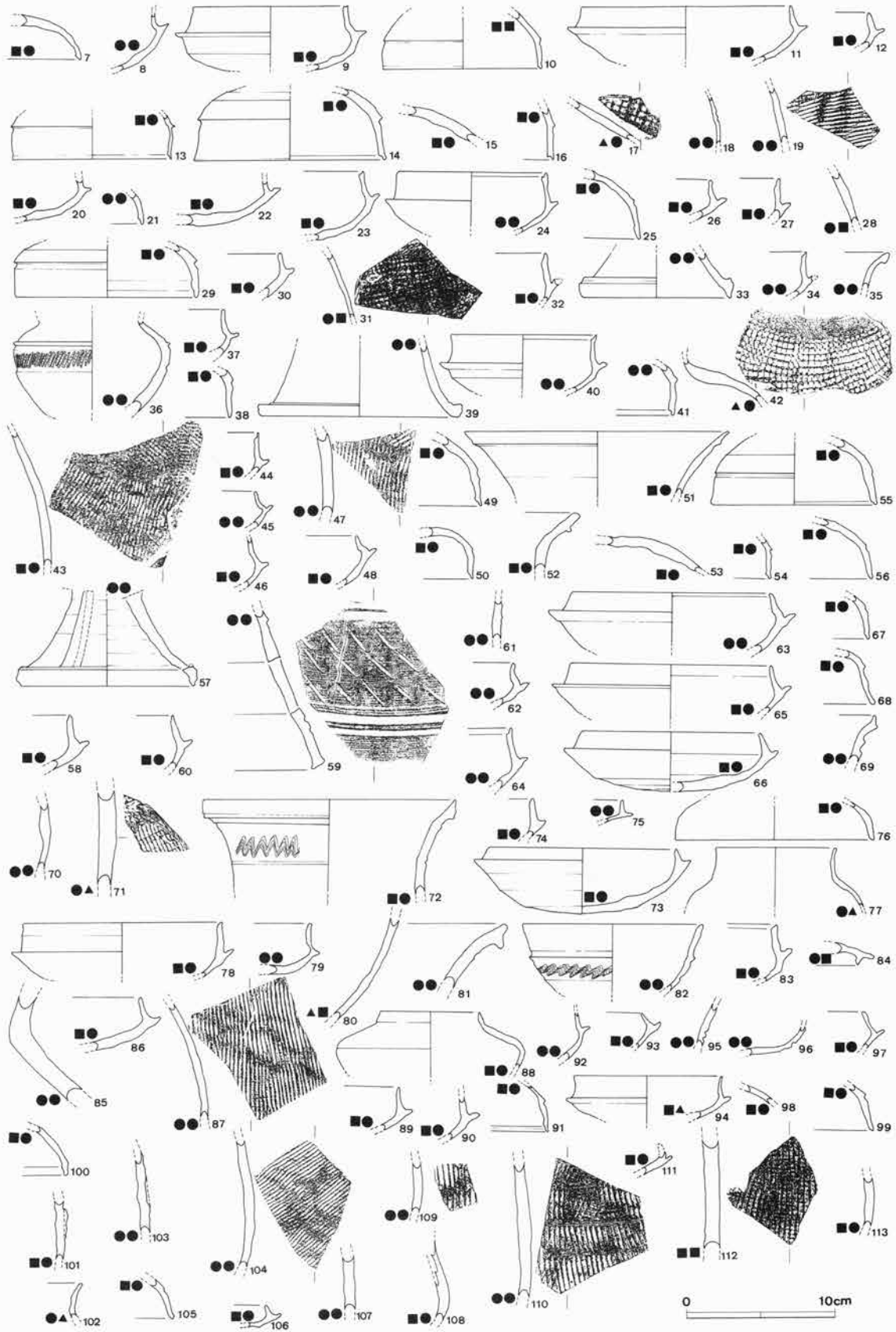
小池 寛・田鍬美紀

蛍光X線分析に供した土器の員数は、第2次調査時に6点、今回の分析に198点であり、総計204点である。出土土器全体からすれば、極少量であるが、森垣外遺跡出土の須恵器の傾向を概観する上で、一定の数量に達していると考えたい。なお、試料1～6の分析結果については、A1地区調査概報に掲載している。

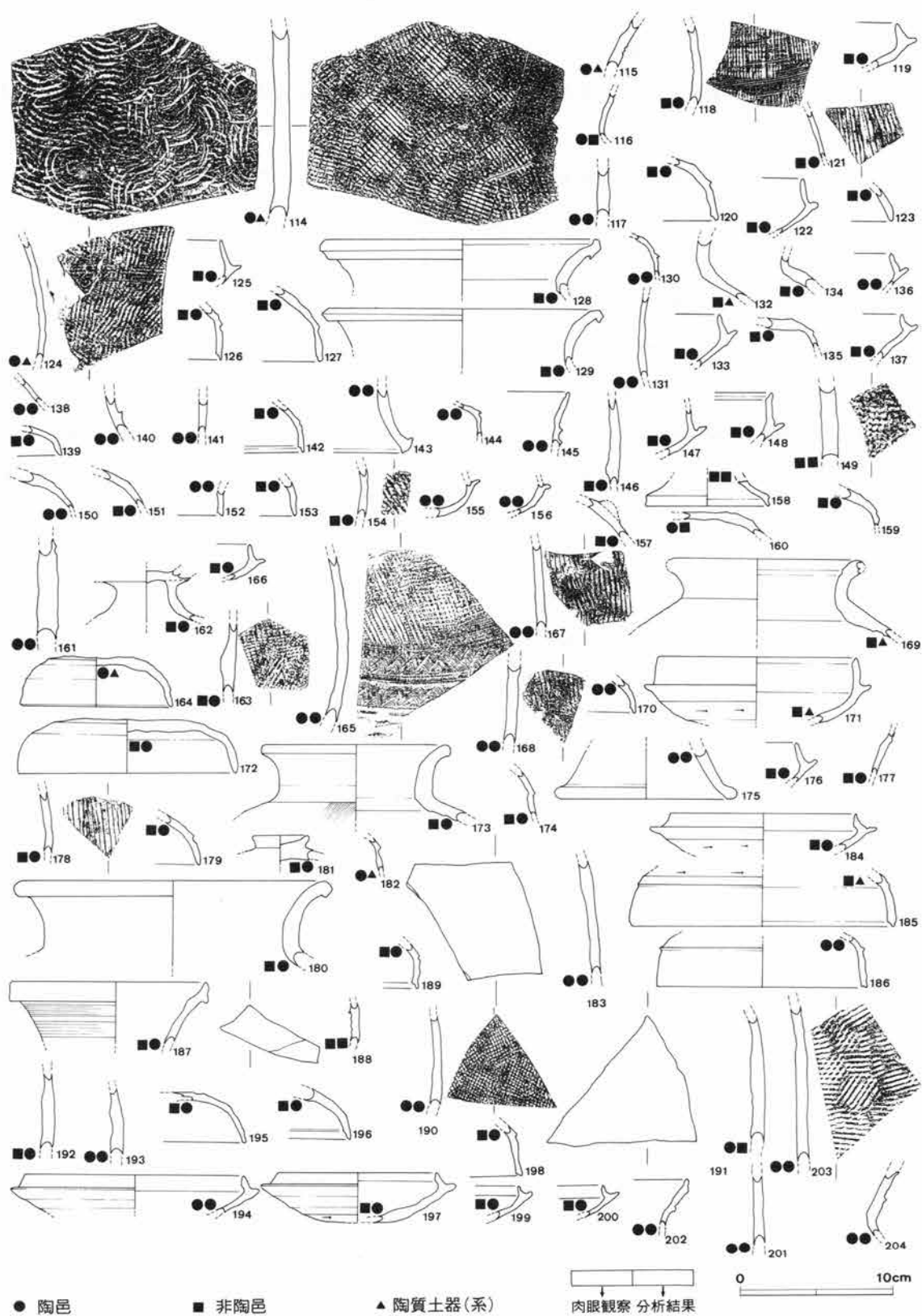
須恵器や土師器、埴輪についての産地同定は、肉眼観察か蛍光X線分析による場合が多い。特に、発掘調査担当者が土器の産地同定を行う場合は、肉眼観察である場合が一般的である。経験的な肉眼観察は、判定する地域や器種が限定される場合は有効であるが、全く異なった地域や器種を広範囲に行なえば、その産地同定結果は、きわめて不正確にならざるを得ない。一方、蛍光X線分析による産地同定は、客観的なデータが提示され、恣意的な同定に陥る危険性は、すこぶる少ない。データが多く集積されれば、より客観性が増し、同時期性の範囲内では、広範囲に産地同定が可能となる。しかし、反面、土器を分類・編年する際の根拠となる型式学は一切加味されないため、型的に産地同定が確実視されても、両者の分析結果は、著しく異なる場合もある。特定個人が、小地域において専門的に行う肉眼観察を基にした産地同定は、その結果を追認する方法もなく、独断的に陥りやすい傾向が指摘できる。その意味において蛍光X線分析による産地同定は、他の研究者による再確認ができる余地があり、将来的にその方法が、継承されることを前提にすれば、有効である。

本稿では、分析試料全てについては、概観できないが、主要な試料について見ておきたい。なお、土器実測付図2・3には、●■▲からなるマークを2個セットで付している。●は、大阪府陶邑古窯址群産、■は非陶邑古窯址群産、▲は朝鮮半島産を示している。また、二つあるマークの内、左側のマークは、肉眼観察による産地同定であり、右側のマークは、蛍光X線分析による産地同定結果である。2つのマークが一致していれば、肉眼観察結果と蛍光X線分析結果が一致したことを表わしている。

基本的な型式については、付図に譲るが、まず、TK23～47型式前後に比定できる試料は、その多くが陶邑古窯址群産であることが把握できた。この段階においては、すでに地方窯が出現して久しいが、南山城での当該時期の須恵器窯が未検出であることから、陶邑古窯址群が、供給源として多くを占めている。しかし、次型式のMT15型式を含めTK10～43型式でも陶邑古窯址群産が多いことがうかがえる。これは、供給源として依然、陶邑古窯址群がその多くを占めている傾向を表出している。しかし、熔着したTK43型式の杯身群(第136図473、図版第78)がC地区流路4から出土していることから、当該時期に須恵器生産が森垣外遺跡周辺で行われていた可能性も指摘できる。



付図1 分析土器実測図(1)



付図2 分析土器実測図(2)

一方、正格子タタキ目を有する体部片は、朝鮮半島系として報告される場合が多いが、分析結果では、陶邑古窯址群産と同定される試料も少なくない。大阪府大庭寺遺跡での出土例と比較しても同一の胎土や焼成ではないことが、観察できたが、他に初期須恵器窯が存在するか、あるいは須恵器ほどの分析データが蓄積されていないことによるのか、現時点では判然としない。しかし、同様な土器を無条件に朝鮮半島との関係で評価することには、慎重になる必要がある。本報告は、その警鐘としたい。

最後に、胎土・焼成・色調から産地を同定する作業にも、何らかの可視基準を作成する必要性が感じられる。また、さらに分析点数を増加させる必要がある。今回の分析にあたり、型式が認定できる土器を恣意的に選択したことが、なんらかの形で分析結果に影響を与えたことも否めないが、反面、型式すら理解できない土器片を多く分析しても、何ら評価されることではない。今後は、一括資料を一切選択せず、全てを分析する必要も考慮すべきである。

なお、多くの分析結果が、報告書の巻末に付載として掲載される場合が多いが、分析結果を十分認識し、遺跡の評価に積極的に取り込んでいく作業の必要性を指摘するとともに、発掘調査担当者と分析担当者が、更に相互理解できる状況をつくることが、両者の更なる研鑽につながることは必至であろう。

<付記>

三辻先生の報文タイトルには、「古式須恵器」とある。これは、先生の玉稿をいただく以前に行った当方の分析試料についての説明に問題がある。試料の多くは、TK23～43型式の須恵器であり、必ずしも古式須恵器ではない。分析データ自体には、影響はないが、先生にご迷惑をおかけしたことについて、ご寛恕ねがいたい。

付 載 報 告 2

京 都 府、 森 垣 外 遺 跡 に お け る 花 粉 分 析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

花粉は有機質の植物遺体の中で最も保存性がよく、堆積物中に残存しやすい。花粉分析は花粉層序による層序区分や森林を中心とする植生復原に用いられ、花粉生産の多い森林の高木相や広域に分布する草本がよく反映される。

この報告では、

森垣外遺跡の遺構
内堆積物および堆
積層の花粉分析を
行い、周囲の植生
と環境について検
討を行う。

2. 試料

分析試料は、2
次調査A1地区S
K204(試料1)、
3次調査A2-9
SD80(C層)(試
料2)、3次調査
B1-1地区d-
2SD22(試料
3)、3次調査B
1-2地区A-5
(試料4)の4点で
ある。それぞれの
堆積時期は、試料
1がTK47型式前
後、試料2が古墳
中期初頭前後、試

学名	分類群	試料			
		1	2	3	4
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Abies</i>	モミ属	2		2	
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1		1	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属			3	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ			5	1
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ		1	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科			7	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ			1	
<i>Betula</i>	カバノキ属	2			
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1		2	
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	2	2	7	5
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属		1	1	1
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2	1	9	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1		1	
Celastraceae	ニシキギ科			1	
<i>Acer</i>	カエデ属			1	
<i>Vitis</i>	ブドウ属			1	
<i>Elaeagnus</i>	グミ属			1	
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属			1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			252	11
Leguminosae	マメ科			1	
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科	4	6	63	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	5		9	2
<i>Polygonum sect.</i>	タデ属			1	
<i>Rumex</i>	ギシギシ属			1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2	1	15	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科			1	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属			1	
Cruciferae	アブラナ科	1		1	1
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科			1	
Apiodeae	セリ亜科			3	302
Solanaceae	ナス科			1	
<i>Plantago</i>	オオバコ属			1	
Lactucoideae	タンポポ科			1	1
Asteroidae	キク亜科	1		2	
<i>Xanthium</i>	オナモミ属			4	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	7	6	45	5
Fern spore	シダ植物孢子				
Monolate type spore	単条溝孢子	11	23	1	1
Trilate type spore	三条溝孢子		3	1	1
Arboreal pollen	樹木花粉	11	5	45	7
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	253	11
Nonarboreal pollen	草本花粉	20	13	150	313
Total pollen	花粉総数	31	18	448	331
Unknown pollen	未同定花粉	2	2	2	0
Fern spore	シダ植物孢子	11	26	2	2
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)

表1 森垣外遺跡第3次調査における花粉分析結果

料3がTK47型式前後、試料4はTK47型式前後?とされる。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考に、以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

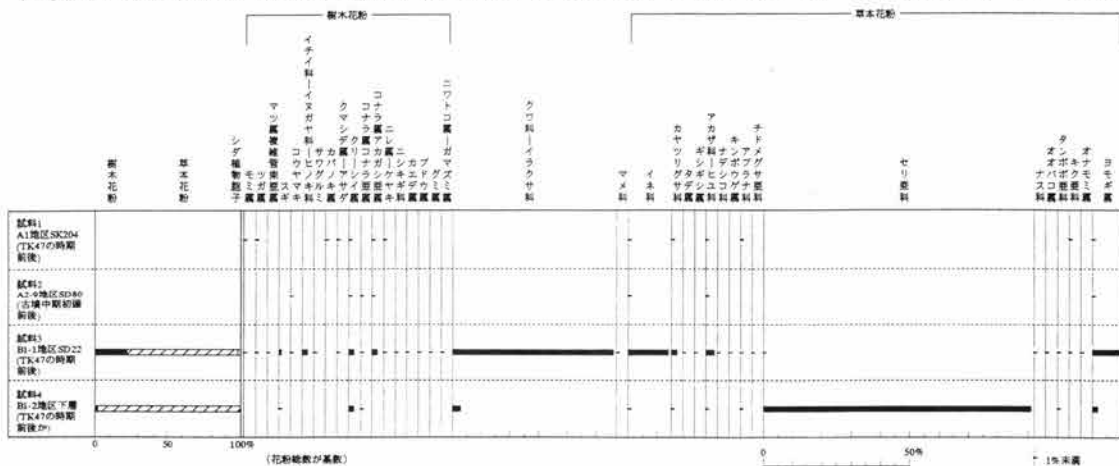
以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1500rpm、2分間)の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後、直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉18、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉16、シダ植物胞



付図1 森垣外遺跡第3次調査における花粉ダイアグラム

子2形態の計38である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、サワグルミ、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ-シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、ニシキギ科、カエデ属、ブドウ属、グミ属、ニワトコ属-ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2)出現傾向

試料1と試料2からは花粉がほとんど出現しない。試料3では、クワ科-イラクサ科が優占し、イネ科とヨモギ属が伴われる。草本花粉では他にカヤツリグサ科とアカザ科-ヒユ科が出現し樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、クリ-シイ属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が出現するが低率である。試料4では、セリ亜科が優占する。クワ科-イラクサ科、ヨモギ属、クリ-シイ属が低率に出現するほかは極めて少ない。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

1)試料1(A1地区SK204、TK47型式前後)

花粉がほとんど検出されないことから、花粉の分解する乾燥した堆積環境か、堆積速度が速かったことなどが推定される。

2)試料2(A2-9SD80(C層)、古墳中期初頭前後)

花粉がほとんど検出されない。試料1同様に花粉の分解する乾燥した堆積環境か、堆積速度が速かったことなどが推定される。

3)試料3(B1-1地区d-2SD22、TK47型式前後)

クワ科-イラクサ科の花粉の占める割合が極めて高く、周囲には土手などに多いイラクサなどの草本が群落を形成して生育していたと推定される。他にイネ科やヨモギ属の草本が分布する。周囲は樹木がほとんど分布しない。おそらく局地的な植生と考えられる。

4)試料4(B1-2地区A-5、TK47型式前後?)

セリ亜科の花粉の占める割合が極めて高く、セリなどの湿地に生育するセリ亜科が群落を形成

して分布していたと推定される。このことから、堆積地は湿地であったと考えられる。周囲は樹木がほとんど分布しない。堆積地周辺の局地的な植生と考えられる。

参考文献

- 中村 純(1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.
金原正明(1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料 研究の方法, 角川書店, p.248-262.
島倉巳三郎(1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
中村 純(1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録 第13集, 91p.
中村 純(1974) イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
中村 純(1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

補稿 分析に供した試料は、合計4点である。試料1は、A1地区で検出した土坑204の堆積土である。当該土坑は、切りあった竪穴式住居跡171・656の下層で検出しており、床下土坑の可能性もある。分析結果から、花粉の絶対量が少量であり、急速に埋め戻されたことを示している。花粉の絶対量がわずかであることと、屋内土坑であることが密接に関係する可能性もある。試料2は、B1地区・A2地区北尻3号墳の周溝内の堆積土である。急速に埋没した可能性が指摘される。試料3は、B1地区方形区画溝22の堆積土である。土手に生育するイラクサなどの草本類の花粉が検出されている。区画溝には、土手が築かれていた可能性が指摘できる興味ある分析結果である。試料4は、B1地区北東端の堆積土である。湿地であったことを示す結果が報告されている。古墳時代における遺跡地内には、あまり樹木が生育せず、居住空間が広がっていたことを想起させる分析結果と見ておきたい。

今回は、森垣外遺跡の評価に係わる遺構を厳選し、分析を委託した。今後、稿を改めて全体の中での評価をしたい。なお、「2. 試料」に記載された年代観は、当方が提示した記述をそのまま踏襲したものである。

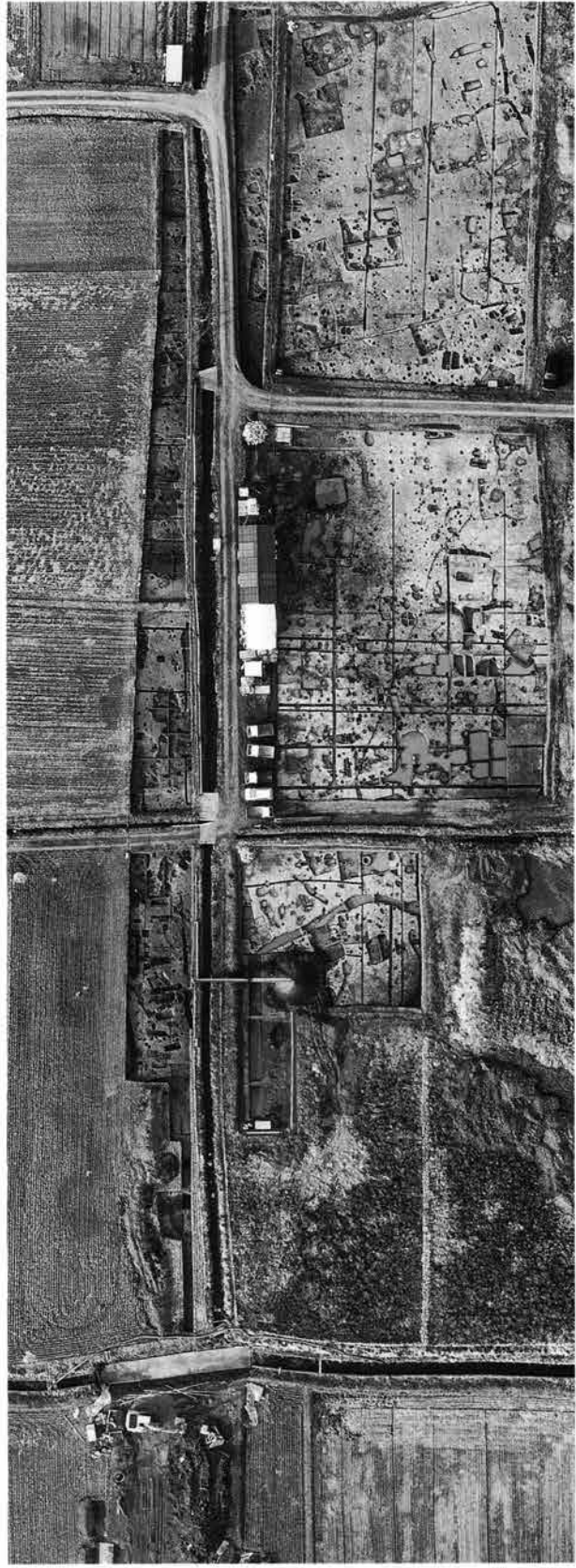
(小池 寛)

圖 版

図版第1 池上遺跡第5次



(1)調査区北半全景 (空中写真)



(2)調査区南半全景 (空中写真)

図版第2 池上遺跡第5次



(1)調査前全景（北から）



(2)第1トレンチ掘削風景
（南東から）



(3)第1トレンチ全景（北西から）



(1)第1トレンチSB114 (南から)



(2)第2トレンチ全景 (南西から)



(3)第2トレンチSB115
(北西から)

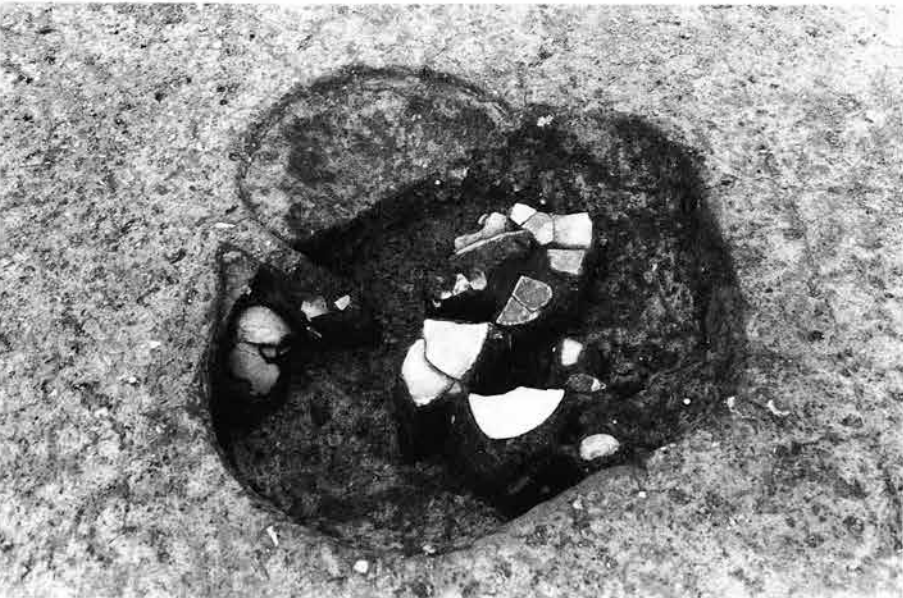
図版第4 池上遺跡第5次



(1)第2トレンチ S E270
(南東から)



(2)第2トレンチ S K271
(西から)



(3)第2トレンチ S K32
(南から)

図版第5 池上遺跡第5次

(1)第2トレンチ S K196・170
(南から)



(2)第3トレンチ全景 (北西から)



(3)第3トレンチ S B551 (北から)



図版第6 池上遺跡第5次



(1)第3トレンチSB117
(北西から)



(2)第3トレンチSH90
(南から)



(3)第3トレンチSH90竈
(南から)



(1)第3トレンチSH90内柱穴



(2)第3トレンチSH118 (西から)



(3)第3トレンチSH446、SK272・365 (西から)

図版第8 池上遺跡第5次



(1)第4トレンチ全景(北西から)



(2)第4トレンチ全景(南から)



(3)第4トレンチ作業風景(北から)

図版第9 池上遺跡第5次



(1)第4トレンチSH120 (西から)



(2)第4トレンチSH105 (南から)



(3)第4トレンチSH104 (東から)

図版第10 池上遺跡第5次



(1)第4トレンチSH119上層
(南から)

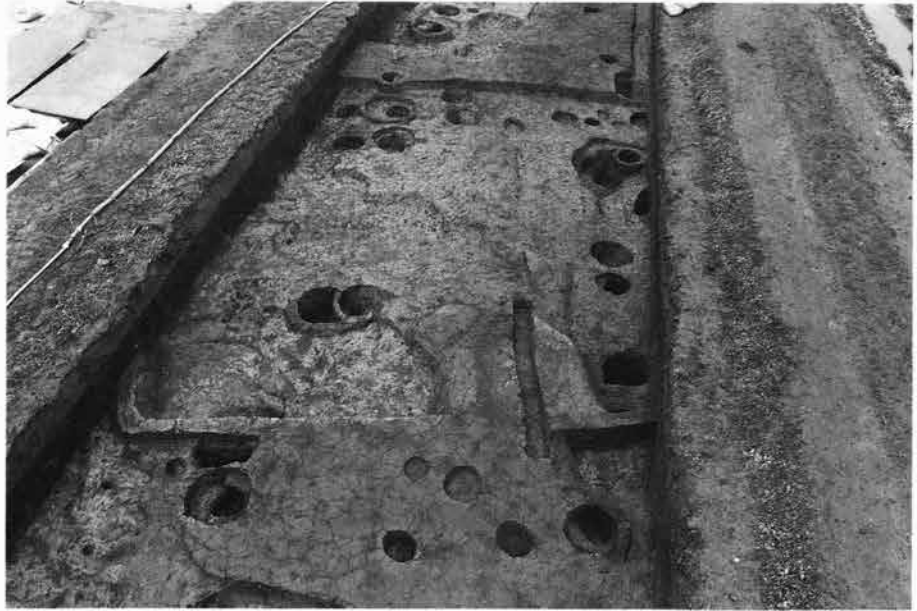


(2)第4トレンチSH119下層
(北から)

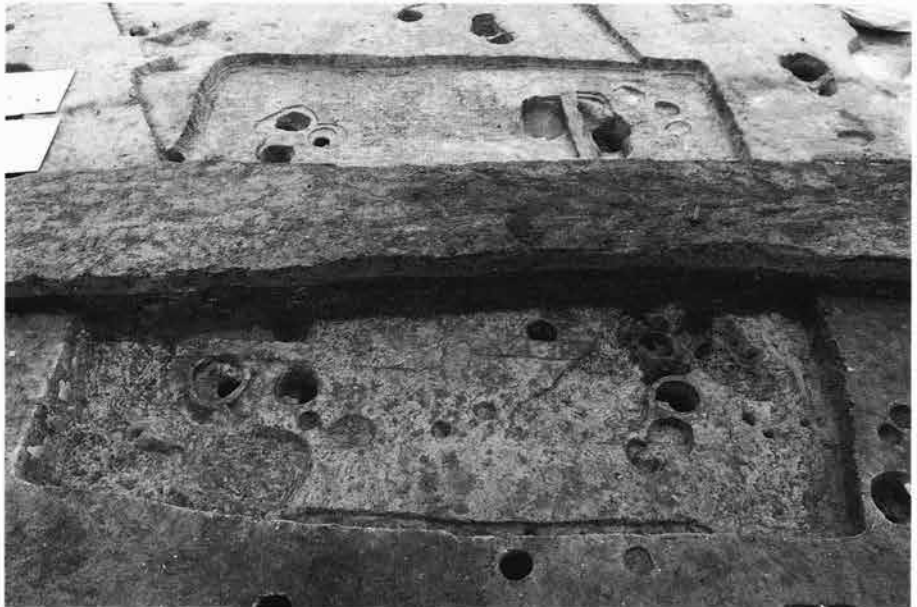


(3)第4トレンチSH119焼土
(東から)

(1)第4トレンチSH107
(北西から)



(2)第4トレンチSH108
(西から)



(3)第5トレンチ全景 (南から)



図版第12 池上遺跡第5次



(1)第5 トレンチ S H390・391
(南から)



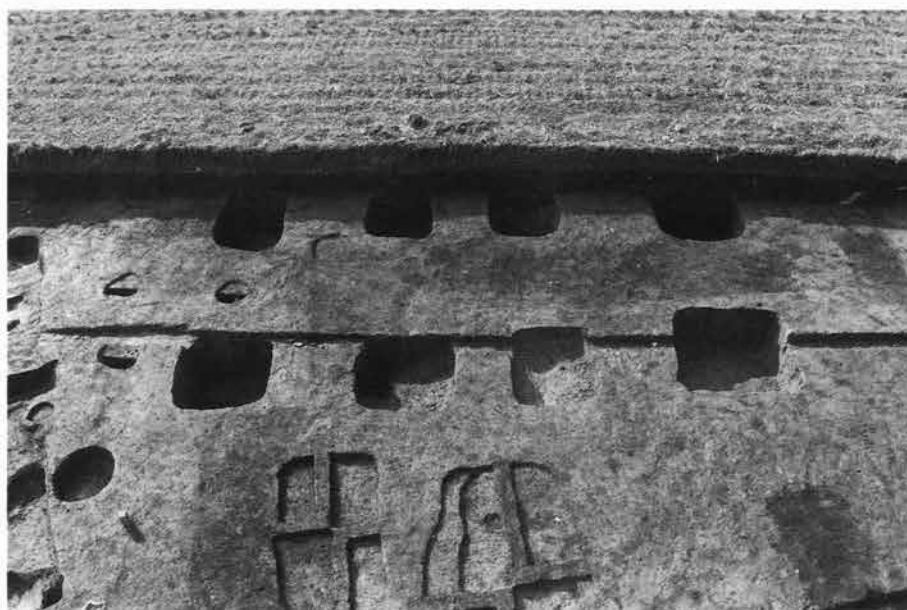
(2)第5 トレンチ S H391遺物出土
状況 (南西から)



(3)第5 トレンチ S H394・395
(南から)



(1)第6 トレンチ全景 (南西から)



(2)第7 トレンチS B608 (東から)



(3)第7 トレンチS X500 (東から)



(1)第7トレンチ S H417
(南東から)



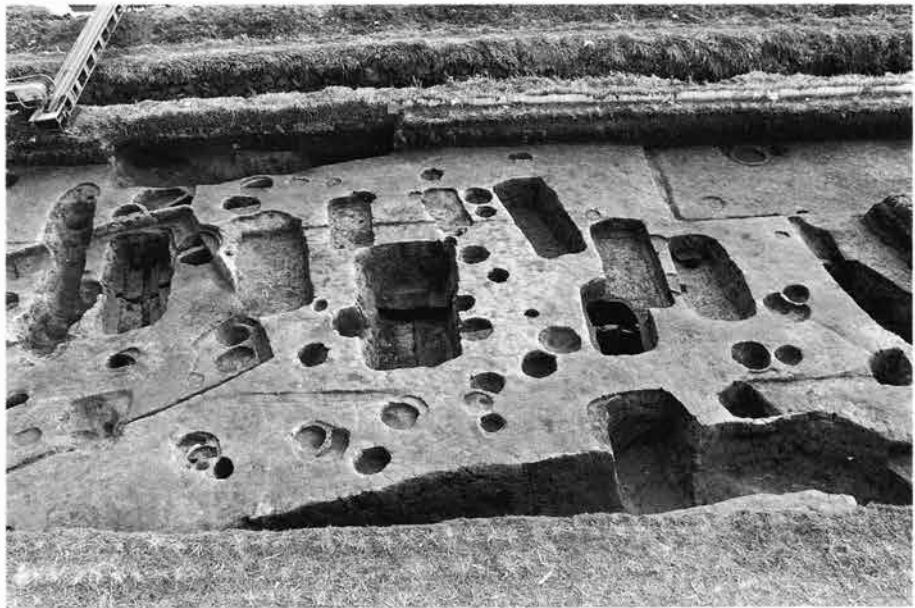
(2)第7トレンチ S H416
(西から)



(3)第7トレンチ S T610・611・
612 (北から)



(1)第7トレンチS T610・611・612 (南から)



(2)第7トレンチS T610 (西から)



(3)第7トレンチS X106 (北西から)



(1)第7トレンチSD389 (西から)



(2)第7トレンチSD462 (南から)



(3)第7トレンチSD526 (東から)

図版第17 池上遺跡第5次



(1)第7トレンチSK449 (西から)



(2)第7トレンチSK452 (東から)



(3)第7トレンチSK451 (北から)



(1)第7トレンチSK448 (西から)



(2)第7トレンチSK546 (西から)



(3)第7トレンチSK455 (西から)



(1)第7トレンチSK540 (南から)



(2)第7トレンチSK453 (東から)



(3)第7トレンチSK454 (東から)



(1)第7トレンチ S K544 (西から)



(2)第7トレンチ S T611 (西から)



(3)第7トレンチ S K456・457
(東から)



(1)第7トレンチSK494 (西から)



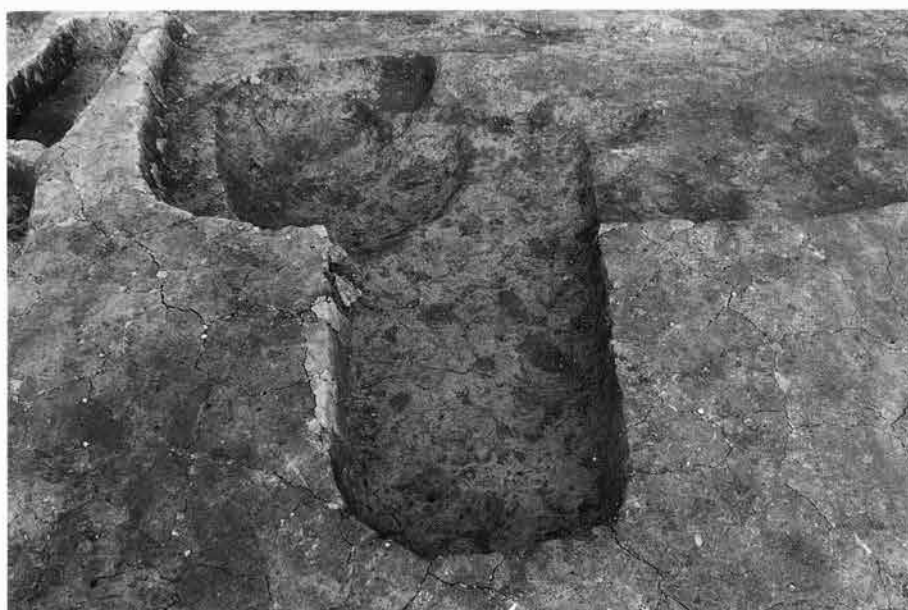
(2)第7トレンチSK495 (西から)



(3)第7トレンチSK542 (南から)



(1)第7トレンチ S K548
(南東から)



(2)第7トレンチ S K537・538
(西から)



(3)第7トレンチ S K536 (西から)

(1)第7トレンチ S K539
(北西から)



(2)第7トレンチ S K512 (西から)



(3)第7トレンチ S H606 (南から)





(1)第7トレンチS D604・605
(西から)



(2)第7トレンチS D604遺物出土
状況(東から)



(3)第7トレンチS D605断面
(西から)



388



22



12



26



16



60



17



62



18



63



20



65



21



68



35



71



73



75



84



85



86



87



92



93



94



103



101



121



124



146



156



160





234



256



258



246



261



248



(SH396)



252



285



253



300



312



328



357



329



361



358



373



367



349



368



370



369



372



377



356



385



345



390



389



391



392



398



401



400



403



406



404



405

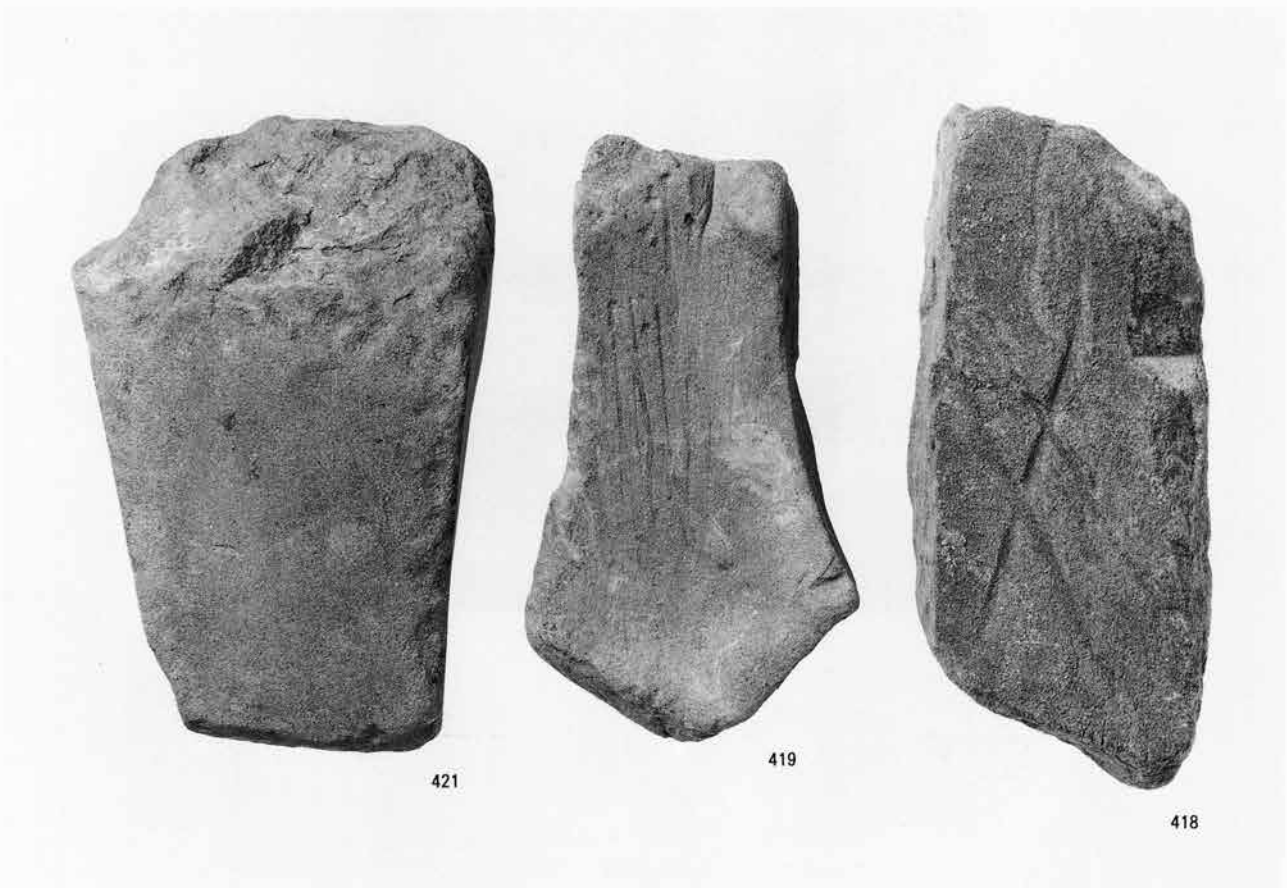
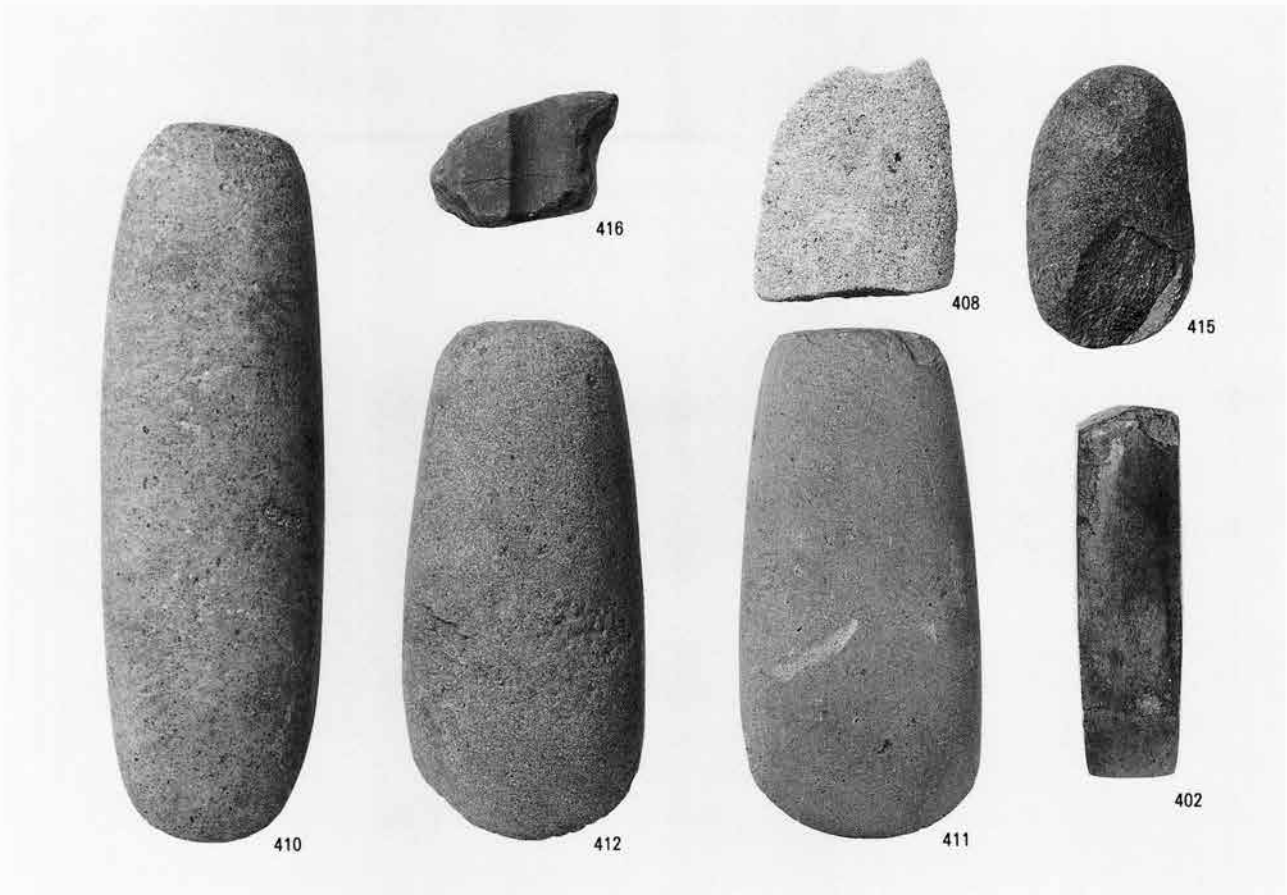


395

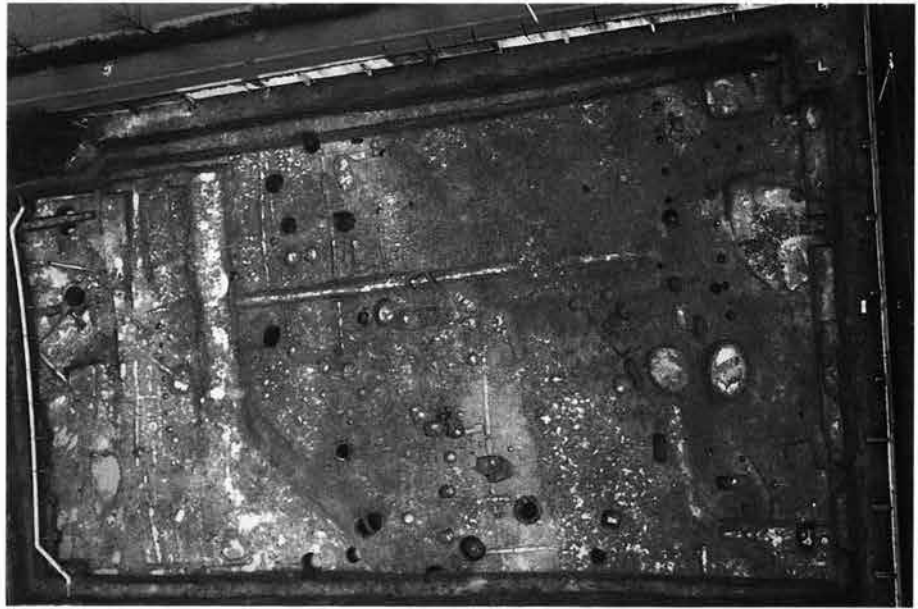


397

図版第32 池上遺跡第5次



(1) トレンチ全景 (左が北)



(2) 隄S D01 (北西から)



(3) 隄S D01 (上が北)





(1)隄S D01土層断面 (西から)



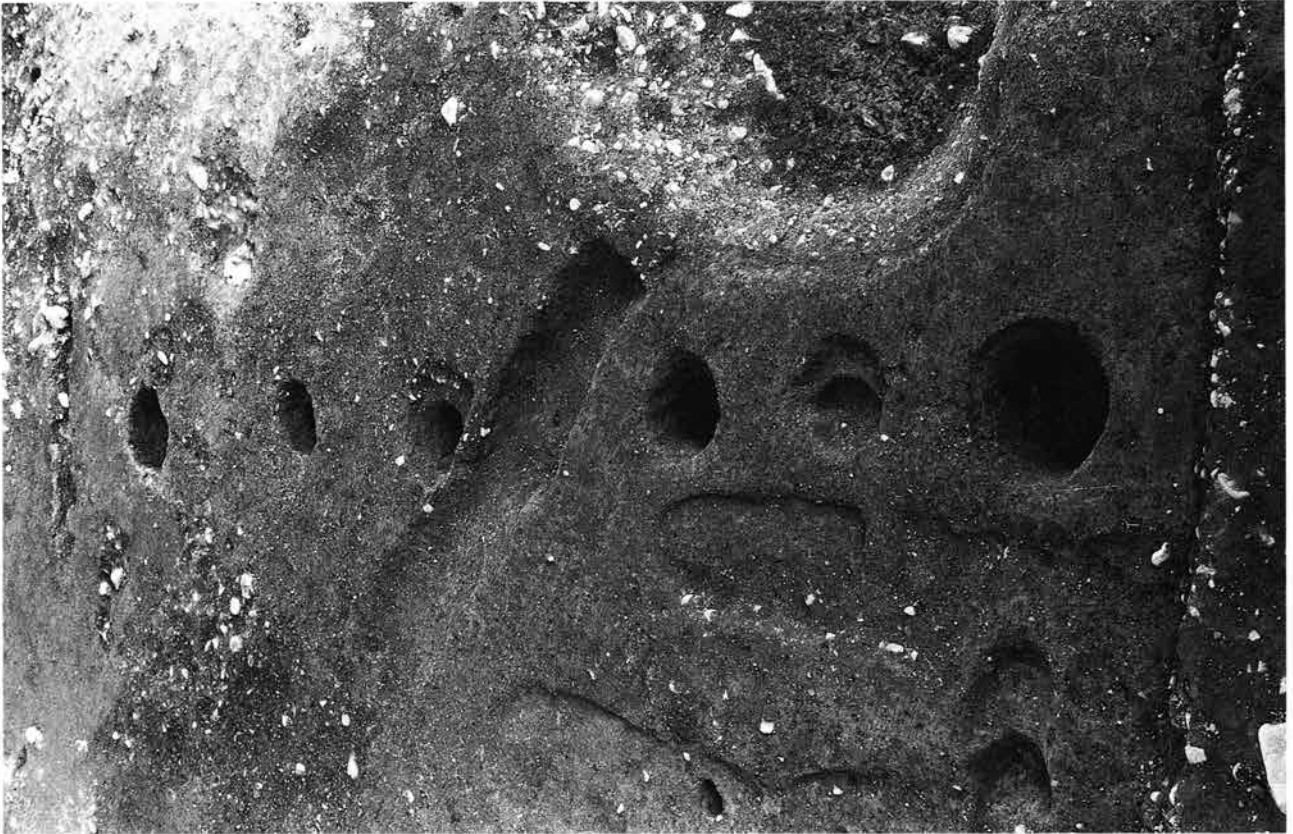
(2)池S G01滞水状況 (西から)



(1)池S G01洲浜(南西から)



(2)池S G01洲浜(南西から)



(1) 柵 S A01 (西から)



(2) 柵 S A03・廃棄土坑 S X03 (南から)



(1)墓S X02 (北から)



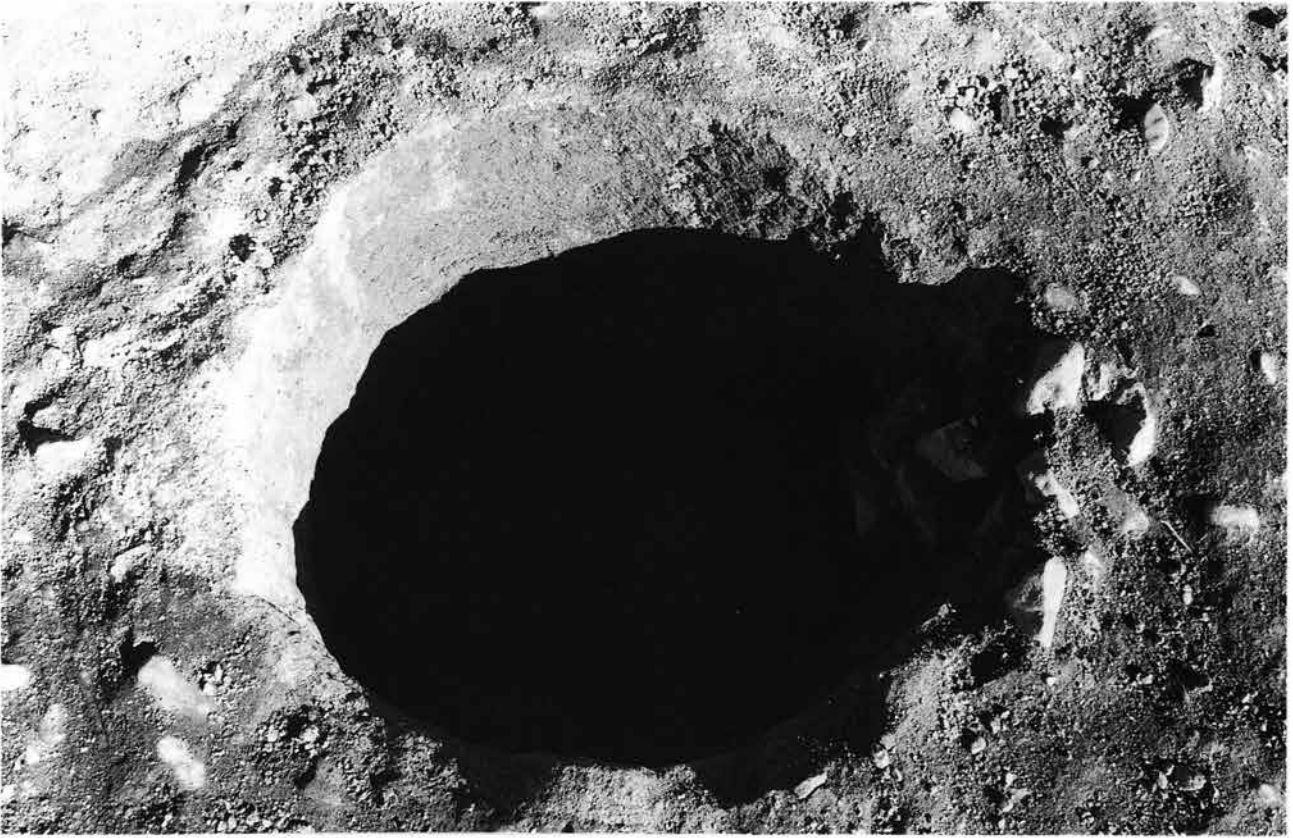
(2)墓S X01 (西から)



(1)井戸S E01土層断面(南から)



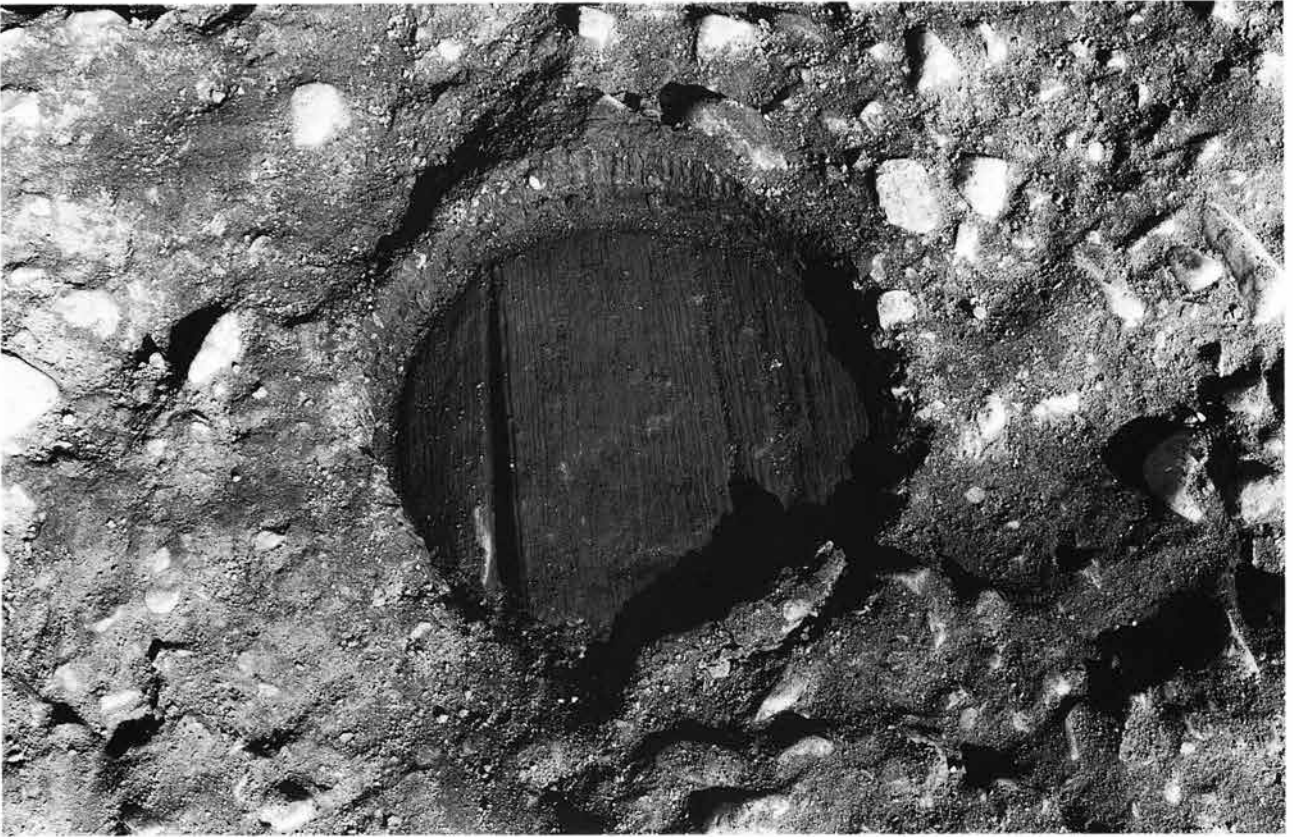
(2)井戸S E02(南から)



(1)井戸S E03 (南から)



(2)井戸S E08 (南から)



(1)埋桶遺構1 (南から)



(2)埋桶遺構2 (南から)



(1)SK02 (西から)



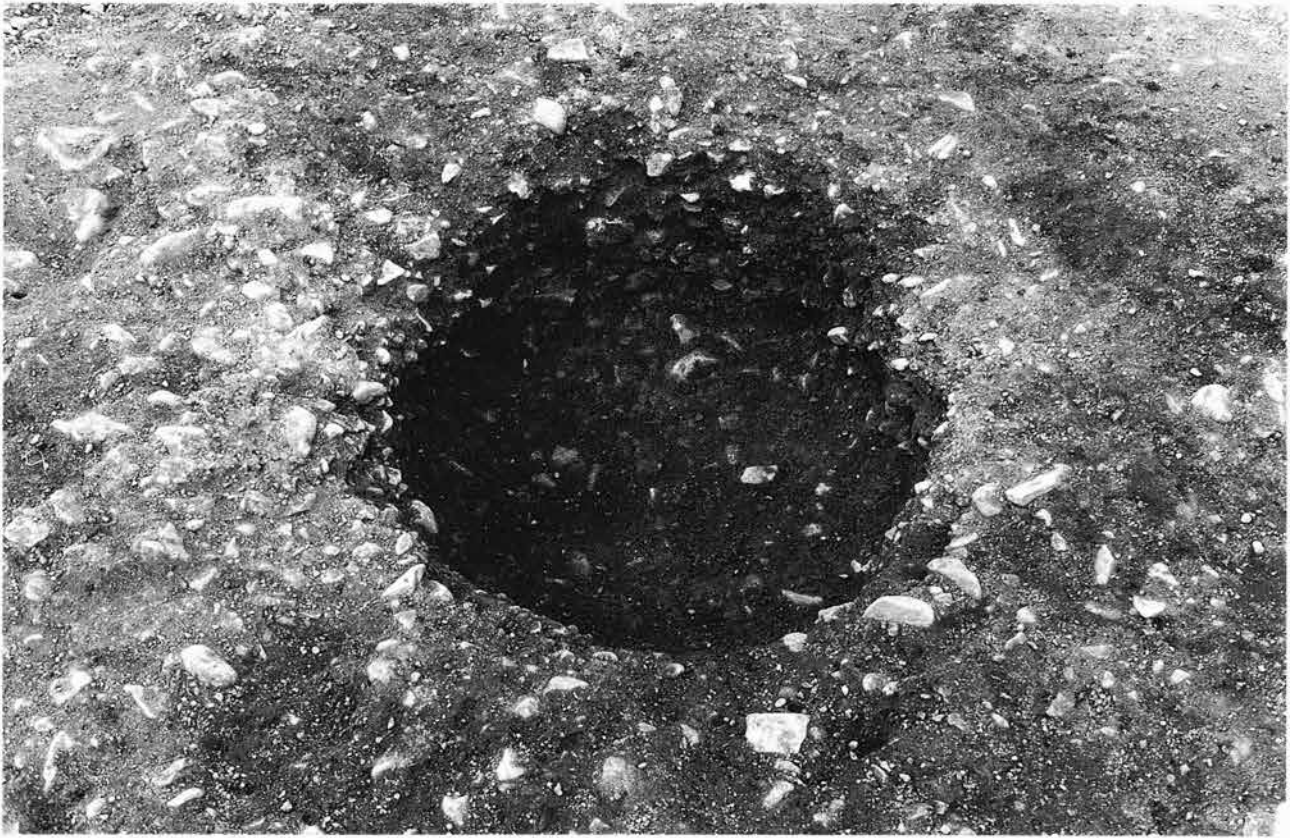
(2)SK04 (南から)



(1) S K 09 (西から)



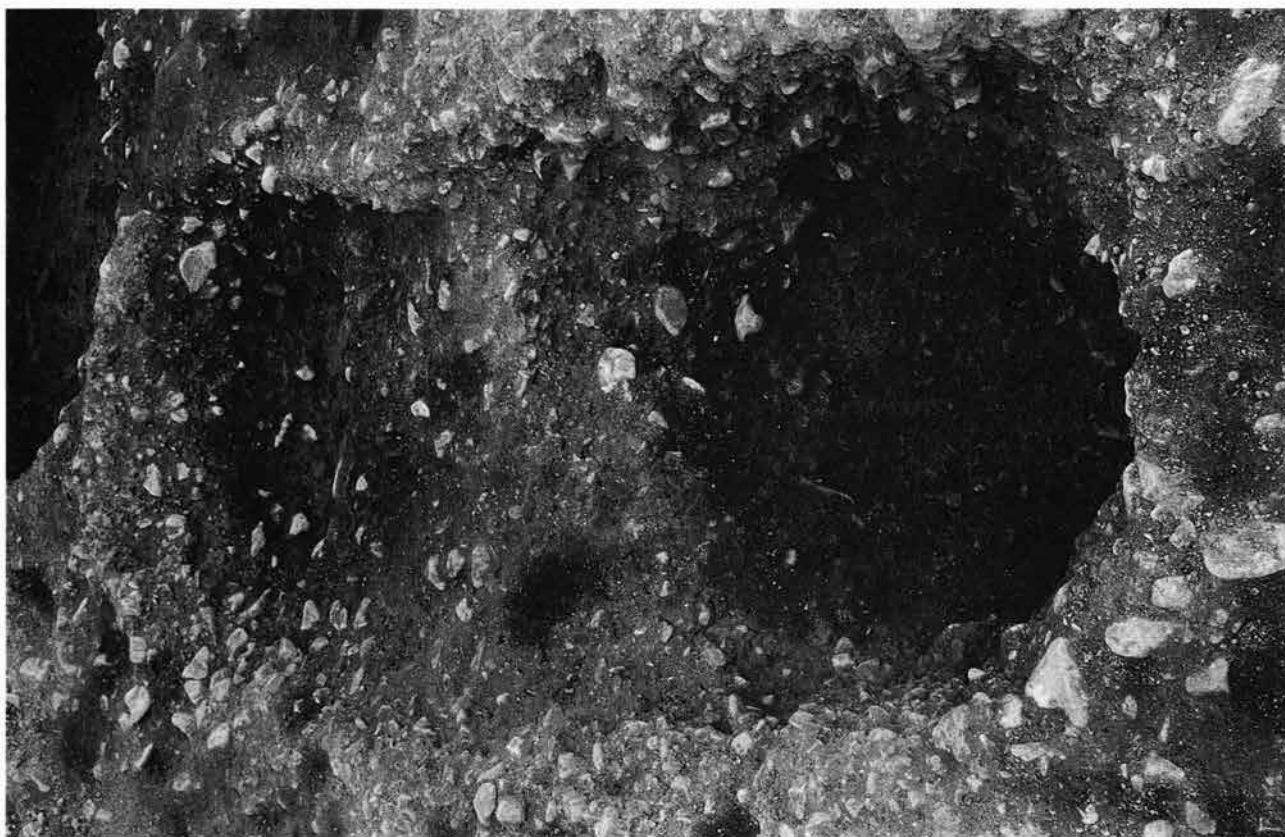
(2) S E 10 (南から)



(1)SK11 (南から)



(2)SK22 (南から)



(1) S K 19~21 (南から)



(2) S K 27 (東から)



1



10



3



11



8



14



5



16

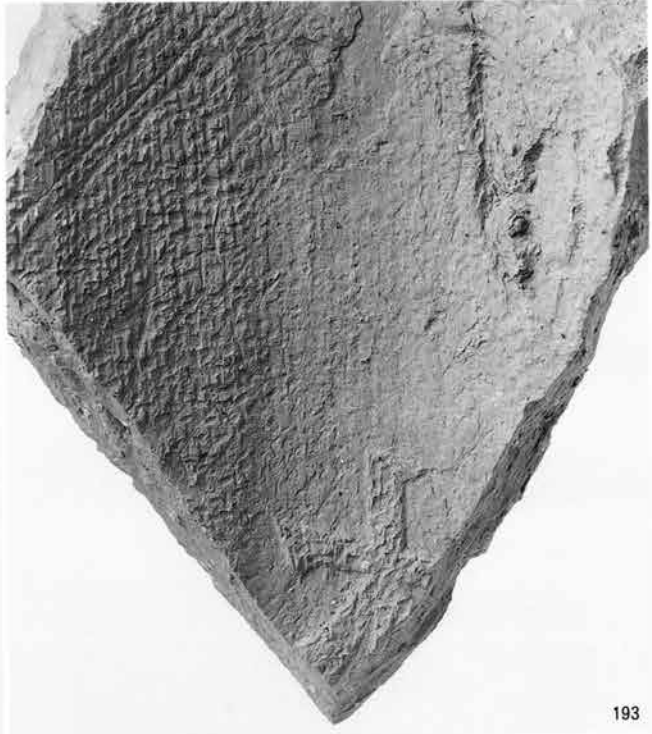


13





190



193



SK16出土



19



36



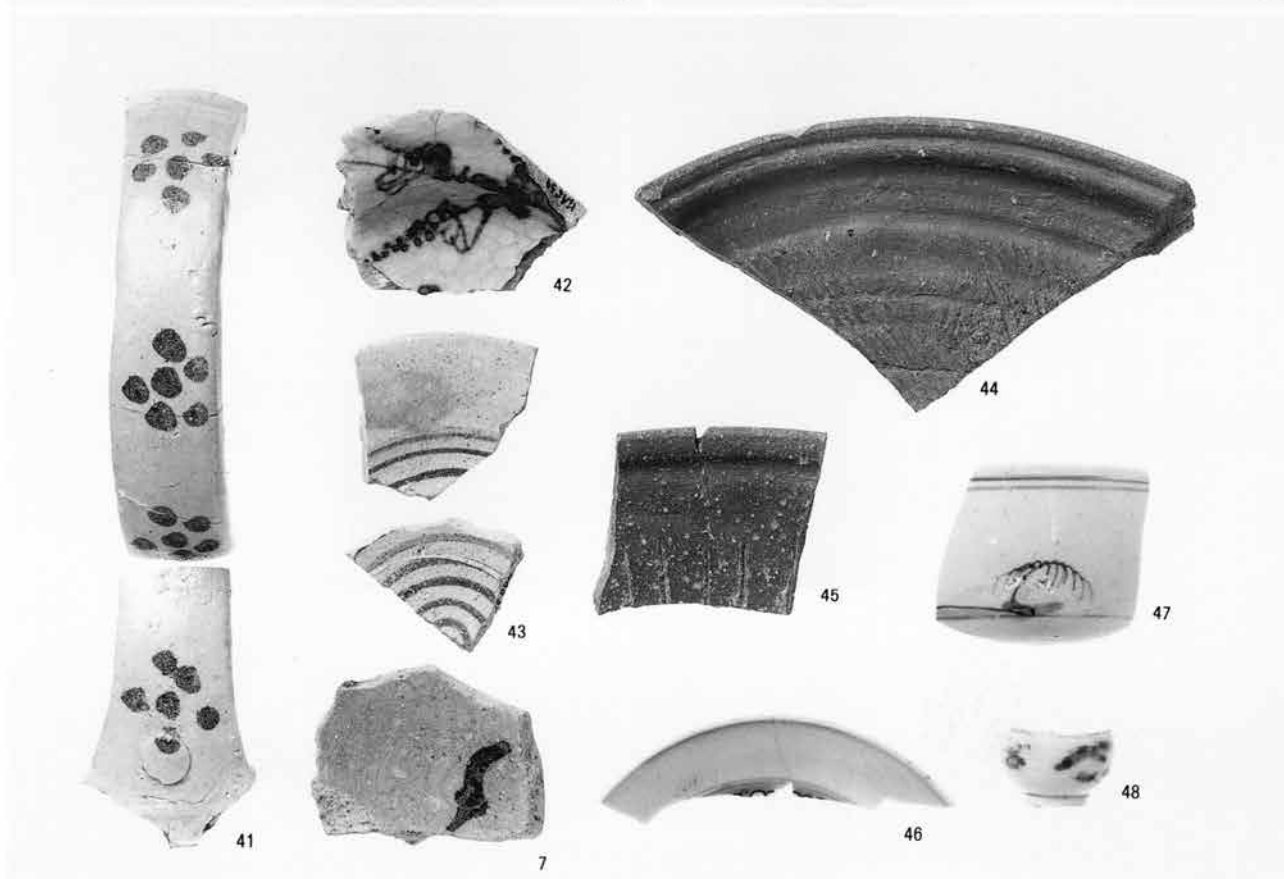
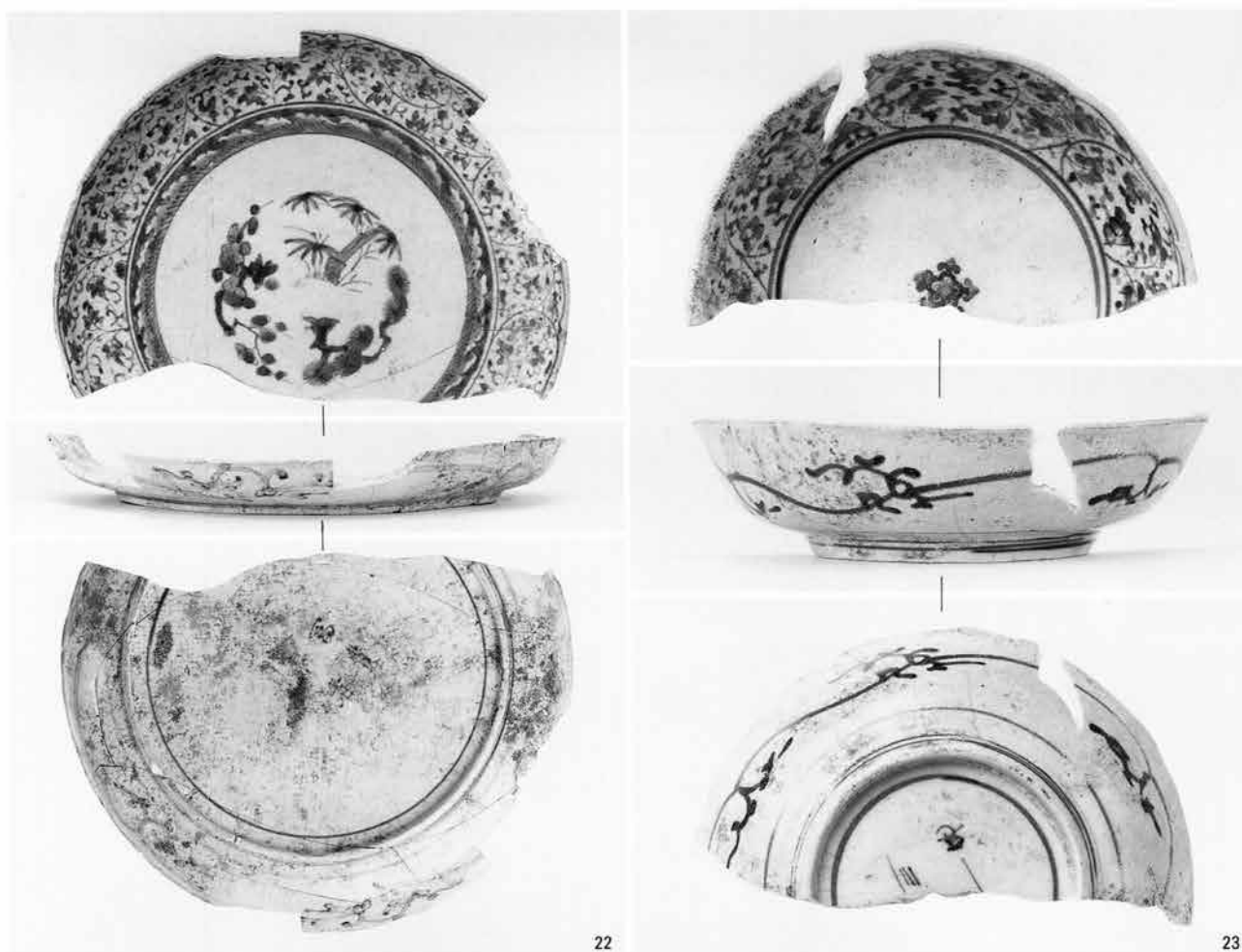
25



19



20



出土遺物(4)

図版第49 森垣外遺跡第3次

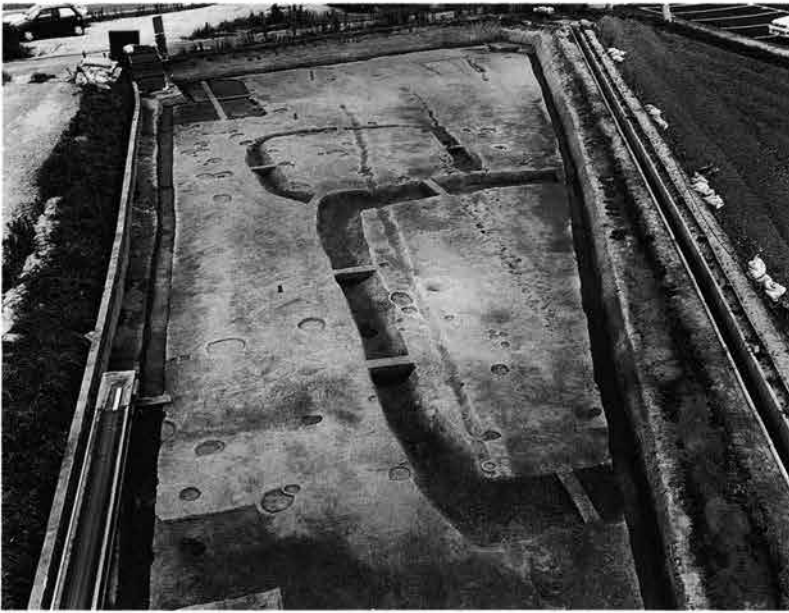


(1) A 2 地区遠景 (空中写真、東から)

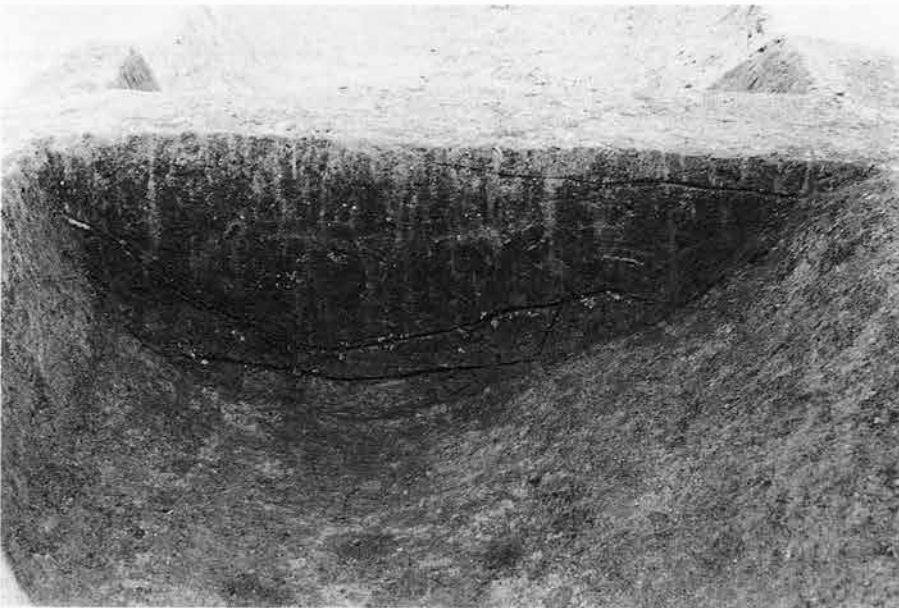


(2) A 2 地区全景 (空中写真、右方が北)

図版第50 森垣外遺跡第3次



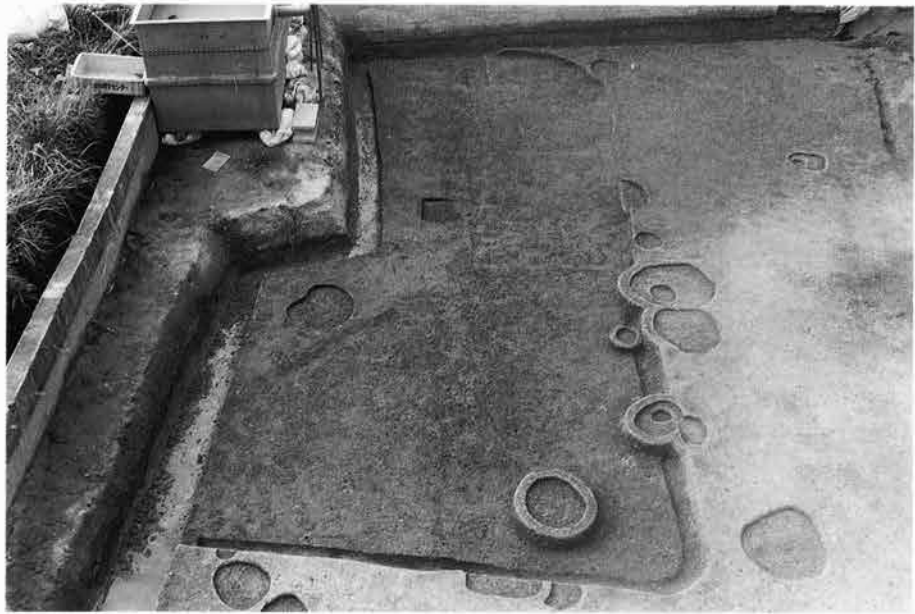
(1) A 2 地区北尻 2・3 号墳完掘
状況 (南から)



(2) A 2 地区北尻 3 号墳周溝断面
E 堆積状況 (北から)



(3) A 2 地区 10 b t 遺構検出状況
(南から)



(1) A 2 地区竪穴式住居跡82検出
状況（南から）



(2) A 2 地区土坑85遺物出土状況
（南から）



(3) A 2 地区溝4 罾出土状況
（南から）



(1) B・C地区遠景（空中写真、東から）



(2) B・C地区全景（空中写真、西から）



(1) B1-1・2地区全景（空中写真、東から）



(2) B1-1・2地区全景（空中写真、北から）



(1)B 1 - 1 ・ 2 地区全景 (空中写真、西から)



(2)B 1 - 1 ・ 2 地区全景 (空中写真、左方が北)



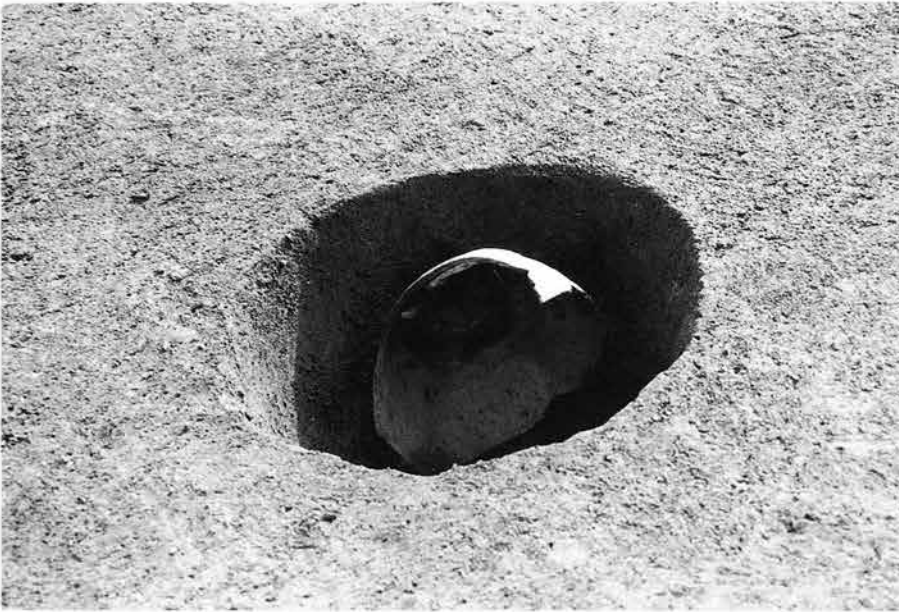
(1) B 1 - 1 ・ 2 地区近景
(北西から)



(2) B 1 - 1 ・ 2 地区溝22建築部材
出土状況 (東から)



(3) B 1 - 1 ・ 2 地区柱穴828土器
出土状況 (東から)



(1) B 1 - 1 ・ 2 地区柱穴939土器
出土状況 (東から)

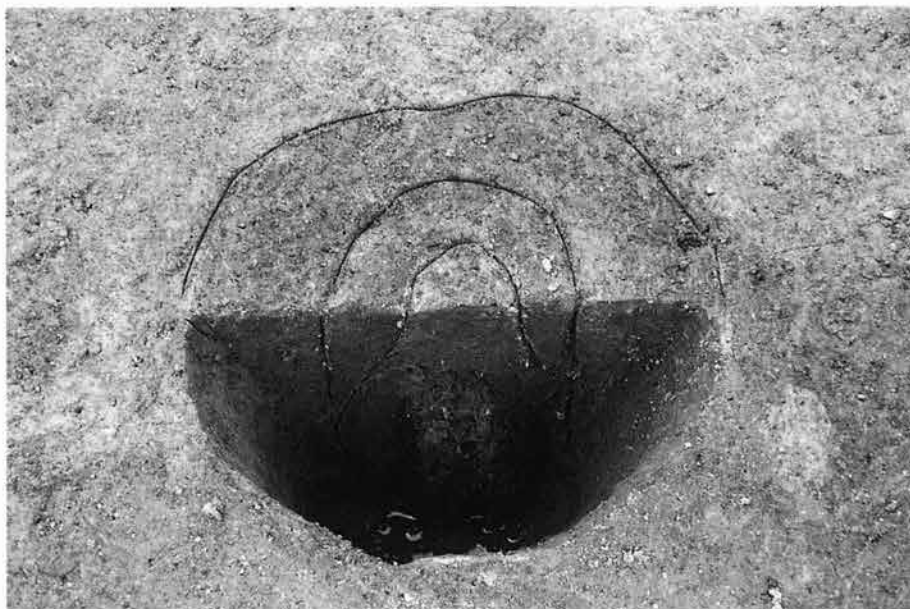


(2) B 1 - 1 ・ 2 地区柱穴943土器
出土状況 (北から)



(3) B 1 - 1 ・ 2 地区柱穴587土器
出土状況 (南から)

(1) B 1 - 3 地区柱穴889柱根検出
状況 (南東から)



(2) B 1 - 3 地区柱穴945柱根検出
状況 (南東から)



(3) B 1 - 1・2 土坑1土器検出
状況 (南から)





(1)B 1 - 1・2 地区竪穴式住居跡
15検出状況（東から）



(2)B 1 - 1・2 地区竪穴式住居跡
16検出状況（東から）



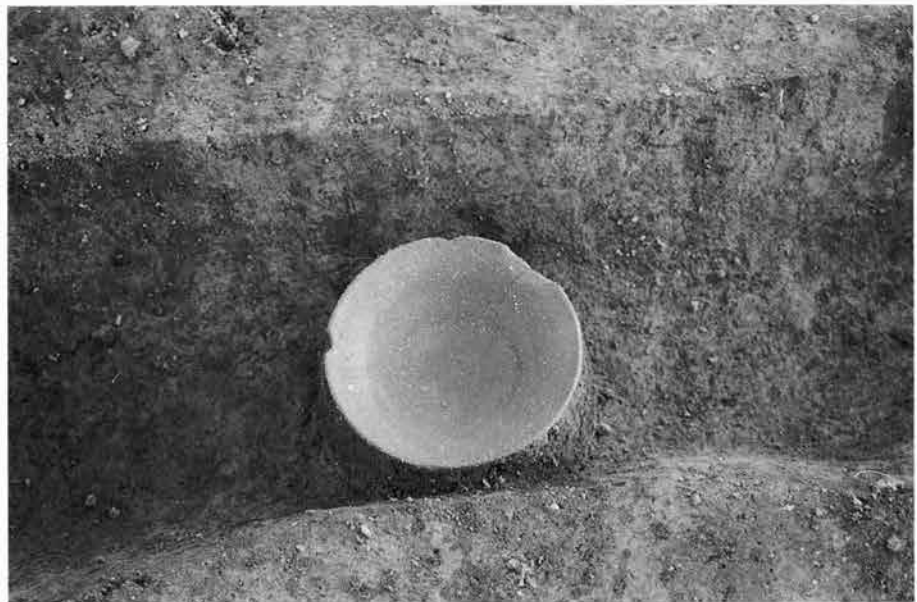
(3)B 1 - 1・2 地区溝22最上層
遺物出土状況（南から）



(1) B 1 - 1・2 地区井戸307検出
状況 (北から)



(2) B 1 - 1・2 地区井戸307完掘
状況 (南から)



(3) B 1 - 3 地区溝878土器出土
状況 (南から)



(1) B 1 - 1 ・ 2 地区井戸460転落
井戸枠出土状況（北から）



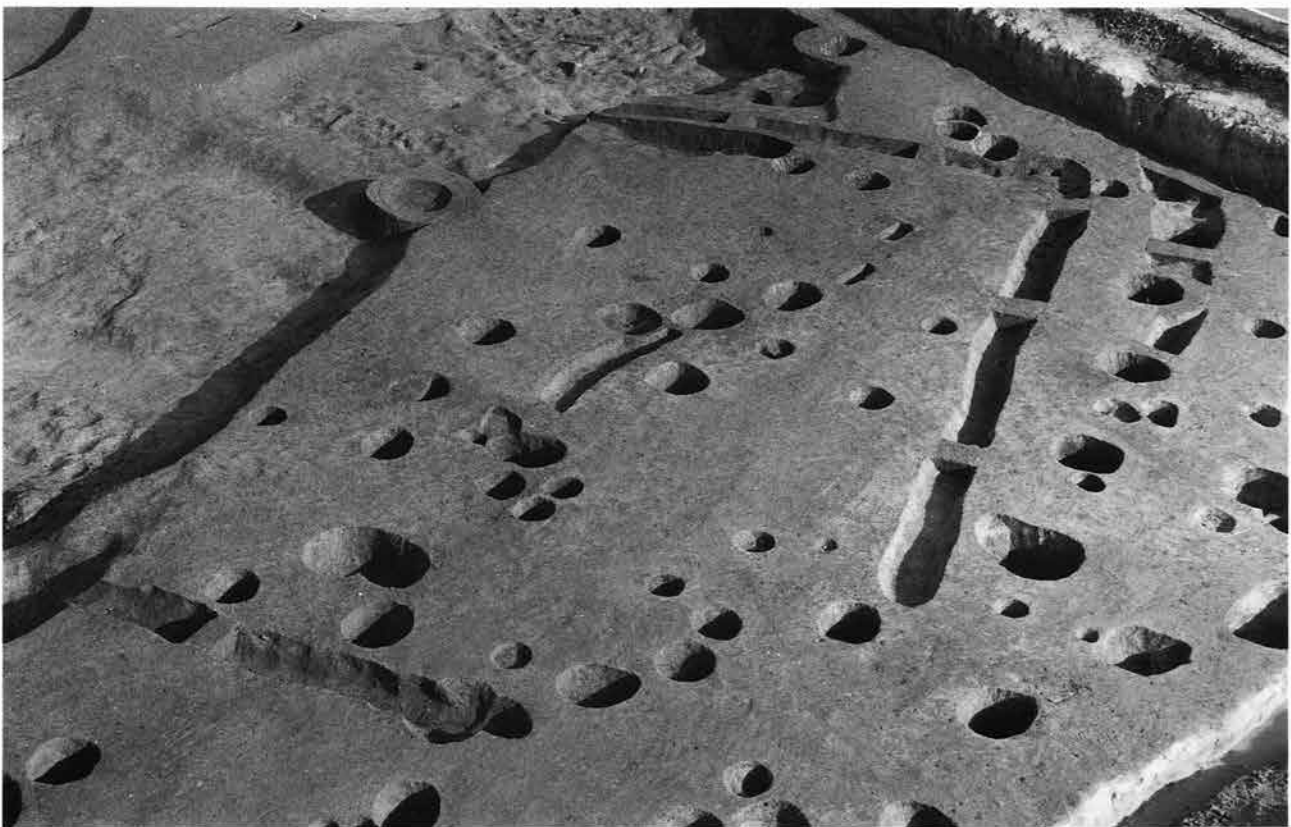
(2) B 1 - 1 ・ 2 地区井戸460
最下部土器出土状況（南東から）



(3) B 1 - 3 地区流路875遺物出土
状況（南東から）

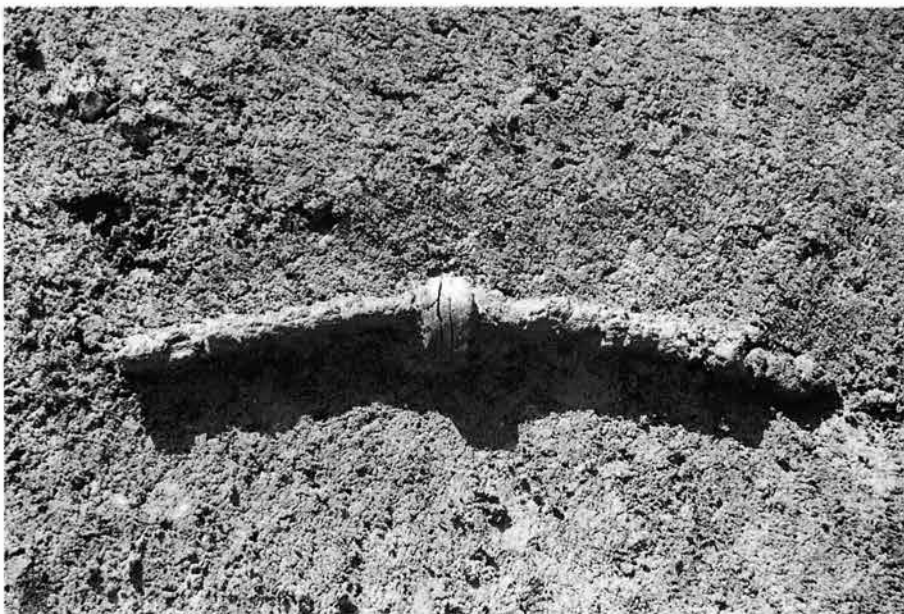


(1) B 1 - 3 地区全景 (空中写真、下方が北)



(2) B 1 - 3 地区、掘立柱建物跡・溝878完掘状況 (南西から)

図版第62 森垣外遺跡第3次



(1) B 1 - 3 地区流路875用途不明
鉄製品出土状況 (北から)



(2) B 1 - 3 地区流路887土層堆積
状況 (西から)



(3) C 地区東壁断面 (南西から)



(1) B 1 - 3、C地区遠景（空中写真、南から）



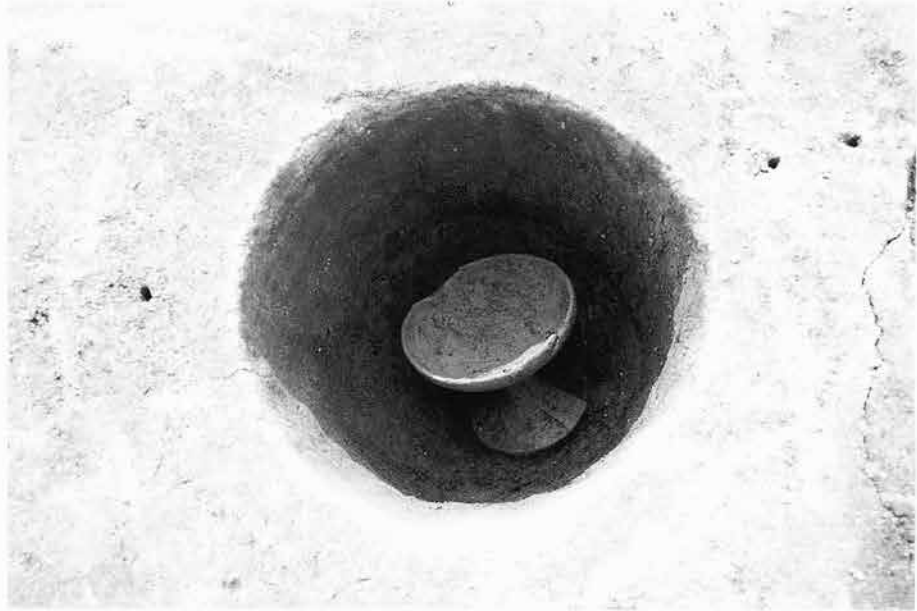
(2) C地区全景（空中写真、右方が北）



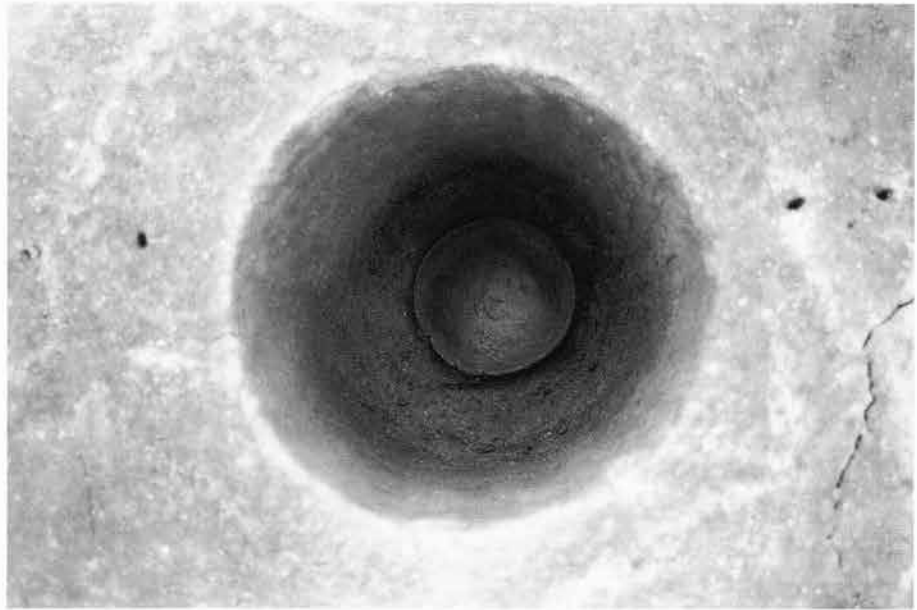
(1)C地区溝52・土坑79付近遺構検出状況（空中写真、上方が東）



(2)C地区流路4・5、溝22付近遺構検出状況（空中写真、上方が東）



(1)柱穴188上位高杯出土状況
(北から)



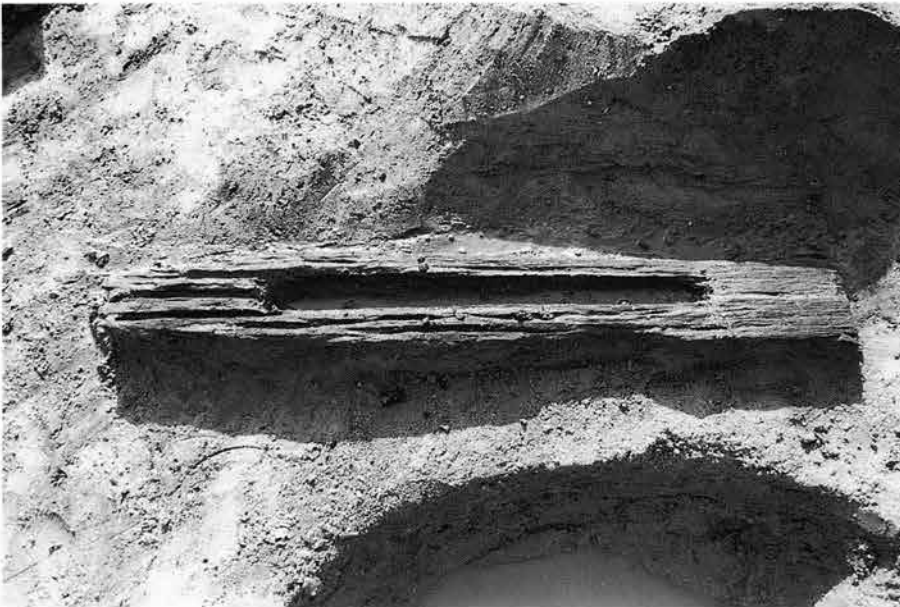
(2)柱穴188下位高杯出土状況
(北から)



(3)柱穴104遺物出土状況
(南から)



(1) C地区流路5 鏡形模造品出土状況 (上方が南)



(2) C地区流路4 建築部材出土状況 (上方が西)



(3) C地区流路4 遺物出土状況 (東から)



(1)C地区溝52検出状況(北西から)



(2)C地区溝103検出状況(北東から)



26



32



27



34



28



37



31



38



68



62



91



77



95



77底部



83



98



121



101



123



118



123内面



133



136



124



125



154

出土遺物(3)



146



152



160



157



180



192



163



189



185



215



191



215



198



221



210



222



225



223



272



232



272内面



234



296



236



264



297



251



311



322



300



318



337



323



343



324



346



333



360



345



370



413



373



424



384



447



385



448



390



449

460



463



478



467



464



468



481

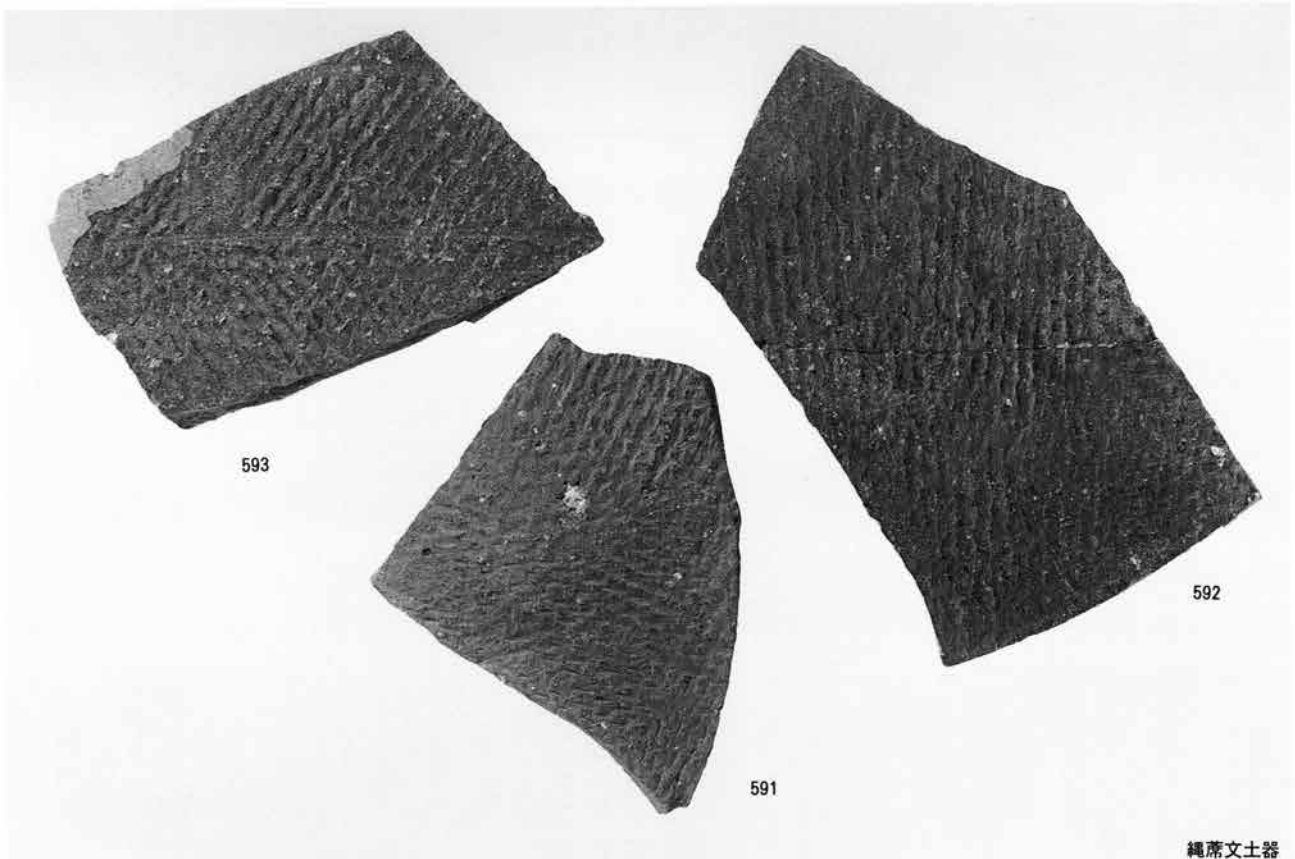


469



495







517



278



278



517



594



594



517



113



53



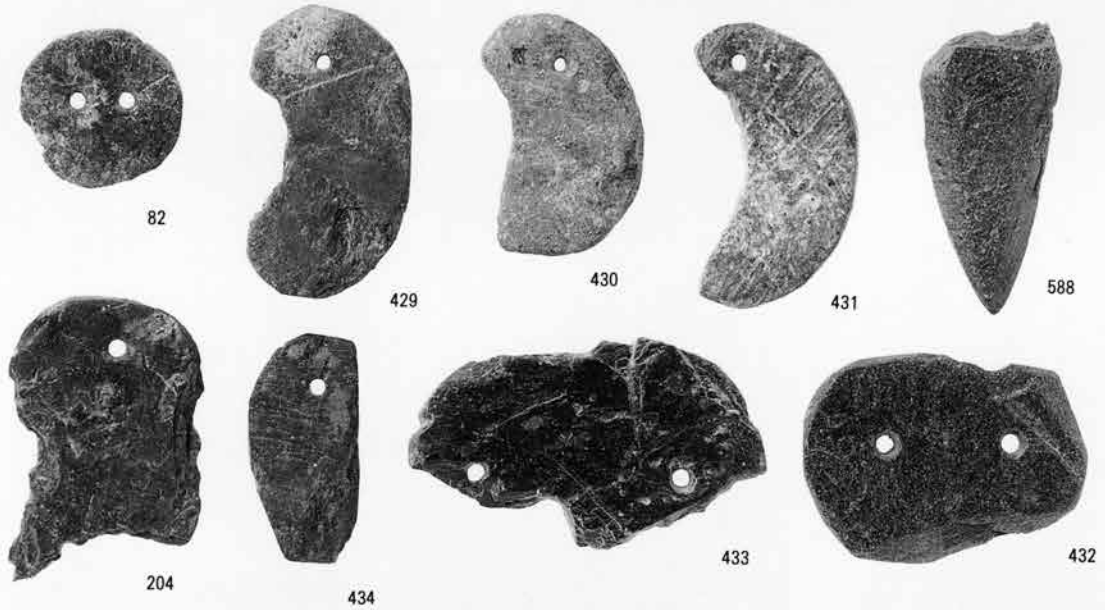
585



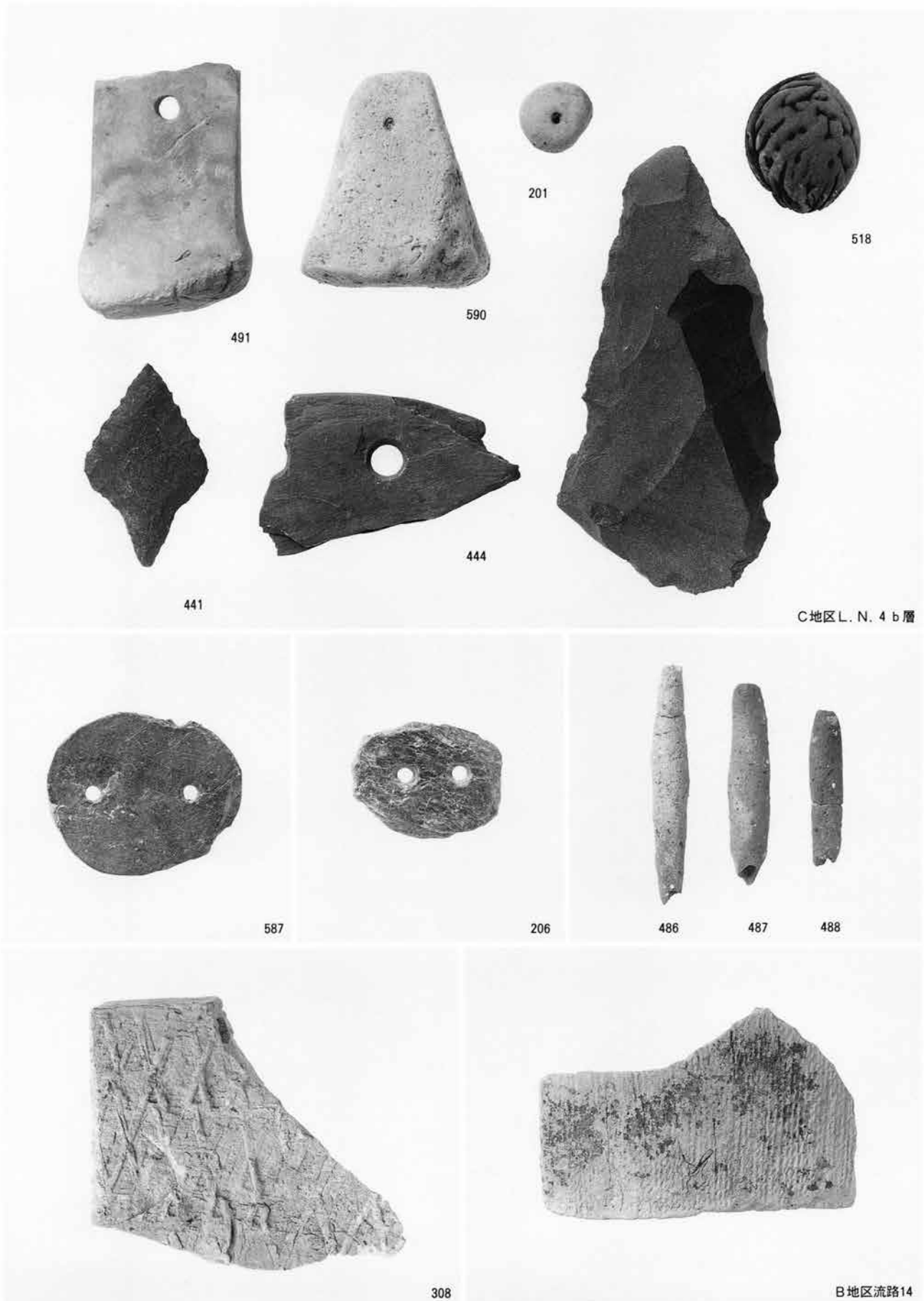
202



245



図版第81 森垣外遺跡第3次





208



A 2 地区
14番地 L. N. 4



209



B 1 地区
方形区画溝22



C 地区
流路 4



315

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第91冊							
編著者名	中川和哉・筒井崇史・野々口陽子・福島孝行・小池 寛・松尾史子							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone 075(933)3877			
発行年月日	西暦 2000 年 2 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 -	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いけがみいせ きだいごじ	ふないぐんやぎちよ ういけがみ							
池上遺跡第 5次	船井郡八木町池上	402		35° 4 ' 58"	135° 32 ' 24"	19981022 ~ 19990331	2,000	
へいあんきよ うあとにじよ うおおじ	きょうとしなかぎよ うくにしのきょうし きぶちよういちばん ち	104	1	35° 0 ' 37"	135° 44 ' 53"	19981211 ~ 19990312	1,300	
もりがいと いせきだいさん じ	そうらくぐんせい かちようおおあざみな みいなやづまこあざ もりがいと	366	26	34° 45 ' 13"	135° 47 ' 22"	19980618 ~ 19990305	3,670	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
池上遺跡第 5次	集落・墳墓	奈良・平安 古墳 弥生		掘立柱建物 竪穴式住居 竪穴式住居・方形周溝墓		瓦器・鈴 須恵器・土師器 弥生土器		
平安京跡二 条大路	都城	平安 近世		平安宮南 埋桶遺構		瓦類 陶磁器		
森垣外遺跡 第3次	集落・古墳	古墳		竪穴式住居・掘立柱建物 古墳		土師器・須恵器・石 製模造品・鍛冶関連 遺物		

京都府遺跡調査概報 第91冊

平成12年2月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)